ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

X－5－1

1982

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

X-5-1

1982

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県下のほ場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、はや10年目を迎えることになりました。この間はほ場整備事業の拡大に伴い発掘調査件数も年々増加してきました。

このような状況のもとで発掘調査と開発事業との間で大きな問題が生じることなく発掘調査が円滑に実施出来ておることは関係機関の御理解の賜ものと感謝いたします。

発掘調査で得られた資料や成果を公開し、広く県民に資料提供するため、ここに昭和57年度に実施しました発掘調査の報告書を刊行することにいたしました。

この報告書が、滋賀の埋蔵文化財に関する理解を深めていただく一助になれば幸いであります。

最後にこの調査に御協力をいただきました地元関係者および関係諸機関の方々に対し厚くお礼申し上げます。

昭和58年３月

滋賀県教育委員会事務局
文化部文化財保護課長
外　池　忠　雄

例　　言

1．本報告書は、昭和57年度県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、県農林部の費用負担にかかる調査成果を収載した。

2．本報告書は、昭和57年度事業の第５分冊にあたり、湖東地区（安土町）の２遺跡を収録した。

3．調査にあたっては、県農林部耕地建設課、八日市県事務所土地改良２課、地元安土町役場、教育委員会をはじめ、地元役員等多くの方々から種々の協力を得た。

4．調査は県教育委員会文化財保護課主査近藤滋が担当し、現地調査は慈恩寺遺跡を町教育委員会技師石橋正嗣、小中遺跡を同技師西家淳朗の協力を得て実施した。

5．調査に協力を得た諸氏については、各遺跡ごとに記した。厚く感謝の意を表する次第である。

6．本報告書は、石橋正嗣、西家淳朗が編集した。

総　目　次

序

第Ⅰ章　慈恩寺遺跡

1　はじめに……1

2　位置と環境……4

3　調査結果……5

(1)D区……5

イ)遺構……5

ロ)遺物……13

ハ)小結……23

(2)G区……27

イ)遺構……28

ロ)遺物……34

ハ)小結……36

(3)その他のトレンチ……39

4　まとめ……41

注釈……42

第 Ⅱ 章　小中遺跡

1 はじめに ……53
2 位置と環境……55
3 調査結果……56
(1)遺構……56
(2)遺物……68
4 まとめ……72
注釈……72

挿図目次

慈恩寺遺跡

挿図　1．町内遺跡分布図……3
2．トレンチ配置図……4・4
3．D区遺構図……6・7
4．D区北壁断面図……6・7
5．D区ＳＰ１断面図……6・7
6．D区ＳＰ１柵列側面・断面図……7
7．D区遺構断面図……8・9
8．D区土坑１平面・断面図……9
9．D区土坑５平面図……10
10．D区土坑８（井戸２）平面図……11
11．D区ＳＰ１Ｃ．Dセクション出土　土師器皿実測図……14
12．G区遺構図……28・29
13．G区１．２．３．４号住居平面図……28・29
14．G区５．６号住居切り合い．７号住居平面図……30
15．G区８号住居平面図……31
16．G区遺構断面図……32・33
17．A区．E区．F区．遺構図……32・33
18．５号トレンチ（T・５）西壁断面図……32・33
19．G区５．６号住居．７号住居出土遺物（石製品）……36

表目次

表　1．慈恩寺遺跡　D区検出遺構出土土師皿分類表……14
2．慈恩寺遺跡　D区検出遺構出土軒丸瓦計測表……19
3．慈恩寺遺跡　D区検出遺構出土軒平瓦計測表……21
4．慈恩寺遺跡　D区検出遺構出土丸瓦計測表……22
5．慈恩寺遺跡　D区検出遺構出土平瓦計測表……22
6．慈恩寺遺跡　D区検出遺構出土遺物一覧表……24
7．慈恩寺遺跡　G区竪穴住居一覧表……37
8．慈恩寺遺跡　遺物観察表……45

挿図目次

小中遺跡

挿図 .1 町内遺跡分布図……54
2．トレンチ配置図……55
3．A－1遺構図……56・57
4．A－2 ．A－6遺構図……56・57
5．A－6 .12号住居平面・断面図……59
6．A－2SR1土器出土状況図……60
7．A－8遺構図……60・61
8．A－8SX1 ．SX2切り合い断面図……62
9．B－1遺構図……64・65
10. B－141号住居出土遺物……66
11. B－1SX4断面図……67
12. A－4南壁，A－6SR1中央セクション，B－1東壁，　B－4南壁断面図……68・69

表目次

表　1．遺物観察表……74

図　版　目　次

慈恩寺遺跡

（写真図版）

図版１．慈恩寺遺跡（遺構）　上：遺跡遠景　下：Ａ区　（西から）

２．慈恩寺遺跡（遺構）　上：Ｂ区　（南から）　下：Ｄ区　全景（南から）

３．慈恩寺遺跡（遺構）　上：Ｄ区　ＳＰ１　Ａセクション西壁こけら経出土状況

下：Ｄ区　ＳＰ１　Ｅセクション西側板柵こけら経出土状況

４．慈恩寺遺跡（遺構）　上：Ｄ区　ＳＰ１　五輪塔出土状況

下：Ｄ区　ＳＰ１　Ｂセクション出土木製椀

５．慈恩寺遺跡（遺構）　上：Ｄ区　土壙１（検出時）　下：Ｄ区　土壙１（完掘後）

６．慈恩寺遺跡（遺構）　上：Ｄ区　土壙２　下：Ｄ区　土壙３（瓦溜り）

７．慈恩寺遺跡（遺構）　上：Ｄ区　土壙５．６　下：Ｄ区　土壙８（井戸２　桶）

８．慈恩寺遺跡（遺構）　上：Ｄ区　ＳＤ１　出土土器　下：Ｄ区　遺構４（築地）

９．慈恩寺遺跡（遺構）　上：Ｄ区　１号住居　下：Ｄ区　１号住居　出土土器

10．慈恩寺遺跡（遺構）　上：Ｅ区　（北西から）　下：Ｆ区　（Ｆ－１）全景（東から）

11．慈恩寺遺跡（遺構）　上：Ｇ区　全景　下：Ｇ区　平面確認部分検出住居群

12．慈恩寺遺跡（遺構）　上：Ｇ区　１号住居（西から）　下：Ｇ区　２．３号住居（南西から）

13．慈恩寺遺跡（遺構）　上：Ｇ区　４号住居（南東から）　下：Ｇ区　４号住居　出土高坏

14．慈恩寺遺跡（遺構）　上：Ｇ区　５．６号住居（北東から）

下：Ｇ区　５．６号住居　土器出土状況

15．慈恩寺遺跡（遺構）　上：Ｇ区　７号住居（東から）　下：Ｇ区　７号住居　土壙内土器出土状況

16．慈恩寺遺跡（遺構）　上：Ｇ区　８号住居全景　下：Ｇ区　８号住居　土器出土状況

17．慈恩寺遺跡（遺物－土器）　上：Ｄ区　１．２．４：ＳＰ１　Ａセクション，９～11：Ａセクション西

下：Ｄ区　５～８：ＳＰ１　Ａセクション西

18．慈恩寺遺跡（遺物－土器）　上：Ｄ区　13：ＳＰ１　Ｂ～Ｃセクション，14：ＳＰ１　Ｂセクション西，17：ＳＰ１　Ｄセクション東部肩口，18～21：ＳＰ１　Ｄセクション西，22：ＳＰ１　Ｄセクション東，23：ＳＰ１　Ｅセクション西，24：ＳＰ１　Ｅセクション西板柵付近

下：Ｄ区　26～28：ＳＰ１，29．30：ＳＰ１　１層

19．慈恩寺遺跡（遺物－土器）　上：Ｄ区　48．50：土壙１　下：Ｄ区　49～52：土壙１

20．慈恩寺遺跡（遺物－土器）　上：Ｄ区　69～85：土壙５　下：Ｄ区　53：土壙１，68～83：土壙５

21．慈恩寺遺跡（遺物－土器）　上：Ｄ区　54～57：土壙１　下：Ｄ区　58．59：土壙２

22．慈恩寺遺跡（遺物－土器）　上：Ｄ区　60．61：土壙３

下：Ｄ区　15：ＳＰ１　Ｃセクション，16：ＳＰ１　Ｃセクション東部，36．62～64：土壙４

23．慈恩寺遺跡（遺物－土器）　上：Ｄ区　65～67：土壙５，86：土壙６，88：土壙８

下：D区　84．87：土壙6

24．慈恩寺遺跡（遺物ー土器）　上：D区　32～35：ＳＤ１　Ｃグリット３層

下：D区　40：ＳＤ２　Ｂグリット，41～44：ＳＤ２　Ｃグリット，45.46：ＳＤ２　Ｄグリット

25．慈恩寺遺跡（遺物ー土器）　上：D区　89～94：遺構1

下：D区　95．96：遺構2（ＳＤ５），97：遺構3，98．100：遺構5，101：遺構6，102：表採

26．慈恩寺遺跡（遺物ー土器）　上：D区　165～171：３号住居

下：D区　３：ＳＰ１　Ａセクション西，12：ＳＰ１　Ｂセクション西

27．慈恩寺遺跡（遺物ー土器・坩堝）　D区　105：ＳＰ１　Ａセクション，38：ＳＤ１　Ｃグリット３層，31：ＳＤ１　Ｃグリット，47：ＳＤ２　Ｂグリット，99：遺構5，186：１号住居，164：３号住居

28．慈恩寺遺跡（遺物ー土製品）　上：D区　柱状土製品・鞴 601：ＳＰ１　Ａセクション西，602：ＳＰ１　Ａセクション，603：ＳＤ２　Ｃグリット下層部，604：３号住居付近表採

下：D区　鞴 605．606．619．620：ＳＰ１　Ａセクション西，608．610．614．616：ＳＰ１　Ａセクション，607：ＳＰ１　Ｄセクション西，615：ＳＰ１　１層，618：ＳＤ２　Ｂグリット，611．612：ＳＤ２　Ｃグリット下層部，613：遺構4中央部，609．617：遺構5底部

29．慈恩寺遺跡（遺物ー古銭・鉄製品）　上：D区　404：ＳＰ１　１層，403（元祐通宝）：土壙1

下：D区　411：ＳＰ１　Ａセクション，410：土壙5，412：ＳＤ２　Ｄグリット

G区　405．407．409：ＳＤ１，408：ＳＤ１　１層，406：５．６号住居　埋土

30．慈恩寺遺跡（遺物ー鉄製品・瓦）　上：D区　401：ＳＤ２　Ｃグリット

G区　402：東部断面

下：D区　508：ＳＰ１　Ａセクション西

31．慈恩寺遺跡（遺物ー瓦）　上：D区　501：ＳＰ１　Ａセクション

G区　545．548：ＳＤ２　Ｄグリット，513：ＳＤ２グリット下，521：ＳＰ１　Ｄセクション東壁

32．慈恩寺遺跡（遺物ー瓦）　D区　502．503．509．510：ＳＰ１　Ａセクション，536．537：ＳＰ１，541：ＳＤ２　Ｃグリット

33．慈恩寺遺跡（遺物ー瓦）　D区　512：ＳＰ１　Ｂセクション西部肩口，523．525：ＳＰ１　Ｄセクション西，529：ＳＰ１　Ｅセクション東，530：ＳＰ１，547：ＳＤ２　Ｄグリット

34．慈恩寺遺跡（遺物ー瓦）　D区　519：ＳＰ１　Ｄセクション，522．527：ＳＰ１　Ｄセクション西，533：ＳＰ１，535：ＳＰ１　土壙4，515：ＳＤ２　Ｃグリット

35. 慈恩寺遺跡（遺物ー瓦）　上：D区　506：ＳＰ１　Ａセクション，514：ＳＰ１　Ｂ～Ｃセクション１層，532：ＳＰ１，543：ＳＤ２　Ｃグリット，540：ＳＤ２　Ｄグリット

下：D区　538．539：ＳＰ１

36. 慈恩寺遺跡（遺物ー瓦）　D区　504．505．507．511：ＳＰ１　Ａセクション，516～518：ＳＰ１　Ｄセクション，524：ＳＰ１　Ｄセクション西，531．534：ＳＰ１

37. 慈恩寺遺跡（遺物ー瓦）　上：D区　520：ＳＰ１　Ｄセクション東部，560：土壙４

下：D区　544．546：ＳＰ１　Ｄグリット

38. 慈恩寺遺跡（遺物ー瓦）　上：D区　549：土壙１，554：土壙４

下：D区　561：ＳＰ１　Ｄセクション付近表採，542：ＳＤ２　Ｄグリット，526．528：土壙４

39. 慈恩寺遺跡（遺物ー瓦）　上：D区　552：土壙３，551：遺構３

下：D区　555．556：遺構４

40. 慈恩寺遺跡（遺物ー瓦）　D区　553：土壙４，550：遺構２，558：遺構５

41. 慈恩寺遺跡（遺物ー瓦）　上：D区　557：遺構５

下：D区　559：遺構５

42. 慈恩寺遺跡（遺物ー土器）　D区　201．214．253．261．：ＳＰ１　ＳＤ２　Ｄグリット下層，233．243．251．262．263．264：ＳＰ１　ＳＤ２　Ｄグリット

43. 慈恩寺遺跡（遺物ー土器）　上：G区　139．148：１号住居埋土，137：２号住居焼土中，140：２号住居床面，142：２号住居，143．146：２号住居焼土，144．145：２号住居埋土，147：３号住居 Pit，149：３号住居床面

下：G区　128．129：１号住居埋土，125～127．130．132～136：３号住居埋土，131：３号住居床面

44. 慈恩寺遺跡（遺物ー土器）　上：G区　172：４号住居床面，174．178：４号住居，175～177．179．181：４号住居埋土，173：５．６号住居ＳＫＸ，180：５．６号住居土壙１

下：G区　155：７号住居土壙１，153．154：７号住居土壙２，156：７号住居土壙３，157：７号住居 Pit，158～161：７号住居床面

45. 慈恩寺遺跡（遺物ー土器）　上：G区　116～119．122．124：12号住居北西埋土，120．121：12号住居南西埋土

下：G区　188～191：13号住居土壙２，192：13号住居土壙５，187：13号住居土壙15

46. 慈恩寺遺跡（遺物ー土器・石製品）　上：G区　108：８号住居，110～112：８号住居埋土，113：８号住居焼土

下：D区　301：表採

G区　306：８号住居床面

47. 慈恩寺遺跡（遺物ー土器・石製品）　上：G区　303．304：７号住居土壙１

下：G区　114．115：12号住居床面，185：14号住居埋土

48. 慈恩寺遺跡（遺物ー土器・石製品）　G区　39：ＳＤ１，138：２号住居焼土中，150：３号住居床面，182：４号住居，184．305：５．６号住居床面，162：７号住居土壙１，106．107：８号住居，103：13号住居土壙１

49. 慈恩寺遺跡（遺物ー漆器椀）　D区　W５：ＳＰ１　Bセクション，W２．W６：ＳＰ１　Dセクション

50. 慈恩寺遺跡（遺物ー漆器椀）　D区　W８：ＳＰ１　Cセクション，W３：ＳＤ１　Bグリット

（実測図版）

図版51. 慈恩寺遺跡（遺物実測図ー土器）　D区　池（ＳＰ１）３．５．６．７．８：Aセクション西，105：Aセクション，12：Bセクション西，15：Cセクション，27：池内，29：池内１層

52. 慈恩寺遺跡（遺物実測図ー土器）　D区　31：ＳＤ１　Cグリット，32．38：ＳＤ１　Cグリット３層，47：ＳＤ２　Bグリット，48～53．57：土壙１，58：土壙２，60：土壙３，36：土壙４，70～72．74．77：土壙５，84．87：土壙６，98．302：遺構５，186：１号住居，164：３号住居，301：表採

53. 慈恩寺遺跡（遺物実測図ー土器・石製品）

G区　39：ＳＤ１，139．148：１号住居埋土，138：２号住居焼土中，147：３号住居 Pit，149：３号住居床面，172．182：４号住居床面，181：４号住居埋土，180：５．６号住居土壙１，184：５．６号住居床面，155．162：７号住居土壙１，156：７号住居土壙３，106．306：８号住居床面，107：８号住居埋土，115：12号住居床面，193：12号住居埋土，185：14号住居埋土

54. 慈恩寺遺跡（遺物実測図ー漆器椀・木製品）

D区　W４：ＳＰ１　Aセクション，W５．W７：ＳＰ１　Bセクション，W８．W９：ＳＰ１　Cセクション，W２．W６：ＳＰ１　Dセクション，W３：ＳＤ１　Bグリット

55. 慈恩寺遺跡（遺物実測図ー鉄製品）

D区　401：ＳＤ２　Cグリット，412：ＳＤ２　Dグリット，410：土壙５，411：ＳＰ１　Aセクション

G区　402：東部断面，405．407．408．409．417～420：ＳＤ１，406：５．６号住居，413．414：ＳＫＸ１，415．416：井戸１

56. 慈恩寺遺跡（遺物実測図ー瓦）　D区　501：池（ＳＰ１）Aセクション

57. 慈恩寺遺跡（遺物実測図ー瓦）

D区　池（ＳＰ１）502．503：Aセクション，512：Bセクション西部肩口，520：Dセクション東部，523．525：Dセクション西側，561：Dセクション付近表採，535．560：土壙４，530：池内

58. 慈恩寺遺跡（遺物実測図ー瓦）

D区　池（ＳＰ１）509．510：Aセクション付近，522．527：Dセクション西側，

519：Dセクション付近，529：Eセクション東側，533：池内

59. 慈恩寺遺跡（遺物実測図一瓦）　D区　515. 542. 547：SD2　Dグリット，541：SD2　Cグリット，526. 528：土壙4，551：遺構3，559：遺構5

小中遺跡

（写真図版）

図版60. 小中遺跡（遺構）　上：遺跡遠景（南から）　下：A区　調査前（西から）

61. 小中遺跡（遺構）　上：A－1　西部（東から）　下：1号住居（南から）

62. 小中遺跡（遺構）　上：A－1　2号住居（東から）　下：A－2　全景（北から）

63. 小中遺跡（遺構）　上：A－2　SR1　遺物出土状況（北から）
下：A－4　全景（北東から）

64. 小中遺跡（遺構）　上：A－6　12号住居（南から）　下：A－6　12号住居カマド（南から）

65. 小中遺跡（遺構）　上：A－6　12号住居遺物出土状況　下：A－6　12号住居　遺物出土状況

66. 小中遺跡（遺構）　上：A－6　SR1（南から）　下：A－8　全景（東から）

67. 小中遺跡（遺構）　上：A－8　14号住居（南から）　下：A－8　15号住居（北から）

68. 小中遺跡（遺構）　上：A－8　SX1．2（北から）　下：A－8　SX3（南から）

69. 小中遺跡（遺構）　上：A－8　SX2　遺物出土状況　下：B－1　北半全景（南東から）

70. 小中遺跡（遺構）　上：B－1　南半全景（北から）　下：B－1　南半全景（南から）

71. 小中遺跡（遺構）　上：B－1　34号住居（南から）　下：B－1　37号住居（東から）

72. 小中遺跡（遺構）　上：B－1　39号住居（北から）　下：B－1　40号住居（南から）

73. 小中遺跡（遺構）　上：B－1　41号住居（南から）　下：B－1　SX4（北から）

74. 小中遺跡（遺構）　上：B－3　遺構検出状況（北から）　下：T・31－1（北から）

75. 小中遺跡（遺構）　上：T・31－2（南から）　下：T・31－3（西から）

76. 小中遺跡（遺物）　1：A－1　1号住居土壙，2：A－1　2号住居土壙，6：A－1　2号住居焼土，4：A－1　3号住居，3．5：A－1　3号住居埋土

77. 小中遺跡（遺物）　7．8．12．19：A－1　SD2　2層，9．13：A－1　SD2　3層，26：A－1　SD2　肩部

78. 小中遺跡（遺物）　11．21．25：A－1　SD2　2層，20．22：A－1　SD2　3層，14：A－1　SD2　肩部

79. 小中遺跡（遺物）　上：24：A－1　SD2　2層，23：A－1　SD2　3層
下：27～34：A－1　SD2　1層

80. 小中遺跡（遺物）　46．59．60：A－2　SR1　1層，47．49．74：A－2　SR1　2層，48．50．70：A－2　SR1　3層，71：A－4　SR1　3層

81. 小中遺跡（遺物）　45．73：A－2　SR1　2層，52．56．72：A－2　SR1　3層，44：A－6　SR1　3層

82. 小中遺跡（遺物）　53．54：A－2　SR1　2層，55：A－4　SR1　2層

83. 小中遺跡（遺物）　57．64．67．69：A－2　SR1　2層，58：A－6　SR1　3層

84. 小中遺跡（遺物）　35：A－6　12号住居埋土，36～40：A－6　12号住居床面

85. 小中遺跡（遺物）　42：A－6　12号住居床面，41．43：A－6　12号住居　カマド

86. 小中遺跡（遺物）　79：A－8　16号住居埋土，80：A－8　17号住居床面，75．76：A－8　20号住居床面

87. 小中遺跡（遺物）　84．85：A－8　14号住居床面，86：A－8　19号住居埋土，82：A－8　19号住居床面，78．81：A－8　20号住居床面，83：A－8　22号住居埋土，77：A－8　23号住居床面

88. 小中遺跡（遺物）　87～94：A－8　SX2

89. 小中遺跡（遺物）　104：B－1　34号住居床面，106：B－1　35号住居埋土，108：B－1　42号住居床面，102：B－1　43号住居床面

90. 小中遺跡（遺物）　119：B－1　30号住居埋土，105：B－1　33号住居土壙，107：B－1　37号住居埋土，97：B－1　38号住居埋土，98：B－1　39号住居埋土，103：B－1　47号住居床面

91. 小中遺跡（遺物）　117．118：B－1　31号住居床面，95．96：B－1　37号住居埋土，109．116：B－1　37号住居床面

92. 小中遺跡（遺物）　112：B－1　30号住居埋土，115：B－1　33号住居焼土，113：B－1　35号住居土壙，110：B－1　38号住居土壙，111：B－1　39号住居埋土，114：B－1　42号住居床面

93. 小中遺跡（遺物）　100：B－1　33号住居土壙，99：B－1　39号住居土壙，126．128．129：B－1　SX4

94. 小中遺跡（遺物）　120～125．127．130．131：B－1　SX4

（実測図版）

図版95. 小中遺跡（遺物実測図）　7．8．10．11．12．16．17．19．21．24．25：A－1　SD2　2層，13．20．22．23：A－1　SD2　3層，14．26：A－1　SD2　肩部，27～31．33．34：A－1　SD2　1層

96. 小中遺跡（遺物実測図）　45．53．54．73：A－2　SR1　2層，50．52．56．72：A－2　SR1　3層，55：A－4　SR1　2層，51：A－6　SR1，44：A－6　SR1　3層

97. 小中遺跡（遺物実測図）　46．59．60．65：A－2　SR1　1層，61．63：A－2　SR1，47．57．62．64．66．67．69：A－2　SR1　2層，48．68．70：A－2　SR1　3層，71：A－4　SR1　3層，58：A－6　SR1　3層

98. 小中遺跡（遺物実測図）　35：A－6　12号住居埋土，36～40．42：A－6　12号住居床面，41．43：A－6　12号住居　カマド

99. 小中遺跡（遺物実測図）　1：A－1　1号住居土壙，6：A－1　2号住居焼土，2：A－1　2号住居土壙，4：A－1　3号住居，3．5：A－1　3号住居埋土，84：A－8　14号住居床面，79：A－8　16号住居埋土，80：A－8　17号住居床面，86：A－8　19号住居埋土，75．76．78．81：A－8　20号住居床面，83：A－8　22号住居埋土，77：A－8　23号住居床面，134：B－1　31

号住居，95．96：B－1　37号住居埋土，98：B－1　39号住居埋土，99：B－1　39号住居土壙

100．小中遺跡（遺物実測図）　112：B－1　30号住居埋土，117．118：B－1　31号住居床面，100．105：B－1　33号住居土壙，104：B－1　34号住居床面，106：B－1　35号住居埋土，113：B－1　35号住居土壙，101．116：B－1　37号住居床面，110：B－1　38号住居土壙，111：B－1　39号住居埋土，108．114：B－1　42号住居床面，102：B－1　43号住居床面，103：B－1　47号住居床面

101．小中遺跡（遺物実測図）　87～92：A－8　SX2，120～133．135：B－1　SX4

第Ⅰ章　慈恩寺遺跡

は　じ　め　に

本報告は県営安土北部ほ場整備事業に伴い、昭和57年度に実施された安土城城下町遺跡（慈恩寺地区）の発掘調査報告である。

当該区域である大字慈恩寺地先は、近江源氏（宇多源氏）佐々木六角氏ゆかりの地で、この菩提寺である金剛寺（廃寺）・慈恩寺（廃寺）などが建立された史実を持つところでもある。特に慈恩寺は金剛寺とは異なり、創建当時より佐々木氏代々の菩提寺としてこの地に栄え、寺内には数々の塔頭を持っていたと考えられているが、室町時代中頃に勃発した応仁・文明の乱の余波を受け、その戦火の中に貴重な資料もろともに焼失してしまった。その後、天下統一をもくろむ織田信長によって当地に浄厳院が建立され、地名も「安土」といったんは変ったが、信長の野望が本能寺で潰えた後はいつしかもとの「慈恩寺」にもどり、「安土」は小字名として今に伝えられている。

この様な佐々木氏にまつわるものとは別に、浄厳院の東から南にかけての田には古墳時代から平安・鎌倉時代に相当する土器の散布が広い範囲で認められ、さながら当地における歴史の深さを物語っているかのようである。

ここにほ場整備事業による排水溝および切上等が計画され、遺構破壊が避け得なくなったため、急遽発掘調査が必要となった訳である。調査は滋賀県教育委員会文化財保護課主査近藤滋が指導し、安土町教育委員会文化財係技術員石橋正嗣が担当した。現地調査の期間は昭和57年９月から翌58年２月の約半年間で、調査対象面積3.5ヘクタールの内約8,100㎡にトレンチを設定した。なお本調査に参加協力をいただいた方々は次のとおりである。

調査員	長谷川洋一（滋賀大短期大学部ＯＢ）
	宍戸　貴子
調査補助員	植田　文雄
	設楽　靖史（京都産業大学）
	小西　忠宏（　　〃　　）
	足達　拓実（大阪経済大学）
	野瀬　芳子
	村田千恵子
	深尾由美子（関西外国語短大）

また本報告作成にあたり、執筆・整理分担は次のとおりである。

執筆・編集	石橋（Ｄ区・まとめ）・植田（Ｇ区）
図版・製図	宍戸・村田
遺物復元 保存処理	中川正人（滋賀県埋蔵文化財センター）：漆器
	河内美代子（米原町文化財審議員）：土器 こけら経
遺物　実測	石橋・植田（土器）、設楽（石製品）
	小西（鉄製品）、足達（木製品）、中川
	（漆器）、江南亜子（陶磁器）
遺物写真撮影	中島　勝（フォトなかじま）

この他に現地調査にあたっては地元安土町の常楽寺・上豊浦・下豊浦・石寺・東老蘇の各字より有志の作業員

諸氏と大学生諸君等の協力を得、整理執筆にあたっては藤沢典彦（元興寺文化財研究所）、泉拓良（京都大学構内遺跡調査会）、吉川義彦（京都市埋蔵文化財研究所）、森田克行（高槻市埋蔵文化財センター）の諸氏に遺物についての御助言・御教示を得、水野正好（奈良大学教授）、江南洋（近江八幡市立郷土資料館長）の両氏と秋田裕毅氏（滋賀県立近江風土記の丘資料館学芸員）には遺構の性格を想定するにあたっての重要な示唆をいただいた。末尾ながらここに記して謝意を表したい。

近江八幡市
五個荘町
八日市市
調査地
慈恩寺地区
安土山
竜石山
作山
A 大中の湖南遺跡
B (特別史跡)安土城跡
C 瓢箪山古墳
D 観音寺城跡
E 老蘇の森
1 獅子ケ鼻遺跡
2 熊野神社古墳群
3 金剛寺遺跡
4 安土城城下町遺跡
5 常楽寺山古墳群
6 西才行遺跡
7 江頭遺跡
8 桑実寺古墳群
9 桑実寺遺跡
10 瓢箪山遺跡
11 常楽寺山古墳群
12 鳥打峠遺跡
13 観音寺城遺跡
14 アラシカ谷遺跡
ア アラシカ谷古墳群
16 竜石山古墳群
17 石寺楽市楽座跡
18 東老蘇遺跡
19 東老蘇立宿遺跡
20 十三仏遺跡
21 箕作山遺跡
22 平塚古墳郡
23 弁天島遺跡
24 新開古墳
0 1000 2000M

挿図. 1 町内遺跡分布図

2、位置と環境

安土城城下町（慈恩寺）遺跡は、安土町大字慈恩寺地先にあって、現況はおよそ32.3ヘクタールから成る水田である。

地形的には観音寺山・竜石山・常楽寺山からなる繖山山系に端を発する南北にのびる三条の舌状台地のほぼ交点にあたり、海抜89M～92Mの等高線がめぐる比較的平坦な地域に位置している。

この三条の台地とは、①安土町大字小中・常楽寺・上豊浦・下豊浦を結ぶライン。②近江八幡市大町から安土町大字香庄へと続くライン。③近江八幡市長田町・（金剛寺町）・西庄町・浅小井町を結ぶラインで、これらの台地上には古くから集落が営まれている。

①の台地の東側には広々とした湿地が開け、これと接する西才行遺跡[注(1)]などから推測して、弥生時代からすでに水田が設けられていたものと考えられている。またこの台地上には古墳時代から平安時代末・鎌倉時代初にかけての集落跡、小中遺跡[注(2)]をはじめ、中屋遺跡[注(3)]、安土城城下町遺跡[注(4)]などが形成されており、現在の集落とほぼ重なり合っているようである。

①の台地の先端は、かって小中の湖と呼ばれた内湖に没しており、縄文時代早期とされる遺物を出土する弁天島遺跡へと連なっている。°

②の台地はその先端を西の湖に没しており、香庄の集落内には古墳時代後期の群集墳、熊野神社古墳群がある。またこの台地の延長上には新開と呼ばれる森があって広々とした田園の中にぽつんと一ケ所高く盛りあがって見える。この森はその形状から帆立貝式古墳である可能性があるが、真偽のほどはわかっていない。

これら①②の両台地のつけ根、ちょうど指の股にあたる部分に当慈恩寺遺跡がある。南に連なる常楽寺山には５ｃ～６ｃ代の古墳群[注(5)]がひかえ、そのすぐ裾に中屋の集落がながめられる。北には常楽寺・上豊浦・下豊浦の城下町を越えて向うに安土山が見渡せ、山の緑に捻見寺の三重の塔や安土城の石垣が見え隠れしている。また附近には信長の創建で知られる浄厳院をはじめ、戦国時代における近江の将佐々木六角氏にまつわる沙々貴神社などの建物が今に伝えられている。

当遺跡所在の大字慈恩寺は、佐々木氏頼入道崇永が母の菩提寺として建立した「慈恩寺」の跡地と考えられ、佐々木氏内紛の舞台ともなってその建物のほとんどは焼失したものとされているが、その後織田信長によって浄厳院が設けられた後も塔頭のいくつかは受け継がれたものとみえ、現在でも春陽院の名が浄厳院の建物としてその境内に残っている

この様に地理的・歴史的にも重要な背景をもつ当遺跡は、当所が佐々木庄と別称されるに及んでもきわめて意味深い地域であり、中世近江を知る上で大きな位置づけを与えられるものと考える。

A区
B—1
B—2
B区
B—3
C—1
C区
C—2
D区
E区
2号トレンチ(T・2)
5号トレンチ(T・5)
F—1
F区
F—2
G区
0
50
100m

挿図. 2　トレンチ配置図

3、調　査　結　果

(1)　D　区

調査対象区域の西部ほぼ中央に約 1,800㎡のD区を設定し遺構の検出を試みたところ、トレンチ全域で溝、池跡、土壙、竪穴住居等が検出された。このトレンチは当初、後述のE区と同様切土面として全掘が予定されていたが、ほ場整備事業の設計変更により遺構面が保存されるところとなり、トレンチ北部では遺構内の部分掘り込みのみにとどめた。各遺構はすべて床土直下の地山面（黄灰色～黄褐色粘質土）上面で検出されており、検出面の絶対高はトレンチ西部で 90.10M、東部で 89.60Mを測る。これはトレンチ東辺部分が過去の耕地整理によって、一段低く田面が切り開かれ、この際に遺構面の掘削がなされたものと考えられる。（挿図３～10）

(イ)　遺　構

池　跡（SP１）

トレンチ南部のほとんどを占めており、A～Eの各セクションを設けてその前後を２mばかりの幅で掘り込みを行なったところ、次のような施設・遺物を検出するに至った。なお池の形状、遺物の散布状態を見るために、各セクションで部分的な掘り込みの拡張を図っている。この結果各セクションで池の二次的形成（掘り直し）が認められ、この池が少なくとも二時期（ＳＰ１・Ⅰ次、ＳＰ１・Ⅱ次）にまたがって存在していたことがうかがえた。また瓦をはじめとする出土遺物は堆積層の中層以上で岸近くに集中して認められ、ＳＰ１のⅠ・Ⅱ次共に埋め戻された形跡がある。（挿図５参照）

Aセクション

セクシヨン南部西側で池の肩（岸）とそこに貼りつく形で平瓦（501）が検出されている。またセクション西壁附近で、土師器皿（５～８）、常滑焼（３）、瀬戸灰釉壺などの陶器類と瓦（501～506、508～511）などのほかに「こけら経」が出土している。この「こけら経」は後述するEセクション附近出土のものと比べて薄く、幅広のものである。これとは別にセクション南部東側では断面中で坩堝（105）が認められたほか五輪塔の火輪水輪等が池岸に沿って総計16個、Bセクション北端に向けて帯状に検出されている。漆器椀（Ｗ４）はこれらの間より出土したものである。

Bセクション

セクション北部池岸附近で、Aセクションにて検出の五輪塔の連りとして空風輪が11個ばかり検出されたほか、鉄滓が多量に混入した層が認められ、それが二次的な掘り込みによって切られているのが確認された。前述の五輪塔はこの二次的な掘り方（ＳＰ１・Ⅱ次）の中に廃棄されたものと考えられる。鉄滓層には鞴の破片が多量に出土しているが土器は認められない。出土遺物としては五輪塔周辺で瀬戸・信楽焼（12、27、29）などの陶器類、瓦質土器(火舎)、瓦が認められ、セクション東側では池岸附近で漆器椀（Ｗ５、Ｗ７）が出土している。

Cセクション

Bセクションとの中間において５ケ所ばかり島状に地山が残り、その内のセクション南部西側の部分より常滑（15）が出土している。またセクション北部池岸附近では信楽焼ほか若干の陶器類と漆器椀(Ｗ８)、木製下駄(W

9)が出土している。ここでもBセクションと同様池の二次的な掘りかたが断面によってうかがえる。

Dセクション

セクション南端で瓦だまり（土壙4）が検出されたが、この瓦だまりについては後述する。セクション北部西側の池岸附近できわめて多量の土師器皿(挿図11)が一括して出土しており、これと瓦質土器（20)、漆器椀（W2、W6）が検出されている。またセクション中央東側では3条痕をもつ信楽擂鉢（22）が出土している。池の二次的な掘りかたはここでもうかがえる。

Eセクション

セクション北部西側と中央東側で一連のものと考えられる竹（外側）と板（内側）との二列の柵列が認められた。これは地山の岸（SP1・Ⅰ次)、あるいは整地の岸（SP1・Ⅱ次）に沿うように打ち込まれたもののように見うけられ、B～Cセクションで確認された池の二次的形成と関連づけて、そのおのおのの時期における護岸柵と考えられた。しかし内側の板柵は池の中心に対して逆の傾きを示しており、はたして護岸となり得るかどうか疑問が残る。この部分での遺物の出土はほとんどなく、わずかに竹柵に接して池底より「こけら経」と「木製塔」のみが出土している。この「こけら経」は前述のAセクションにて検出のものに比べ割り剝ぎ状で厚みがあり、幅もきわめて狭いようである。（挿図6参照）

溝　（SD）

D区で検出の溝は総計7条認められるが、このうち築地状遺構として考えている遺構4は後項で説明する。なおSD6はSP1掘り込みに際して検出されたもので、部分掘り込みのみにとどまった。（挿図7参照）

SD1

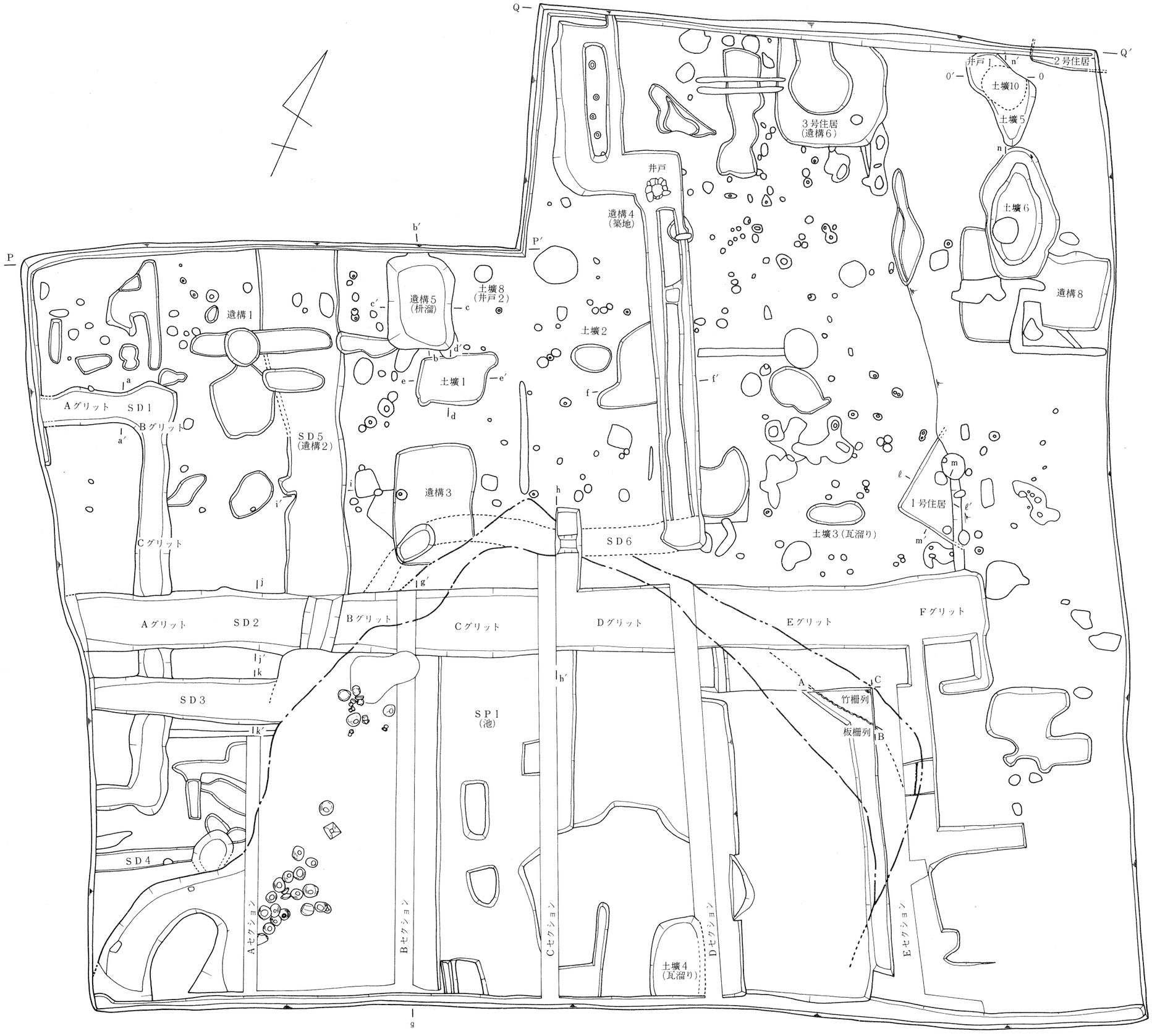
トレンチ西辺に「コ」の字状に検出された溝である。溝内堆積は第1層攪乱土、第2層暗褐茶色粘土、第3層淡茶黒色粘土となっており、第3層中より黒色土器椀（31)、土師器（32～35、38)、漆器椀（W3）などが出土している。この溝は後述のSD2、SD3によって切られており、幅 1.5m、深さ約30cmを測り、溝東辺の方位はN－20°－Wを示している。

SD2

トレンチのほぼ中央を東西に横切る溝である。溝内堆積は第1層暗茶褐色粘質土、第2層茶灰色粘土、第3層淡青灰色粘土、第4層暗青褐色粘土となっており、第1層・第2層中より信楽焼をはじめ陶器片（41～45)、ほうらく（47)、瓦質土器（46）などの土器のほか瓦（515、540、543、547）が出土している。また溝底部からは鞴の小片のほか、鉄鏃（412)、小づかの柄の部分（401）が認められたがこれはSP1の堆積土中のものの可能性がある。この溝はSP1、SD1と後述のSD5、SD6を切っており、当区検出の溝の中で最も新しいものと考えられる。幅 2.5m、深さ約40cmを測り、方位はN－67°－Eを示している。

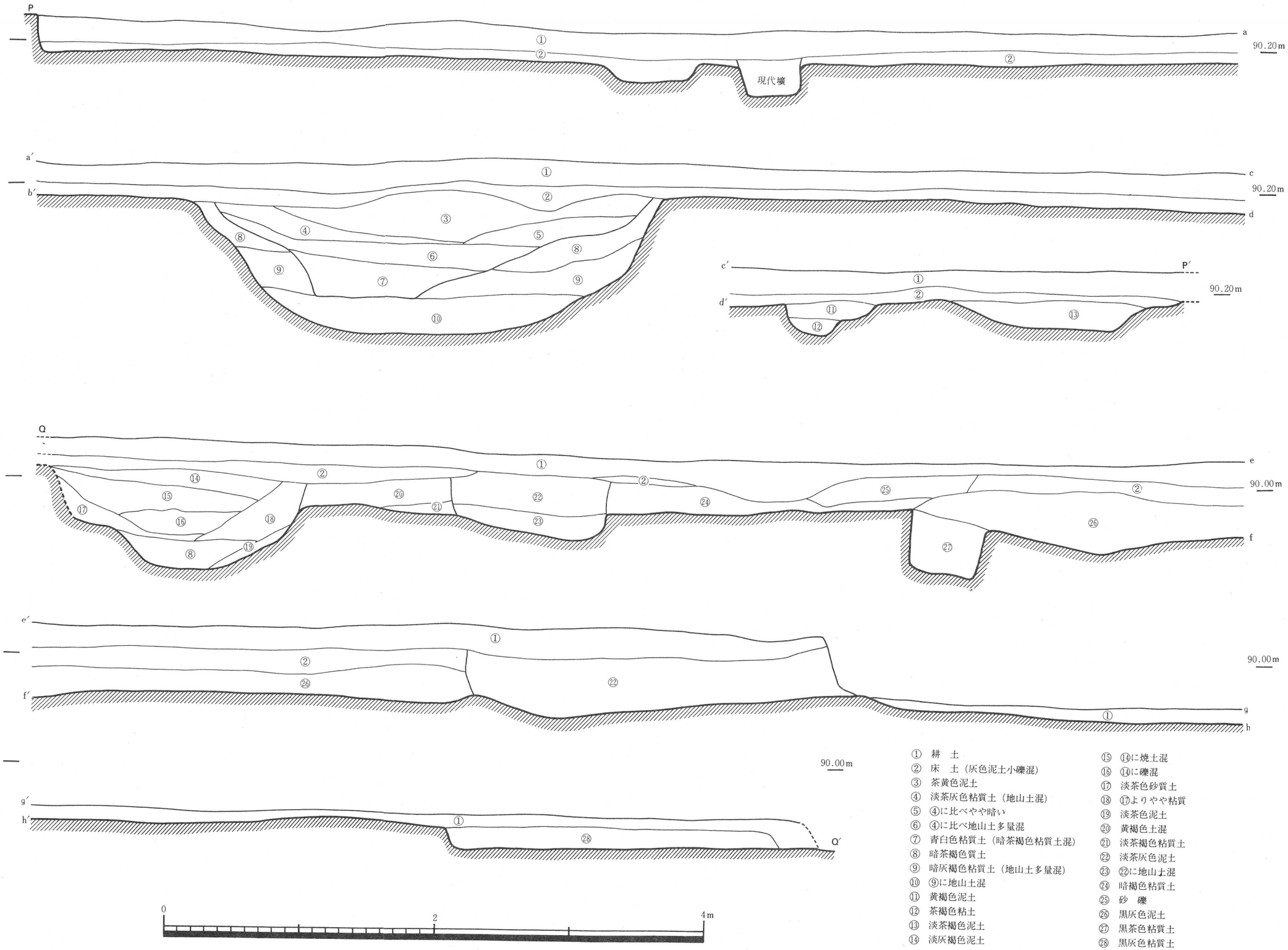
SD3

SD2の南にこれと平行して流れる溝である。溝内堆積は第1層灰褐色粘質土、第2層淡青褐色砂土（腐植土



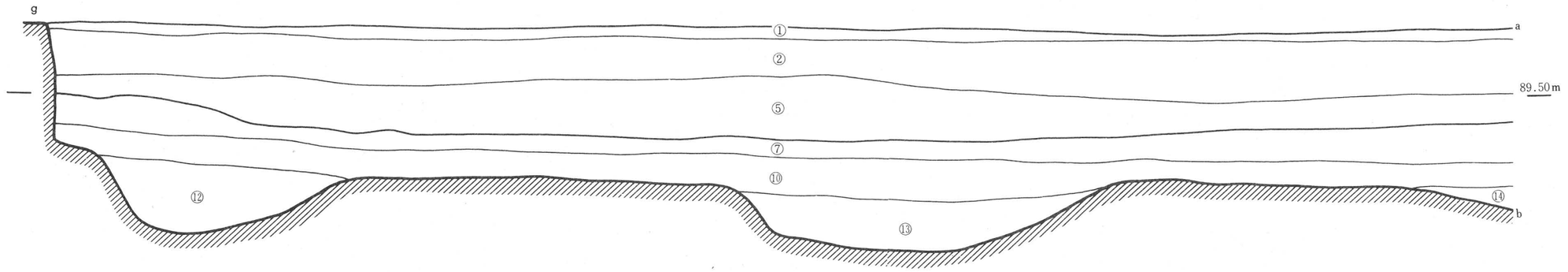
挿図. 3　D区遺構図

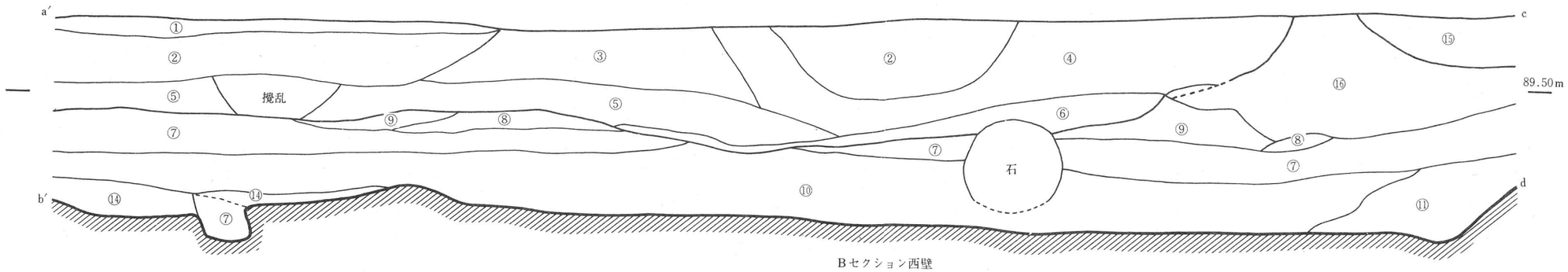
0　10　20m



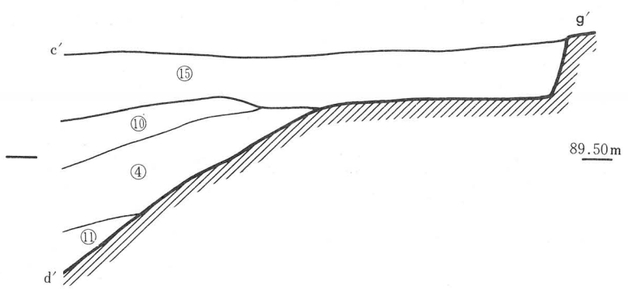
① 耕　土
② 床　土（灰色泥土小礫混）
③ 茶黄色泥土
④ 淡茶灰色粘質土（地山土混）
⑤ ④に比べやや暗い
⑥ ④に比べ地山土多量混
⑦ 青白色粘質土（暗茶褐色粘質土混）
⑧ 暗茶褐色質土
⑨ 暗灰褐色粘質土（地山土多量混）
⑩ ⑨に地山土混
⑪ 黄褐色泥土
⑫ 茶褐色粘土
⑬ 淡茶褐色泥土
⑭ 淡灰褐色泥土
⑮ ⑭に焼土混
⑯ ⑭に礫混
⑰ 淡茶色砂質土
⑱ ⑰よりやや粘質
⑲ 淡茶色泥土
⑳ 黄褐色土混
㉑ 淡茶褐色粘質土
㉒ 淡茶灰色泥土
㉓ ㉒に地山土混
㉔ 暗褐色粘質土
㉕ 砂　礫
㉖ 黒灰色泥土
㉗ 黒茶色粘質土
㉘ 黒灰色粘質土

挿図．4　D区北壁断面図

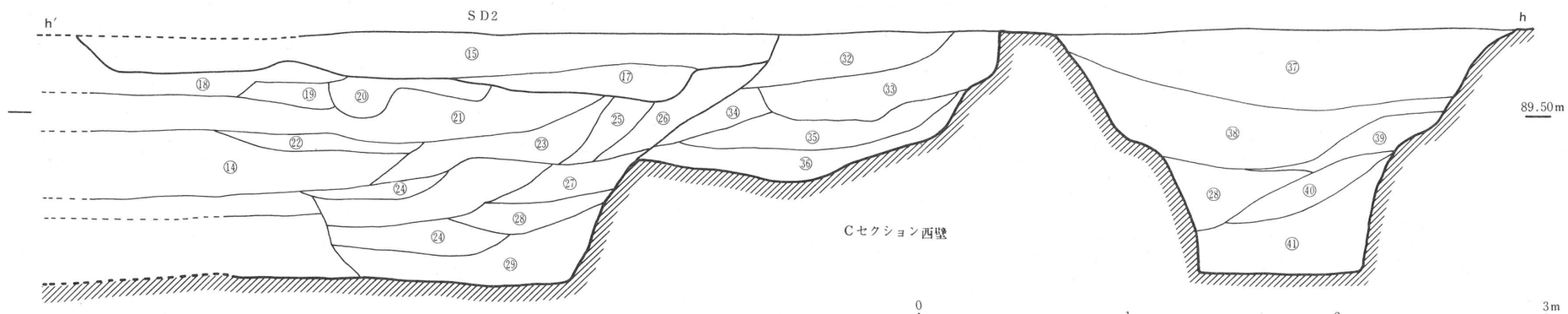




Bセクション西壁

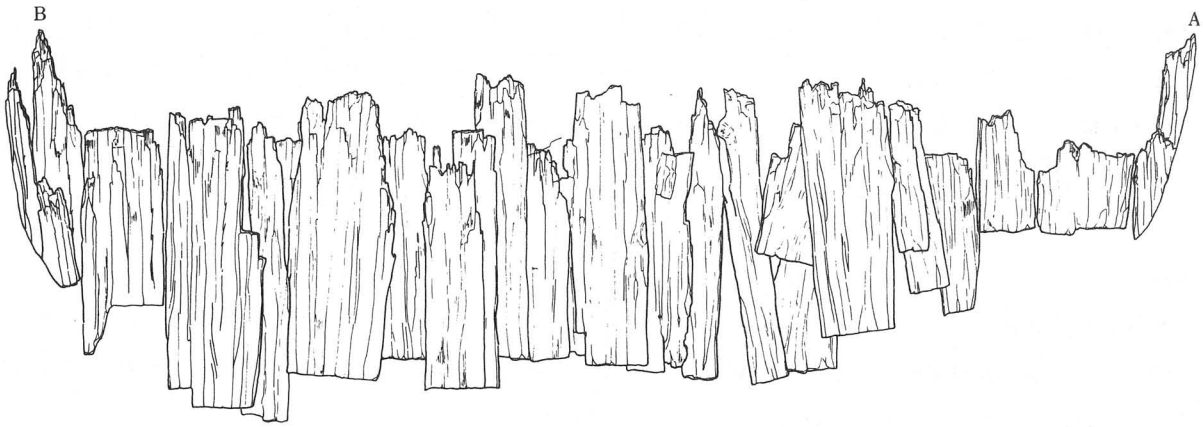


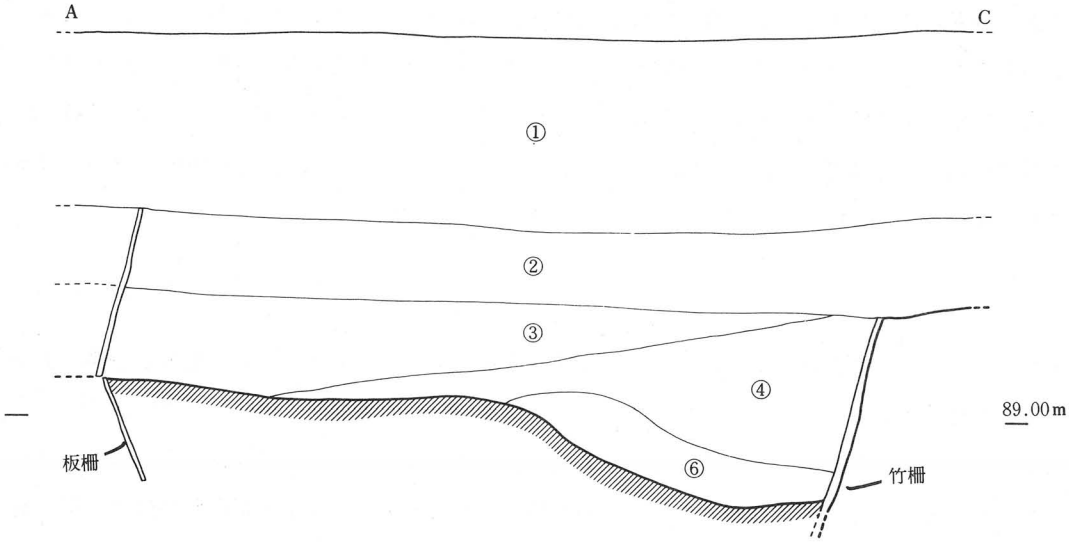
① 暗青褐色粘質土撹乱
② 淡青白色砂質土（③層混入）
③ ②に腐植物混入
④ ②に腐植物多量混
⑤ 暗青白色砂質土（腐植土混入）
⑥ ⑤よりやや色が薄く腐植物混入
⑦ 暗灰褐色粘土（腐植物多量混）
⑧ ⑦より砂ぽい
⑨ ⑦よりさらに砂っぽい
⑩ 灰褐色粘土（腐植物多量混）
⑪ ⑩より砂っぽい
⑫ 暗褐灰色粘土（腐植物混入）
⑬ 褐灰色粘土（腐植物混入）
⑭ 淡灰褐色粘土
⑮ 暗茶褐色粘質土
⑯ 鉄油混入土層
⑰ 茶灰色粘土
⑱ 淡灰色粘質土
⑲ 暗灰色粘質土
⑳ 淡青灰色粘質土
㉑ 暗灰色粘土
㉒ 黄灰色砂質土
㉓ 暗褐色砂質土（粗砂混　）
㉔ 淡灰黄色砂土
㉕ 灰褐色粘土
㉖ 淡黄灰色粘土
㉗ 暗褐色粘質土
㉘ 淡灰色粘土
㉙ 暗灰黒色粘土
㉚ 青灰色地山ブロック
㉛ 暗灰褐色粘土
㉜ 渋黄灰色粘質土（地山ブロック混）
㉝ 暗灰茶色砂質土
㉞ ㉜層に比べやや砂っぽい
㉟ 黄灰色砂質土
㊱ 淡黄灰色粘土（暗灰茶色粘質土ブロック状混）
㊲ 黄灰色粘質土（整地？）
㊳ 淡青白色～青灰色粘質土（腐植土多量混）
㊴ 灰褐色粘土（㊳層ブロック混）
㊵ 淡灰青色粘土
㊶ 暗灰青色粘土

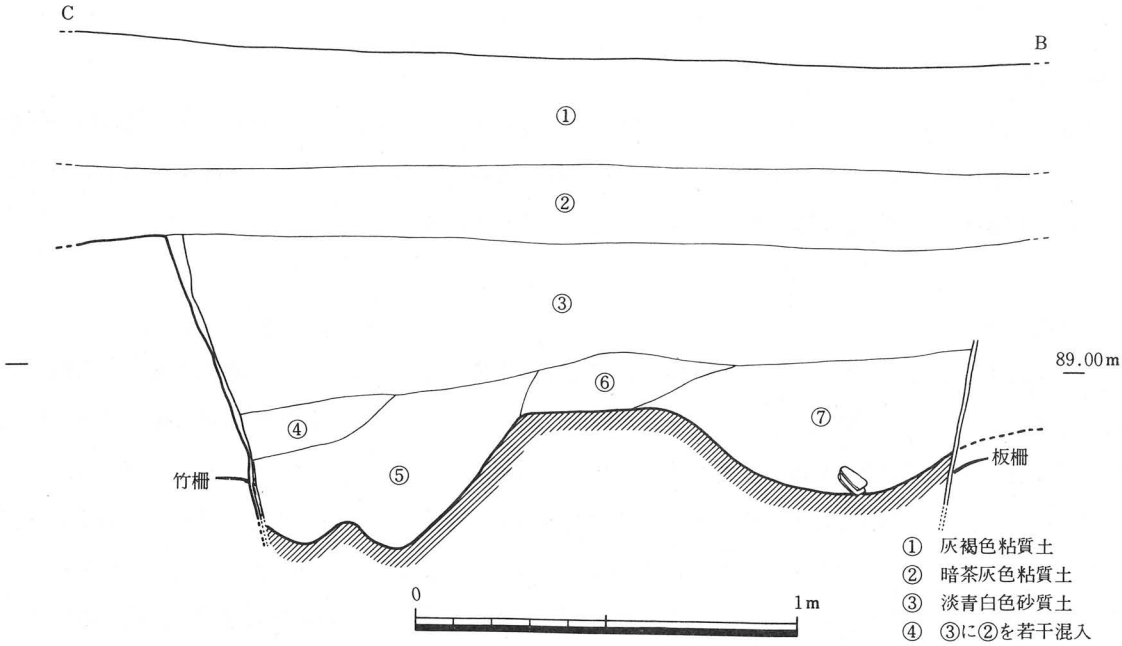


Cセクション西壁

挿図. 5　D区SP1断面図







① 灰褐色粘質土
② 暗茶灰色粘質土
③ 淡青白色砂質土
④ ③に②を若干混入
⑤ 淡灰青色粘質土
⑥ 灰白色粘土
⑦ 暗褐灰色粘質土（⑥混入）

挿図　6　D区ＳＰ１柵列側面・断面図

混)、第３層灰褐色砂質土（粗砂混）となっており、第１層中より磨滅のため器形は不明であるが土師器の小片が出土している。この溝はその位置関係から後述のＳＤ５と一連のものとして考えられるが、ＳＰ１、ＳＤ２によってその接点にあたる部分が掘削されており、確認はできなかった。幅 1.7m、深さ20～30cmを測り、方位はＮ－67°－Ｅを示している。

ＳＤ４

ＳＤ１南辺の南側にこれと平行して流れる溝である。その東端はＳＰ１の直前で土壙状の浅い落ち込みによって切られている。幅 0.8m、深さ15cm前後を測り、方位はＮ－62°－Ｅを示している。堆積土はＳＤ１とよく似た暗茶褐色粘質土のみで、ここよりの遺物の出土は認められない。

ＳＤ５

ＳＤ１東辺の東側にこれと平行して流れており、ＳＤ２に直行して切られている溝である。この溝は検出当初は形状が不定であったため遺構２として遺物等をとりあげていたが、その後溝と判明したためＳＤ５としたものである。溝内堆積は第１層淡灰色粘質土、第２層淡茶褐色粘質土、第３層淡黄褐色粘質土ほか５層が認められ、この第１層より瓦小片、土師器、陶器片などが出土している。またこの溝は二次的な掘削が認められる。幅 2.7m、深さ約１mを測り、方位はＮ－24°－Ｗを示している。

ＳＤ６

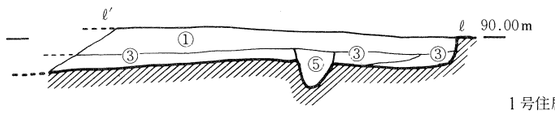
ＳＰ１Ｃセクションの北部断面で検出され、部分掘り込みによっておよその流れを把握した溝である。このため詳細については言及できないが、溝の東端は後述の遺構４(築地)の南端部に接続しており、そこから東には続かない。しかし堆積土より推測して遺構４を切っている可能性が強い。また西端はＳＤ５とは切り合わずにＳＰ１に切られるか、あるいは注ぎ込むかである。溝内堆積は６層認められ、第１層黄灰色粘質土（第２層ブロック状混入)、第２層淡青白色～青灰色粘質土（腐植土多量混入）となっており、第３層以下は灰青色～灰褐色の粘土である。幅 2.3m、深さ約 1.2mで方位はＮ－64°－Ｅを示している。ここよりの出土遺物は認められない。

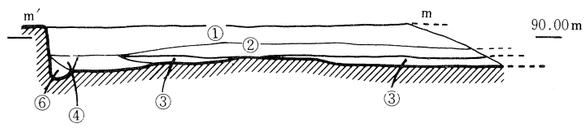
土　壙（ＳＫ）

土壙は遺物の出土したもの、あるいは何らかの施設が伴うものを一応土壙として認め、その他の浅い落ち込みについてはここではふれないことにする。この場合の土壙の総数は八基を数え、貯蔵土壙（土壙１)、井戸（土壙８)、瓦溜り（土壙３・土壙４)、廃棄土壙（土壙５）などが認められる。

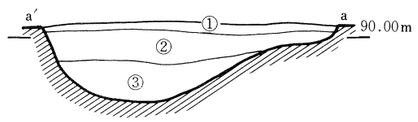
土壙１（貯蔵土壙）

トレンチ西部北辺附近に位置し、後述の遺構５の南に隣接する石組みの認められる遺構である。石組みは自然石で土壙底部より１～２石が積まれており、それが四面に渡っている。この石組みの内径は縦 2.2m、横 1.1mで、掘り方は縦３m、横 2.2mを測る。またこの掘り方と石組みとの間にはこぶし大の石、あるいは瓦片などで裏込めが認められ、深さ40cmにおよんでいる。土壙内堆積は第１層暗茶灰色～暗灰褐色粘質土、第２層淡褐色粘質土となっており、第２層下面と中位で瀬戸美濃系灰釉・鉄釉の小皿が５点（48～52）と小片の信楽焼擂鉢(56)、瀬戸産と考えられるおろし皿（57)、天目茶埦（55）などの陶器類をはじめ、土師器皿（53)、銅銭(403)、瓦(549)

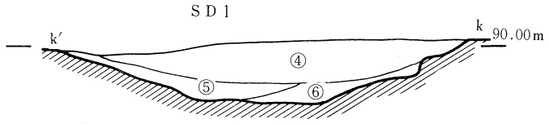




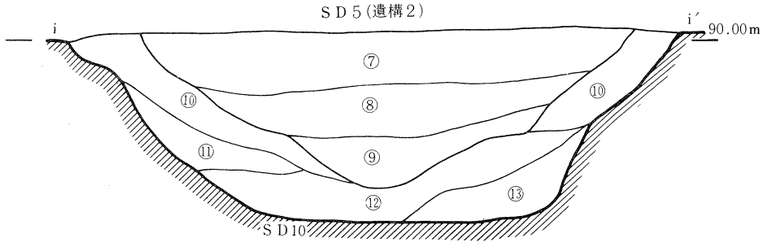
1号住居



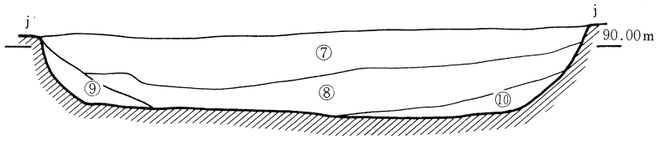
SD1



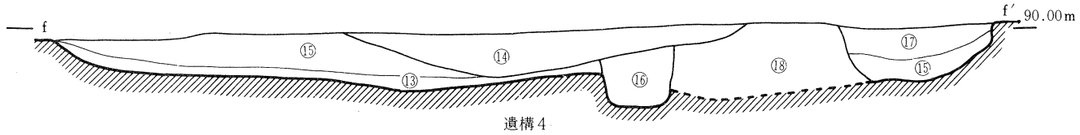
SD3



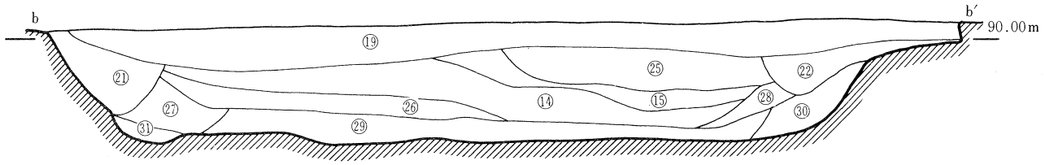
SD5(遺構2)　SD10切り合い



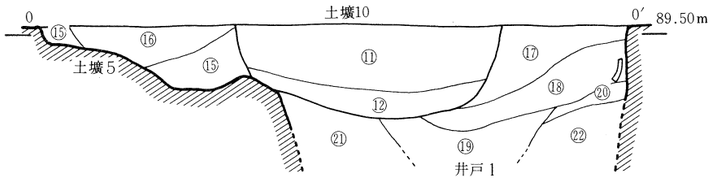
SD2

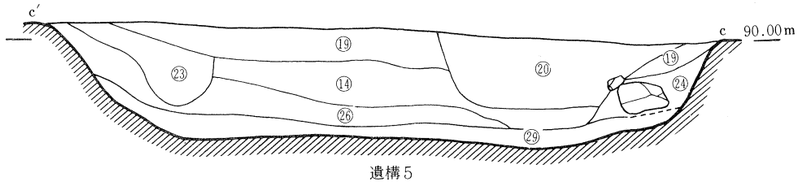


遺構4

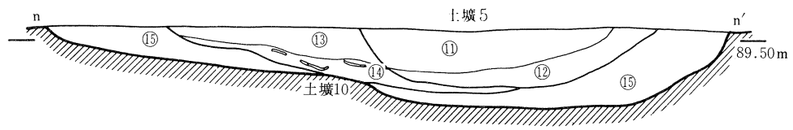


遺構5





遺構5



土壙5.10、井戸1切り合い

1号住居・遺構2・4・5の断面

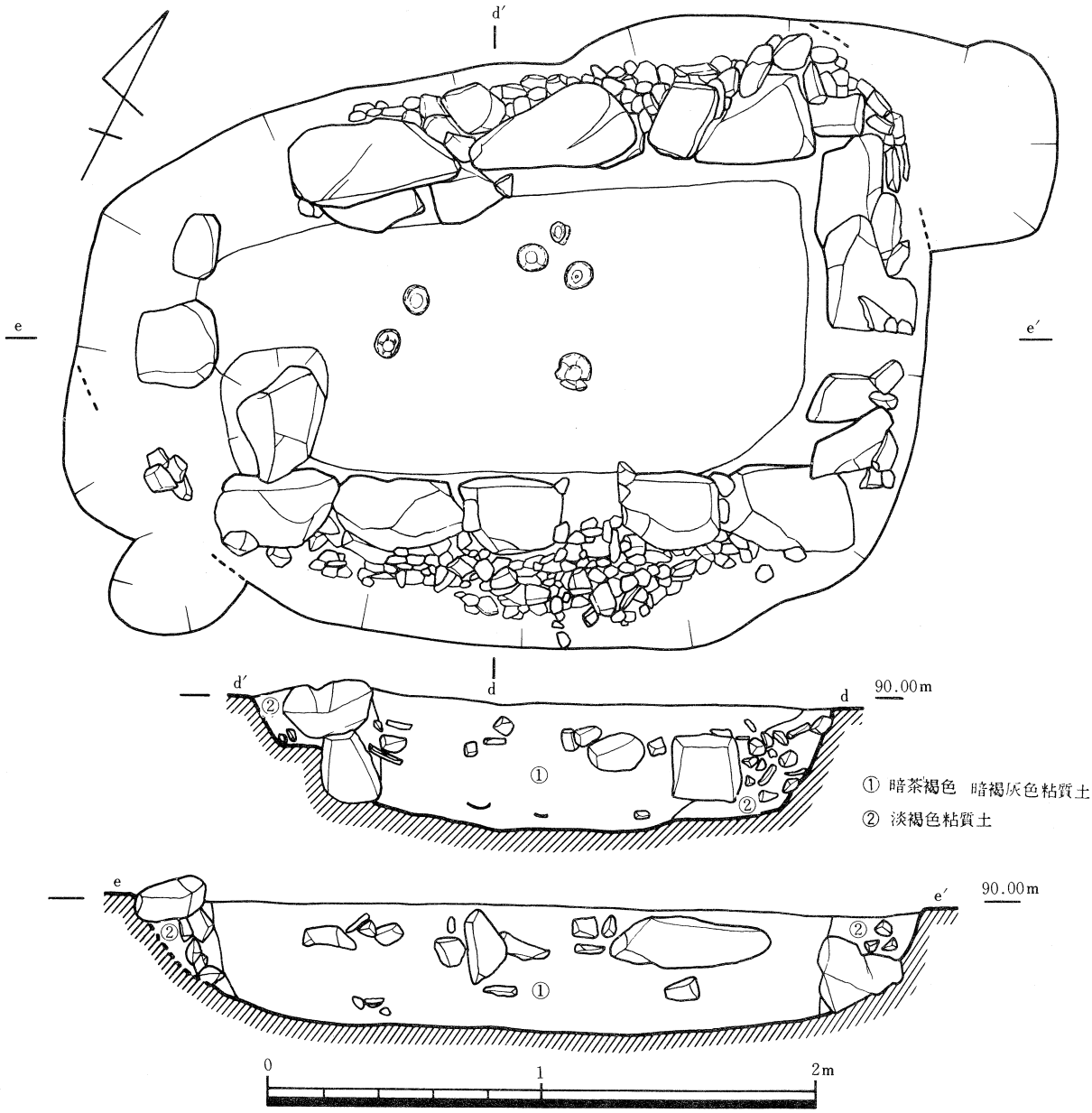
① 埋土1（茶黒色粘質土）
② 埋土2（暗茶黒色粘質土）
③ 貼り床（暗茶褐色粘質土・焼土混）
④ 壁溝内堆積（②層に地山ブロック状混）
⑤ 暗茶灰色粘質土
⑥ 黒灰色粘質土（又は粘土）
⑦ 淡茶灰色粘質土（地山土ドット状に多量混）
⑧ ⑦に比べ地山土多い
⑩ 暗茶褐色粘質土（地山土少量混）
⑪ ⑩よりやや色淡く地山土多量混
⑫ 暗灰黒色粘土
⑬ 暗灰褐色粘質土
⑭ 淡茶灰色粘質土
⑮ 暗茶褐色粘質土
⑯ 淡褐灰色粘質土（地山土細ブロック混）
⑰ 暗灰茶色粘質土
⑱ 盛土（⑮⑯⑰層・地山土ブロック状混）
⑲ 茶灰色砂質土（土器片混）
⑳ 淡灰茶色粘質土
㉑ 撹乱土（⑬㉖㉗ブロック状混）
㉒ 撹乱土（⑮㉕㉘ブロック）
㉓ 撹乱土（⑭㉖ブロック）
㉔ 暗灰褐色粘土（又は粘質土）
㉕ 茶褐色粘質土
㉖ 淡茶褐色粘質土
㉗ 灰茶色砂質土
㉘ 褐灰色粘土
㉙ 暗青灰色粘土
㉚ 淡褐灰色粘質土
㉛ 灰黒色粘質土（又は泥土）

SD1～3・土壙の断面

① 撹乱土（調査中のものか？）
② 暗褐茶色粘土
③ 淡茶黒色粘土
④ 灰褐色粘質土
⑤ 淡青褐色砂質土（腐植土混）
⑥ 灰褐色砂質土（粗砂混入）
⑦ 暗茶褐色粘質土（粗砂混）
⑧ 茶灰色粘土
⑨ 淡青灰色粘土
⑩ 暗青褐色粘土
⑪ 黄褐色粘質土
⑪ 黄褐色粘質土 ｝ SK10
⑫ 暗黄褐色粘質土
⑬ 淡黄茶色粘質土
⑭ 暗茶黒色粘質土（炭化物多量混） ｝ SK5
⑮ 茶灰色～茶褐色粘質土
⑯ 淡黄褐色粘質土
⑰ 淡茶灰色粘質土（土器片混）
⑱ 暗茶褐色粘質土
⑲ 褐茶色粘質土
⑳ ㉑層地山ブロック混入
㉑ 暗灰茶色粘質土（裏込石含）
㉒ 暗褐茶色粘質土（裏込石含）

挿図. 7　D区遺構断面図

などが出土している。なおこの土壙の長軸の方位はN－65°－Eを示している。（挿図８参照）



挿図. 8　D区土壙１平面・断面図

土壙２

土壙１の東側で後述の遺構４（築地）附近に位置する土壙である。土壙内堆積は淡茶褐色～暗灰褐色粘質土のみで、ここより平瓦・丸瓦などの破片に混って信楽焼（58、59）などの陶器片が認められた °長軸 1.8m、短軸 1.2m、深さほぼ20cmを測り、長軸方位はN－65°－Eを示している。

土壙３（瓦だまり）

ＳＤ６東端のほぼ延長上で後述の１号住居附近に位置する土壙である。土壙内堆積は暗茶褐色土のみで、ここにはこぶし大よりやや大きめの石が集中しており、それに混って多量の平瓦・丸瓦などの破片が検出されたほか、

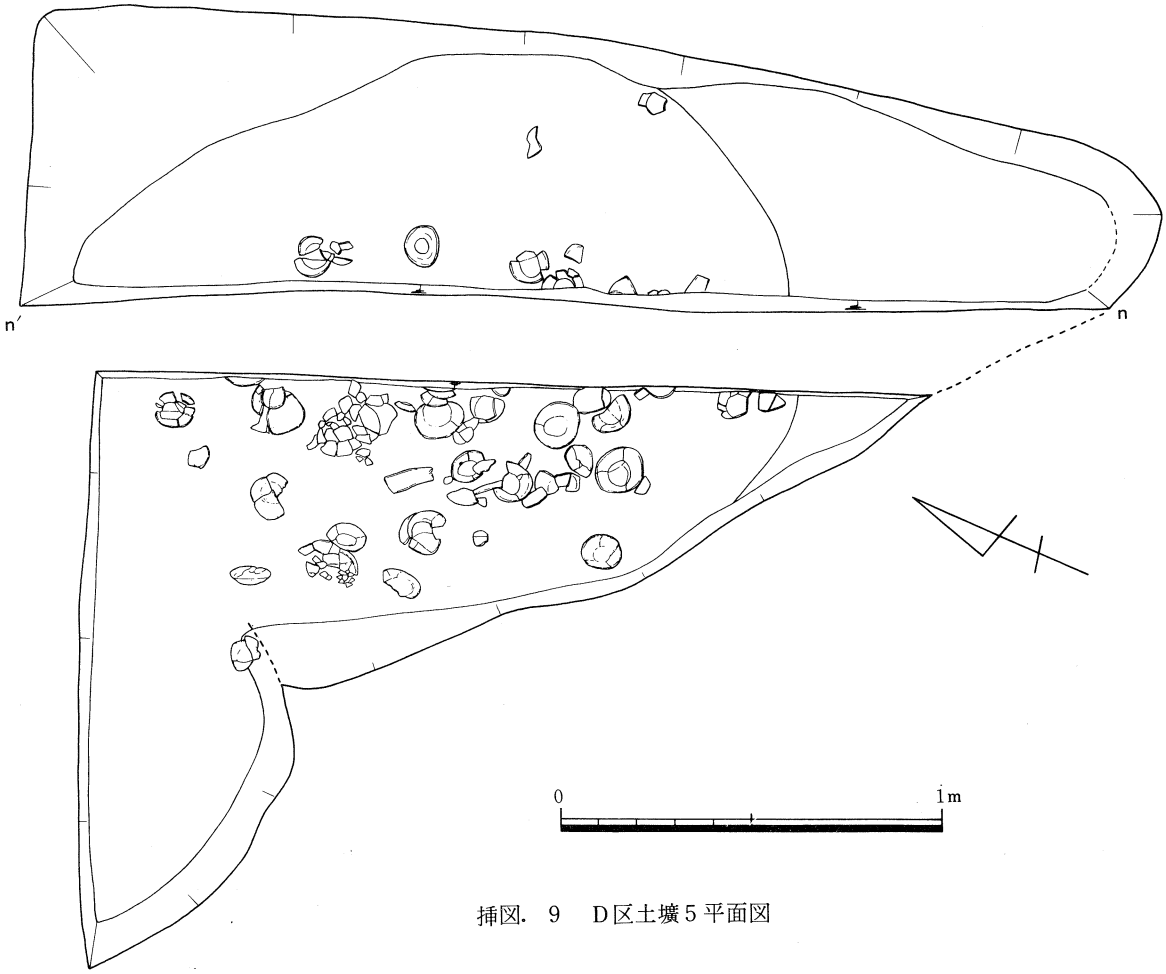
白磁埦（60)、陶器（61)、瓦（552）などが出土している。このうち陶器（61）は仏具の一種と考えているが底部のみが残存しており、その糸切り底がかなり磨耗しているところから何かを摺るために転用されたことがうかがえる。土壙の長軸は 2.5m、短軸は 0.9m、深さ約25cmを測り、長軸方位はN－66°－Eを示している。

土壙４（瓦だまり）

ＳＰ１Ｄセクションの南端でトレンチ南壁附近に位置する土壙である。この土壙はＳＰ１埋土上面より浅く切り込まれており、長軸 3.3m、短軸 2.1m、深さ約50cmを測る楕円形の掘り方をもっている。ここより軒平瓦(526、528、535、553、554、560) をはじめ、多量の瓦が出土しており、これに混って瀬戸系天目茶埦(63)、土師器皿（36、62、64）などが出土している。長軸方位はN－63°－Eを測る。

土壙５（廃棄土壙）

トレンチ北東角附近に位置する土壙である。検出当初は井戸１、'土壙10を含めて大型の土壙と考えていたが、掘り込みの過程でこれが三つの遺構より形成されており、土壙10が井戸１と土壙５を切っていることが判明した。土壙内堆積は第１層淡黄茶色粘質土、第２層暗茶黒粘質土（炭化物多量混)、第３層茶灰色～茶褐色粘質土となっており、第２層中と第３層直上で多量の土師器皿(68～83、85)および瀬戸美濃系の陶器（65）のほか用途不明鉄製品(410)、砥石（67）などが出土している。形状は土壙10によって北側半分が切られているため不明であるがほぼ楕円を呈するものと思われる。この場合に推定される規模は長軸がほぼ３m、短軸が 1.5mで深さ30～40cm前後と考えられる。長軸方位はN－19°－Wを示している。（挿図９参照）



挿図. 9　D区土壙５平面図

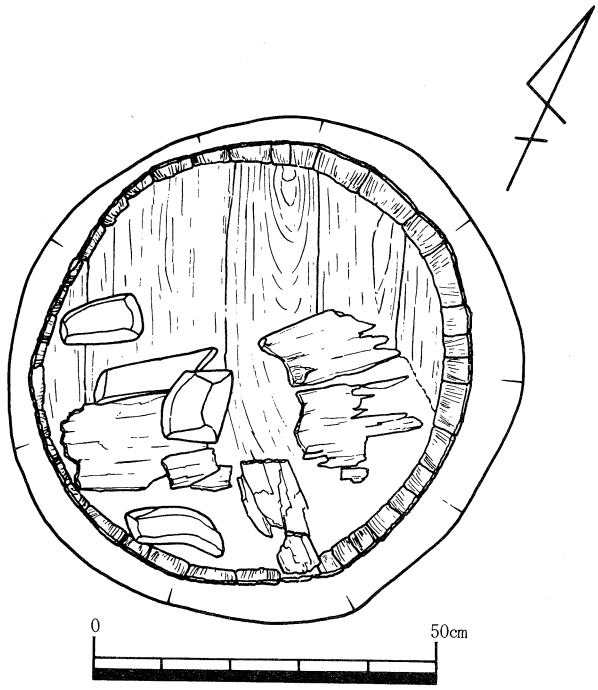
土壙６

土壙５の南端部に近接して検出され、後述の遺構８を切っている大型土壙である。土壙内堆積は大きく二層にわかれ、上層は暗茶褐色～茶黒色粘質土、下層は青褐色～暗灰褐色粘質土となっており、上層より土師器皿（84、87）、青磁片（86）などが出土している。長軸 5.7m、短軸 3.3m、深さ80cmを測り、長軸方位はN－21°－Wを示している。

土壙８（井戸２）

土壙１の北側、トレンチ壁近くに位置する径80cm前後の円形土壙である。ここでは土壙の掘り方いっぱいに桶が据えられてあり、底板の上に蓋と考えられる木片が落ち込んでいる。土壙内堆積は暗茶灰色粘質土（腐植物混）のみで、ここより瀬戸美濃系の小皿（88）が出土している。なお検出面から底板までの深さは約42cmを測る。

（挿図10参照）



挿図. 10　D区土壙８（井戸２）平面図

土壙10

土壙５、井戸１を切る土壙である。長軸 1.4m、短軸 1.2mほどの方楕円を呈するもので、深さは30～40cmを測る。土壙内堆積は二層認められ、上層は黄褐色粘質土、下層は暗黄褐色粘質土が堆積している。ここよりの遺物の出土はない。

遺構４（築地）

トレンチ中央やや東寄りで東西方向に二条の平行した溝状遺構が検出され、その北部が直角に二度屈折しているのが確認された。検出当初は径10～50cmほどの大小さまざまな石が溝内に帯状に堆積しており、そこに土器、瓦などの小片のほか、土壁の一部分と考えられる焼土塊が若干認められた。これらの石は遺構の掘り込みを進め

て行く過程で溝内に落ち込んだものであることが確認された。また二条の溝の間は地山土に酷似した黄灰色～黄褐色粘質土でつき固められており、北部の屈折部附近ではそこに直径20cm前後の柱穴が不等間隔で５～６ケ所検出されている。溝は西側の方が深く60cmほどであるのに対し、東側では20cm前後である。溝内堆積は西側では淡灰褐色粘質土ほか６層が見うけられ、ここより丸瓦（555・556）をはじめ瓦が比較的多く出土しているが、東側の溝の淡茶灰色粘質土ほか一層においてはこれといった出土遺物はない。遺構中軸線の方位はN－27°－Eを示している。なお遺構４の北部に認められる石組みの井戸は現代のものである。

遺構５（溜枡）

土壙１の北側に隣接する長辺４ｍ、短辺３ｍの隅丸方形の土壙である。土壙内堆積は茶灰色砂質土ほか十層認められ、最上層より青磁碗（99）のほか土師器皿の小片が数個出土している。土壙東辺の肩口附近では径20cm前後の石が認められ、断面観察によってこれが土壙四面に石組みとして構築されていた可能性が考えられる。深さ40～50cmを測り、長軸方位はN－81°－Wを示している。（挿図７参照）

竪穴住居

１号住居

トレンチ東部中央にあって南西角のみが残存する住居跡である。床面までの深さは15～20cmほどで、埋土は茶黒色粘質土、暗茶黒色粘質土の２層が認められ、住居南辺の南西角附近の貼り床上面には焼土が認められる。この附近より壺（186）と甕の胴部が出土している。また住居内でピット四ケ所（主柱とは考えられない）と土壙一基が検出されているが出土遺物はなく詳細は不明である。南北主軸方位はN－９°－Eとほぼ磁北を示している。

２号住居

トレンチ北東角でその南西角のごく一部が検出されており、深さ約15cmの掘り方の底部がたいらであることから住居跡と考えた。住居内堆積は黒灰色粘質土のみが認められ、ここより土師器の極小片が出土している。

３号住居（遺構６）

検出当初は住居中央部に黄白色～黄灰色粘質土がマウンド状に認められ、そこより焼土と共に用途不明の柱状土製品（604）が出土していたため遺構６として遺物等を採取した。その後掘り込みが進むにつれて古墳時代の土師器（164～171）が出土し、また床面が検出されたため住居跡と判断した。検出面より床面までの深さは約20cm前後で、淡黒灰色粘質土に地山土が混入する貼り床が厚さ３～５cmで認められた。この住居跡は調査中にほ場整備の計画変更があり、削平をまぬがれることとなったため部分掘り込みのみにとどめた。形は一辺５ｍほどの隅丸方形を呈しており、南北主軸方位はN－19°－Wを示している。

その他の遺構

トレンチ西部北辺附近に古墳時代の土師器が比較的集中して出土した部分があり、遺構１として掘り込みを行ったが、確たる遺構は検出されていない。また土壙３の北側では断面青紫色を呈する極めて焼きの良い丸瓦をはじめ、平瓦とも含めて十数点の瓦が地山直上で検出されている。このほか長辺５ｍ、短辺 3.5ｍを測る方形の掘り方（遺構３）や一辺３ｍを測るほぼ方形の掘り方（遺構８）などを認めたが、これらはいずれも10cm前後と浅

く、出土遺物も認められなかったため詳細を知るには至っていない。

(ロ) 遺　物

当区で検出された遺物は一部竪穴住居出土の土器類を除けば、他はすべて平安時代末期から室町時代後期の範疇でとらえることができよう。その種類もさまざまで、土師器類、磁器類、陶器類、漆器椀、瓦類、鉄製品、五輪塔、こけら経、鞴とかなり多様である。これらの遺物について適宜考察を試みながら若干の説明を加えてみたい。

①土師器類

土師器皿

一般に土師器皿における編年作業は京都府内の各所で緻密におこなわれているようであるが、この年代観の把握は分類による各タイプの占める比率の変化によって読みとれるようである。[注(6)] これを前提として、まず当慈恩寺遺跡出土の土師器皿を次のA～Fの6形態に分類し、器形の大きさによってさらに、1：大型（12cm以上)、2：中型（9cm～12cm)、3：小型（9cm以下）の3つに分けることによって各タイプの占める比率を調べてみたい。その表記はA類の中型器形ならばA_2と記載する。

A類：いわゆる「ヘソ皿」の系統をひくもので、[注(7)] 底部より直線的に外方へ立ち上がる口縁部は口縁上半でやや厚みをもち、底部外面中央には指押えによる窪みが認められる。口縁外面上半と器内面はユビナデが施され、外面下半は指圧痕が認められる。中型のA_2と小型のA_3がある。

B類：比較的平坦な底部より外方へ立ち上がる口縁部は、外面下半に施された指圧によって外反するように見えるが、口縁端部直下でユビナデにより内弯する。器内面はユビナデされており、端部に1条の沈線をもつものもある。B_2とB_3とが認められる。

C類：比較的平坦な底面より外方へ立ち上がる口縁部は、外面下半に施された指圧によって外反するように見えるが、口縁端部直下でユビナデにより直立気味に端部に至る。この指圧痕とユビナデとの境には1条の沈線が認められるものもある。器内面は底部の見込み部分に強いユビナデによる凹線がめぐり、口縁部と底部とを画している。大型器形のC_1と中型器形のC_2がある。

D類：比較的薄い底部は整形が粗雑で波打っており、口縁部下半には指圧痕が認められる。口縁部上半は大きく外反し、端部はその直下のユビナデによっていったん稜をなしやや厚みをもっている。器形は中型器形のD_2のみである。

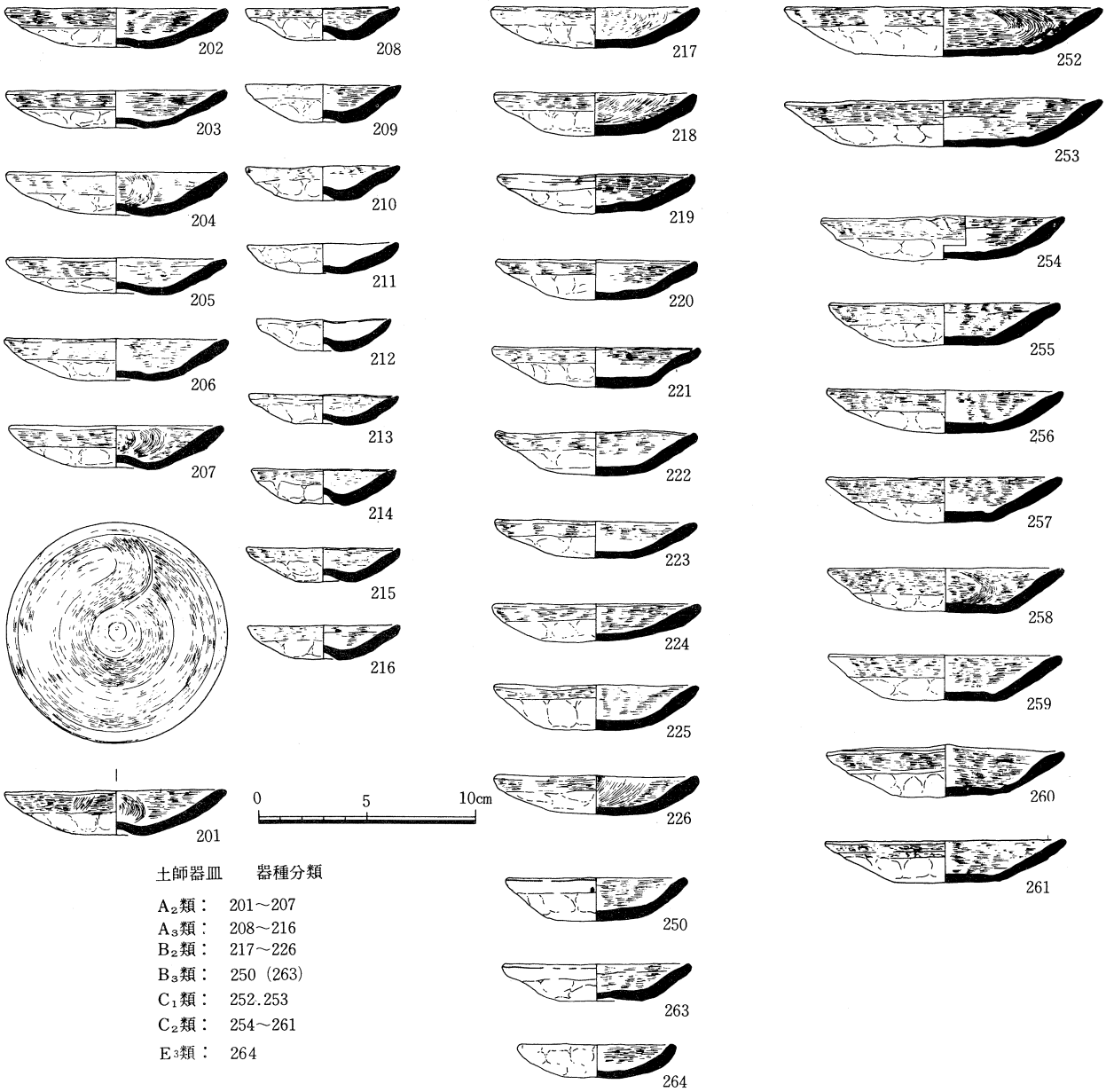
E類：比較的丸味をもつ底部に内弯気味の口縁部が立ち上がり、端部は丸く収まるものである。器内外面とも調整痕は認め難く、わずかに口縁部内面にユビナデを見るのみである。小型器形のE_3のみがある。

F類：平坦な底部より内弯気味に立ち上がる口縁部は短く、端部は厚みをもって丸く収まるものである。器内外

表１　慈恩寺遺跡Ｄ区検出遺構出土土師器皿分類表

遺構＼分類	A類		B類			C類		D類	E類	F類		
	A_2	A_3	B_1	B_2	B_3	C_1	C_2	D_2	E_3	F_1	F_3	総計
ＳＰ１　Ａセクション	—	3	—	4	—	1	—	—	—	—	—	８個体
ＳＰ１　Ｃセクション	—	6	—	3	—	—	—	—	—	—	—	９個体
ＳＰ１　Ｄセクション	14	10	—	53	6	3	9	1	1	—	—	97個体
ＳＰ１　Ｅセクション	—	1	—	2	—	—	—	—	—	—	—	３個体
ＳＰ１　総計	14	20		62	6	4	9	1	1			117個体
土壙１	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	１個体
土壙５	—	1	3	5	1	—	—	11	—	—	—	21個体
土壙６	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	２個体
土壙　総計		1	4	6	1	1		11				24個体
ＳＤ　１	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	4	５個体
ＳＤ　総計										1	4	５個体

※計測個体は残存½以上のものである。



土師器皿　器種分類

A_2類：　201～207
A_3類：　208～216
B_2類：　217～226
B_3類：　250（263）
C_1類：　252.253
C_2類：　254～261
E_3類：　264

挿図. 11　Ｄ区ＳＰ１Ｃ．Ｄセクション出土　土師器皿実測図

面ともにユビナデが施されている。大型器形のF_1と小型器形のF_3がある。
これらのほかに、B_2タイプの特徴をもち、底部外面に若干の窪みをもつもの（263）があるが、わずか１個体のみの出土であったためここではとりあげないことにする。

この分類をもとに各遺構出土の土師器皿の内容を見れば表１のようになる。ただしこの表で示す個体数の数値は、残存部位½以上のものを対象とし、以下は切り捨てた。

次にこれら土師器皿を出土した遺構の中でも特にその出土量の多かったＳＰ１Ｃ，Ｄセクションと土壙５について詳細に検討を加えてみたい。

ＳＰ１Ｃ,Ｄセクション出土の土師器皿をタイプ別に見ると、総個体数106個体のうち、A_2－14個体、A_3－16個体、B_2－56個体、B_3－６個体、C_1－３個体、C_2－９個体、D_2－１個体、E_3－１個体となっており、これをパーセンテージにおきかえると次のようになる。

A_2＝13%、A_3＝14%、B_2＝53%、B_3＝６%、C_1＝４%、C_2＝８%、D_2＝１%、E_3＝１%

同様に土壙５出土土師器皿について見れば、総個体数21個体に対して次の比率となる。

A_3＝５%、B_1＝14%、B_2＝24%、B_3＝５%、D_2＝52%

両者を比較すれば、ＳＰ１Ｃ，Ｄセクション出土の土師器皿ではB_2が最も多く53%と主流を占め、次いでA_3（14%）、A_2（13%）、C_2（８%）の順でD_2はわずか１%に過ぎないが、主壙５においてはD_2が52%とその半数以上を占め、以下B_2（24%）、B_1（14%）となりA_3はわずか５%にとどまっている。つまりＳＰ１Ｃ、Ｄセクション出土の土師器皿群と土壙５出土の土師器皿群との間に時期的な変遷があるとすれば、それは前者のB_2に対して後者のD_2であると言えよう。

ここで当慈恩寺遺跡検出の各遺構をそこから出土した土師器皿によって分けると次の四時期が考えられる。

（Ⅰ）F_1タイプの土師器皿
　　が主流となるもの　―　ＳＤ１
（Ⅱ）B_2タイプの土師器皿
　　が主流となるもの　―　ＳＰ１、土壙６
（Ⅲ）C_1タイプの土師器皿
　　が主流となるもの　―　土壙１
（Ⅳ）D_2タイプの土師器皿
　　が主流となるもの　―　土壙５

ただしこの土師器皿による遺構の分類はあくまでも½以上残存の土師器皿を対象として区分したもので、厳密さには欠けている。

さてここにあげたＡ～Ｆ類の各タイプの土師器皿の時期的な変遷を、京都大学における土師器の編年[注(8)]に照らし合わせて具体的な時代観を明らかにしてみたい。

まず当遺跡出土のA_3はいわゆる退化ヘソ皿で、京都においては15Ｃ後半～16Ｃ前半に位置づけられているものである。B_2は京大のＦ類に相当するものと思われ、室町時代中期～後期のものと考えている。C_1は京大のF_3類に相当し、16Ｃ段階のものであろう。なおこれら京都大学における土師器皿の分類は、口縁部の形態・手法等に

よってA～F類に区分され、おのおののタイプによって時代的な変化に注目しており、器形の大小を考慮する当慈恩寺遺跡の分類とは若干ニュアンスが異なる。この意味でA_2、D_2などは京大の資料には認められず、ある意味で地方色の強いものと思われる。ちなみに京都市埋蔵文化財研究所に照会したところ、A_2は形態的にF類に相当し、D_2は京大のE類に相当するものとの示唆をいただいた。この場合の時代観としてはA_2が室町時代後期、D_2は15C段階の後半としての認識が妥当と考える。

古式土師器

壺（186）は球形の体部に肉厚の丸底とやや外反気味の口縁部がとりつくもので、口縁部内外面はヨコナデが施され、体部外面はタタキ目の上からハケ成形が認められ、内面は肩部に指圧とそのすぐ下に横方向のケズリ、体部下半はユビナデが認められる。布留式併行期のものと考えている。

器台（164）は浅く広がった受け部に安定した脚部がとりつくもので、脚柱部は断面平行の円筒状のものである。この脚柱部と脚裾部との接点に３ケ所穿孔が認められる。器表面はかなり磨滅しているため内面の調整は不明であるが、外面は幅１～２㎜の縦方向のヘラミガキが施されているようである。弥生時代の形態を引くものと考えているが、一応前述の 186よりも先行するものとだけ言っておきたい。

その他の土師器類

ほうらく（47）は口径28㎝、器高 7.9㎝を測り、内弯しつつ立ち上がる口縁部は端部で 1.5㎝の厚みをもって肥厚し外端面をもつ。外面はヨコ方向の削り、内面はヨコナデされている。

黒色土器（31）は内面黒色のA類で、口径14.2㎝、器高４㎝を測り、外面には指圧痕と口縁部附近で黒化していないまばらな暗文が認められる。内面の暗文は幅２㎜前後で放射状のものが基本となっているようである。時期的には平安時代末期～鎌倉時代初期のものと考えている。

坩堝（105）は口縁部内径 4.7㎝、深さ約４㎝を測るもので、胴部中位より幅 3.5㎝、長さ 2.5㎝ほどの把手がついている。器内外面とも表面に溶融物が付着し、胎土中の気泡が外部に向けて作ったと思われるクレーター状の小穴がいたるところに見うけられる。

②磁器・陶器類

磁器類

60は白磁で皿か鉢であろう。薄い器壁をもつ底部は断面三角の高台をもち、つくりも丁寧で安定している。中国産のものであろう。

陶器類

陶器は信楽焼を中心に国産のものがほとんどで、瀬戸美濃、常滑焼などが見うけられる。

信楽焼――擂鉢（27、29、58）、甕（12）、鬼桶などが認められる。

擂鉢（27）は口径32.2㎝、底径10.7㎝、器高15.5㎝を測り、深くて裾すぼみの感を与える。内面には４条の櫛描条痕が施されている。28は口径30㎝、底径12、5㎝、器高12.1㎝で、27のひとまわり小さいものであるが条痕は６条と多い。58は底部のみの残存で27と同様４条の櫛描条痕が施されている。

甕（12）は体部下半と底部のみの残存である。底面にはヘラ切り痕がわずかに残り、未調整である。体部内面

にはロクロ成形時のケズリが認められる。

鬼桶は小片のみの残存であるが、おそらく小型のものであろう。

常滑焼 ── 甕、壺などが認められるが破片の数としては圧到的に甕が多い。壺（3）は口径5cmの短かい口縁部に直接丸い肩のずん胴がとりつくもので、内外面は焼きしめによる茶灰色を呈している。底部は欠損している。

瀬戸美濃系 ── ほとんどが小皿であるが一部鉢または壺と思われる底部が認められる。

小皿（48、50）は鉄釉が施されており、底部は断面三角形の低い削り出し高台をもつものである。48の見込み周辺には黒褐色釉で花弁状の模様が施されている。小皿（49、51、52）は灰釉が施されているものである。49は釉薬に光沢が無く、見込み部分にも施釉が認められるのに対し51、52は光沢があり、見込み部分の釉薬を削り取っている点で相異がある。なお鉄釉小皿の見込み部分には重ね焼きの際のトチ痕が認められる。また49は断面三角形の低い削り出し高台をもつが、51、52は底面を削り窪めることによって畳付き部分を形成している。

小皿（57）はおろし皿で、見込み部分に櫛でおろし目をつくり、薄く鉄釉を施している。口縁部の内外面には灰釉が見られるが、底部外面は無釉である。底部は底面を削り窪めることにより畳付き部分をつくり出している。

③漆器類（椀）

総計8個体（W1～W8）が検出されているが、椀の形状をとどめているものは7個体である。

W2は椀の体部下半と底部のごく一部の残存である。高台は欠損している。黒漆地に赤漆で花一輪が描かれている。

W3はきわめて薄い木地に赤漆が施され、体部に『大』の文字と底部高台内側に『一』の文字が黒漆で描かれている。口径14.5cmに対し器高 4.2cmと浅く感じられ、安定した高台をもっている。

W4は口径10.7cm、器高 7.7cmを測る底の深い椀で、底部は高台を成さず円弧状を呈している。わずかに黒漆が認められる。

W5・W7は底部のみの残存である。W5・W7ともに、黒漆が施されている。

W6は浅い体部に安定した低い高台をもつものである。黒漆が施されている。

W8は口径13.7cm、器高 6.6cm、高台径 6.8cmを測る深くて安定した感じを与えるものである。内面は黒漆地に赤漆で菱形とその中に五本の横線が描かれており、外面は黒漆がほとんど剝げ落ちている。

④瓦　類

D区出土の瓦は遺物テンバコにして 100ケース余りを数え、軒丸、軒平、鬼瓦のほか、鳥衾、雁振、熨斗と丸瓦、平瓦などの各種の瓦が出土している。色も明黄橙色を呈するもの（赤瓦）、表面が銀化した黒で断面は暗灰色のもの（黒瓦）、表面は黒っぽく見えるが断面は青紫色を呈するもの（青瓦）と大きく三種類が認められる。以下特徴のあるものについて説明を試みたい。

①軒丸瓦

当区出土の軒丸瓦はすべて三巴文のものばかりである。これらはその瓦当面の文様形態において次の三種類に大きく分類できるものと思われる。なお巴の巻方向は尾部から頭部に向って進む方向を示すものとする。

軒丸Ⅰ類：頭部から尾部に至るまでの上面の稜が比較的明稜な左巻三巴文で、圏線珠文帯ともにない。巴の頭部は先端が尖っており、各先端は接してはいないがきわめて近い位置どうしにある。尾部はほぼ半周した位置で外縁部に至る。外縁部は内区凹面に対し比較的高い位置にあり、ヘラ等による面とりは認められない。瓦当部と丸瓦部の接点における補強粘土は薄く、強いユビナデによって整形されている。丸瓦部は外面に粗いヘラミガキが認められ、内面下端部は比較的幅広く、面取りがされた後、ユビナデが施されている。

このタイプに属するものとして519、522のほかに（1001～1005、1007～1014、1052）が出土している。

軒丸Ⅱ類：瓦当の内区と外区とを画する部分に圏線をもち、外区に珠文帯をもつものである。これは巴文の形状等によって次の二タイプに細分される。

軒丸Ⅱa：頭部から尾部に至るまでの上面の稜は不鮮明で、頭部先端が尖った三巴文は幅が狭く、¾周ほど深く巻き込んだもの（527、557、1051）と半周ほど巻き込んだもの（1006）とがある。外縁部の調整等はⅠ類とよく似ている。量的にはあまり認められない。

軒丸Ⅱb：頭部から尾部にかけての上面の稜は不鮮明で、頭部が丸い三巴文は比較的厚みがあり、半周巻き込んだところで圏線に接している。外縁部外端は幅の狭い面とりが施されている。この例としては1050があげられる。

軒丸Ⅲ類：三巴文の頭部は丸く尾部はほぼ一周巻き込んだところで隣りの尾部と重なり圏線状を呈す。珠文帯はかなり外縁部に寄っており、外縁部は比較的幅が広い。内区凹面に対する外縁部の高さに相異が認められるところから次の二タイプに細分される。

軒丸Ⅲa：外縁部が内区凹面に対し比較的高い位置にあるもの。（509、541、1006、1015～1017）

軒丸Ⅲb：外縁部が内区凹面に対し比較的低い位置にあるもの。（510、529、533）

以上三種五タイプの次期的な相異について元興寺出土の瓦類[注（9）]に照し合わせて検討を加えると、Ⅰ類は先端が尖り、外縁部が内区凹面に対し比較的高い位置にあり、また丸瓦部における内面下端の面とりの状態から見て鎌倉時代の前半に位置づけられるものと考えられ、いずれも小型であることから小さな堂もしくは築地壁を葺いたものと考えられる。

Ⅱ類は圏線があり、それによつて画された外区が広く珠文帯とのバランスがゆったりとしていること、あるいは内区凹面に対し外縁部の位置が高いことなどから、室町時代前期～中期のものと考えられ、Ⅲ類は圏線が認められないこと、外縁部の位置がⅡ類に比べて低くなってきていることなどから、室町時代の中期～後期のものとして考えたい。

表2　慈恩寺遺跡D区検出遺構出土軒丸瓦計測表

分類	出土地	遺物No.	色	直径	内区			外区						巴の先端の形状
									内縁		外縁			
					径	巴数	巻方向	外区広	幅	文様	幅	高	文様	
Ⅰ類	SP1 Dsec	519	赤	10.9	7.5	3	左	—	—	—	1.25	1	素文	先尖
	SP1 Dsec	522	黒	10.8	7.8	3	左	—	—	—	1.4	0.8	素文	先尖
	SP1 Asec	1001	青	(10.8)	7.4	3	左	—	—	—	1.5	0.7	素文	先尖
	SP1 Asec	1002	青	(10.8)	9.8	3	左	—	—	—	1.2	0.8	素文	先尖
	SP1 Asec	1003	青	(10.6)	7.6	3	左	—	—	—	1.3	0.9	素文	先尖
	SP1 Asec	1004	青	(11.0)	7.6	3	左	—	—	—	1.2	0.8	素文	先尖
	SP1 Asec	1005	青	(10.2)	7.4	3	左	—	—	—	1.3	0.8	素文	先尖
	SP1 Csec	1007	青	(10.4)	8.0	3	左	—	—	—	1.1	0.8	素文	先尖
	SP1 Dsec	1008	青	(10.8)	7.4	3	左	—	—	—	1.2	0.9	素文	先尖
	SP1 Dsec	1009	青	(10.2)	7.6	3	左	—	—	—	1.2～1.5	0.7	素文	先尖
	SP1 Dsec	1010	青	11.0	8.0	3	左	—	—	—	1.4	0.8	素文	先尖
	SP1 Dsec	1011	青	10.0	8.0	3	左	—	—	—	1.4	0.9	素文	先尖
	SP1 表採	1013	青	(10.6)	8.2	3	左	—	—	—	1.35	0.8	素文	先尖
	SD3	1014	青	10.5	7.7	3	左	1.4	—	—	1.1	0.9	素文	先尖
Ⅱa類	SP1 Dsec	527	青	(10.8)	7.2	3	左	2.3	1.6	S19.圏線	1.4	1.3	素文	先丸
	遺構5	557	黒	12.4	6.6	3	右	2.9	1.5	S16.圏線	1.4	0.6	素文	先丸
Ⅱb類	SP1 Dsec	547	黒	(17.4)	9.2	3	右	4.0	1.5	S (24)	1.6～3.2	1.5	素文	先丸
	土壙5	1050	青	(15.4)	7.8	3	右	3.5	1.4	S (18)	2.1	1.1	素文	先丸
Ⅲa類	SP1 Asec	509	黒	(14.4)	8.4	3	右	3.0	1.2	S (26)	1.6	1.0	素文	先丸
	SP1 Csec	541	黒	(16.2)	10.0	3	左	3.1	1.2	S (26)	1.95	0.5	素文	先丸
	SP1 Csec	1006	青	(17.4)	11.0	3	右	3.2	1.0	S (24)	1.7	0.8	素文	先丸
	土壙3	1015	青	(13.8)	8.6	3	左	2.6	1.5	S (22)	1.1	1.3	素文	先丸
	土壙3	1016	黒	(16.8)	10.4	3	左	3.2	1.4	S (28)	1.8	0.5	素文	先丸
	土壙4	1017	青	(15.0)	8.6	3	左	3.2	1.6	S (26)	1.6	1.2	素文	先丸
Ⅲb類	SP1 Asec	510	黒	16.5	9.7	3	右	3.4	1.2	S 22	2.1	1.5	素文	先丸
	SP1 Esec	529	黒	15.4	7.6	3	右	3.9	2.0	S 18	2.0～2.6	1.0	素文	先丸
	SP1 表採	533	?	11.2	6.4	3	右	2.4	1.0	S 16	1.5～2.0	0.9	素文	先丸

※　（単位　cm）

※　（　　）内は推定値を示す。

※　巴の巻方向については、頭部の進む方向が基準である。

※　Sは珠文を表わす。

※　外区と内区とを界する圏線は、本表では便宜的に外区（内縁）のの範中に入れた。

②軒平瓦

軒平瓦はすべて平瓦の凸面部をすり消してあり、叩き目は認められない。しかし瓦当面文様形態から次の三種類に大きく分類できるものと思われる。なお瓦当各部位の名称は奈良市ならびに元興寺文化財研究所の表記法[注(10)]にならって表記する。

軒平Ⅰ類：内区、外区の区別がなく、瓦当面に直接6個の剣刀文が一列に整然と施されている。この際、剣刀文の上端が瓦当の上外縁と平行であるため、この間で外縁部状のものを形成している。従って下外縁は三角形の連なりのように見える。また瓦当部は平瓦部の粘土を折り曲げて形成され、剣刀文凸面には布目が認められる。アゴの部分はユビナデによって調整されている。瓦当面の上縁部分には5～6㎜前後の面とりがされており、平瓦部上面の布目はこれに重なる平瓦がおおう面で認められ、その他は布目が消されている。また平瓦部の上部側面には面とりが認められない。

このタイプの瓦は小型のもののみが認められ、瓦当長 160㎜、瓦当幅26㎜で、平瓦部を含めた平面形状は、縦長 170㎜、奥辺の横長が 145㎜と若干奥すぼまりである。526、528、542、559、561、1044、1045がこれに該当する。

軒平Ⅱ類：二～三条の波形文が基本となるもので、中央に菊花文が入り左右対象の位置に波形文が入るパターンをもつものと思われる。これは界線をもつものと、もたないものの二種類に細分できる。

軒平Ⅱａ：瓦当面の下部に内区と外区とを画する界線をもっており、脇区を経て上縁部に接続している。上部外縁は幅広い面とりが施され、平瓦部にアゴ部の粘土を補塡することによって瓦当部分を形成している。主文の凹凸は比較的浅く、外縁部は瓦当面に対して比較的高い位置にある。側縁部は後述のⅢ類に比べ狭いようである。菊花文の認められるもの（1047）、脇区に倒立した菊花文が認められるもの（549、554）、波形文のみが認められるもの（1048）がある。なお 549は掛瓦である。

軒平Ⅱｂ：瓦当面のつくり、上部外縁の幅広い面とり、主文のパターン等はⅡａと大差がない。ただ界線が認められないことと脇区における倒立した菊花文が認められない点で相異がある。波形文のみのもの（520、523、560、1044）と菊花文が認められるもの（525）が出土している。

軒平Ⅲ類：均整唐草文が基本となるもので、前述のⅡ類に比べ瓦当面が大きく、瓦当中央部の文様も菊花、花菱、宝珠とさまざまである。界線のあるものとないものとで二種類に分類できる。なお瓦当面のつくり、上部外縁の面とり、全体に対する側縁部の厚みなどはⅡ類と大差ない。

軒平Ⅲａ：界線をもっており主文の凹凸が浅いもので、菊花文が認められるもの（512、530）、宝珠が認められるもの（553）、均整唐草文のみのもの（503、1046）がある。

表3　慈恩寺遺跡D区検出遺構出土軒平瓦計測表

分類	出土地	遺物No.	色	上弦幅	弧深	下弦幅	厚	内区厚	内区主文	上外区		下外区		脇区		文様面の深さ	備考
										厚	文様	厚	文様	厚	文様		
Ⅰ類	SP1 Dsec	土壙4 526	黒	15.85	1.95	15.75	2.4	—	剣刀文	—	—	—	—	—	—	—	外区分かれていない
	SP1 Dsec	土壙4 528	黒	15.30	2.0	—	2.4	—	〃	—	—	—	—	—	—	0.25	〃
	SP1 Dsec	542	青	15.60	1.75	115.6	2.4	—	〃	—	—	—	—	—	—	0.3	〃
	遺構5	559	黒	15.80	2.3	16.0	2.5	—	〃	—	—	—	—	—	—	—	〃
	SP1 表採	561	青	15.25	1.8	(15.6)	2.4	—	〃	—	—	—	—	—	—	—	〃
	SP1 Csec	1043	青	—	—	—	2.5	—	〃	—	—	—	—	—	—	0.2	〃
	SP1 Esec	1045	青	(18.8)	(1.75)	(18.0)	(2.5)	—	〃	—	—	—	—	—	—	—	〃
	土壙4	1049	青	—	—	—	2.8	—	〃	—	—	—	—	—	—	—	〃
Ⅱa類	土壙1	549	黒	—	—	—	3.8	2.0	波形文	0.9	界線	0.9	界線	1.0	界線	0.1	一部菊花文有り
	土壙4	554	青	—	—	—	(3.6)	2.0	波形文	0.95	界線	(1.0)	界線	1.2	界線	0.1	〃
	土壙4	1047	黒	—	—	—	3.7	1.9	波形文	0.8	界線	0.8	界線	—	—	0.1	中心部に菊花文を配する。
	土壙4	1048	青	—	—	—	(3.6)	2.0	波形文	1.0	界線	0.9	界線	—	—	0.1	〃
Ⅱb類	SP1 Dsec	520	黒	—	—	—	3.3	1.6	波形文	—	—	—	—	1.6	—	—	中心部に菊花文を配すると考えられる。
	SP1 Dsec	523	赤	—	—	—	3.5	1.65	波形文	1.1	素文	1.0	素文	1.4	素文	0.05～0.2	中心部に菊花文を配する
	SP1 Dsec	525	赤	(22.8)	(2.2)	—	3.7	1.4	波形文	1.5	素文	1.0	素文	—	—	0.05～0.1	〃
	SP1 土壙4	560	黒	—	—	—	3.5	1.8	波形文	0.8	素文	0.8	素文	1.3	素文	0.1	中心部に菊花文を配すると考えられる。
	SP1 Dsec	1044	赤	—	—	—	—	—	波形文	—	—	—	—	—	—	—	中心部に菊花文を配すると考えられ小片にて計測不可能
Ⅲa類	SP1 Asec	503	黒	—	—	—	6.2	2.8	KK	1.6	界線	1.8	界線	2.3	界線	0.2	
	SP1 Bsec	512	赤	—	—	—	6.3	2.9	KK	1.8	界線	1.6	界線	—	—	0.1	中心部に菊花文を配す
	SP1 表採	530	黒	—	—	—	5.9	2.9	KK	1.7	界線	1.4	界線	—	—	0.05	〃
	土壙4	553	赤	—	—	—	4.6	2.2	KK	1.1	界線	1.8	界線	—	—	0.05～0.3	中心部に宝珠を配する
	土壙1	1046	黒	—	—	—	5.8	2.8	KK	1.2	界線	1.6	界線	2.45	界線	0.05	
Ⅲb類	SP1 Asec	502	黒	(18.0)	(2.2)	(22.0)	5.5	2.4	KK	0.9	素文	0.9	素文	1.5	素文	0.35	
	土壙4	515	黒	—	—	—	3.9	2.8	KK	0.9	素文	0.7	素文	—	—	0.3	
	SD2	535	黒	(19.0)	(1.3)	(18.0)	3.8	2.6	KK	0.8	素文	0.7	素文	1.3	素文	0.2	中心部に花菱形文を配する
	遺構3	551	青	(30.1)	(2.5)	(31.0)	4.9	2.9	KK	1.2	素文	0.9	素文	1.5	素文	0.2	中心部に菊花文を配する
	土壙3	552	黒	—	—	—	4.4	2.7	KK	1.0	素文	0.8	素文	—	—	0.1	中心部に花菱形文の変形文を配する。

※　（単位　cm）

※　KKは均整唐草文を表わす。

※　外区と内区を画する界線は、本表では便宜的に外区の範中に入れた。

※　Ⅰ類（剣刀文瓦）において、計測不可能であった為、本表に記載しなかったものが(赤)3点、(青)7点を数える。

表4　慈恩寺遺跡D区検出遺構出土丸瓦計測表

出土地	色	遺物No.	全長	筒部長	玉縁部長	幅				高				厚		備考
						筒部		玉縁部		筒部		玉縁部		筒部	玉縁部	
						前端	後端	段部	尻部	前端	後端	段部	尻部			
SP1 Aセクション	黒	1018	—	—	4.5	12.7	—	10.0	7.0	6.9	—	4.6	3.3	2.4	1.7	
〃	黒	1019	—	—	4.5	12.9	—	10.7	7.7	7.0	—	5.0	3.8	2.0	1.5	
〃	黒	1024	—	—	4.8	—	—	11.6	(7.6)	—	—	5.9	3.7	3.1	2.3	
〃	青	1020	—	—	4.8	13.0	—	9.9	7.0	7.3	—	4.7	3.5	2.6	1.7	
〃	青	1021	—	—	5.0	13.6	—	10.4	—	7.1	—	4.5	—	2.5	1.7	ヘラ跡あり
〃	青	1022	—	—	4.4	14.9	—	11.6	(7.7)	7.9	—	5.2	3.6	3.0	2.5	
〃	赤	1023	—	—	4.4	15.3	—	11.4	8.0	7.8	—	5.4	3.6	3.0	2.2	
SP1 Bセクション	青	513	24.2	20.5	3.3	21.6	—	19.9	6.8	5.5	—	4.5	2.5	1.7	1.5	
SP1 Dセクション	黒	544	—	—	4.1	12.7	—	9.6	6.9	6.2	—	4.2	3.1	2.0	1.3	
〃	黒	546	—	—	5.1	12.3	—	10.5	8.9	7.3	—	5.0	3.5	3.6	1.7	
〃	赤	1040	—	—	—	11.2	—	10.3	—	6.1	—	(4.8)	—	2.0	—	
〃	?	548	—	—	3.4	11.2	—	10.0	6.1	5.8	—	4.3	2.3	1.8	1.5	
SP1 表採	黒	538	—	—	—	(15.2)	—	(11.5)	—	8.0	—	5.5	—	3.0	2.1	
〃	黒	1025	—	—	5.5	13.6	—	10.5	7.9	7.6	—	5.1	33.3	2.4	1.7	
〃	黒	1026	—	—	4.1	13.7	—	10.1	(6.5)	6.9	—	4.8	2.9	2.8	1.8	
〃	黒	1027	—	—	5.2	(15.5)	—	12.0	(8.8)	7.4	—	5.2	3.4	3.0	2.5	
〃	黒	1028	—	—	5.8	14.6	—	11.6	(7.3)	6.2	—	4.2	2.5	2.5	2.0	
〃	黒	1037	—	—	2.9	10.2	—	9.1	6.3	5.4	—	5.3	2.4	1.4	1.1	
〃	青	539	—	—	5.2	14.7	—	10.9	7.8	7.4	—	6.2	2.4	2.8	2.0	
〃	青	1039	—	—	5.4	13.4	—	10.5	7.5	7.9	—	5.4	2.8	2.4	2.1	
〃	赤	1038	—	—	4.6	15.4	—	11.4	8.2	7.6	—	5.5	3.4	3.3	2.3	
土壙1	青	1041	—	—	5.4	14.7	—	11.1	—	7.4	—	5.0	—	2.4	1.8	
土壙3	赤	1033	—	—	5.0	(14.9)	—	10.9	(7.1)	6.9	—	5.3	3.1	3.1	1.8	
土壙4	黒	1029	—	—	6.0	—	—	11.0	7.6	(7.7)	—	5.5	3.0	3.4	2.4	
〃	黒	1030	—	—	4.6	13.2	—	10.1	(7.5)	7.3	—	5.3	2.3	2.7	1.5	
〃	青	1031	—	—	5.4	11.7	—	9.0	5.4	4.9	—	3.0	2.3	2.0	1.7	
〃	赤	1032	—	—	4.8	15.6	—	11.4	(8.2)	8.4	—	5.7	3.3	3.4	2.4	
SD3	黒	1036	—	—	3.3	11.2	—	9.9	(6.8)	5.5	—	4.3	2.2	1.0	1.5	
〃	青	1034	—	—	—	(15.0)	—	7.0	—	7.5	—	(4.5)		3.0	—	
〃	赤	1035	—	—	5.3	(12.7)	—	10.5	(7.0)	6.4	—	4.5	2.5	2.2	2.1	
遺構4	青	555	—	29.9	—	15.7	—	—	—	8.0	—	—	—	2.9	—	ヘラ跡あり
〃	〃	556	33.5	28.0	5.0	14.2	—	10.5	8.2	7.4	(4.9)	5.2	3.8	3.0	2.0	

※　(単位　cm)　　※　(　　)内は推定値を表わす。

※　厚さについては、筒部・玉縁部ともそれぞれ中央部において計測した値である。

表5　慈恩寺遺跡D区検出遺構出土平瓦計測表

出土地	色	遺物No.	全長	幅		高		厚			備考
				前(狭)端	後(広)端	前(狭)端	後(広)端	前(狭)端	中央部	後(広)端	
SP1 Aセクション	黒	501	33.5	22.5	25.5	6.2	6.2	2.1	2.9	2.8	
SP1 Cセクション	赤	1042	—	—	20.7	—	3.5	—	2.0	2.1	
SP1 表採	赤	536	34.5	—	26.6	—	5.7	2.1	2.8	2.6	
〃	赤	537	34.3	23.6	25.9	5.6	5.8	1.8	2.6	2.5	
遺構2	青	550	28.3	19.8	22.2	5.4	4.1	1.5	2.1	1.9	

※　(単位　cm)

軒平Ⅲb ：界線をもたないものである。菊花文が認められるもの（551)、花菱文の変形と考えられる文様を配するもの（502）などがある。

以上三種五タイプに分類したこれらの軒平瓦の次期的な相異について、軒丸瓦同様元興寺出土の瓦類に照して検討を加えてみたい。

まずⅠ類は主文が剣刀文であること、瓦当面のつくりが折り曲げであること、主文部分に布目が認められることなどから鎌倉時代前期に相当するものと考えている。Ⅱ類は元興寺出土の瓦類にその例がなく、比較して時代を想定できないが、主文中央の菊花が室町時代のものに類似しており瓦当面における上外区の界線が省略され、また瓦当面のつくり、外縁上部の面とりと共伴の平瓦における凸面の叩き目のすり消しなどから類推して室町時代中期のものとしておきたい。Ⅲ類は512、531（共にⅢa 類）が元興寺出土の瓦にその類例が認められ、Ⅲb をさらに簡略化したものと考えるならばⅢa を室町時代前期～中期、Ⅲb を室町時代後期までとして考えたい。これは界線の有無によって判断したもので、文様的に見れば 553に見られる宝珠を配する瓦についてはⅢa の中でもむしろⅢb と併行する可能性がある。なお界線の有無による時期差に注目するならば、Ⅱ類においても同様のことが言えそうであるがかなり側面的な見方であるので今後の調査例を待って検討してみたい。

⑤その他の遺物

こけら経

ＳＰ１の西側（Ａセクション附近）と東側（Ｅセクション附近）で検出されている。Ａセクション附近のものは広幅で削り剝ぎ片面写経のものでC1タイプの土師器皿小片を伴っており、Ｅセクション附近のものは細幅割り剝ぎ両面写経のもので木製塔が共伴している。このタイプの異なるこけら経にはその時期的な差が認められ、前者が鎌倉～室町期のもの後者が室町後期～安土桃山期のものと考えられる。

なおこのこけら経の詳細については別にとりあげ、あらたに考察等をつけ加えて刊行の予定である。注(11)

五輪塔

ＳＰ１・ＡセクションからＢセクションにかけて空風・火・水輪が総計30個検出されている。一般に五輪塔は各輪の東西南北の四面に四門の梵字を配するのが本格であるが、この様な遺品は数少ない。当区検出の五輪塔においても東方発心門の一面のみに梵字を配する略式のものがあり、組み合せは不明ながら水輪のみに刻んでいるものが認められるようである。なお水輪は上下端を水平に切り、ホゾを造っているものはないが、経文等の供養品納入のため、円形に浅く孔を穿ったもの（奉篭孔）が一点認められる。これらの五輪塔は現在浄厳院境内地で保存されている。

(ハ) 小　結

Ｄ区検出遺構には前述したように２時期にまたがる池跡（ＳＰ１・Ⅰ次、ＳＰ１・Ⅱ次）をはじめ、６条の溝（ＳＤ１～ＳＤ６)、貯蔵土壙（土壙１)、瓦溜り（土壙３・土壙４)、廃棄土壙（土壙５)、井戸（土壙８)、築地（遺構４)、溜枡（遺構５）の他に三棟の竪穴住居（１号住居～３号住居）がその主なものとしてあげられる。ここで

表6　慈恩寺遺跡D区検出遺構出土遺物一覧表

遺物 遺構	土師器類	陶磁器類	漆器類	瓦類	その他
SP1 Aセクション	Ⅲ－A_3、B_2、C_1	信楽焼擂鉢 （櫛がき3条、4条、5条） 信楽焼壺 信楽焼甕 瀬戸灰釉壺	椀　W4	軒丸－Ⅰ、Ⅲa、Ⅲb 軒平－Ⅲa、Ⅲb 丸瓦、平瓦	瓦質土器火舎 ふいご、るつぼ 鉄製品、鉄　滓 こけら経 五輪塔
SP1 Bセクション	Ⅲ－A_3、B_2？	信楽焼擂鉢 （櫛がき4条） 瀬　戸（近世）	椀　W5、W7	軒丸－Ⅰ 軒平－Ⅲa 丸瓦、平瓦、鬼瓦	瓦質土器火舎 ふいご、鉄　滓 五輪塔、るつぼ
SP1 Cセクション	Ⅲ－A_3、B_2	信楽焼擂鉢 （櫛がき4条、5条） 信楽焼種壺 信楽焼甕 瀬戸鬼おけ 常　滑	椀　W8	軒丸－Ⅰ、Ⅲa 軒平－Ⅲb 丸瓦、平瓦	木製品 下駄W9 ふいご
SP1 Dセクション	Ⅲ－A_2、A_3、B_2、B_3、C_1、C_2、E_3 火　舎 ほうらく	常　滑 瀬　戸 信楽擂鉢 （櫛がき3条、4条、5条）	椀　W2、W6	軒丸－Ⅰ、Ⅱa、Ⅱb 軒平－Ⅰ、Ⅱb 丸瓦、平瓦	瓦質土器火舎 鉄　滓
SP1 Eセクション	Ⅲ－A_3、B_2、 〔高　坏〕 〔な　べ〕	〔信楽焼擂鉢〕 （櫛がき不明） 〔信楽焼甕〕 〔瀬戸　鬼おけ〕		軒丸－Ⅲb 軒平－Ⅰ 丸瓦、平瓦	木製塔 こけら経
SP1 表　採	Ⅲ－A_2、A_3、B_1、B_2、B_3、C_1、E_3、F_1、F_3	信楽焼擂鉢 （櫛がき4条、6条） 信楽焼壺 信楽焼甕 瀬戸灰釉 瀬戸花瓶（仏具）		軒丸－Ⅰ、Ⅲb 軒平－Ⅰ、Ⅱb、Ⅲa、Ⅲb 丸瓦、平瓦	須恵器坏ふた 瓦質土器火舎 るつぼ 焼土（焼壁？）
土　壙　1	Ⅲ－C_1 ほうらく	信楽焼擂鉢 （櫛がき5条） 信楽焼甕？ 瀬戸美濃灰釉皿 瀬戸美濃鉄釉皿 瀬戸天目茶埦 瀬戸おろし皿 瀬戸花瓶（仏具）		軒平－Ⅱa、Ⅲa 丸　瓦 平　瓦	銅　銭
土　壙　2	Ⅲ－B_2	信楽焼擂鉢 （櫛がき6条） 信楽焼甕 瀬戸鉢？		鬼瓦、丸瓦 平瓦	

土　壙　3		信楽焼擂鉢 （櫛がき５条） 瀬 戸 鉢 瀬戸花瓶（仏具） 瀬 戸 埦？ 白 磁 埦（中国産）		軒丸－Ⅲa 軒平－Ⅱa 、Ⅲb 平瓦、丸瓦	
土 壙 4	皿－A_3、B_1、B_2、B_3 D_2	瀬戸鉄釉天目茶埦		軒丸－Ⅲa 軒平－Ⅰ、Ⅱa、Ⅱb Ⅲa 鬼瓦、丸瓦、平瓦	
土　壙　5	皿－B_1、B_2	信楽焼擂鉢 （櫛がき４条） 瀬戸美濃灰釉埦 瀬　戸		軒丸－Ⅱb 丸瓦、平瓦	鉄 製 品 砥　石 〔チャートはく片〕
土　壙　6	皿－B_1、B_2	信楽焼擂鉢 （条痕不明） 瀬戸美濃小皿 青磁小皿		平　瓦	瓦質土器
土　壙　8		瀬戸美濃小皿			
SD１	皿－F_1、F_3 黒色土器埦	〔信 楽 焼〕	椀　W３		
SD２	ほうらく	信楽焼擂鉢 （櫛がき５条、９条） 信楽焼壺 瀬戸鬼桶 瀬戸近世		平　瓦 丸　瓦	土　　埵 瓦質土器 ふ い ご 鉄鏃、小柄
SD３		〔信 楽 焼〕 〔信楽擂鉢〕 （条痕不明） 〔常　滑〕		（軒丸－Ⅰ） 丸瓦、平瓦	（ふいご）
SD５	皿－B_2 壺、甕、高坏	信楽焼擂鉢 （櫛がき３条）		平　瓦	
遺　構　1	皿－B_2 高坏、甕、壺	信楽焼擂鉢 （櫛がき４条）		軒平－Ⅰ 丸瓦、平瓦	
遺　構　1		瀬戸鉄釉小皿		軒平－Ⅲb、丸瓦、 平瓦	
遺　構　4				鬼瓦、丸瓦、平瓦	ふ い ご
遺　構　5	皿－B_2	青 磁 埦		軒丸－Ⅱa 丸瓦、 軒平－Ⅰ、平瓦	砥　　石 ふ い ご
遺　構　6		信楽焼甕		丸瓦、平瓦	
遺　構　7		信楽焼壺		丸瓦、平瓦	

※　〔　　〕内は表面採集したものである。

はこれら主要遺構についての時期的な検討を、そこから出土した遺物等によって若干の説明と考察を加えてみたい。

まず三棟の竪穴住居を除く主要遺構における平面形状の切り合い関係を調べてみると、ＳＤ１はＳＤ２、ＳＤ３に切られており、ＳＤ３はＳＰ１に切られている、ＳＤ３とＳＤ５との切り合い関係は不明であるがＳＤ５はＳＤ２、ＳＤ１に切られている。ＳＰ１はＳＤ２、土壙４に切られている。またＳＰ１には二時期あるのでＳＤ１・Ⅰ次→ＳＰ１・Ⅱ次である。これらをまとめて時期的に古いもの順に並べると、ＳＤ１→ＳＤ３・ＳＤ５→ＳＰ１・Ⅰ次→ＳＰ１・Ⅱ次→ＳＤ２・土壙４となる。切り合い関係の認められない遺構４、遺構５をはじめ土壙１、２、３、５などはそこから出土した遺物によって判断せざるを得ない。ここでこれらの遺構より出土の遺物について個々に検討してみよう。（表６参照）

ＳＤ１はF_1、F_3タイプの土師器皿、いわゆるＡ類の黒色土器埦などが認められ、時期としては平安末～鎌倉初頭に相当するものと思われる。ＳＤ２は信楽・瀬戸美濃系などの陶器片が認められ、これらの相対時期はおそらく室町時代の範疇で押えることができるものと思われる。ＳＰ１はＳＰ１・Ⅰ次、ＳＰ１・Ⅱ次の二時期に渡って存在した可能性があり、Ｂセクションにおいて観察されたようにＳＰ１・Ⅰ次、Ⅱ次は共に埋められた形跡がある。このＳＰ１・Ⅱ次の埋め戻し時期としては、Ｃ、Ｄセクションで認められた多量の土師器皿から推測してB_2タイプからC_1タイプの時期、すなわち室町中期～室町後期と見るのが妥当と思われる。この場合ＳＰ１・Ⅰ次の埋め戻し時期はＳＰ１・Ⅱ次の形成時期に先行することは言うまでもない。一方ＳＤ５(遺構２)では時期は不詳であるが土師器皿のB_2タイプと三条痕をもつ信楽焼擂鉢が認められ、ＳＤ５が少なくとも室町期を下がるものとは考え難い。さらにこのＳＤ５を切るＳＰ１・Ⅰ次では、Ｅセクション附近で検出されたこけら経と木製塔があげられ相対時期を鎌倉～室町期としているが、これらは多分に伝世する可能性があり、これをもってＳＰ１・Ⅰ次の埋め戻し時期とするのは早計である。しかしＳＰ１・Ⅰ次がＳＤ５とＳＰ１・Ⅱ次との間に位置していることを考え合わせて、室町前期～中期と一応考えておきたい。これらをまとめると次のようになる。

平安末～鎌倉初頭期――ＳＤ１

室町前期～中期　　――ＳＰ１・Ⅰ次、ＳＤ３・ＳＤ５

室町中期～後期　　――ＳＰ１・Ⅱ次、ＳＤ２

この場合のＳＰ１・Ⅰ次、Ⅱ次は埋没時期を示すものである。

次にこのような切り合い関係をもたない遺構について、その出土遺物から時期の検討を加えてみよう。

土壙１は瀬戸美濃系の小皿が完形で五枚と、土師器皿のC_1タイプ、軒平瓦のⅡａ、Ⅲａタイプが出土している。土師器皿C_1は16Ｃ段階（室町後期）のものであるのに対し、軒平瓦においてはⅢａを室町前期～中期においているが、瓦は裏込めなどに使われており、また伝世する可能性も強いことから、ここはやはり土師器皿C_1を相対年代にとって室町後期とするのが妥当かと考えられる。以下同様に土師器皿を各遺構における相対年代の指標にとると次のとおりとなる。

土壙１――C_1タイプ（室町後期）

土壙２――B_2タイプ（室町中期～後期）

土壙４――B_2タイプ（室町中期～後期）

土壙５――D_2タイプ（室町中期）

土壙６――B_2タイプ（室町中期～後期）

遺構５――B_2タイプ（室町中期～後期）

土壙３、土壙８は土師器皿の出土を見ないため、他の遺物で判断せざるを得ないが、土壙３では土壙１と同様の櫛描５条の信楽焼擂鉢が出土しており、土壙８では土壙１で見られたものと同様の瀬戸美濃系の小皿が出土しているところから、両者とも土壙１とそれほど大きな時期差はないものと考える。

一方、各遺構の性格について今一度振り返ってみると、ＳＰ１はその中ほどに地山の部分が小島状に残っており、また他の主要遺構がＳＰ１を避けて配置されているように思えるところから庭園に関係する池として想定できる。ＳＤ１はその形状が「コ」の字に曲るところから建物の区画の溝を思わせ、ＳＤ３とＳＤ５は一連のものと考えるならばＳＤ１と同様のものであろう。遺構４はその溝状部分より出土した壁土や中央の盛土部分で認められたピットなどから築地である可能性が強い。土壙１は溜枡とも考えられるが、ここは京都市山科区で検出された石室収納庫[注(12)]と同様のものとして考えたい。土壙２、３、４、５は瓦あるいは土師器皿の廃棄土壙で、掘削後すぐに埋め戻された可能性が強い。遺構５は福井県一乗谷朝倉氏遺跡に見られる石積施設と類似しており、便所との考えもあるが、[(注13)]一応ここは溜枡としておきたい。

以上のことがらを要約してまとめると、当区においてひとつのビジョンが得られそうである。

つまり平安末～鎌倉初期以前にはすでに溝（ＳＤ１）によって区画された建物（建物１）があり、これと並行して池（ＳＰ１・Ⅰ次）が存在していたものと考えられる。この建物１は軒丸Ⅰ類、軒平Ⅰ類で葺かれた築地壁（遺構４）を伴っており、これは建物１の廃絶後も存続していた可能性がある。

室町前期～中期においてはすでに建物１と池（ＳＰ１・Ⅰ次）は廃絶されており、これに代ってＳＤ３とＳＤ５とによって区画された建物（建物２）と池（ＳＰ１・Ⅱ次）が新たに形成される。この建物２は溜枡（遺構５）、貯蔵庫（土壙１）、井戸（土壙８）の附属施設を持っていたものと考えられ、土壙５において検出されたD_2タイプの土師器皿はこの建物２で使用されたものと思われる。この場合石組みの貯蔵庫（土壙１）は、そこからの出土土師器皿（C_1タイプ）が溜枡、井戸などの出土遺物に比べて一時期新しいかと思えるのだが、ここはあえて建物２に附属する貯蔵庫として考えたい。

しかし建物２と池（ＳＰ１・Ⅱ次）は存続期間が短かく、室町後期には両者共廃絶してしまったようである。この建物２の廃絶に際し、比較的多量の瓦（軒丸Ⅱａ・Ⅱｂ・Ⅲａ・Ⅲｂ、軒平Ⅱａ・Ⅱｂ・Ⅲａ・Ⅲｂ）が土壙３をはじめ池（ＳＰ１・Ⅱ次）に投棄されたものと考えられる。またＳＰ１・Ⅱ次の埋土中よりⅠ類の軒丸・軒平が出土することから考えて、築地（遺構４）もこれと同時に取り壊されたものと思われる。なおＳＤ２、土壙４はＳＰ１・Ⅱ次を切って形成されており、当区検出の主要遺構中最も新しいものと思われる。そしてその形成時期としては建物２とＳＰ１・Ⅱ次の廃絶後である室町後期、もしくは安土桃山前期に位置付けることが妥当であろう。

以上、当区検出の遺構について、その個々の持つ性格と時期的な変遷をたどってみた訳であるが、これらの事柄が示すものはすなわち寺院の沿革を物語るものであり、その期間としては平安時代から室町時代ないし安土桃山時代に至る中世を舞台とするもので、この間における建立と衰退の繰り返しにほかならないと考えられるのである。

（石橋正嗣）

(2) Ｇ　区

調査対象区域の南端部にトレンチＧ区を開設した。Ｇ区の総面積は約 3.370㎡で、ほぼ全域で遺構を検出した。遺構検出面は床土直下の地山面で黄褐色粘質土～黄灰色粘質土である。このトレンチは東西に長く設けたが、地

山面はほぼ平担であり、東部８号住居肩口付近での絶対高はおよそ 90.50M、トレンチ西端では 90.80Mである。ここでの主な検出遺構は、竪穴住居群、溝等であり、その他、小ピット、土壙、多数の溝状遺構などが認められた。ただし８号住居の東側は、田面の掘削により、住居跡などの遺構は検出されていない。（挿図12～16）

(イ) 遺　構

竪穴住居

竪穴住居群はトレンチの中央より東側で検出され、その広がりは、中屋から続く微高地の伸びる方向に従っている。竪穴住居は１号から14号まで検出され、他に平面プランで５棟確認できた。

１号住居

トレンチのほぼ中央で、ＳＤ１の約１ｍ南にその東角を接する。一辺約 3.5ｍの方形で、南北主軸方位はＮ－2°－Ｗと、ほぼ正南北を示す。住居内には全域にわたって厚さ１～３cmの貼り床が認められ、検出面から床面までの深さは北部で４～６cm、南部で８～10cmを測り、床面の絶対高は約90.50Mである。住居内堆積土は、第１層黒茶色粘質土（埋土）、第２層黒茶色粘質土に地山土多量混（貼り床）である。壁溝内堆積土は、淡茶灰色粘質土に地山土混となっている。このうち第１層には古墳時代の土師器片が多量に混入している。住居内には深さ５～30cmのピットが５個検出されたが、いずれもこの住居の主柱穴と呼ぶには疑問が残る。またこの住居の東辺、南辺と西辺の一部に、壁溝より15～30cm程離れて小ピットが並ぶ、ピットの規模は、いずれも径５～10cm、深さは３～５cmを測り、ピット間の間隔は70～90cmと規則性が認められる。これは上屋構造の垂木の柱穴と考えられ、北辺で検出されなかったのは、削平の為と考えられる。この埋土から土師器壺（139、148）が出土している。

２号住居

１号住居のほぼ南東２ｍのところに西辺を接し、３号住居を切っている。規模は１号住居と同じく小型で１辺約 3.5ｍの方形である。南北主軸方位はＮ－20°－Ｅである。検出面から床面までの深さは２～４cmを測り、床面の絶対高は中央部で 90.50Mである。また住居の中央南寄りには、厚さ２～３cmの貼り床が認められる。住居内堆積土は第１層暗茶黒色粘質土（埋土）、第２層地山土に暗茶黒色粘質土混（貼り床）である。壁溝内堆積土は暗茶褐色粘質土である。住居内施設としては、住居の南壁東寄りで厚さ５～10cmの焼土及び炭の混入する窪みが認められ、この焼土中からは土師器の高坏（138）が出土している。他に東辺中央で土壙が検出されている。この住居も１号住居と同じくピットは存在するものの柱痕は認められない浅いもので、この住居の柱穴とするには疑問が残る。（挿図13参照）

３号住居

１号住居の東約３ｍで西辺をもち、４号住居にきられており一辺約 6.5ｍの方形住居で南北主軸方位はＮ－20°－Ｗを示す。検出面から床面までの深さは約10cmを測り、床面中央部での絶対高はおよそ 90.50Mである。住居内堆積土は第１層黒褐色砂質土（埋土）、第２層淡茶褐色粘質土地山土ブロック混（貼り床）である。壁溝内堆積は、淡黄褐色粘質土である。貼り床は、住居内の５～10cmの窪みを修正するかたちで施されている。壁溝は平面プランでは確認されなかったが、断面観察で北辺に浅い溝が確認され、これが相当するものと思われる。床面か

挿図. 12　G区遺構図

0　15　30m

挿図. 13　G区1．2．3．4号住居平面図

0　3　6m

らはこの住居の主柱穴と考えられる４つのピットが検出されており、いずれも柱痕を残す。柱穴の掘方径は30～50cm、柱痕の直径は15～20cmを測る。遺物は床面から土師器の壺（149)、柱穴から甑（147）が出土しており、他に床面から受口状口縁甕の口縁部の出土をみるがいずれも極めて小片である。

４号住居

西辺で３号住居を切り、北東隅をＳＤ１によって切られる一辺約５ｍの方形住居である。南北主軸方位はＮ－で５cm測り、東部は削平されているようである。また床面中央部での絶対高はおよそ90.40Ｍである。住居内堆積土は第１層黒茶色粘質土に土師器片混（埋土）第２層明黄灰色粘質土（貼り床)、壁溝内堆積土は暗茶褐色粘質土に地山土（黄褐色土）混である。住居の南部では、この地域には見られない黄白色の水ヒ性粘土ブロックが検出された。粘土ブロックは長径約80cm、短径約40cmの不定楕円で、一番厚いところで20cmを測る。また柱穴が３ケ所確認され、これらの掘方径は20～30cmで、柱痕の直径は10～15cm、深さ40～50cmを測る。他に屋内土壙（土壙１）が南辺中央部にあるが、遺物は出土していない。遺物は、粘土ブロック付近の床面から土師器の高坏（182)、受口状口縁を呈す甕（172)、埋土からの甕の底部（181）が出土している。

５号住居

４号住居の南東約６ｍに西辺を位置し、一辺約 5.5ｍのほぼ方形を呈する。同じ位置で６号住居と切り合いを持ち、６号住居を切っている。南北主軸方位はＮ－25°－Ｅである。この住居は、床面が削平されている可能性がある。壁溝は北東隅以外の四周を巡っている。また土壙が４ケ所検出されたが、いずれも５、６号住居のどちらに伴うものか判断し難い。住居内にある８ケ所のピットのうち、この住居の主軸に従う４ケ所の柱穴は、いずれもこの住居の主柱穴と考えられ、掘方径は30～50cm、柱痕径10～15cm、検出面からの深さは40～60cmを測る。先に述べたように５、６号住居のどちらのものか不明であるが、土壙１から土師器の壺口縁（180)、５、６号住居いずれかの床面で高坏（184）が出土した。また同じく床面からたたき石（305）も出土している。（挿図14参照）

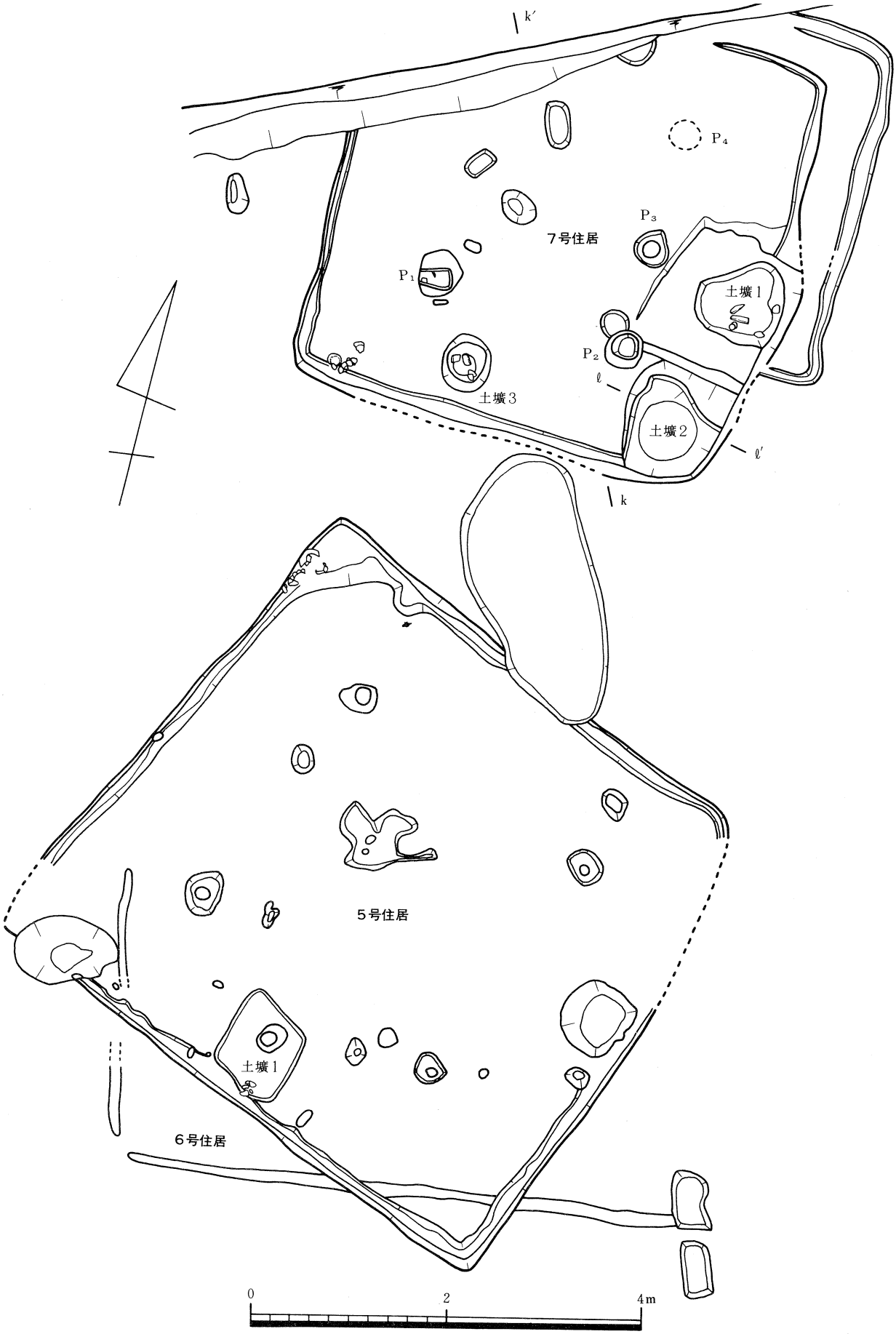
６号住居

５号住居と同じ位置にあり、一辺約 5.5ｍの方形住居と推定でき、南北主軸方位はＮ－４°－Ｗを示す。５号住居と同じく床面が削平されている可能性があり、南辺と東辺の壁溝を検出したのみである。しかし主軸方位に従う４ケ所の主柱穴が検出されており、いずれも残存状態は良い。柱穴の掘方径は20cm前後で、柱痕径は10～15cm、深さは40～50cmを測る。なお、５、６号住居の検出面の絶対高はおおよそ 90.50Ｍである。５号住居の説明で述べたとおり、土壙、床面で遺物が検出されているが、どちらの住居のものか判断し難い。

７号住居

５号住居の北辺から２ｍ北に南辺をもつ。この住居は検出当初９号住居と重複しているものと考えていたが、９号住居の壁溝が７号住居の床面で検出されなかったことや、断面観察で意図的な拡幅が見られたため、その後７号住居の増築が９号住居であるとの認識に至った。よってここでは増築の見られる竪穴住居として述べることにし、９号住居の記述は省略する。

この住居の北辺と東辺の北半分でおよそ50cm拡張のあとが見られる。不定形な方形を呈し、推定規模は一辺約



挿図. 14　ＧＧ区５．６号住居切り合い．７号住居正面図

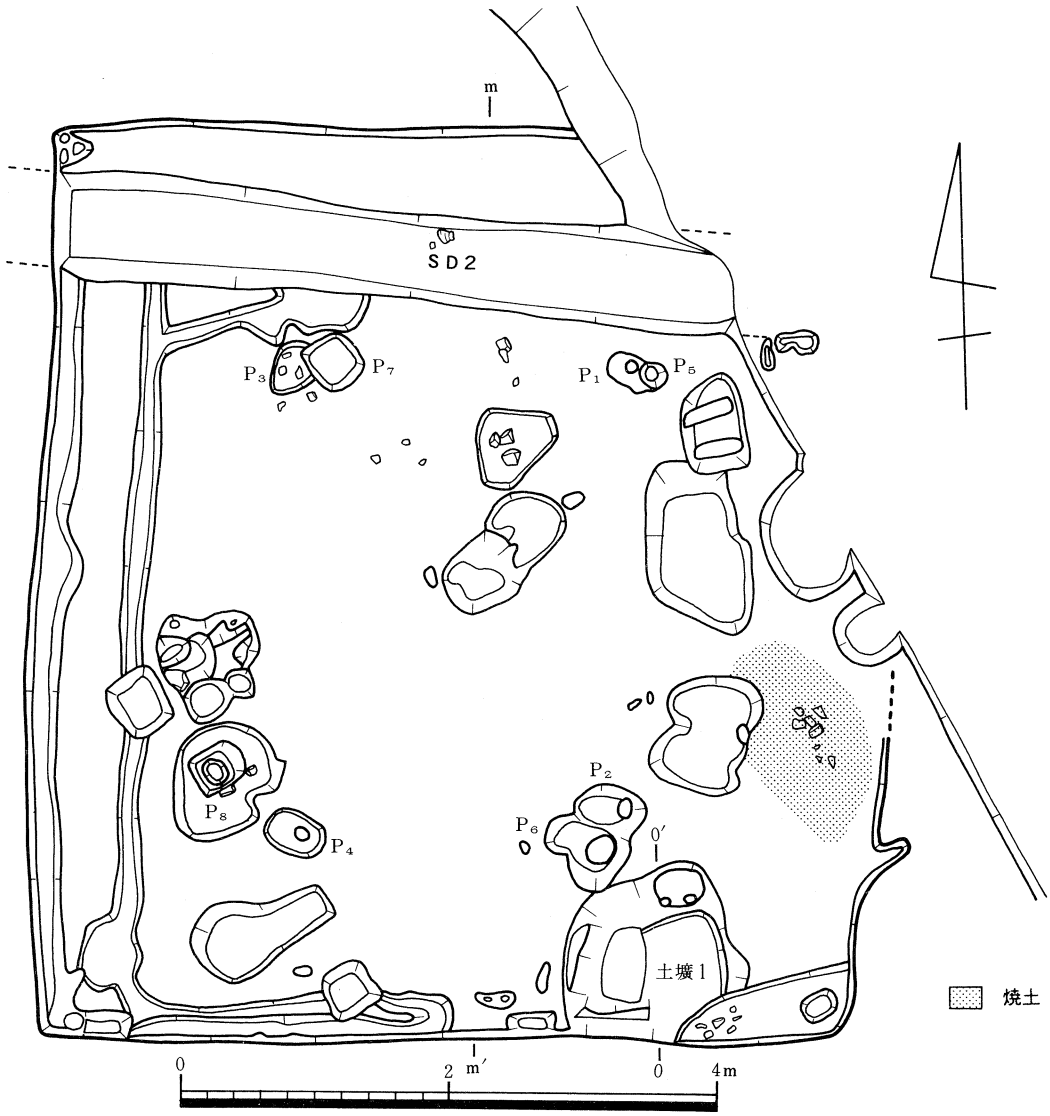
5×5mである。南北主軸方位はN－1°－Wを示す。検出面から床面までの深さは約10cmを測り、床面の絶対高はおよそ 90.35Mである。増築されるベースとなる古い住居の規模は一辺約 4.5mの方形住居である。住居内堆積土は、第1層茶黒色粘質土（埋土）第2層暗茶褐色～黒褐色粘質土、第3層茶灰色粘質土、地山土ブロック混である。ここで第2層は7号住居の貼り床であり、第3層が古い住居の貼り床にあたる。

土壙1　住居の東辺中央部で土壙1が検出された。長軸90cm、短軸70cmの不整形な楕円で、深さはおよそ30cmを測る。土壙内堆積土は上から黒茶色粘質土、淡茶黒色粘質土、淡黄灰色粘質土、淡黄灰色粘質土に黒茶色粘質土混である。堆積の状態をみると、上から3層はこの土壙の埋土で、最下層は使用中の自然堆積土と考えられ、その上面から石製品（300・304）、小型丸底壺（155・162）が出土している。石製品は2点とも柱状で、使用痕が確認できるが、八の字に並べて置いた出土状況から、その上に壺などを据え付けた礎（いしずえ）と考えられる。またこの土壙は7号住居の床面から切り込む形で掘られているものの、増築する以前から受け継がれた可能性は十分ある。

土壙2　住居の南東隅にあって隅丸方形を呈す土壙で、深さ約20cmを測る。土師器片が出土している。

土壙3　南辺中央部付近にあって径約50cmの円形を呈し、深さ15cmを測る。土師器の高坏（156）が出土している。2面ある上の貼り床の下から検出されたため、古い方の住居に伴う土壙と考えられる。

柱穴　この住居からは大小含めて8個のピットが検出されたが、主柱穴としてP_1・P_2が該当し、P_4が想定され



挿図. 15　G区8号住居平面図

る。しかし増築にもかかわらず、柱穴の掘り返しが見られないことや、拡幅が北東辺のみであるところから、古い住居の主柱穴をそのまま利用して増築した可能性がある。また、P_2とP_3との間にはこの住居の出入口が想定できる。この場合、土壙1の上面には蓋板などの設備が考えられ、出入口の道板として併用された可能性もある。

この稿のはじめに、これら竪穴住居は床土直下で、地山土を切り込んで検出されたと述べたが、断面図h－h'を見ると4号住居が淡灰褐色粘質土を切っており、7号住居が茶灰色粘質土を切っている。調査中住居跡のプランを地山土上でしか検出できなかったが、本来これら茶褐色系統の層を切り込んでいた可能性が強い。そうすると、トレンチ南壁の基本層序には認められなかった茶褐色系統の土が、4号住居上面あたりから7号住居、5、6号住居にかけて広がっていたと考えられる。

8号住居

トレンチの東部に位置し、北東角を後世の削平によって切られ、東西方向の溝ＳＤ２を切っている。南北 6.5m、東西6mの方形で、南北主軸方位はＮ－4°－Ｅを示す。検出面から貼り床の見られる床面までの深さは約5cmを測り、床面中央部での絶対高はおよそ90.35Mである。ここでの住居内堆積土は、第1層茶褐色粘質土・地山土混である。この住居は調査を進めるうち、同軸方位でベースとなる古い住居があることが判明した。貼り床も2層あり、壁溝も2本検出された。この場合、暗灰色粘質土・黄褐色土混が古い方の住居の貼り床と考えられ、同じ土に焼土と灰が均一に混入する層がこの住居の貼り床と考えられる。古い方の壁溝は西辺と北辺の一部に見られ、およそ一辺 5.3mの方形住居と考えられ、古い方の住居の柱穴はP_1～P_4であり、8号住居の柱穴はP_5～P_8と考えられる。住居内施設と考えられる土壙1の他、小規模な土壙が検出されている。また南東隅からは焼土の広がりが検出されている。焼土ブロックの規模は径約1×1.5m の楕円形で、厚さ約10cmを測る。この住居の床面からは土師器高坏（106)、滑石製勾玉（306）が出土している。（挿図15参照）

10号住居

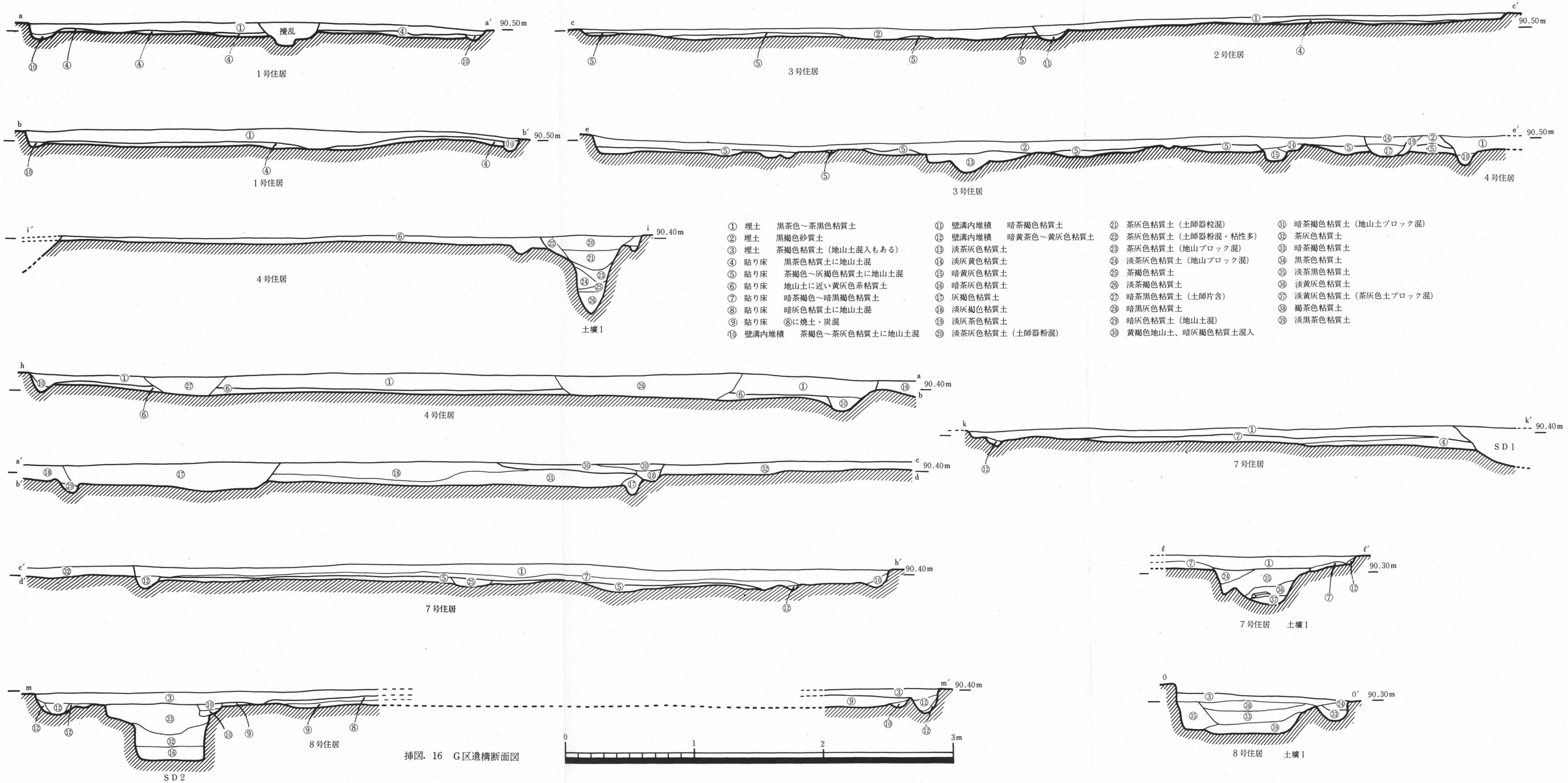
トレンチの北東部、ＳＤ１の北に位置し東西 5.3m、南北 4.5mの方形で、南北主軸方位はＮ－25°－Ｅを示す。ここは、ほ場整備事業計画では切り土の予定のない所で、住居跡の広がりを確認するにとどめた。なお検出面の絶対高はおよそ 90.45Mで、残存する深さは10～15cmを測る。

11号住居

8号住居の東部に位置し、北部を後世の削平の為に切られている。一辺およそ 7.5mの方形住居と考えられ、南北主軸方位はＮ－45°－Ｗを示す。遺構の上面は削平されているらしく、検出した状態では床面が現れていたものと思われる。中央部での床面の絶対高は 90.40Mである。住居内堆積土は第1層淡茶褐色粘質土、第2層淡茶黒色粘質土である。第1層と第2層が貼り床で、この住居の四主柱穴の規模は、掘方径30～40cmで、柱痕は検出できなかったが、深さ40～50cmを測る。床面から土師器片数点が出土している。

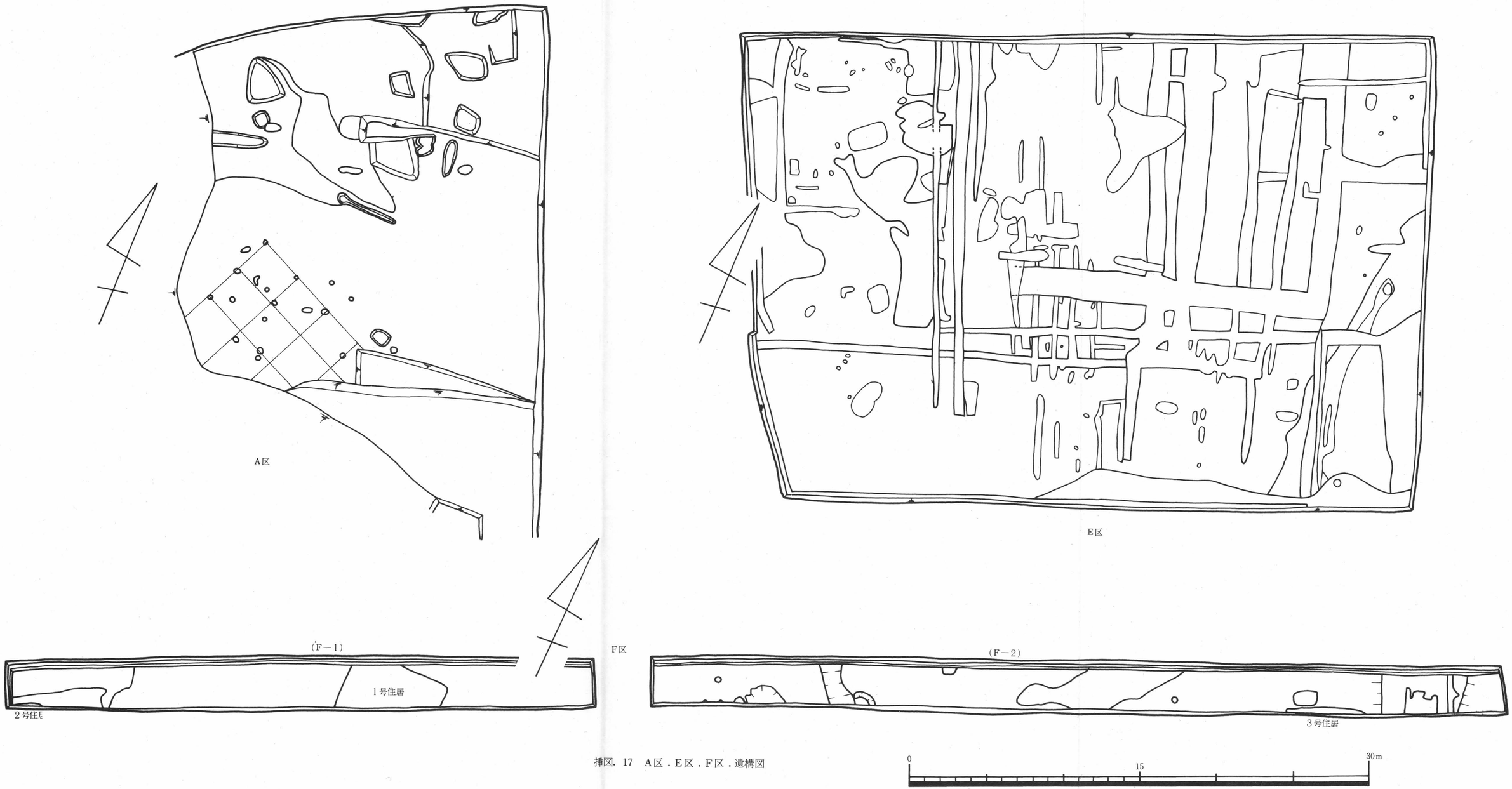
12号住居

トレンチの南壁のほぼ中央に位置し、北辺を削平されていて、南辺はトレンチ外にある。遺存する規模から推定して、一辺約7mの方形住居と考えられる。南北主軸方位はＮ－32°－Ｗを示す。検出面から床面までの深さは20cm、床面の絶対高は 90.30Mである。住居内堆積土は第1層淡黒茶色粘質土、第2層茶褐色粘質土、第3層淡

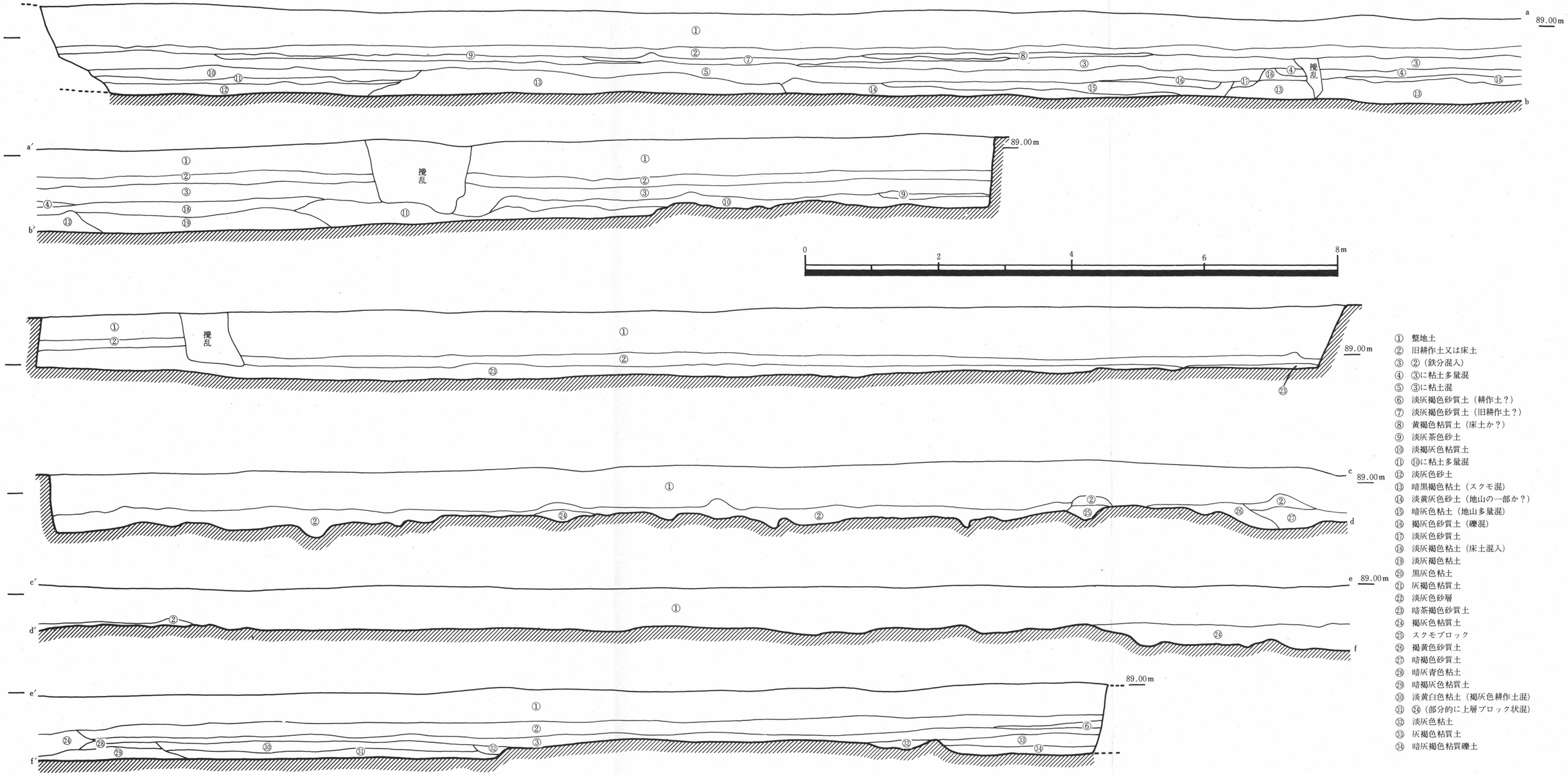


① 埋土　黒茶色～茶黒色粘質土
② 埋土　黒褐色砂質土
③ 埋土　茶褐色粘質土（地山土混入もある）
④ 貼り床　黒茶色粘質土に地山土混
⑤ 貼り床　茶褐色～灰褐色粘質土に地山土混
⑥ 貼り床　地山土に近い黄灰色系粘質土
⑦ 貼り床　暗茶褐色～暗黒褐色粘質土
⑧ 貼り床　暗灰色粘質土に地山土混
⑨ 貼り床　⑧に焼土・炭混
⑩ 壁溝内堆積　茶褐色～茶灰色粘質土に地山土混
⑪ 壁溝内堆積　暗茶褐色粘質土
⑫ 壁溝内堆積　暗黄茶色～黄灰色粘質土
⑬ 淡茶灰色粘質土
⑭ 淡灰黄色粘質土
⑮ 暗黄灰色粘質土
⑯ 暗茶灰色粘質土
⑰ 灰褐色粘質土
⑱ 淡灰褐色粘質土
⑲ 淡灰茶色粘質土
⑳ 淡茶灰色粘質土（土師器粉混）
㉑ 茶灰色粘質土（土師器粒混）
㉒ 茶灰色粘質土（土師器粉混・粘性多）
㉓ 茶灰色粘質土（地山ブロック混）
㉔ 淡茶灰色粘質土（地山ブロック混）
㉕ 茶褐色粘質土
㉖ 淡茶褐色粘質土
㉗ 暗茶黒色粘質土（土師片含）
㉘ 暗黒灰色粘質土
㉙ 暗灰色粘質土（地山土混）
㉚ 黄褐色地山土、暗灰褐色粘質土混入
㉛ 暗茶褐色粘質土（地山土ブロック混）
㉜ 茶灰色粘質土
㉝ 暗茶褐色粘質土
㉞ 黒茶色粘質土
㉟ 淡茶黒色粘質土
㊱ 淡黄灰色粘質土
㊲ 淡黄灰色粘質土（茶灰色土ブロック混）
㊳ 褐茶色粘質土
㊴ 淡黒茶色粘質土

挿図. 16　G区遺構断面図



挿図. 17　A区．E区．F区．遺構図



① 整地土
② 旧耕作土又は床土
③ ②（鉄分混入）
④ ③に粘土多量混
⑤ ③に粘土混
⑥ 淡灰褐色砂質土（耕作土？）
⑦ 淡灰褐色砂質土（旧耕作土？）
⑧ 黄褐色粘質土（床土か？）
⑨ 淡灰茶色砂土
⑩ 淡褐灰色粘質土
⑪ ⑩に粘土多量混
⑫ 淡灰色砂土
⑬ 暗黒褐色粘土（スクモ混）
⑭ 淡黄灰色砂土（地山の一部か？）
⑮ 暗灰色粘土（地山多量混）
⑯ 褐灰色砂質土（礫混）
⑰ 淡灰色砂質土
⑱ 淡灰褐色粘土（床土混入）
⑲ 淡灰褐色粘土
⑳ 黒灰色粘土
㉑ 灰褐色粘質土
㉒ 淡灰色砂層
㉓ 暗茶褐色砂質土
㉔ 褐灰色粘質土
㉕ スクモブロック
㉖ 褐黄色砂質土
㉗ 暗褐色砂質土
㉘ 暗灰青色粘土
㉙ 暗褐灰色粘質土
㉚ 淡黄白色粘土（褐灰色耕作土混）
㉛ ㉔（部分的に上層ブロック状混）
㉜ 淡灰色粘土
㉝ 灰褐色粘質土
㉞ 暗灰褐色粘質礫土

挿図. 18　5号トレンチ（T・5）西壁断面図

茶褐色粘質土・地山土混である。このうち第３層が貼り床と考えられ、地山面の凹凸を修正している。この住居の主柱穴の規模は掘方径30～40㎝、柱痕径15～20㎝、深さ50～60㎝を測る。床面からは受口状口縁を呈する壺（115）が、埋土から（193）が出土している。

13号住居

トレンチの中央より東寄りにあって、11号住居の西辺から西へ７ｍのところに東辺をもつ、一辺約５ｍの方形住居で南北主軸方位はＮ－25°－Ｗを示す。検出面から床面までの深さは約10㎝を測り、床面での絶対高はおよそ90.40Ｍである。住居内堆積土は第１層黒褐色粘質土、第２層暗茶褐色粘質土である。両層ともこの住居が廃棄された後の埋土で貼り床があったかどうかは不明である。また床面上で７ケ所の土壙が検出されたが詳細は不明である。遺物は土壙１から高坏（103）が出土している。

14号住居

10号住居の北東約8 ｍのところに西辺をもち、東半分を竪穴住居と考えられる遺構に切られている。西辺 3.5ｍで、方形住居が想定できる。南北主軸方位はＮ－20°－Ｅを示す。検出面の絶対高はおよそ 90.30Ｍである。これも10号住居と同じく住居跡の範囲の確認にとどめた。埋土から土師器の壺（185）が出土している。

溝　（ＳＤ）

ＳＤ１

トレンチの北部を東西に走る。方位はＮ－63°－Ｅを示し、東から西へ傾斜をもつ。トレンチ東端で、幅７ｍ、深さ50㎝、西端で幅５ｍ、深さ40㎝を測る。

出土遺物は土師器皿、灰釉陶器、中世陶器、瓦などが含まれ、瓦器椀（39）が出土している。他に鉄器が出土している。この溝はかなり大きなＵ字溝で、方位も蒲生郡条里に従っており、今後の周辺調査を待って条里との関係を解明したい。

ＳＤ２

８号住居北辺に沿って東西に走る。方位はＮ－83°－Ｗを示し、流れの方向は不明である。規模は幅約80㎝、深さ40～50㎝の溝である。溝内堆積土は３層で、第１層暗茶褐色粘質土、第２層茶灰色粘質土、第３層暗茶灰色粘質土である。この溝は８号住居、10号住居に切られており、方位的にもこの周辺で検出される弥生～古墳時代にかけての溝等とほぼ同方位を示す。

溝状遺構

トレンチの南側全域に渡り、東西方向に走る多数の溝状遺構が検出された。溝の規模は幅30～50㎝、深さ10～20㎝で、溝と溝の間隔は 0.5～２ｍと規則性が見られない。この溝は流れの形跡はなく、埋土も床土のみであることから、水田の耕作に伴う畝の痕跡と判断した。

以上の他に、トレンチの南壁中央部で深掘りを行った結果、黄褐色粘質土の地山の下から砂礫層が確認されている。

(ロ) 遺　物

G区から検出された遺構にともなう遺物は、ほとんどが古墳時代前期～中期前葉の土師器である。しかしそれらは風化が著しく、図化できない小片が多い。よって各住居跡の時期を位置づけるための床面の遺物は、その多くが図版に掲載されていない。ここでは残存状態の比較的良好な遺物に的を絞りつつ、図版に掲載されない遺物も紹介し、概略にかえたい。

壺

壺（180）は頸部で直立し、口縁に至って強く外反する。口縁端部は横ナデされる。広口壺の口縁部と考えているが、甕の口縁の可能性もある。

壺（115）は受口状口縁を呈す。丸味のある膨らんだ体部から、頸部でいったん強く締まり口縁部に至る。頸部から体部にかけてハケ成形され、肩部に列点文と平行線が施される。口縁部外面は横ナデの後、下半部に列点文が施され、端部は外方に軽くつまみ出される。このタイプの壺は弥生時代末期に類例を持ち、施文方法から北大津遺跡[注(14)]の溝（ＳＤ５）青灰色土層式に比定できる。

壺底部（139、149）は比較的安定した上げ底気味の底部である。185は外面に強いハケ成形が施されていることから、甕の可能性もある。

二個の小型丸底壺（155、162）は共伴している。155は丸底から頸部に至っていったん締り、まるく外傾する口縁を持ち、器壁は厚い。162は丸底から頸部に至って強く締った後、外傾しつつ薄く尖る端部に至る。底部から体部上位にかけてハケ成形され、器壁は155に比して薄い。口径を上まわる扁球形の体部に、中位で膨らみつつ段を有する口縁の取り付くこのタイプは、船橋のＯ－Ⅰ[注(15)]に類例が見られ、布留式併行[注(16)]のものと考えられる。なお、155・162ともに微細な粒子より成る胎土を用いてある。

甕

甕は受口状口縁を有するもの（172、193）と底部のみ残存のもの（148、181）が挙げられる。底部は双方とも摩滅が著しく、成形上の手法は不明である。

受口状口縁甕（172、193）は、いずれも口縁部外側面に棒状浮文が貼り付けられる。172は短い立ち上がりの外部下半に軽く列点文が施され、その上から２本１単位の棒状浮文が貼り付けられる。また、器壁が薄く体部に球形化がみられる。外面ハケ成形の後、頸部に平行線がひかれ、ハケ状工具による刻み目が施される。

193は立ち上がり部の長い外面に、２条の櫛描沈線がひかれ、その上から棒状浮文が貼り付けられる。このタイプは北大津遺跡のA5タイプに属するものと考えられ、草津市の片岡遺跡[注(17)]、守山市の赤野井遺跡[注(18)]に類例が見られる。

一方172は口縁の立ち上がり部が短く、外側面に列点が施されるという点で、前述のA5タイプと同じ範疇に入れてしまうには問題が残る。しかし今のところこのタイプの資料の絶対量が些少であるため、今後の調査例が待たれる。

ここで当区において検出された受口状口縁について若干ふれてみたい。住居跡から検出された受口状口縁の小片を個体別に分類してみると、明らかにその数に差がみられる。ここに列挙すると、多い順に12号住居33個体、

３号住居19個体、４号住居４個体、８号住居３個体、11号住居２個体、13号住居１個体である。これらの数値から何が考えられるかといえば、近江型の土器といわれる受口状口縁の盛行期にある住居と、既に地域色を失って畿内色の土器に収束されつつある時期の住居との時期差、つまり大まかな時代観が摑めるのである。そのことは弥生時代末期と考えられる受口状口縁を呈す壺（115）を伴う12号住居からは33個体も出土しており、布留式併行期の遺物を伴う５号、６号、７号住居からは１片も出土していない事実からも裏付けられることであって、『北大津の変貌』[注(19)]でも言われているように、当遺跡においても布留式併行期には受口状口縁が姿を消していると考えられるのである。

高坏

高坏（138）は杯底部に広い面積を有し、いったん稜をなして外反しつつ端部に至る。内外面にヘラ磨きが施され、弥生式土器の様相を備え持つものである[注(20)]。

156は坏底部の面積がかなり狭く、口縁部が長くなり、底部との稜があまくなる。

183は底部と口縁部との稜がまだやや鋭さを残してはいるが、内外面ともハケ成形されている。

184は坏底部の面積が狭く口縁との境の稜はあまい。また脚部に穿孔を持たない。このタイプの高坏は奈良県布留遺跡[注(21)]に類例が見られる。

甑

甑（147）は平底に焼成後穿孔されている。内面ハケ成形で甕として焼かれたものが甑として転用された可能性が強い。

その他の遺物

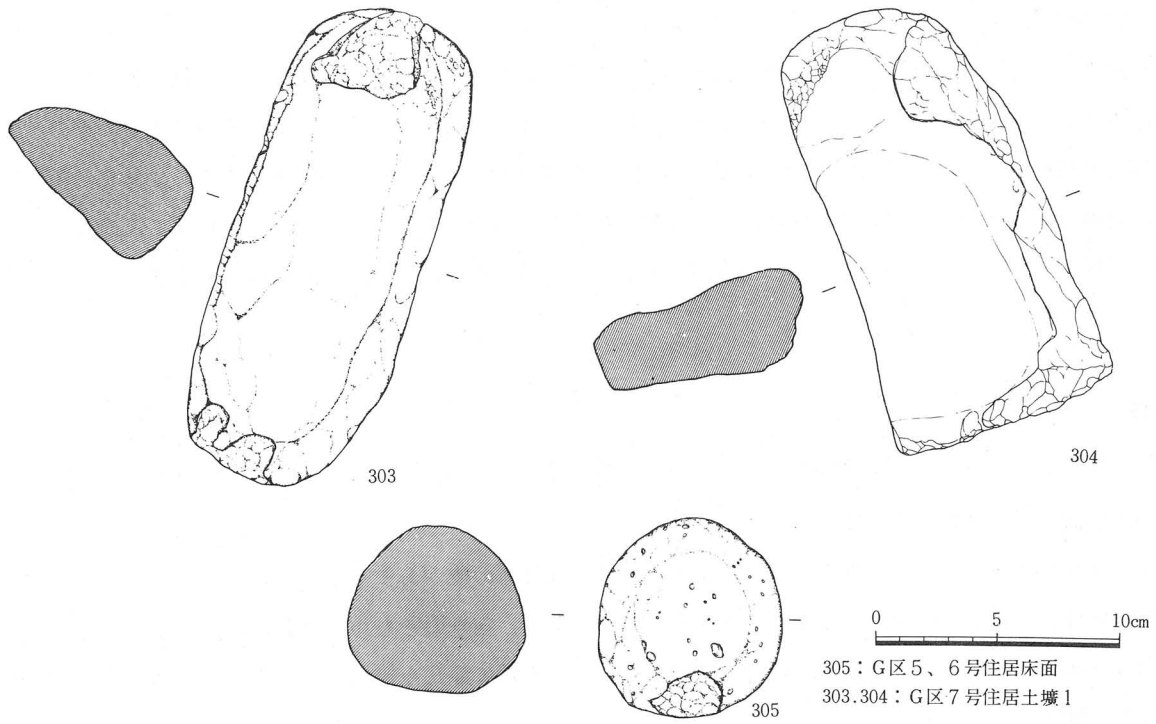
以上の他に12号住居の埋土から台付甕の脚部と、北陸月影式の甕口縁が出土している。また先にも触れたとおり、この住居の床面および埋土中から受口状口縁の小片が多数出土している。

瓦器埦はＳＤ１の埋土から39と８号住居の埋土から 107が出土している。両方とも内面に密な暗文が施され、口縁端部内面に１条の沈線が施される。外面は口縁部に横ナデが見られ、体部のヘラ磨きはほとんど見られない。いずれも白石編年[注(22)]の第６型式に該当するものと考えられる。但し 107は39に較べ体部外面に若干ヘラ磨きが残ること、高台径が広く39の断面三角に対し比較的しっかりした高台をもつことからあるいは１型式古くなることも考えられる。また 107が８号住居の埋土から出土していることは、８号住居の埋土を切り込む遺構が存在したことも考えられる。

７号住居の土壙１出土の棒状石製品は、 303には両端部に叩いたり潰したりしたと思われる使用痕が、 304には砥石として使用されたと思われる擦痕が認められる。８号住居床面出土の勾玉（306）は滑石製である。（挿図19参照）

この他、図版にはもれたがＳＤ１から信楽焼の擂鉢、壺、甕などが出土しており、中に櫛垣文の施される壺の肩部が認められる。また土師器皿、黒色土器、灰釉陶器などの出土も見ている。

以上のように当区で出土した遺物を俯瞰してみると、次のような大まかな分類ができる。ひとつは古墳時代の土師器であり、いまひとつは平安時代末期～鎌倉時代にかかる瓦器及び中世陶器、土師器皿などである。ここで問題となるのは竪穴住居に伴う土師器である。はじめに述べたように今調査で出土した土師器は、そのほとんどが



挿図. 19　G区５．６号住居．７号住居出土遺物（石製品）

風化したものである。よって、住居跡の床面から出土したもので良好な資料は少ない。しかし、当区から須恵器が１片も出土していない事実は、当区での土器相、ひいては当遺跡の住居跡群を語るうえで重要な意味を含むものと考えられる。従って、当遺跡の住居跡に伴う土師器を須恵器の出現を見る以前、大まかに庄内式の古い段階から布留式併行期の幅に収まるものと考えたい。

(ハ) 小　結

今回、当区で検出された遺構で特に目をひくのは19棟にのぼる竪穴住居である。ここでは比較的良好な資料を得られたいくつかの竪穴住居を中心に、住居跡の時代性や、これらの住居が構成していた集落についても考えてみたい。

まず遺物の項でも述べたように、住居跡に伴って出土した土器は12号住居出土の受口状口縁壺（115）をはじめ、２号住居の高坏（138）など弥生式土器の範疇に入れても良いと考えられる土器から、７号住居出土の布留式の指標ともいえる小型丸底壺（162）まで、時期幅は100年は下らないと考えられる。そこで今、改めてこれらの土器を個々に検討しつつ住居跡の前後関係について述べてみたい。

12号住居床面出土の受口状口縁壺（115）は、北大津遺跡・ＳＤ５の青灰色土層式に比定できる。『北大津の変貌』では、これを河内編年の西ノ辻Ｅ・Ｄ式に含まれつつ、上六万寺式に近いとしている。

４号住居床面出土の受口状口縁甕（172）は、前述したように検出例が少ない。しかし共伴する高坏（182）は庄内式併行期と考えられる。

２号住居焼土中から出土した高坏（138）は庄内式以前[注(19)]とされるが、共伴する高坏（137）は庄内式併行期のものと考えられる。

表7　慈恩寺G区竪穴住居一覧表

	規　模(m)	南北主軸方　位	床　面の絶対高(M)	住居内堆積土	住居内施設	出土遺物
1号住居	3.5×3.5	N－2°－W	90.50	①黒茶色粘土質 ②①に地山土多量混 [貼り床]	貼り床	128, 129, 139, 148,
2号住居	3.5×3.5	N－20°－E	90.50	①暗茶黒色粘土質 ②地山土に①混 [貼り床]	貼り床 焼　土 屋内土壙1	137, 138, 140, 142, 143, 144, 145, 146
3号住居	6.5×6.5	N－20°－W	90.50	①黒褐色砂質土 ②淡茶褐色粘土質に地山土混 [貼り床]	貼り床 四本主柱 屋内土壙	125, 125, 127, 130, 131, 132, 133, 134, 135, 136, 147, 149, 150
4号住居	5×5	N－40°－E	90.40	①黒茶色粘土質 ②明黄灰色粘質土	貼り床 粘土ブロック 四本主柱 屋内土壙1	172, 174, 175, 176, 177, 178, 179, 181, 182
5号住居	5.5×5.5	N－25°－E	(90.50)	不　明	四本主柱	173, 180, 184, 305
6号住居	(5.5×5.5)	N－4°－W	(90.50)	不　明	四本主柱	406
7号住居 増　築	4.5×4.5 (5×5)	N－1°－W	90.35 90.40	茶黒色粘質土 ②暗茶褐色～黒褐色粘質土 [貼り床] ③茶灰色粘質土、地山土ブロック混 [貼り床]	貼り床 四本主柱 屋内土壙3	153, 154, 155, 156, 157, 158, 158, 159, 160, 161, 162, 303, 304
8号住居 増　築	(5.3×5.3) 6.5(南北) ×6(東西)	N－4°－E	90.35 90.40	①茶褐色粘質土・土山土混 ②暗灰色粘質土・地山土混 [貼り床] ③②に焼土と炭混 [貼り床]	貼り床 四本主柱 屋内土壙1以上 焼　土	106, 107, 108, 110, 111, 112, 113, 306
10号住居	4.5(南北) ×5.3(東西)	N－25°－E	(90.30)	不　明	——	——
11号住居	7.5×7.5	N－45°－W	90.40	①淡茶褐色粘質土[貼り床] ②淡茶黒色粘質土[貼り床]	貼り床, 四本主柱 屋内土壙1	——
12号住居	7×7	N－32°－W	90.30	①淡黒茶色粘質土 ②淡茶褐色粘質土 ③②に地山土混 [貼り床]	貼り床 四本主柱 屋内土壙1	114, 115, 116, 117, 118, 119, 120, 121, 122, 124
13号住居	5×5	N－25°－W	90.40	①黒褐色粘質土 ②暗茶褐色粘質土	屋内土壙7	103, 187, 188, 189, 190, 191, 192
14号住居	(3.5×3.5)	N－20°－E	(90.30)	不　明	——	185

※(　　)内は推定値。

5号、6号住居床面から出土の高坏（184)、7号住居、土壙1の小型丸底壺（155、162）は、いずれも布留式併行期のものと考えられる。ここで高坏（184）は残存が½以上あり、5号住居に切られている6号住居の貼り床内に混入していたとするのは不自然である。よってこれを5号住居に伴うものと判断する。

また小型丸底壺（155、162）が出土した土壙1は、7号住居が増築される以前から受け継がれた可能性はあるが、堆積状況をみると土壙1は土器を伴ったまま廃棄されていると考えられ、（155、162）は共に7号住居の増築後に伴う遺物と考えられる。以上挙げた土器の年代観から住居の前後関係を示すと、12号→3号→4号→5号、6号、7号となる。

次に切り合い関係と住居の配置から、前後関係及び同時存在のセット関係を考えてみたい。平面プランをみると、3号住居を切っている2号住居と4号住居の南北主軸方位がほぼ同じであり、出土遺物から考えても同時期の存在が考えられ、2号住居と4号住居がセット関係にあったことがうかがえる。そうすると2号住居とほぼ同規模で小型の1号住居は、3号住居と同時存在のセット関係にあった可能性は充分ある。また、これらの住居の少し西方に離れてある5号、6号住居と7号住居も、セット関係にあったと考えられる。5号、6号住居にみられる同位置での建て替えと7号住居の増築は、これらの住居が2世代に渡って存在した可能性が強い。そこで今、これらセット関係にある住居の変遷をたどってみると、1号、3号→2号、4号→6号、7号の増築前→5号、7号の増築後となるのである。

そこでこれらセットになって同時存在した大、小の住居が、どのような構造を持っていたかを考えてみたい。3号、4号、6号の大型住居には、四主柱穴が検出されている。一方、1号、2号住居には主柱穴が検出されていない。このことは、大型住居が小型住居に較べて構造的にしっかりした上屋を有していたことが想像できる。また主柱穴の検出されていない1号、2号住居の上屋の構造を想定した場合、人が生活するのに必要な空間としては狭すぎるのではなかろうか。というのは2本柱や、叉首で棟を支えた家屋よりも、4本柱と梁で上屋を持ち上げた家屋の方が、より広い生活空間が確保できたであろうし、人間が生活するにはより高く、広い空間を求めたに違いないのである。そうすると、四本柱を持った大型住居が母屋的な性格を持つ住居で、小型住居はそれに付随して設けられた小屋的な家屋（燃料や食物などの貯蔵施設）というふうに想定しても良いのではないだろうか。そして、7号住居が小型であるにもかかわらず四本柱を有していることは、ある時期から小型住居にもより広い空間を求めたからであろう。しかし、これらのことについては家族構成員の増減や、家族単位の持つ領域など多くの問題を含んでいるため、これ以上は言及できない。

以上のことからセット関係にある2棟の住居が4時期に渡って変遷しつつ存在しており、同一家族単位が4世代に渡って生活を営んでいたことが想定できるのである。そしてその時期は、古墳時代前期から須恵器の出現をみる直前という幅に収まるものと考えられるのである。

ここで今調査において他区で検出された竪穴住居も考慮に入れ、住居の分布について述べてみたい。まず住居の検出面の絶対高を地区別に挙げてみると、D区89．60M、F区89.30M、G区90.30M～ 90.50Mである。また当区のトレンチの南西側では1棟も検出されていない。当区は、常楽寺山の麓から北西に伸びる微高地の馬の背上にあり、当区で検出された住居跡は微高地の伸びる方向に従って帯状に広がる集落を形成していたと考えられる。また8号住居の東側は削平を受けているために検出されていないが、住居跡が広がっていたと思われる。一方、沙々貴神社、四ノ坪地区を狭んだ西側の微高地に位置する小中遺跡でも古墳時代の住居跡群が検出されており、2本の舌状台地の標高90M前後に帯状の集落が形成されていたと考えられるのである。

そこで当遺跡の住居跡と周辺遺跡との関係を考えてみると、当地域の背後には常楽寺山に散在する5世紀中葉

から６世紀末期にかけての常楽寺山古墳群が位置し、当遺跡と同じ台地上に古墳時代後期とされる熊野神社古墳群が存在する。当遺跡の住居群をこれらの古墳群と結びつけて考えるならば、古墳の造営時期に先行する住居群であり、古墳の造営に係わった集落につながるものであったと考えられる。今回の調査では須恵器を伴う住居跡が検出されなかったが、小中遺跡では古墳時代中期～古墳時代後期にかかる住居群が検出されており、今後当遺跡の周辺調査でその時期と重なる住居群が検出される可能性は充分あると思われる。また東方の繖山山麓に位置する瓢箪山古墳との関係を追ってみると、４世紀中葉とされる古墳造営時期に併合すると考えられる住居跡が認められ、先に述べた２号、４号住居、あるいは６号、７号の増築前の住居はその時期に相当するものと思われる。しかし、当遺跡のいくつかの住居跡だけで瓢箪山古墳造営に係わる集落については言及できない。ここにその一端を露呈したにすぎないのである。

今調査を糧として今後の精査に努めたい。

（植田文雄）

(3) その他のトレンチ

A区

調査区域の北端、東海道線沿いにA区を設けた。調査面積は約 620㎡である。ここでの基本層序は、耕作土直下に盛土が認められ、その下が黄褐色ないし黄灰色粘質土の地山面である。トレンチの北部では地山面が攪乱を受けており、部分的に土壙状の掘り込みが認められた。これは東海道線建設にあたり、土取りされたものの考えられる。北部では30cm前後の耕作土の下に約１ｍの盛土が認められた。（挿図17参照）

掘立柱建物

トレンチ南寄りで19個のピットが検出された。掘立柱建物は南北２間以上東西３間以上で、柱間寸法は南北間2.5ｍ、東西間３ｍである。柱穴の直径は25～40cm、検出面からの深さは５～10cmを測る。

なお、このトレンチから遺物の出土は見なかった。

B・C区

A区の南西部にB区、C区を設け遺構の有無を確認した。30～50cmの耕作土直下には、湧水をともなって青灰色ないし黄灰色粘質砂層が認められ、その面においては遺構は検出されなかった。なお、トレンチ開設面積はB区は約 160㎡、C区は約 120㎡である。

E区

調査当初、この部分においてほ場整備事業による遺構面の掘削が予定されていたが、設計変更にともなって切土計画がなくなったために、平面確認調査のみに留まった。遺構としてはD区と一連のものが予想されるが、掘込みを実施していないため詳細は不明である。遺構検出面の絶対高はおよそ 90.30Mである。ここのトレンチ開設面積は約1260㎡である。

F区

調査区域の中央より南寄り、２号トレンチの約65ｍ南にF区を設定し、F－１、F－２を開設した。開設面積はおよそ 280㎡である。当初、当区域は切り土が予定されていたのであるが、ほ場整備事業の設計変更により切

り土の計画がなくなったため、試掘調査に留めた。調査の結果、床土直下で古墳時代のものと思われる住居跡が3棟検出された。

F－1検出遺構

1号住居

トレンチの中央東寄りで竪穴住居、1号住居が検出された。検出面は床土直下の地山面である。この住居の規模は東西辺約 6.5mで、方形住居が推定できる。南北主軸方位は、ほぼ正南北を示す。検出面の絶対高は、およそ 89.60Mである。

2号住居

トレンチの西端で竪穴住居らしい遺構の肩が検出されたが、規模・主軸方位は不明である。検出面の絶対高は、89.40Mである。

F－2検出遺構

3号住居

トレンチの東部にその北辺の一部が検出された。東西辺約5mである。検出面の絶対高は、およそ 89.30Mである。しかし2・3号住居についてはいずれも検出面積が少なく、住居跡の可能性のある遺構としたい。

以上3棟の住居跡は、今調査D区、G区で検出されている竪穴住居が、一群をなしていることの裏付けとして興味深い。

2号、5号トレンチ

排水路計画に従ってトレンチ配置図（挿図2）に示すように2号、5号両トレンチを開設した。

2号トレンチ

このトレンチでは東西方向における地山の変化と、それにともなう地形復原を試みた。しかし、一部東側で遺構面(地山)が攪乱されているものとみえ、遺構は確認されなかった。トレンチの西部では、床土直下で極めて浅いピットと不定形の土壙が認められた。そこから土師器片が出土している。

5号トレンチ

ここでの基本層序は、第1層耕作土、第2層旧耕作土又は床土、第3層灰褐色～暗灰褐色粘質土である。地山面（黄褐色ないし黄灰色粘質土）の絶対高は北部でおよそ 88.00M、南部で 89.50Mを測る。（挿図18参照）

4、ま　と　め

今回の調査で検出された遺構は、D区における室町時代を背景とした寺院の沿革と、G区における古墳時代前半期の集落の変遷という二大素因を軸としていると言っても過言ではない。ここでは今一度D区検出の中世遺構群に焦点を合せ、これを寺院の沿革とした妥当性と文献資料との対比・補足を試みてまとめとしたい。

本報告の冒頭においても述べたが、当遺跡は佐々木六角氏ゆかりの地であり、現地名である大字「慈恩寺」も実は佐々木氏菩提寺である慈恩寺に由来している。この佐々木慈恩寺は南北朝時代の中頃、延文・弘安年間（1356～1362年）に六角氏頼によって建立されたとあり、天正年間の初め、織田信長によってこの地に浄厳院が建立されるにおよんで廃寺となったものと思われる。[注(23)] この間200余年における当寺の変遷は、応仁・文明の乱の最中、六角氏と京極氏との争いに際して伊庭貞隆が佐治太郎に宛てた文明元年（1469年）の書簡に慈恩寺の戦いの有様を見ることができ、さらにその二年後の文明三年にも当寺において合戦があったことが江農記などに読みとれるところから、おそらく当寺が一度は焼失してしまったのではないかとの推測を促すのみである。このほぼ3年の間に六角氏の盛衰は目まぐるしく変貌し、先の文明元年の戦では一時衰運にあったものが後の文明三年には再び勢いを盛り返しているようである。[注(24)]

本調査D区における中世遺構群は、これらの文献資料と多分に時代性が一致するものであり、文献にない部分を補促する点で極めて注目に値するものであろう。すなわち端的に述べるならばひとつは文明の戦乱期における慈恩寺の一時的な断絶とその後の再興であり、今ひとつは慈恩寺創建以前の寺の存在である。以下順次説明を加えてみたい。

前述したように慈恩寺の創建時期は延文・弘安年間とだけ記されており、それも同じく氏頼によって建立された金剛寺の後の建立といういわば推測によっている。D区検出遺構中には残念ながらこの時期に見合う遺構・遺物は見当らず、慈恩寺創建にかかわるものとしての裏付けはとれないでいるが、文明年間（室町中期）においてはある程度時期を同じくするものが見出せそうである。

ＳＤ３とＳＤ５によって区画された建物２と、掘り直しが認められたＳＰ１・Ⅱ次、建物の附属施設として考えられる貯蔵庫の土坑１、溜枡と考えられる遺構５などはそこから出土した遺物によって室町時代中期に想定できるものである。特にＳＰ１・Ⅱ次は一度埋め立てられたＳＰ１・Ⅰ次を掘り直しているものであり、このＳＰ１・Ⅰ次の埋め立ての時期を慈恩寺の戦による文明元年～三年に至る荒廃期とするならば後の掘り直しは再興に伴うものと見るのが妥当ではないであろうか。もちろんＳＰ１・Ⅱ次の掘り直しの時期は建物やその附属施設の建設時期と同一時期と考えねばならない。これは文明三年の戦を機に六角氏が再び勢いを盛り返したとあることから一族の菩提寺を再興することも十分考えられることである。一方、ＳＰ１・Ⅱ次をはじめ各遺跡で鎌倉時代のものと見られる軒丸・軒平などの瓦が認められ、ＳＰ１によって区画された建物１やＳＰ１・Ⅰ次などにおいても鎌倉時代のものと考えられる遺物が出土している。これらは慈恩寺の創建以前の遺構であり、慈恩寺の前身ともなるべきものであろう。今のところこれらの遺構に対して確たる文献資料は見当らないが、前述の軒丸・軒平瓦が小型であること、これに見合う平瓦・丸瓦の絶対量が少ないことなどから築地壁の上屋を葺いたものと考えており、慈恩寺に先行する氏寺の存在を想定している。[注(25)] ＳＰ１・Ⅱ次の埋土中よりこれら鎌倉相当期の小型瓦が出土する理由としては、慈恩寺の再興にあたりこれらの小型瓦が使用されたか、あるいは築地が旧状のまま受け継がれたかである。しかし築地は焼壁を伴っているもののその量はわずかであり、また修復の形跡も認められなかったことなどから慈恩寺再興の折も存続していたと一応考えたい。

この様にもとは名も残らない一氏寺であったこの寺も、南北朝の中頃には氏頼によって一族の菩提寺とされ名も慈恩寺となり、その後の文明の災禍にもかかわらずいったんは再興したが、それ以後六角氏の衰運と歩調を共にし、信長が大正年間の初めにこの地に浄厳院を創建するにあたっては「纔に楼門一基を存するのみ」[注(26)]となっていたようである。ＳＰ１・Ⅱ次で認められた多量の遺物は、そのほとんどが慈恩寺のものであり、信長が浄厳院の建設に際し池を埋めた折に混入したものであろう。

以上稚拙ではあるがＤ区における中世遺構群に対する意味づけとその説明を述べて、文献資料の裏付けと補足を試みてきた。多方の御叱責と御教示を賜りたい。

（石橋正嗣）

注釈

注(1)　弥生時代末期～古墳時代初期にかけての遺物散布地。昭和56年～58年にかけて団体営ほ場整備事業に伴なう発掘調査が実施されたが集落跡は検出されていない。近く報告書が刊行される予定である。

(2)　昭和56年～58年にかけて発掘調査が実施され弥生時代後期～古墳時代後期の住居跡が検出されている。詳細は後稿『小中遺跡発掘調査報告書』を参照いただきたい。

(3)　安土町における三条の台地の交点にあたる部分に位置し、弥生時代から中世に至る幅広い遺物の散布が認められる。現在分布調査を実施中である。

(4)　下豊浦地区で受託事業、個人住宅の新増改築に伴なう調査が実施され、小字十七地先では城下町焼失の裏付けと考えられる焼土層とそれらに関連の遺構が検出されている。安土郵便局舎新築に伴なう発掘調査報告書は近く刊行の予定である。

(5)　詳細は『常楽寺山古墳群調査報告書』（昭和52年３月、安土町教育委員会、安土町史編纂委員会、（財）滋賀県文化財保護協会）参照。

(6)　泉拓良氏の教示による。氏は『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ－白河北殿北辺の調査－』に掲載の表５（土師器杯・皿・椀のＤ縁部分類）について、Ａ～Ｆの分類が時期差を示すものでなく、Ａ～Ｆのおのおのの形態（例えばA_1、B_2といったもの）が占める比率の変化によって時期差が読みとれるとされている。ちなみに京都市埋蔵文化財研究所の吉川義彦氏も泉氏と同意見であった。

(7)　京都における「ヘソ皿」は当遺跡におけるA_3タイプに該当し、厳密には当遺跡A_2はむしろＢタイプの系統をひくとの教示をいただいた。

(8)　注(6)同様『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ－白河北殿北辺の調査－』掲載の表２(土師器時期区分の大略)ほか『京都市速鉄道鳥丸線内遺跡調査年報Ⅱ　1976年度』（1980年京都市高速鉄道鳥丸線内遺跡調査会）に掲載の土器群との比較による。なお京都における土師器皿の編年はほぼ25年単位で構成されているとのことであるが、刊行物その他に掲載はなされていないようである。

(9) 『元興寺の古瓦』（1983年10月　元興寺文化財研究所）、『中・近世瓦の研究ー元興寺編ー』（1982年　元興寺文化財研究所）参照

(10) 注(9)の他、『飛鳥・藤原宮発掘調査概報13』（昭和58年４月　奈良国立文化財研究所）、『多聞廃城跡発掘調査概要報告』（1979年３月　奈良市教育委員会）などを参考にする。

(11) 『滋賀県文化財調査年報　昭和57年度』に掲載予定である。

(12) 岡田保良氏（元京都大学院在学、現国士館大学助教授）修士論文『山科寺内町ーその歴史的調査と保存修景計画ー』の第二節第二次発掘調査における検出遺構として４基の〈石室群〉が掲載されており、そこから多量の土師器皿が出土している。氏はこの石室を厨房施設と関連づけて収納庫ないし貯蔵庫との見解を述べられている。

(13) 『特別史跡ー乗谷朝倉氏遺跡Ⅻ』（昭和56年３月　福井県教育委員会、朝倉氏遺跡調査研究所）第40次調査Ｄ区検出遺構のＳＦ1617で金隠と思われる板が出土し、この石積施設が便所である可能性を強く打ち出している。

(14) 中西常雄『北大津の変貌』（昭和54年）参照。また今回遺物の検討にあたり、石原道洋氏（八日市市教育委員会技師）の御教示を得た。

(15) 田辺昭三、原口正三、田中琢、佐原真『船橋Ⅱ』

(16) 杉原荘介、大塚初重『土師式土器集成本編Ⅰ』（1971）『土師式土器集成本編Ⅱ』内の奈良県下明寺池遺跡のNo.56も当遺跡の 162 と同タイプである。

(17) 「草津市片岡遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ－Ⅱ』（昭和51年　滋賀県教育委員会、（財）滋賀県文化財保護協会）参照。

(18) 「守山市赤野井遺跡」『昭和51年度滋賀県文化財調査年報』（滋賀県教育委員会）参照。

(19) 注(14)に同じ。

(20) 「五之里遺跡」『昭和51年度滋賀県文化財調査年報』（滋賀県教育委員会）参照。図版百九のNo.56に類似するものと考えられる。当報告書ではこれを『庄内式併行期よりも古い』と、とらえられている。

(21) 前掲注(10)『土師式土器集成本編Ⅰ』「布留遺跡」参照。

(22) 白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二、三の問題」『古代学研究』（第54号）

(23) 『近江蒲生郡志』（巻七　第三章廃寺志慈恩寺）参照。

(24) 『近江蒲生郡志』（巻九　第三章文明元年の戦 「第五節慈恩寺の戦」 第五章文明三年の戦「第一節慈恩寺合戦」）参照。

(25) 水野正好氏による教示。

(26) 宇野健一編『近江興地志略・全』巻之五十七　蒲生郡第四〔安土浄厳院〕参照。

表8　慈恩寺遺跡遺物観察表

器 No. 形	器 No. 形	法　量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺　構
3	壺	口径 5.6 最大腹径13.6	ややたて長の体部で肩部で丸く内彎し、直立して外傾する短い口縁がつく。	ロクロ、水びき	(色調) 内外面とも暗茶褐色 (胎土) 精製された水ヒ粘土 (焼成) 堅緻 ・信楽	D　区 SP　1 sec A西
5	小　皿	口径 6.1 器高 1.6	底部が不安定で肉厚気味でゆがみが著しい。	手づくね	(色調) 内外面とも淡白褐色 (胎土) 精製されている。 (焼成) 良　好	D　区 SP　1 sec A西
6	小　皿	口径 9.3 器高 2.1	比較的安定感のある底部により、直線的に外上方に開き丸く収まる端部に至る。 口縁と底部との稜は不明瞭である。	ロクロ使用 内面—指ナデ 外面—口縁のみ指ナデ体部指オサエ	(色調) 内外面とも淡灰褐色 (胎土) 精製されている (焼成) 良　好	D　区 SP　1 sec A西
7	小　皿	口径 9.3 器高 2.1	やや不安定な底部から外上方に開く。 口縁と底部との稜は不明瞭である。	ロクロ使用 内面—指ナデ 外面—口縁のみ指ナデ体部指オサエ	(色調) 淡灰褐色 (胎土) 精製されている。 (焼成) 良　好	D　区 SP　1 sec A西
8	大　皿	口径12.3 器高 2.1	安定した底部から外上方に開き、端部に至る。 内面底部と口縁の稜に沈線が刻まれる。	ロクロ使用 内面—指ナデ 外面—口縁のみ指ナデ、体部オサエ	(色調) 淡灰褐色 (胎土) 精製されている。 (焼成) 良　好	D　区 SD　1 sec A西
12	甕	底径13.3	平底の底部からやや内彎しつつ外上方に立ち上がる。	粘土紐を巻き上げた後ロクロを用いた、ヘラ削り、ナデなどで仕上げる。	(色調) 内外面とも赤褐色 (胎土) 3mm×1.5mmの砂粒、小石を含む (焼成) 良　好 ・信楽焼	D　区 SP　1 sec A西
15	鉢か甕	底径18.6	しっかりした高台のつく広い底部より丸味をもちつつ立ち上がる。内面と体部外面に茶褐色の釉がかけられる。 体部下方に二条の沈線がひかれる。	粘土上ヒモ巻き上げの後ロクロ廻転を利用したヘラ削り。	(色調) 施釉茶褐色 露体部灰白色 (胎土) 精製された微細な粒子よりなる。 (焼成) 良く焼け、締っている。 ・常　滑?	D　区 SP　1 sec D西
27	擂り鉢	底径10.7 器高15.5	底部から外上方に直線的にのびる。	粘土ヒモ巻き上げの後ロクロ成形、四条の櫛目。	(色調) 淡茶灰色 5mm×5mまでて砂粒を含む(石英・長石) (焼成) 堅　緻	D　区 SP　1

					・信楽	
29	擂鉢	底径15.8	底部から外上方に開口する。	ロクロ使用 櫛目は四条、ゲタ痕あり。	（色調）内外面とも淡茶褐色 （胎土）7㎜までの砂粒を多く含む。(石英砂) （焼成）良　好	D　区 SP　1 1　層
31	埦	口径14.3 底径 5.1 器高 4.1	底部から内彎しつつ大きく開く。見込みの浅い埦である。口縁端部内面に沈線が施される。 暗文は中心部より放射状に描かれる。 高台は断面台形の貼り付け高台である。	内面ーヘラ磨き、ヘラナデ。 外面ー指オサエ 口縁部は軽くヘラが当る。	（色調） 内面ー黒褐色 外面ー淡白茶色 （胎土）2㎜×2㎜までの砂粒をまばらに含む。 （焼成）良　好 ・12C末～13C初	D　区 SD　1 グリットC
32	小皿	口径 8.2 器高 1.7	底部に広い平坦面をもち、口縁が短く立ち上がり端部丸く収まる。	指オサエ 口縁端部を簡単にナデる。	（色調）内外面とも淡灰褐色 （胎土）微細な粒子からなる。 （焼成）良　好 ・平安～鎌倉	D　区 SD　1 グリットC 第一層
36	小皿	口径 9.3 器高 1.8	平坦な底部からいったん屈曲し外上方へ直線的に延びる。 口縁端部は直立し内面に凹みをつくる。	内面ー指ナデ 外面ー口縁指ナデ、体部指オサエ。	（色調）淡灰褐色 （胎土）精製されている。 （焼成）良　好	D　区 SK　4
38	大皿	口径14.8 器高 2.5	底部から甘い稜をなし立ち上がり、端部丸く収まる。	内外面とも指オサエ 口縁指ナデ	（色調）内外面とも淡白茶色 （胎土）3㎜×3㎜の砂粒を均一に含む。 （焼成）良　好	D　区 SD　1 グリットC 第一層
47	焙烙	口径28.0	内彎しつつ口縁に至り口縁は玉で丸く収まる。 外部にスス付着。	内面ーハケ形成の後指による横ナデ 外面ー体部ヘラ削り口縁横ナデ	（色調） 内面ー淡茶褐色 外面ー灰褐色 （胎土）よく精製された良好な胎土である。 （焼成）良　好	D　区 SP　1 sec　B （SD2） グリットF
53	大皿	口径12.4 器高 2.4	やや不安定な底部より口縁との稜を明確にもたず。直線的に外上方に延び端部に至る。端部丸く収まる。 内面屈曲部には爪による沈線が刻まれる。	内外面とも指ナデ、底部外面のみ指オサエ。	（色調）淡白褐色 （胎土）精製されている。 （焼成）良　好	D　区 土坑1⑦

60	皿	底径 9.7	直立する高台をもつ底部から内彎気味に上方に立ち上がる。		(色調) 白　色 (胎土) 緻　密 (焼成) 良　好	D　区 S K 3
70	小皿	口径 9.9 器高 2.1	平らな底部よりいったん甘い稜を成して立ち上がる。 口縁の中ほどで外反し、端部に至る。	内外面とも摩滅が著しい。	(色調) 淡白橙色 (胎土) 精製されている。 (焼成) 良　好	D　区 S K 5－2
71	小皿		やや凹凸の著しい底部より立ち上がり、丸く収まる端部に至る。	内面－ナデ 外面－口縁ナデ 体部オサエ	(色調) 淡白茶色 (胎土) 微砂を含むが精製されている。 (焼成) 良　好	D　区 S K 5－3
72	大皿	口径12.1 器高 2.2	比較的安定した底部より、外上方に直線的に開く。 端部丸く収まる。	内外面とも摩滅著しい。不明	(色調) 淡白茶色 (胎土) 微細な粒子よりない。 (焼成) 良　好	D　区 SK5－8
74	小皿	口径10.0 器高 2.3	比較的平坦面のせまい底部より屈曲した後直線的に外上方にのび、端部は丸く収まる。	摩滅著しく不明。	(色調) 淡白茶色 (胎土) 1mm×1mm大の砂粒をまばらに含むが精製された胎土。 (焼成) 良　好	D　区 SK5－11
77	小皿	口径10.4 器高 2.2	やや平坦面の広い底部より、稜をなして立ち上がり、口縁中位あたりでいったん強く外反した後また外面に稜をなして端部に至る。	内外面ともオサエ 一部指ナデ	(色調) 淡白茶色 (胎土) 精製されている。 (焼成) 良　好	D　区 SK5－16
84	大皿	口径12.5 器高 2.5	比較的安定した底部からやや外反気味に口縁端部に至る。	不　明	(色調) 淡白茶色 (胎土) 3mm×3mmまでの石粒をまばらに含むが精製されている。 (焼成) 良　好	D　区 S K 6
87	小皿	口径 9.0 器高 1.8	平らな底部より、やや甘い稜をなして外上方に立ち上がる。 口縁端部はやや直立し、内面に擬沈線が施される。	内面－指ナデ 外面－口縁外面指ナデ 体部指オサエ	(色調) 淡白茶色 (胎土) 良く精製されている。 (焼成) 良　好	D　区 S K 6
98	小皿	口径 8.5 器高 1.2	比較的平らな底部より甘い稜をつくって口縁部を形成する。 口縁部端は立ち上がり丸く収まる。	内面－指ナデ 外面－底部オサエ 口縁指ナデ	(色調) 淡白茶色 (胎土) 精製されている。 (焼成) 良　好	D　区 遺 構 5

164	器台	口径20.0 底径16.4 器高11.4	受部は脚柱部よりゆるやかに外反しつつ立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部外面には面を持つ。 脚柱部はやや［ハ］の字状に開きつつ穿孔部で一たん稜をなし外方へ下り端部に至る。端部附近では、一条の沈線がめぐる。	外面全面には細かいヘラミガキ（摩耗のためほとんど見えない） 受部内面にも恐らくヘラミガキ、その他不明	（色調）内外面とも黄褐色 （胎土）0.2mm×0.8mm大砂粒多く含むが全体的に緻密な精選土より成る。 （焼成）良　好	D　区 3号住居
186	壺	口径12.0 器高18.8 最大腹径18.9	丸底から内彎気味に立ち上がり最大腹径のある肩部下位に至る。 肩部から強く円傾し頸部からはやや外反しつつ立ち上がり端部に至る。 端部は丸く収まる。	口縁内外面とも指ナデ。 体部外面ハケ成形。 内面未調整（指ナデ・オサエあり）	（色調）内外面とも淡白橙色 （胎土）2mm×2mmの砂粒を均一に含み良好な胎土である。 （焼成）良　好。	D　区 1号住居
57	おろし皿	口径15.0 底径 8.6 器高 2.1	・体部はやや外彎気味に端部に至る。 ・端部をやや上方へ拡張する。 ・内外面口縁部灰釉を施す。 ・内面見込には茶褐釉を施す。 ・外面体部より下方は露胎。	・見込部にクシ目でオロシ部を作る。 ・外面体部及び高台部削り出し。	（色調）淡いネズミ色 （胎土）やや荒い （焼成）良　好 ・瀬戸美濃	D　区 S K 1
48	小皿	口径10.6 底径 6.2 器高 2.5	・内面見込部はやや高くなっている。 ・体部はゆるやかに内彎し、端部を丸くおさめる。 ・内外面茶色釉を施し見込を囲むようにして内面側壁に黒褐釉をかけ釉している。	・水ビキ・ロクロ成形 ・高台削り出し ・外面高台内輪トチの痕跡、内面見込内トチ痕3つあり	（色調）淡黄橙黄 （胎土）やや荒い （焼成）良　好 ・瀬戸美濃	D　区 SK1①
49	小皿	口径 9.8 底径 6.0 器高 2.4	・体部はゆるやかに内彎し端部を丸くおさめる。 ・釉薬が白泥しているが焼成のためか。 ・内外面灰釉を施していると思われる。	・水ビキ・ロクロ ・高台削り出し ・外面高台内に輪トチの痕跡	（色調）淡黄橙色 （胎土）やや荒い （焼成）良　好 ・瀬戸美濃	D　区 SK1②
50	小皿	口径10.4 底径 5.8 器高 2.5	・内外面茶色釉を施している。	・水ビキロクロ成形 ・高台削り出し ・外面高台内に輪トチの痕跡、内面見	（色調）淡黄橙色 （胎土）やや荒い （焼成）良　好 ・瀬戸美濃	D　区 SK1③

				込内にトチ痕３つあり。		
52	小皿	口径 9.9 底径 5.0 器高 1.9	・内面見込部はやや高くなっている。 ・体部はゆるやかに内彎し、端部を丸くおさめる。 ・内面見込は無釉で他灰釉を施しており、体部と見込の境目で釉が厚くガラス状になっている。	・水ビキロクロ成形 ・高台削り出しと思われる。 ・外面高台内輪トチの痕跡	(色調) 淡黄橙色 (胎土) やや荒い (焼成) 良　好 ・瀬戸美濃	D　区 ＳＫ１⑤
51	小皿	口径 9.4 底径 6.0 器高 1.7	・内面見込部はやや高くなっている。 ・体部はゆるやかに内彎し、端部を丸くおさめる。 ・内面見込は無釉で他は灰釉を施しており体部と見込の境目で釉が厚くガラス状になっている。	・水ビキロクロ成形 ・高台削り出しと思われる。 ・外面高台内輪トチの痕跡	(色調) 淡黄橙色 (胎土) やや荒い (焼成) 良　好 ・瀬戸美濃	D　区 ＳＫ１⑥
26	擂鉢	口径28.0 底径12.4 器高12.1	・底部はほぼ平底を呈し、体部は外上方に向って大きく開き、口縁部はさらに外反する。 ・端部は丸くおさめる。 ・内面に櫛目６条	・内外面ナデ	(色調) 赤褐色 (胎土) やや荒い (焼成) 良　好	D　区 ＳＫ２
39	椀	口径15.0 底径 5.6 器高 5.3	底部から内弯しつつ立ち上がり、口縁に軽く外反しつつ端部に至る。高台は貼り付高台で逆三角である。	内面は密な暗文が施され、端部には一条の沈線がひかれる。外面は体部指オサエ口縁部は簡単な指ナデ。	(色調) 灰黒色 (胎土) 精製された粒子よりなる。 (焼成) 良　好	G　区 ＳＤ１
106	高坏	脚径13.3	中空の脚柱部は外反しつつ下がり、穿孔のあるあたりから強く開き始め端部に至る。端部は削られて平坦である。	内外面とも摩滅が著しく、不明である。	(色調) 内外面とも赤褐色 (胎土) やや粗い (焼成) 良　好	G　区 ８号住居 床　面
107	椀	口径15.1 底径 7.3 器高 5.3	底部から内弯しつつ開き、口縁部は外面に稜を成して外反する。高台は断面台形の貼り付高台である。	内面底部のみ簡単なナデが残り、体部は密な暗文が施され、口縁端部には沈線が廻る。外面口縁部は横ナデ調整、体部以下は指ナデ、ヘラ磨きが残る。	(色調) 灰黒色 (胎土) 良　好 (焼成) 良　好	G　区 ８号住居 埋　土

115	壺	口径13.3	受口状口縁を呈す。頸部は長い平坦面をもち、端部は少しつまみ出されている。	口縁は内外面とも指ナデ、頸部から肩部にかけてハケ成形されている。口縁外面には3～4条の刺突列点が施され、肩部に列点(8条)と平行線が施される。	(色調) 外面淡白褐色、内面淡灰褐色 (胎土) 精　良 (焼成) 良　好	G　区 12号住居 床　面
138	高坏	口径20.6	受部は直線的に外方に開き、いったん鋭い稜をもち、やや直立気味に外反しつつ立ち上がる。	内外面ともヘラ磨き。	(色調) 内外面とも淡赤褐色 (胎土) 緻　密 (焼成) 良　好	G　区 2号住居 焼土中
139	壺	底径 6.6	中央部に窪みのある底部から外上方に強く外反する。	内面不明。外面ハケ成形。	(色調) 外面淡白橙色、内面淡灰白色 (胎土) 3㎜×3㎜までの砂粒を均一に含み良好である。 (焼成) 良　好	G　区 1号住居 埋　土
147	甑	底径 3.2	底部は平底で中央に一穿孔が認められる。	穿孔は焼成後である。内面はハケ成形。外面は摩耗が著しく不明である。	(色調) 内外面とも淡白褐色 (胎土) 2㎜×2㎜までの砂粒を均一に含み良好な胎土である。 (焼成) 良　好	G　区 3号住居 ピット(柱穴)
148	壺	底径 3.9	平底から内弯気味に立ち上がる。	不　明	(色調) 淡橙褐色 (胎土) 良　好 (焼成) 良　好	G　区 1号住居 埋　土
149	壺	底径 4.8	中央にやや窪みをもつ平底から強く外反しつつ立ち上がる。	内面不明。外面はハケ成形。	(色調) 外面淡橙白色、内面淡白灰色 (胎土) 砂粒をあまり含まないが良好な胎土である (焼成) 良　好	G　区 3号住居 床　面
155	壺	底径 2.0 最大腹径 7.6	丸底から内弯して立ち上がり、頸部でいったん締まり、外反する。	内外面ともオサエ、指ナデ。	(色調) 内外面とも淡橙褐色 (胎土) 良好(砂粒は含まない) (焼成) 良　好	G　区 7号住居 土坑1
156	高坏	口径17.8	受部外面にいったん稜をもち、内弯しつつ外上方に延び、口縁端部は外反し、丸く収まる。	内外面とも不明。	(色調) 淡赤褐色 (胎土) やや粗い (焼成) 甘　い	G　区 7号住居 土坑3

162	壺	口径 7.9 器高 7.8	小型丸底壺である。口縁部中位には稜をもち、端部は鋭く収まる。	体部外面ハケ成形。口縁部内外面とも横ナデ。体部内面指ナデ。	(色調) 内外面とも淡白茶色 (胎土) 良く精製されている。 (焼成) 良　好	G　区 7号住居 土坑 1
172	甕	口径14.8	受口状口縁を呈す。逆［コ］の字形の頸部で、体部は球形化する。	口縁内外面とも指ナデ。頸部内面はハケ成形。体部内面は指ナデ。体部外面はハケ成形。口縁外坦面下半に刺突列点文が施され、上から棒状浮文が貼り付けられる。頸部には平行線肩部には刻み目が施される。	(色調) 内外面とも暗灰褐色 (胎土) 2㎜×2㎜までの砂粒を均一に含み、良好な胎土である。 (焼成) 良　好	G　区 4号住居 床　面
180	壺	口径16.8	頸部が強く外反し、端部外面に面をもつ。	摩滅著しく不明。	(色調) 内外面とも淡白茶色 (胎土) 3㎜×3㎜までの砂粒を多量に含み、粗い胎土である。(石英･長石･雲母) (焼成)　良好	G　区 5・6号住居 土 坑 1
181	甕	底径 4.1		外面摩滅が著しい。内面ハケ成形。	(色調) 内面暗灰色外面淡白茶色 (胎土) やや粗い。 (焼成) やや甘い。	G　区 4号住居 埋　土
182	高坏	口径19.8	底部は水平に近く外傾しいったん稜をもって屈曲し、外反しつつ端部に至る。	内外面ともハケ成形口縁外面は指ナデ。	(色調) 淡橙褐色 (胎土) 良　好 (焼成) 良　好	G　区 4号住居 床　面
184	高坏	口径16.3 脚径11.7 器高11.4	受部は底部と口縁部の稜が明確でなく、深い。 脚柱部はやや外開きの脚部は中空で、裾部との境には甘い稜をなす。 穿孔はない。	内外面とも摩滅が著しく、成形、調整痕はない。	(色調) 淡白茶色 (胎土) 良　好 (焼成) やや甘い。	G　区 5・6号住居 床　面
185	壺	底径 4.3	やや上げ底気味の平底から強く外反しつつ立ち上がる。	外面はハケ成形。内面はオサエの上から簡単なナデ。	(色調) 外面淡白茶色、内面黒褐色 (胎土) 良　好 (焼成) 良　好	G　区 14号住居 埋　土
193	甕		受口状口縁を呈す。頸部に鋭い稜をもち、立ち上がり部が長い。端部はつまみ出される。	口縁外面に横ナデの後、2条の櫛描沈線が施され、棒状浮文が貼り付けられる。	(色調) 内外面とも淡白茶色 (胎土) 2㎜×2㎜までの砂粒を含み、精良である。 (焼成) 良好好	G　区 12号住居 埋　土

第II章　小　中　遺　跡

1、は じ め に

本報告は安土北部県営ほ場整備事業に伴い、昭和57年度に実施された小中遺跡の発掘調査報告である。当遺跡は蒲生郡安土町大字小中に位置し、従来より古墳時代から中世に至る土器片の散布地として知られていた。ここに昭和56年より２ケ年計画でほ場整備事業が計画され、排水路敷および切り土部分において遺構破壊が避けられなくなり、事前に発掘調査が必要となった。調査は昭和56年に引続き、滋賀県文化財保護課主査近藤滋が指導し、安土町教育委員会技術員石橋正嗣、同嘱託西家淳朗が担当した。

排水路敷及び切土部にそれぞれ幅３ｍの試掘トレンチを設け遺構の範囲を確認した結果、調査区ほぼ全域で遺構が検出されたため順次トレンチを拡張した。調査対象面積59.000㎡のうち最終的な調査面積は約11.780㎡におよび、調査期間は昭和57年７月１日より昭和58年２月末日までの８ケ月を要した。

なお昭和57年度現地調査にあたり参加協力をいただいた方は次のとおりである。

調査員	長谷川洋一	（滋賀大短期大学部O．B）
	宍戸　貴子	
調査補助員	植田　文雄	
	小西　忠宏	（京都産業大学）
	設楽　靖史	（　〃　）
	足達　拓実	（大阪経済大学）
	石橋　清重	（近畿大学）
	山脇　克二	（福井工業大学）
	中村　年宏	（　〃　）
	深尾　淳一	（大阪外国語大学）
	深尾由美子	（関西外国語短大）
	真山　浩美	（大阪成蹊学園）
	村田千恵子	
	野瀬　芳子	

この他、地元安土町上豊浦・常楽寺・小中・中屋の各字より有志の作業員諸氏と大学生、高校生諸君の協力を得た。

また本報告書作成にあたり、執筆、整理分担は次のとおりである。

執筆・編集	西家
図版・製図	西家・宍戸・村田
遺物実測	西家・植田・設楽
遺物復原・処理	河内美代子
	宍戸・村田
	藤井外喜子
遺物写真撮影	中島　勝　（フォトなかじま）

上記の他、足達・小西・山口聖勝・深尾（由）・岩崎由美子・城念栄子諸氏の協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

A 大中の湖南遺跡
B (特別史跡)安土城跡
C 瓢箪山古墳
D 観音寺城跡
E 老蘇の森

1 獅子ケ鼻遺跡
2 熊野神社古墳群
3 金剛寺遺跡
4 安土城城下町遺跡
5 常楽寺山古墳群
6 西才行遺跡
7 江頭遺跡
8 桑実寺古墳群
10 瓢箪山遺跡
11 常楽寺山古墳群
12 鳥打峠遺跡
13 観音寺城遺跡
14 アラシカ谷遺跡
15 アラシカ谷古墳群
16 竜石山古墳群
17 石寺楽市楽座跡
18 東老蘇遺跡
19 東老蘇立宿遺跡
20 十三仏遺跡
21 箕作山遺跡
22 平塚古墳群
23 弁天島遺跡
24 新開古墳

挿図1　町内遺跡分布図

2、位置と環境（挿図1）

小中遺跡は安土町大字中屋から常楽寺、下豊浦にかけて南北にのびる標高91～92mの微高地のほぼ南端に位置する。この微高地の南には繖山の西端である常楽寺山、東には湿地をはさんで繖山がそびえ、北には琵琶湖の内湖の一つ西の湖が広がり、唯一西に平野が開け近江八幡へ続いている。当遺跡の南には常楽寺山古墳群があり、この微高地上には、中屋遺跡[注(1)]、慈恩寺遺跡[注(2)]、宗円堂遺跡[注(3)]、佐久間遺跡[注(4)]、十七遺跡[注(5)]、常楽寺新開遺跡[注(6)]など数多くの遺跡が知られている。また小中遺跡の東には、西才行遺跡をはさんで瓢箪山古墳が存在する。

このように面的に狭小な地理的条件にもかかわらず、当遺跡をとり囲むように各時代の遺跡が形成され、古代から集落が連綿と営まれてきた要因として、豊富な水と東側の肥沃な湿地があげられよう。すなわち、かつては当地を流れていたと思われる愛知川が繖山の隆起により流路が変わり、伏流水となり、当地の南部で自噴し泉を形成しそこから流れ出る水が低湿地に流れ込み稲作に最適の状態になったと考えられる。さらに三方を山と湖で囲まれた地形は外部からの侵入を防ぎやすく、気候も北陸式と瀬戸内式の接点にあたり、比較的温暖で人々の生活の場としては最適であったと考えられる。

これらの自然環境、気候条件のなかで、原始・古代から安土、とりわけ当微高地で累々と遺跡が形成され現在において遺構密度が高くなっている。

3、調査結果

(2) 遺　構　（挿図２）

トレンチ配置図で示すように、調査対象地（主に切り土部分）を大きく２分し、それぞれＡ地区・Ｂ地区と呼び、両地区においてトレンチを設定した。調査の進行中遺構の関連から一部トレンチを併合した為、最終的なトレンチ数は、Ａ－１、Ａ－２、Ａ－４、Ａ－６、Ａ－８、Ｂ－１～６および排水路敷５ヶ所の計16ヶ所である。。以下各トレンチで検出された遺構の概要を述べる。

イ）　Ａ－１　（挿図３）

Ａ地区北西部に設けた面積 1,850㎡のトレンチである。厚さ約15cm～20cmの現代耕作土層を除去すると黄褐色粘質土層が表われ、この層をベースに各遺構が検出された。遺構面の絶対高は、西部で、91.90m、東部で91.90m～ 92.00mを測る。

竪穴住居（１号～10号）

１号住居

トレンチ西部中央で検出された5.7m×5.3mのほぼ方形のプランを持つ住居跡である。耕作による削平が激しく現存する深さは５cmを測る。主軸はＮ－25°－Ｅを示す。主柱穴はほぼ住居の対角線上で４ヶ所検出された。また検出時に南西部に焼土の広がりがみられた。埋土は、暗灰褐色土一層である。埋土から土師器の小片が出土したが、床面から遺物は検出されなかった。床面南半で貼り床が検出され、住居西辺中央の床面に焼土がみられカマドの存在が推定できる。また北東コーナー附近で貯蔵穴と思われる土坑が検出され坑内より須恵器坏身（１）が出土している。

２号住居

１号住居の北側で検出された一辺約 5.9mの方形の住居跡である。南辺を１号住居に切られる状態で検出された。主軸は１号同様Ｎ－25°－Ｅである。現存する深さは５cmで、埋土は黒褐色土一層である。主柱穴は４ヶ所認められ　径20cm　深さ９cmを測る。西辺で壁溝と思われる溝が検出されたが他辺では見られなかった。南東コーナー近くで焼土塊が検出されカマドを推定できる。また南東部で貯蔵穴と思われる土坑が検出された。埋土中および床面から遺物の出土は見られなかったが、焼土中より土師器甕（６）、土坑中より須恵器坏身（２）が出土している。

３号住居

トレンチ北西コーナーで検出された。東コーナーを近世井戸によって切られ、西半が調査区外である為全容は不明であるが、一辺 5.7m前後の隅丸方形であると推定される。主軸はＮ－31°－Ｅを示し、現存する深さは15cmを測る。埋土は暗褐色砂泥、暗灰色粘質土の２層で、埋土中より須恵器甕（３）、土師器甕（４）、高坏（５）が出土している。柱穴が２ヶ所、土坑一基が床面と思われる面で検出されたが、当住居跡関連の施設かどうかは不明である。

４号住居

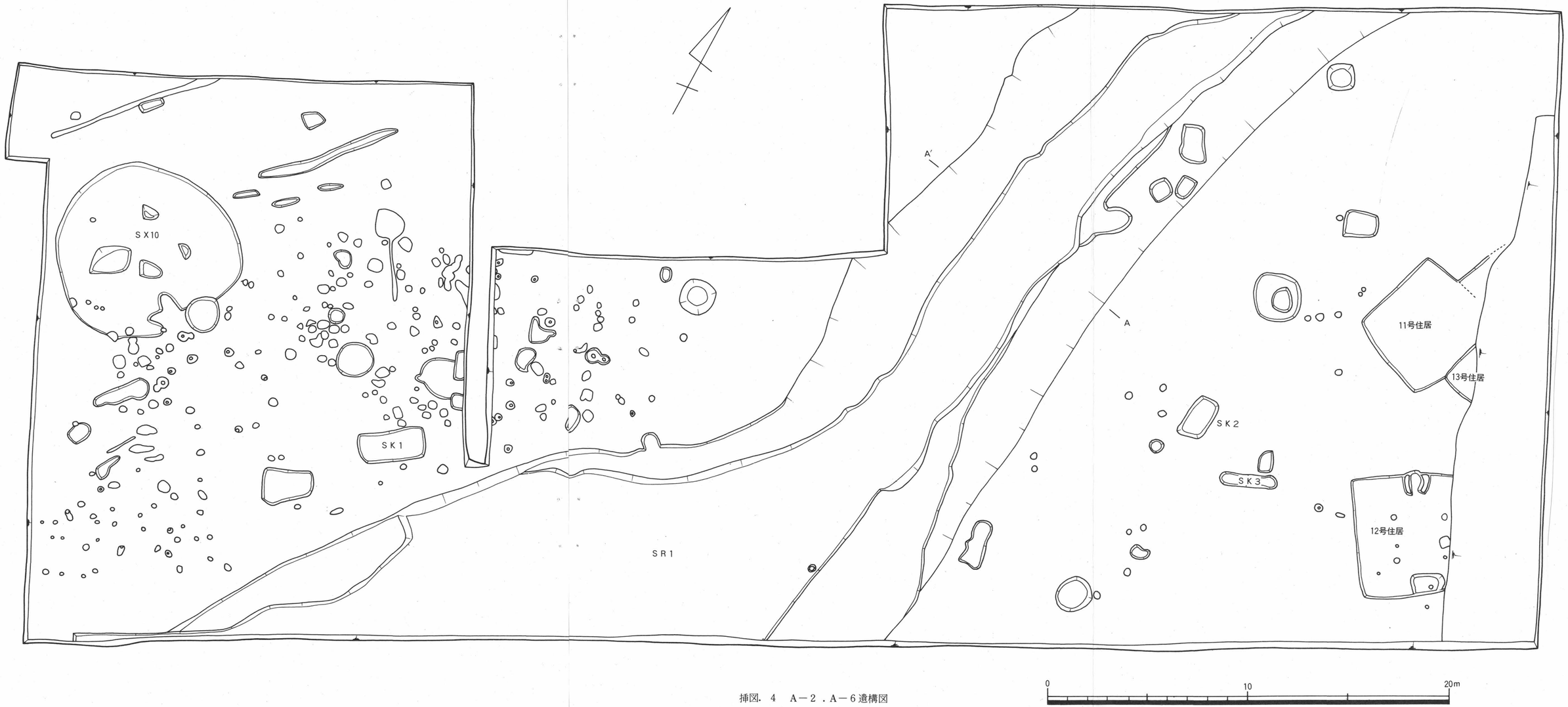
２号住居の北約６ｍの所で検出された。耕作による削平を激しく受けており現存する深さは１cm前後にすぎない。一辺 4.8m前後の方形のプランを持ち主軸はＮ－20°－Ｅである。柱穴は４ヶ所認められ径20cm、深さ40cmを

沙々貴神社
T・31—2
T・31—3
T・31—1
B—1
B地区
A地区
B—2
B—3
B—4
B—5
B—6
A—1
A—2
A—4
A—6
A—8
T・33—1
T・33—2
県道 安土西生来線
0
50
100m

挿図2　トレンチ配置図

挿図3　A－1　遺構図

0　10　20m



挿図. 4　A－2．A－6遺構図

測る。また住居北東部に貯蔵穴と思われる土坑が検出され、土坑内埋土より土師器甕が出土している。

5号住居

トレンチ東部で検出され、6.3m×5.6mの方形のプランを持ち、主軸はN－15°－Eを示す。現存する深さは15cm程度で、埋土は暗灰色土（やや砂質）一層である。主柱穴は4ヶ所認められ、径30cm～50cm、深さ20cm～30cmを測る。壁溝と思われる溝が北半で検出された。住居東辺中央部に焼土が見られ、またほぼ中央部で土坑が1基検出された。埋土から土師器小片が、床面から土師器甕一点が出土している。また土坑内より土師器甕・高坏等出土している。

6号住居

4号住居の北約3mでトレンチ北壁に接して検出された。6.3m×5.6mのほぼ方形のプランを持ち、主軸はN－17°－Wを示す。現存する深さは20cmを測り、埋土は黒褐色土である。

柱穴は2ヶ所検出された。また2m×0.8mの長円形の土坑が検出されたが、住居との関連は不明である。埋土中および床面からの遺物の出土はない。

7号住居

6号住居の東側で検出された。6.1m×6mのほぼ方形のプランを持ち、主軸はN－42°－Eを示す。現存する深さは10cmを測り、埋土は黒褐色粘質土である。柱穴は4ヶ所検出され、径30cm、深さ25cm、柱間2.5mである。埋土および床面からの遺物の出土はない。

8号住居

4号住居と切り合う形で検出された。一辺4m以上の方形のプランを持つと考えられる。現存する深さは約5cmで、埋土は黒褐色土一層である。柱穴は3ヶ所認められ、径20～30cm、深さ20～25cm、柱間寸法1.5m～2.0mを測る。4号住居が床面近くまで削平を受けている為、切り合い関係は不明である。出土遺物はない。

9号住居

8号住居の西隣で、北西コーナーのみ検出された。大半が調査区外にある為全容は不明である。埋土は黒褐色粘質土で、遺物の出土はない。

10号住居

トレンチ北部、5号住居の北側で検出された。西半をSD2によって切られており全容は不明であるが、1辺6～7mの隅丸方形を呈すと思われる。主軸はN－13°－Wを示す。現存する深さは15cm程度で、埋土は黒褐色土、暗褐色土の2層である。壁溝、柱穴等は確認し得なかった。床面から、土師器甕・甑・高坏・須恵器蓋などが出土している。

自然河道跡

ＳＤ２

トレンチ南東コーナーから北西コーナーに向い、ゆるやかに西に蛇行する形で検出された。現存する深さは50～60cmで、溝内埋土は、褐色砂礫と黒灰色泥土の大きく２層に分かれる。砂礫層からは緑釉埦（31、32）、黒色土器埦（27、28）、須恵器坏（30）、磁器（33、34）などの中世の土器が出土し、黒灰色泥土層からは古墳時代の土師器（10～12、14、16、17、19、21、24～26）、須恵器（７、８）が出土している。なおトレンチ南東コーナー部において溝内に方形の掘り込みが検出された。この掘り込み内埋土である黒褐色粘質土層から多量の古墳時代の土師器（９、13、20、22、23）が出土した。（これらの土器はＳＤ２，３層として掲載した。）この掘り込みと溝の関係、性格は不明である。

その他の遺構　（柱穴・土坑等）

柱穴群

トレンチのほぼ全面で、大小の掘立柱建物の柱穴と思われるピットが検出された。埋土・遺物等からみて、古墳時代と平安末期～鎌倉時代の２期に分けられるが、掘立柱建物としてのまとまりは確認し得なかった。

土坑

トレンチほぼ中央から東部で数ヶ所の土坑が検出された。埋土より中世土師皿、黒色土器等の破片が出土している。

ロ）　Ａ－２　（挿図４）

Ａ地区中央西側に設けた面積 1,079㎡のトレンチである。厚さ15cm～20cmの現代耕作土層を除去すると、東部では黄褐色粘質土、西部では砂礫混りの黄褐色土がみられ、この層をベースに各遺構が検出された。遺構面の絶対高は西部で91.70M～91.80M、東部で91.50Mである。

自然河道跡（ＳＲ１）……後述

土壙（ＳＫ１）

トレンチほぼ中央で検出された3.4m×1.5mの長方形のプランを持つ土坑である。現存する深さは約５cmで、埋土は暗茶褐色土で焼土を多量に含む。埋土中より中世土師器（皿・坏）、黒色土器（埦）が出土している。

柱穴群

トレンチの西部で径10cm～50cmの柱穴が多数検出された。形状、埋土等から分類したが、建物としてはまとまらなかった。柱穴掘方及び柱痕から中世土師器、黒色土器、緑釉、灰釉等の土器片が出土している。

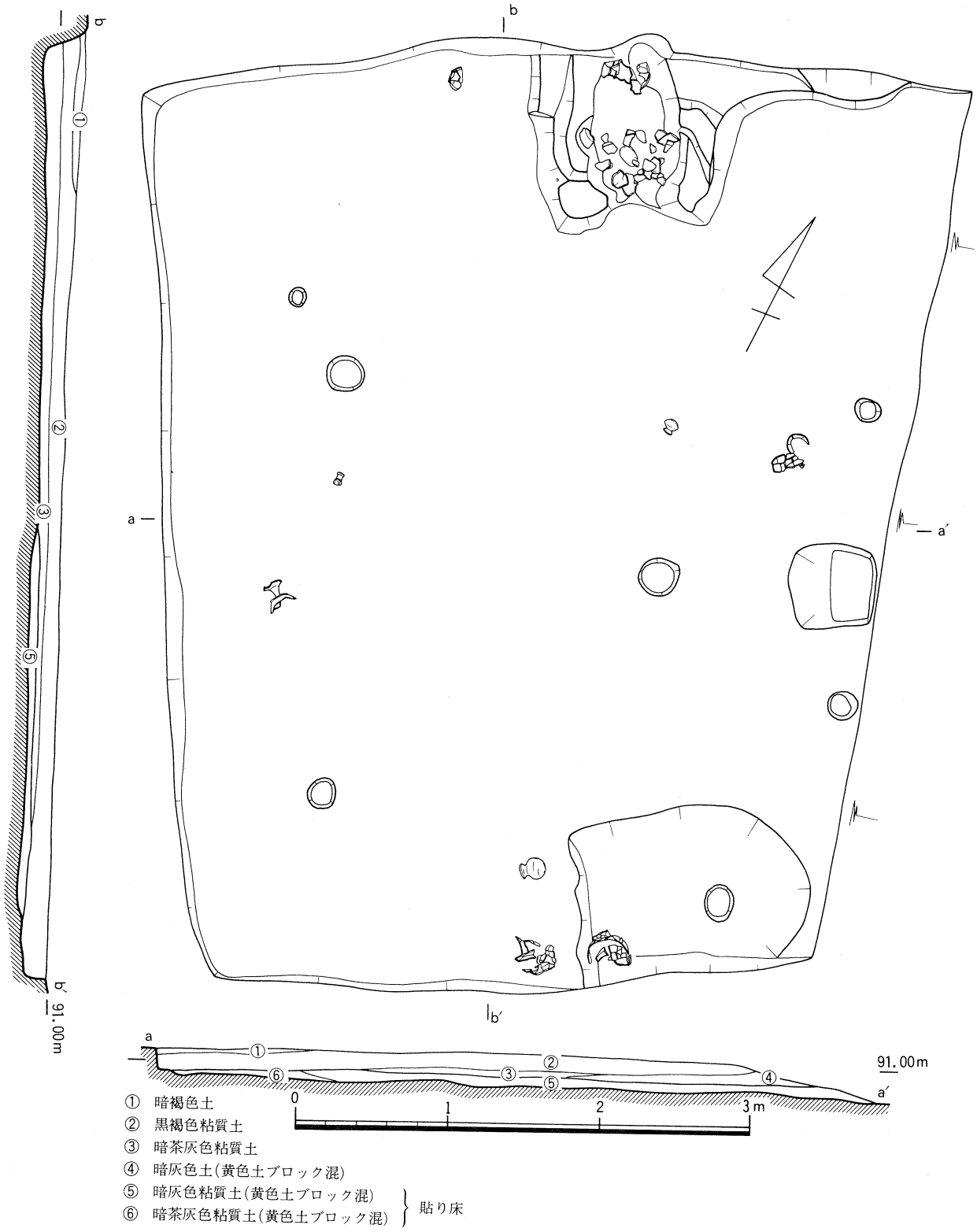
その他の遺構

ＳＸ10

トレンチ北西部で検出された径 8.5m～９mを測るほぼ円形のプランを持つ遺構である。現存する深さは５cm～10cmと均一でなく、埋土は暗灰褐色砂質土、暗褐色砂質土の２層である。内部で柱穴と思われる掘方が数ヶ所検出されたが当遺構との関連は不明である。埋土および柱穴からの遺物の出土はない。

ハ）　Ａ－４

Ａ地区北東部に設けた面積 897㎡のトレンチである。厚さ20cm～30cmの現代耕作土層の下から褐色砂礫層となり、各遺構が形成される。検出された遺構は自然河道跡（ＳＲ１）の他、柱穴、性格不明の集石遺構等である。



挿図. 5　A－6　12号住居平面・断面図

遺構面の絶対高は 91.50Mを測る。なおトレンチ西部の礫層を重機で深掘し、下層の状況を確認した。この結果、深さ約2.5mまでφ２～４cm大の礫層が確認された。

ニ)　Ａ－６　（挿図４）

Ａ地区中央東側、Ａ－２と連続して設けた面積 1,058㎡のトレンチである。厚さ20cm～30cmの現代耕作土層の下、黄褐色粘質土と褐色砂礫が交互にみられ、遺構面を形成している。トレンチ東部を後世耕作により削平を受ける。遺構面の絶対高は91.40～50Mを測る。

竪穴住居（11号～14号住居）

11号住居

トレンチ北東部で検出された。北東コーナーを耕作による削平を受け、又南東部を14号住居に切られている為全容は不明であるが、一辺 5.0m前後の方形のプランを持つと思われる。主軸はＮ－11°－Ｅで現存する深さは９cm前後を測る。埋土は暗灰色土、黒褐色土、暗茶褐色粘質土の３層が見られ、土師器小片が出土している。床面からは、土師器（壺、甕・高坏等）が出土している。柱穴、壁溝等の施設は検出されなかった。

12号住居

11号住居の南側で検出された。東部を耕作の為削平されているが、一辺 6.0m前後の方形のプランを持つと推定される。主軸はＮ－32°－Ｗを示し、現存する深さは20cm～30cmを測り、埋土は暗褐色土、黒褐色粘質土、暗茶灰色粘質土の３層である。また床面南東半には貼り床が認められた。柱穴は３ヶ所検出され、径30cm～40cm、深さ30cm、柱間寸法は2.3mである。

住居北壁中央部でカマドが比較的良好な残存状態で検出された。焚き口径70cm、奥行90cm、壁の残存高は最高部で30cmを測る。カマド内埋土上層には壁体と思われる粘土塊がみられた。カマド壁内面および床面は激しく火を受けた痕跡が残り、支脚と思われる石が検出された。カマド内より土師器甕・高坏（41)、奥部から煙道部にかけて甑（43）が出土した。

また住居床面東部に土坑２基が検出された。坑内より土師器高坏・甕等が出土している。

床面から、土師器壺（37)、甕（38、39、40)、高坏（42）が完形に近い形で検出された。　（挿図５）

13号住居

11号住居南東を切る形で検出された。北西コーナー隅のみ検出され、現存する深さは５cmを測る。埋土は黒褐色土で、床面から土師器（甕・高坏）が出土している。

土坑

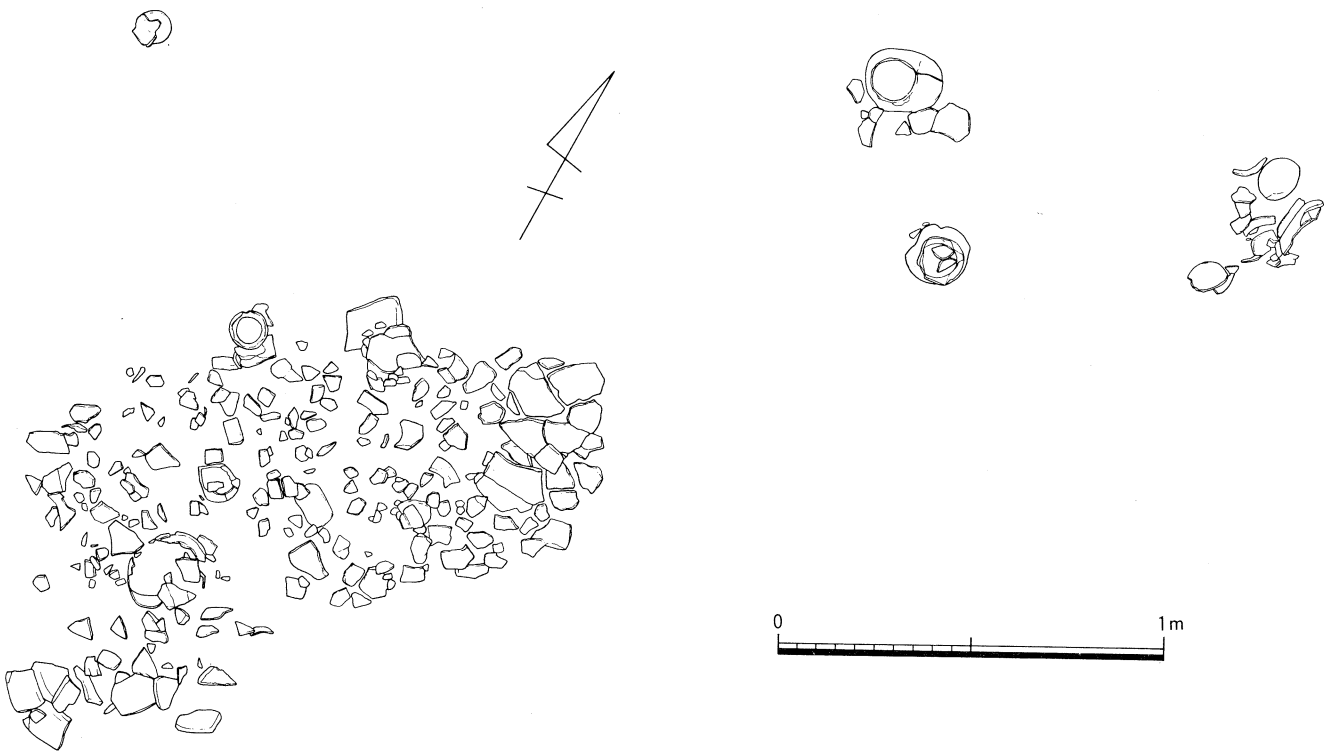
ＳＫ２

トレンチ中央南部で検出された径1.5m～1.8mの円形のプランを持つ土坑である。埋土は灰褐色砂質土１層で完掘後の深さは15cmを測る。坑内より中世土師器（皿・椀)、黒色土師（椀)、白磁等が多量に出土した。

ＳＫ３

トレンチほぼ中央で検出された3.0m×0.7mの溝状土坑である。埋土は灰褐色砂質土で、完掘後の深さは10cmを測る。埋土中より中世土師器（皿)、灰釉陶器（椀）等が完形で出土している。

自然河道跡（ＳＲ１）（挿図４、６、12）



挿図. 6　A－2　ＳＲ１土器出土状況図

A－2からA－6、A－4にかけて検出された南から北へ傾斜を持つ流路跡である。検出された流路底の絶対高は南で91．10M、北で90．50Mを測り、流路幅は10m～11m、深さは80cmである。埋土は大きく3層に分かれる。第1層は茶灰色泥土で、部分的に砂質の場所がある。この層は耕作時に攪乱を受けたと思われ床土化しており、含まれる遺物は多数に小片化している。(46、59、60、65) 第2層は暗茶褐色泥土で、A－6中央附近で砂礫を含む層となる。古墳時代の土器を多量に含む層で特にA－2において遺物が集中して出土した。(45、47、49、53～54、62、64、66、67、69、73、74) 第3層は暗褐色土が中心で、底部において砂礫・粘土を部分的に含む層である。この層からも古墳時代の土器が多量に出土しているが特にA－6からA－4にかけて集中している。(44、48、50、56、58、68、70、72) なおこの流路跡から出土した遺物はすべて土器で、遺物整理コンテナ約130箱にのぼる。

ホ)　A－8　(挿図7)

A地区南部に設けた面積 1,833㎡のトレンチである。厚さ15cm～20cmの現代耕作土層を除去すると、東部で黄褐色粘質土、西部で褐色砂礫層が広がり各遺構が検出された。また南東コーナー附近で黒褐色粘質土の遺物包含層が20cm～30cm認められた。

竪穴住居 (14号～28号)

14号住居

トレンチほぼ中央で検出された一辺 3.6mの方形のプランを持つやや小型の住居である。主軸はN－25°－Wを示し、現存する深さは20cmを測る。埋土は、第1層：暗茶褐色粘質土で住居南西部に第2層：淡茶灰色土がみられる。主柱穴は3ヶ所検出され、径20cm、深さ30cm～40cmを測る。床面東部に焼土の広がりが認められ、南東コーナー附近で土坑が検出されている。住居西壁および北壁で壁溝が検出された。また床面北半中央部で貼り床と

思われる面が認められた。床面より土師器高坏（84、85）が出土している。

15号住居

14号住居北側で検出された4.4m×4.0mのほぼ隅丸方形のプランを持つやや小型の住居である。主軸はN－11°－Wを示し、現存する深さは15cm～20cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土１層で、床面中央部に焼土の広がりが認められた。住居に関連した柱穴、壁溝等は検出されなかった。

16号・20号・21号住居

トレンチほぼ中央で３棟重複して検出された。切り合い部分に中世土壙・溝が存在し、また近世の攪乱を受け詳細は不明であるが、21号住居が一番古く、以下16号、20号の順番であると推測される。

21号住居

住居南辺のみ確認された。一辺 4.2mで方形のプランを持ち、主軸はN－8°－Eを示すと思われる。現存する深さは３cm～５cmで、埋土は黒灰色粘質土１層である。住居南壁から東壁にかけて壁溝が検出された。また南西コーナーで土坑が検出されている。

16号住居

一辺 4.0m前後の隅丸方形もしくは方形プランを持ち、主軸はN－36°－Wを示すと思われる。現存する深さは20cmを測り、埋土は黄褐色粘質土をブロック状に含む暗灰色粘質土１層である。柱穴、溝等の施設は検出されなかった。埋土中より土師器の小片が出土している。

20号住居

一辺 3.6mの方形のプランを有し、主軸はほぼ真北を示す。埋土は暗灰色粘質土、暗茶褐色粘質土の２層で、

現存する深さは15cm～20cmを測る。床面中央北西コーナー寄りで焼土が認められた。柱穴等は検出されなかった。床面および埋土から土師器壺（75、76、78、81）が出土している。

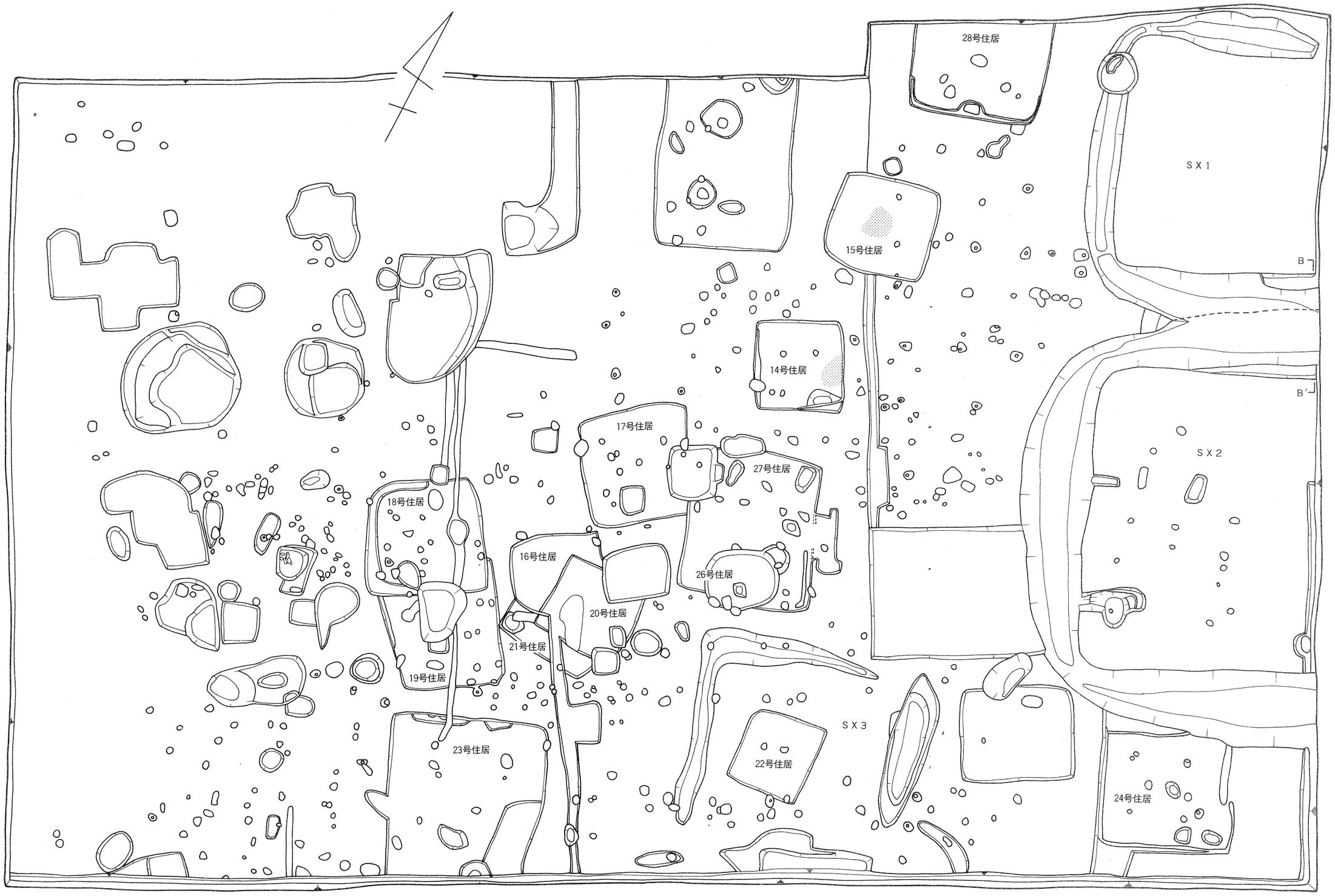
17号住居

16号北部で検出された一辺 4.6m前後の隅丸方形のプランを持つと考えられる。主軸はN－36°－Wを示す。西部を中世土坑によって切られる。現存する深さは８cm～10cmを測り、埋土は暗茶灰色粘質土１層である。住居関連の柱穴は２ヶ所検出され、径20cm～30cm、深さ15cmを測る。住居西壁および北壁で壁溝が検出された。床面より土師器壺(80) が出土している。

18号住居

16号住居西部で検出された、4.5m×4.8mの隅丸方形の住居である。主軸はN－34°－Wを示す。中世土坑・溝・柱穴等によって切られており全容は不明である。現存する深さは10cm前後で、埋土は暗茶褐色粘質土一層である。住居西半で壁溝が認められた。床面中央部で黄褐色粘質土がブロック状に混入しており貼り床と考えられる。住居に関連すると考えられる柱穴、土坑等は検出されなかった。

19号住居


28号住居
SX1
B
15号住居
14号住居
B′
17号住居
27号住居
SX2
18号住居
16号住居
26号住居
20号住居
21号住居
19号住居
SX3
23号住居
22号住居
24号住居
0
10
20m
焼土

挿図. 7　A－8遺構図

北部を18号住居に切られ、中央部を中世土坑、溝等によって撹乱を受けており全容は不明であるが、4.5m×5.0mの方形もしくは隅丸方形を呈すと考えられる。主軸はN－31°－Wを示す。現存する深さは5cm～10cmを測り、埋土は暗茶灰色粘質土1層である。住居南壁及び西壁の一部で壁溝が検出された。柱穴等の施設は検出されなかった。埋土より土師器高坏（86)、甕（82）の他土師器小片が出土している。

22号住居

トレンチ南部中央でS×3（後述）と切り合う関係で検出された。1辺 3.5mの方形のプランを持つ小型の住居である。主軸はほぼ真北を示す。現存する深さは約20cmで、埋土は黒褐色粘質土1層である。住居東辺中央で焼土がみられた他、柱穴等は検出されなかった。埋土より土師器高坏(83) が出土している。

23号住居

トレンチ南部、19号住居の南側で検出された。現存する深さは北側で5cmで南側は削平を受け消滅する。主軸はN－23°－Wを示す。一辺 6.4mの方形プランを持つと推定される。埋土は暗灰褐色粘質土1層である。北辺に壁溝の一部が検出されている。柱穴は二ヶ所検出され、径40cm～50cm、深さ5cmを測る。床面より土師器壺（77)が出土している。

24号住居

トレンチ南東コーナー附近で、SX2（後述）に隣接して検出された。4.7m×5.5mのほぼ方形のプランを持ち、主軸はN－23°－Wを示す。埋土は黒褐色粘質土1層である。現存する深さは10cmを測る。前述のように当住居上面には包含層が認められ、遺構は包含層の下、地山（黄褐色粘質土）を切り込み形成されている。主柱穴は4ヶ所認められ、径20cm～25cm、深さ2cmを測る。東壁の一部を除き壁溝が認められた。室内土坑と思われる土坑が2ヶ所認められるが詳細は不明である。

28号住居

トレンチ北東部で検出された。北半がトレンチ外にある為全容は不明であるが、一辺5.5m前後の方形プランを持ち、主軸はN－19°－Wを示すと推定できる。現存する深さは5cm前後で埋土は暗褐色粘質土1層である。南辺で壁溝が認められ、柱穴は2ヶ所検出された。南辺中央部に室内土坑が検出された。埋土および床面からの遺物の出土はない。

26号・27号住居　当遺構は昭和56年度調査の際、試掘トレンチが設けられ調査済である。土坑などと切り合っているが詳細は昭和56年度の調査報告を参照されたい。

方形周溝状遺構（SX1・2・3）

今回の調査で方形周溝墓と推定される遺構が4基検出されたが、うち3基がA－8に集中している。4基とも盛土及び主体部は後世の削平の為か検出されなかった。以下、溝の概要を記す。

SX1

東部が調査地外である為全容は不明であるが、四方を溝で囲まれると推定される。一辺12m～13m、現存する

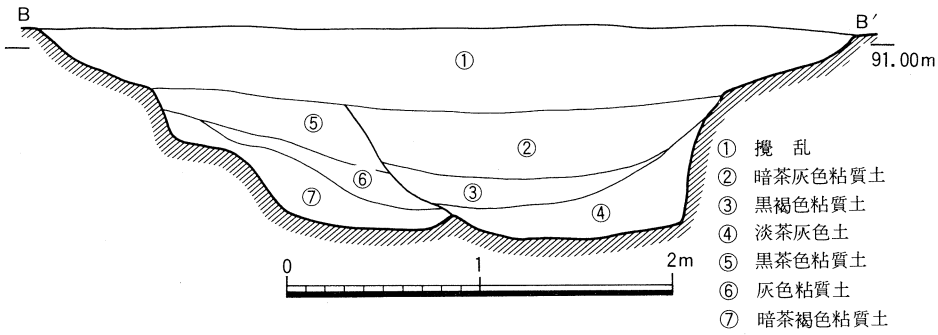
溝幅は1.0m～1.2m、深さは西辺で60cm、北辺で70cmを測る。方位は西辺でN－20°－Wを示す。またコーナー部は極端に浅くなり、溝幅も40cm～80cmと狭くなる。南辺部をＳＸ２によって切られる。溝内埋土は基本的に第１層：暗灰色粘質土、２層：黒茶色粘質土、３層：暗茶褐色粘質土の３層で、部分的に地山のブロックを含む。１、２層で土器の細片が出土した他、完形遺物の出土はない。

ＳＸ２

ＳＸ１同様東部が調査区外である為全容は不明であるが、１辺16m～17m、現存する溝幅は3.0m～3.5m、深さは北辺で 110cm、西辺、南辺で 120cmを測る。方位は西辺でN－30°－Wを示す。コーナー部は極端に浅くなり溝幅も1.2m～1.4mと狭くなる。遺構検出時ではＳＸ２北辺とＳＸ１南辺は共有の形で検出されたが、断面精査の結果、ＳＸ２がＳＸ１を切る事が判明した。（挿図８）

埋土は第１層：暗灰色粘質土、２層：暗茶灰色粘質土、３層：黒褐色粘質土、４層：淡茶灰色土の４層である。また部分的に地山土をブロック状に含む所があり、南辺最下層では暗青灰色粘土層が見られた。

埋土１・２層より遺物が多量に出土したがそのほとんどが小片である。(87、88、90～94) また、北辺中層より土師器甕（89）が転倒した形で出土した。



挿図. ８　Ａ－８ＳＸ１，ＳＸ２切り合い断面図

ＳＸ３

南辺が攪乱され形状が不明であるが３隅に陸橋部が確認された。一辺が10m前後である。方位は西辺でN－20°－Wを示す。北辺と西辺が連続し、コーナー部で最大幅を持ち、深さ約50cmである。東辺は長さ6.0m、幅1.5m、深さ50cmを測る。

埋土は第１層：暗茶褐色土、２層：暗茶灰色粘質土、第３層：暗灰色粘質土の３層である。埋土中より遺物の出土はない。

その他の遺構

柱穴

トレンチ全般でピットが多数検出された。埋土及び遺物から判断して中世と古墳時代の２時期に分類できたが、掘立柱建物としてのまとまりは想定し得なかった。

土坑

主にトレンチ西半で土坑状遺構が検出された。坑内より中世陶器、土師器、磁器等の破片が出土しているが、これらの土坑の性格は不明である。

挿図．9　B－1遺構図

0　15　30m

へ）　B－1（挿図9.12）

B区北部に設けた面積 2,577㎡のトレンチである。約20cmの現代耕作土層を除くと北部では砂礫層、中央から南部にかけて黄褐色粘質土層となり各遺構が検出された。南東コーナー附近は後世耕作の為か削平されている。遺構面の絶対高は北部で91.10M～91.20M、南西コーナーで91.33M、南東コーナーで90.00Mである。

竪穴住居（29号～47号住居）

29号住居

トレンチ北東コーナー近くで検出された。東半が削平されて全容は不明であるが、一辺 5.5m前後の方形のプランが想像できる。方位は西辺でほぼ真北を示す。現存する深さは8cmを測り、埋土は暗茶灰色粘質土・黒褐色粘質土の2層である。柱穴等の施設は検出されなかった。出土遺物はない。

30号住居

一辺5.5m×6.0mの隅丸方形のプランを持ち、主軸はほぼ真北を示す。現存する深さは11cm～15cmで、埋土は暗褐色土、茶灰色砂質土、灰色土の3層である。柱穴は4ヶ所認められ、径20cm～30cm、深さ6cmを測る。住居壁西半で壁溝が認められた。埋土より土師器高坏（112、119）が出土している。

31号住居

東部が調査区外である為全容は不明であるが、一辺 4.2m前後の方形のプランを持ち、主軸はN－21°－Wを示すと思われる。現存する深さは15cmで、埋土は茶灰色砂泥と暗灰色砂泥の2層である。柱穴は2ヶ所検出されたが深さ4cm程で住居の主柱穴とは考え難い。床面より土師器高坏（117、118）が出土している。

32号住居

31号住居の8m南方で検出され一辺 4.3mの方形のプランを持つ。主軸はN－16°－Wを示す。現存する深さは5cmで、埋土は暗茶褐色粘質土1層である。柱穴は2ヶ所認められ、径22cm、深さ10cmを測る。南東コーナー附近に土坑が検出され、また南部で浅い溝状の落ち込みが認められた。埋土中より土師器の小片が出土した他床面からの出土物はない。

33号住居

3.7m×3.5mの方形のプランを持つやや小型の住居である。主軸はN－13°－Wを示す。現存する深さは8cm～10cmで、埋土は灰褐色砂質土1層である。床面中央から北部にかけて貼り床が認められた。西辺中央に焼土が検出され、カマド壁体と思われる粘土ブロックが認められた。柱穴は4ヶ所検出され、径25cm～27cm、深さ5cmを測る。また北東コーナーで貯蔵穴と思われる土坑が検出された。焼土中より高坏（115）、土坑内より甕（100、105）が出土している。

34号住居

一辺 3.5mの方形のプランを持つ住居で、南西部を近世井戸によって切られる。主軸はN－11°－Eを示す。現存する深さは8cm～10cmを測り、埋土は暗茶褐色砂泥、暗灰褐色粘質土の2層である。住居西壁の一部に壁溝が認められた。柱穴は検出されなかった。床面より土師器壺（104）が出土している。

35号住居

34号の西に隣接して検出された。一辺 5.0mの方形のプランを持ち、主軸はN－6°－Wを示す。現存する深さは14cmを測り、埋土は黒灰色粘質土・暗茶色粘質土の２層である。住居東壁を除き壁溝がめぐり、主柱穴が４ヶ検出された。径20cm～30cm、深さ20cm～30cm、柱間寸法 2.5mを測る。床面南東部で焼土が認められ、また北東コーナーで土坑が検出された。埋土より土師器壺（106）、土坑内より高坏（113）が出土している。

36号住居

トレンチ北西コーナー附近で床面の一部が検出された。上部を激しく削平され、埋土等の詳細は不明であるが、一辺 4.5m前後の方形プランを持つと考えられる。南東コーナー附近で土坑が検出されたが、屋内土坑かどうかは不明である。遺物の出土はない。

37号住居

東部約⅓を削平されている為全容は不明であるが、一辺 3.3m前後の方形のプランを持つ小型の住居と考えられる。現存する深さは12cmを測り、黒褐色粘質土、茶褐色泥砂の２層である。住居西壁及び北壁の一部で壁溝が確認された。南西コーナー附近で屋内土坑が検出され、また西部に焼土がみられた。住居関連の柱穴は検出されなかった。埋土（第２層）より須恵器坏蓋（95）身（96）・土師器甕（107）、床面より土師器甕（101）・高坏（109、116）が出土している。

38号住居

方形のプランが検出された為、住居として取り扱ったが、中央部を土坑によって切られ全容は不明である。埋土は暗褐色泥砂が4 cm～５cmみられ、この層より須恵器高坏（97）が出土している。また西半で土坑が検出され壙内より土師器高坏（110）が出土している。

39号住居

東部が削平されて全容は不明である。西辺で 4.5mを測り、N－14°－Eを示す。現存する深さは10cm～15cmで、埋土は黒褐色土１層である。南及び西辺で壁溝が検出されたが西辺では二重にめぐる。また東部で当住居の壁溝と思われる溝が検出された。主柱穴は４ヶ所認められ、径20cm～40cm、深さ20cmを測る。また住居南北で２ヶ所の土坑が検出された。埋土より土師器高坏（111）・壺（98）、北部土坑より壺（99）が出土している。

40号住居

一辺 4.0mのほぼ方形のプランを持ち、主軸はN－11°－Eを示す。現存する深さは４cm～5 cmで、埋土は灰褐色砂質土１層である。北辺及び東辺の一部で壁溝が検出された。また北部中央で貼り床が認められた。柱穴は４ヶ所検出され、径20cm～30cm、深さ５cm～10cmを測る。埋土より土師器小片が出土した。

41号住居

東部を43号住居に切られ全容は不明であるが、一辺 4.5m前後の隅丸方形であると考えられ、主軸はN－18°－Wを示す。現存する深さは７cm～10cmを測り、埋土は茶褐色粘質土１層である。ほぼ中央部で貼り床が見られた。西部で２段の掘り形を持ち南辺に土坑が検出された。埋土中より土師器小片及び石斧が出土している。（挿図10）

42号住居

トレンチ南西部で北東コーナー部のみ検出された。方位は東辺でN－5°－Wを示す。現存する深さは10cm～12cmで、埋土は焼土混暗茶褐色土である。床面から土師器甑（108）・高坏（114）が出土している。

43号住居

41号東部で検出された、3.0m×2.8mのほぼ方形のプランを持つ小型の住居である。主軸はN－7°－Wを示す。現存する深さは18cm～20cm、埋土は暗茶褐色土１層である。住居関連の柱穴等は検出されなかった。床面より土師器甕（102）が出土している。

44号住居

東部大半が後世の削平を受け全容は不明である。方位は西辺でN－15°－Wを示す。現存する深さは20cmを測り、埋土は暗茶褐色粘質土１層である。西部中央及び北西コーナー床面で焼土がみられる。南部で土坑が検出された。

45号住居

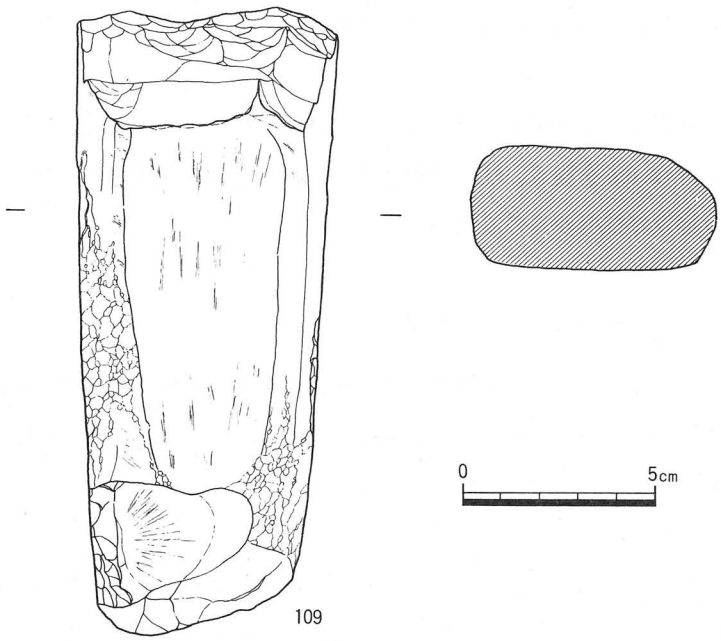
南部を40号に、北東部を35号に切られる。一辺 5.0m前後の方形のプランを持つと考えられる。現存する深さは６cmで、埋土は暗灰褐色粘質土１層である。柱穴等は検出されなかった。

46号住居

33号住居南部で壁溝の一部と柱穴、土坑のみ検出された。床面は削平され現存しない。４ヶ所の柱穴は径20cm～25cm、深さは20cm～30cm、柱間寸法は2.0m～2.2mを測る。遺物の出土はない。

47号住居

43号住居北側で南西コーナー部のみ検出された。現存する深さは３cmで埋土は暗茶褐色粘質土１層である。床面より土師器壺（103）が出土している。

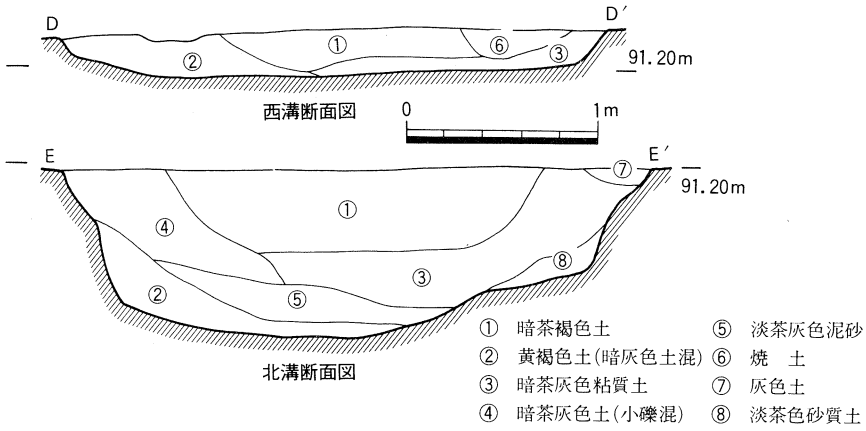


挿図. 10　B－1　41号住居出土遺物（石斧）

方形周溝状遺構

ＳＸ４　（挿図11）

トレンチ南部で北辺及び西辺が検出された。南辺は削平されており、東辺は中世土坑に切られ全容は不明であるが、四隅に陸橋部を持つタイプと考えられる。溝検出面の絶対高は91.10M～91.20Mを測る。現存する溝は北辺で全長 9.5m、最大幅 3.5m、深さ60cm～90cm、西辺で全長9.0m、最大幅3.0m、深さ30cmを測る。方位は西辺でＮ－11°－Ｗを示す。溝埋土は、暗茶褐色土、黄褐色土混暗灰色土、暗茶灰色粘質土、暗茶灰色土（小礫混）、淡茶灰色泥砂、焼土が認められた。溝内より多量の土師器が出土しているが完形品はない。出土遺物は土師器のみで壺（120～122、125）、甕（123、124、126、132）、高坏（127～129、133）、器台（130）、手づくね（131）などがある。



挿図. 11　Ｂ－１　ＳＸ４断面図

掘立柱建物

ＳＢ１

トレンチ北部で検出された４間×２間の掘立柱建物である。方位はほぼ真北を示す。柱間寸法は、桁行 1.72ｍ、梁行1.50m を測る。柱穴掘形は直径30cm～50cmの円形で、深さ30cm～40cmを測り、直径20cm程度の柱痕が検出されたものもある。堀形内埋土は暗灰褐色土である。柱穴掘形内より信楽擂鉢片が一点出土した他、遺物の出土はない。

ＳＢ２

トレンチほぼ中央で検出された４間×２間の総柱の掘立柱建物である。方位はＮ－20°－Ｗを示し、柱間寸法は、桁行1.8m～2.0m、梁行 2.0m を測る。柱穴掘形は直径15cm～30cmの円形で深さ20cm～30cmを測る。掘形内埋土は灰色粘質土で、掘り形及び柱痕からの遺物の出土はない。

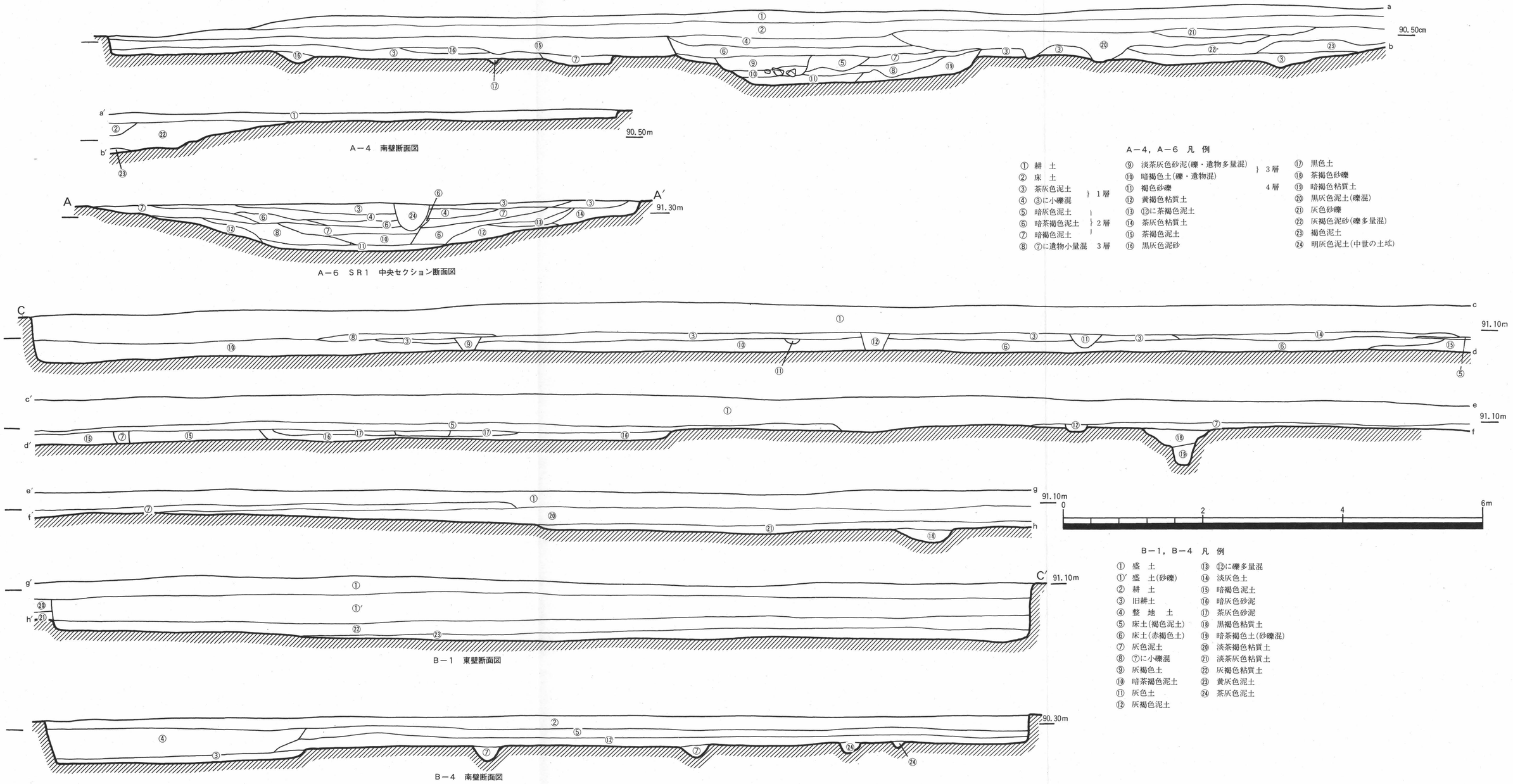
溝

ＳＤ３

トレンチほぼ中央を西から東に流れる溝跡である。検出時の溝幅は西部で約 1.0m、中央部で約 3.5m、東部で約 2.0m を測る。また底部で段を持ち幅30cm～50cmを測る。埋土は上層：黒褐色粘質土（小礫混）、下層：暗灰褐色土（砂礫混）で埋土中より古墳時代須恵器・土師器が出土している。

ＳＤ４

トレンチ北西コーナー附近で検出された、南北の方位を持つ溝である。検出幅は南部で1.0m、北部で2.5m、深さは南部で10cm、北部で12～14cmを測る。埋土は暗灰褐色（小礫混）で、古墳時代の土師片が出土している。



挿図. 12　A－4南壁，A－6SR1中央セクション，B－1東壁，　B－4南壁断面図

ト）　Ｂ－２

Ｂ区中央西部に設けた面積 168.4㎡のトレンチである。現代耕作土の下、砂礫層が認められ遺構は検出されなかった。

チ）　Ｂ－３　（挿図12）

Ｂ区中央東部に設けた面積 423.6㎡のトレンチである。層位は現代耕作土（40～50cm）、赤褐色土（20cm）、灰褐色粘泥土（20cm）、地山土（黄褐色粘質土）である。遺構は地山面で検出された。検出された遺構は、ＳＲ１の続きと思われる溝、直径20cm～50cmのピット、土坑などである。このトレンチにおける遺構面は絶対高 89.80M～89.90Mを測り、ほ場整備計画の切り土内に収まる為、遺構の掘り込みは行わず、写真撮影と平板測量のみ実施した。

リ）　Ｂ－４

Ｂ－２南側に設けた面積277.84㎡のトレンチである。現代耕作土（40～50cm）の下、黒灰色粘質土層が厚さ30cm～40cm認められた。この層を切り込み、平安末～鎌倉期とみられる掘立柱建物が１棟検出された。またこの層を一部深掘りした結果ＳＲ１の続きと思われる土器を包含する層が認められた。

ヌ）　Ｂ－５

Ｂ－４東部に設けた面積 388.8㎡のトレンチである。Ｂ－３同様の層位で、遺構検出面の絶対高は 89.65M～89.90Mを測り、切り土計画内である為、遺構の掘り込みは行なわず、写真撮影、平板測量のみ行なった。検出された遺構はピット、土坑、溝などである。

ル）　Ｂ－６

Ｂ－４南側に設けた面積 141.2㎡のトレンチである。現代耕作土層（40～50cm）、暗灰色粘質土（50～60cm）、茶灰色粘質土（20～25cm）、地山層（黄褐色粘土）の層位である。地山面から遺構は検出されなかった。

Ｔ31－１

31号排水路敷南半に設けた幅２ｍ、総延長90mのトレンチである。トレンチ 南部は15cm～20cmの現代耕作土層の下砂礫層となり、遺構は認められなかった。北部で黄褐色粘質土が検出され、ピット、土坑等が検出された。遺物の出土は極めて少量で、時代等は不明である。

Ｔ31－２

31号排水路敷北半に設けた幅２ｍ、総延長 100mのトレンチである。黄褐色粘質土を切り込みピット、土坑等の遺構が検出された。特に北部において、古墳時代の遺物を含む住居跡と思われる遺構や土坑が検出されている。

Ｔ31－３

31号排水路敷に設けた東西方向のトレンチである。幅２ｍ、総延長 100mを測り一部Ｂ－１に隣接する。時代不明のピット、土坑、落ち込みの他、一部で古墳時代の土器を包含する層が認められた。

Ｔ33－１

33号排水路敷に設けた、幅２ｍ、総延長 105mのトレンチである。北部では耕作土の下、砂礫層（25cm）、暗灰色泥土（20cm）、暗灰色粘土（地山）、南側では耕作土（15cm）、褐色砂礫（20～25cm）、暗灰色粘土（地山）の層位をなす。各層から遺構・遺物は検出されなかった。また南部では耕作土・床土（25～30cm）、褐色粗砂（25～30cm）、

青灰色粘土（地山）の層位をなし、北部同様遺構・遺物は検出されなかった。

(2) 遺　物

今回の調査で先に述べた各遺構に伴い、遺物整理コンテナ約 200箱分にもおよぶ多量の土器が出土している。これらは、住居、河道跡等に伴う弥生時代後半から古墳時代にかけての土器と、掘立柱建物、土坑、溝等に伴う平安時代末期～鎌倉時代の土師器、陶器、磁器類の、大きく２つの時期に分かれるが、量的には前者が圧倒的に多い。しかし出土土器が膨大な数にのぼるため、本報告ではそのごく一部の紹介にとどめたい。

Ａ－１　竪穴住居

須恵器・坏身　（１、２）　立ちあがりは内傾し端部は丸くおさめる。受部は外上方につまみ出し、端部は丸くおさめる。底部にヘラ削りは施されない。陶邑編年ＴＫ10形式[注(7)]に相等すると考えられる。

甕　（３）口径33.6cmを測る。口縁に貼り付け突帯をめぐらし、頸部に波状文を施す。胎土は緻密で灰白色を呈す。初期須恵器の搬入品と考えられる。

土師器・甕　（４、６）「く」字状口縁を呈し体部は球形と思われる。（６）の口縁端部は厚く、外側に内傾した平坦面をもつ。

高坏　（５）中空の脚柱部から内側に稜をなして外反する裾部をもつ。

Ａ－６　12号住居

壺　(37) ほぼ球形の体部に、「く」字状の頸部から直線的に外反する口縁を持つ。口縁内外面ともヨコナデ、体部外面に目の細いハケ成形を施す。体部内面は粗いナデで粘土紐の巻き上げ痕が残る。

小型壺　(35、36)　(35) は手づくねで底部内面にハケ目が残る。(36) はやや張りのある扁平化した体部をもつ。口縁および体部上半内外面は丁寧なヨコナデで、体部下半外面に叩目が残る。全体的に丁寧な調整である。

甕　(38、39、40)　(38) は小型で、小さく外方へつまみ出した口縁に球形の体部を持つと思われる。口縁内外面ともヨコナデ、体部内面はヘラ削り、外面にヘラ状工具によるカキ目が見られる。外面にススが付着する。(39、40) は最大腹径がほぼ中位にある、丸底で縦長の球形の体部に、短く外反気味の口縁を持つ。口縁内外面共ヨコナデ、体部外面は縦方向のハケ、内面に粘土紐の継ぎ目痕が残る。ともに外面にススが付着する。

高坏　(41、42)　(42) は坏底部と口縁部の境に明確な稜をなし、大きく外反する口縁をもつ。口縁端部は外につまみ出される。中空の脚柱部に外反する裾部を持つ。坏部内面は丁寧なヨコナデ、外面はハケの後ヨコナデ、脚部外面ナデ、脚柱部内面ヘラ削りを施す。

甑　(43) 平坦な底部に大小の不規則な穿孔をもつと思われる。口縁部ヨコナデの他摩滅が激しく不明である。粘土紐巻き上げ痕の残る体部のほぼ中位に断面円形の取手がつく。

ＳＲ１

須恵器　(45) 口縁部のみ現存する。壺の口縁と思われる。口縁端部を上方に軽くつまみ出す。口縁および頸部に４条の波状文を２重に施す。胎土はきめ細かく、軟質である。

瓶　(44) やや扁球気味の体部で外上方に開く口縁を持つ。口縁外面に稜線がめぐる。口縁部、体部ともロクロナデのみで施文はない。体部中位やや上方に穿孔し、穿孔部下方および底部に「ヘラ記号」が見られる。

土師器・壺　(53) 受口状の口縁を呈す。頸部の稜は甘く口縁端部を外上方に軽くつまみ出す。口縁内外面ヨコナデ、体部内外面ハケ成形。　(54) やや上げ底気味の底部でほぼ球形の体部に「く」字状の口縁をもつ。口縁内外面ヨコナデ、体部外面はハケ成形。　(52) 外反した頸部が一旦稜をなしてさらに大きく外反する口縁を持つ。内面丁寧なヘラ磨きを施し、外面ヨコナデ後、口縁部に乱雑な波状文を施す。　(56) 長頸壺の体部と思われる。最大腹径は体部下半にあり直立する口縁をもつ。外面は丁寧なヘラ磨きを施し、内面はナデである。

小型壺　(48) 半球の体部に大きく開く口縁を持つ。口縁部と体部の境の稜線は甘く明稜でない。口縁内外面および体部外面下半をハケ成形、その他ナデ。　(47) 体部中位上方で張りのある扁平な体部にやや内弯気味に開く口縁をもつ。体部外面ハケ成形口縁外面はヨコナデ、内面はハケ後ヨコナデを行なう。　(46) 扁球化した体部に短く外反する口縁を持つ。体部外面ハケ成形、内面はヘラ削り、口縁はナデ。　(72、73) いわゆる「手づくね」の土器である。ともに焼成が悪く、摩滅が激しい。

甕　(58) 球形の体部にやや内弯気味に立ち上がり、端部内面に肥厚する口縁を持つ。体部外面は叩きを施した後ハケ成形する。内面ヘラ削りで器壁は薄く仕上げる。口縁内外面ともハケ成形の後ヨコナデを施す。体部下方に一ケ所穿孔する。　(57、60、61) 受口状の口縁を呈す。端部を丸くおさめるもの (61)、外側に軽くつまみ出すもの (57)、大きく外上方につまみ出すもの (60) がある。口縁内外面ともヨコナデ、体部外面はハケ成形後、平行沈線を施すもの (61)、2条のカキ目を格子状にめぐらすもの (60) がある。　(60) は口縁外面に2条の沈線を施す。(57) の体部は球形と思われる。　(59)「く」字状の口縁を呈す。口縁内外面ヨコナデ、体部外面の一部にハケ目が残る。

鉢　(70) 受口状の口縁を呈す。口縁内外面ヨコナデ。顎部に列点、頸部から肩部にかけて8条の平行沈線、体部上部にハケ原体による列点を施しハケ成形する。中位に波状文が見られる。　(71) 扁球化した体部にやや内弯気味の口縁を持つ。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面一部にハケ目残る。　(69) 小型の鉢とした。あげ底気味の底部にやや内弯して立ち上がる体部をもつ。外面ハケ成形、内面は指ナデを行なう。

甑　(62) 丸底の底部に径1cmの穿孔を行なう。内外面とも目の細かいハケ成形を施す。

高坏　(63、64、65)「ハ」字状に開いた裾部に焼成前に穿孔を4方施すもの (63)、中空の脚柱部に裾部が大きく外反するもの (64)、脚柱部から直線的に「ハ」字状に開くもの (65) がある。これらの他本報告には掲載しなかったが、脚柱部が中実のもの、穿孔が3方のものなどさまざまなタイプが出土している。成形はナデおよびハケでヘラ磨きは施されない。

器台　小型器台 (66)、くびれ部がほぼ中位にあり受部および脚部が大きく外反するもの (68)、受部が直線的に大きく外反するもの (67) などがある。(67) の脚部外面はヘラ磨きを施し、3方の孔を穿つ。受部内外面とも丁寧なナデ。(68) は受部内面および脚部外面の一部にヘラ磨きを施す。その他は丁寧なナデを行なう。脚部に焼成前の5方の孔を穿つ。

A－1　SD2 (2層・3層)

須恵器・坏蓋　(7) 丸味をおびた天井部のほぼ中心に中くぼみのつまみをもつ、天井部と体部の境の稜は甘く明瞭でない。天井部約½にヘラ削りを施す。

坏身　(8) 立ちあがりは強く内傾し、端部はやや厚めで内面に段をなす。ヘラ削りは施されない。

土師器・壺　(12、13、14)　(12) 直立気味の口縁部で端部内側にわずかに肥厚する。(13) 大きく外上方に外反する口縁で、端部わずかに上方につまみ上げる。内外面ともナデ成形。頸部に突帯を貼りつける。(14)「コ」字状の頸部から一旦稜をなして直立する口縁をもつ。端部内面にわずかに肥厚するとともに外方につまみ

出し、上側に平坦な面をもつ。内外面ともヨコナデで、頸部から肩部にかけてハケ原体による刻み目を施す。

小型壺　(10、11)　(11) あげ底の底部をもつ。内面は丁寧なナデ、外面上半にヘラ磨き、下半に丁寧なナデを施す。粘土は精選されており、全体的に丁寧なつくりである。

甕　(16、17)　(16) 受口状口縁を呈す。顎部から外弯気味に立ち上がり、端部を外側につまみ出す。内外面ともヨコナデ。(17)「く」字状口縁を呈し、端部は内面に肥厚する。体部は球形と思われる。口縁内外面ヨコナデ、体部内面はヘラ削り、外面は目の細かいハケ成形を施す。

高坏　(20～22)　(20)「ハ」字状の裾部に4方の孔を穿つ。(22) やや大型で「ハ」字状の裾部に4方の孔を穿つ。(22) やや大型で「ハ」字状の脚柱部からわずかに外反する裾部をもつ。

小型器台　(23～25)　受部と脚部の境が中空のもの(24、25)　とそうでないもの(23)　がある。(25) は受部内面および脚部外方に丁寧なヘラ磨きを施す。脚部に焼成前穿孔が3ヶ所見られる。

A－8　SX2

壺　(87) 外弯気味の頸部に強外反する口縁をもつ。端部上下を肥厚させ平坦面をつくり、3条の平行沈線をめぐらす。外面ハケ成形、頸部に3～4条の沈線をめぐらす。

甕　(89) 最大腹径は中位よりやや上方にあり、平底を呈す。頸部より外上方に開いた口縁は、外側に緩い稜をなして直立する。端部を外上方に軽くつまみあげ、凹面をなす。口縁内外面ともヨコナデで施文はない。体部内面ヘラ状工具によってカキ上げる。

高坏　中空の脚柱部になだらかに外反する裾部を持つもの (90)　と脚柱部から裾部にかけて直線的に外反するもの(91)　がある。外面はヘラ磨き、内面下半ハケ目が残る。(91) は脚柱部上方に3方の孔を穿つ。

器台　(92) 小型器台で受部と脚部の境は中空で、脚部に3方の穿孔を施す。受部内外面および脚部外面にヘラ磨きを施す。

B－1　SX4

壺　長頸壺の口縁(120)、受口状口縁をもつもの(125、126)　外反する口縁をもつもの(121)がある。(126) は口縁から顎部に刻み目、頸部に列点及び沈線を施す。(125) は口縁に列点を施す。

甕　受口状口縁を呈すもの (122、124、132) とそうでないもの (123) がある。(124) の口縁は無文でわずかに頸部に平行沈線がみられる。(122) は器壁が比較的厚く壺の可能性もある。

高坏　大きく開いた坏底部に外弯する口縁をもつもの (127) と開いた坏底部から稜をなして内傾する口縁をもつもの (128) がある。(128) の坏部内面は焼成不良の為か黒化している。(135) は穿孔を5方施すが、1ヶ所穿孔を意図したと思われる竹管の押し痕が残る。

器台　(130) は受部と脚部の境のくびれが中位よりやや上方にあり、受部、脚部とも直線的に開く。(133) は脚部のみで焼成前穿孔を3ヶ所施す。

B－1　竪穴住居

須恵器・蓋　(95) の天井部は丸味をおびふくらむ。天井部と体部の境の稜線は甘い。天井部上半にヘラ削りを施す。身 (96) の立ちあがりは一旦内傾し甘い稜をなして立ちあがる。底部から体部にかけて丸味をおびる。底部にヘラ削りが見られる。陶邑編年TK47形式[注(8)]に相等すると考えられる。

土師器・壺　(104) は最大径が体部下半にあり「パイナップル型」を呈す。今回の調査での出土例はこれ一点

のみである。成形は粗雑で粘土紐の継ぎ目が残る。

甕　球形の体部に外反する口縁をもつタイプである。

甑　(108) 底部に径43cmとやや大きめの穿孔を施す。下半は「籠状」のもので型をとったと思われ、外面に「籠目」痕が残る。この「籠目土器」は「纒向遺跡」[注(9)]などで数例見られるが県内では希である。

高坏　「ハ」字状に開いた中空の脚部に大きく開いた坏底部より外側に稜をなして外反して立ち上がる口縁を有するもの (117、118)、中空の脚柱部より屈曲した裾部をもつもの (110、111)、中ぶくれの脚柱部に内弯して立ち上がる口縁をもつもの (114) などがある。(117、118) の脚部は丁寧なヘラ磨きを施すが坏部はハケ及びナデのみで比較的雑である。(116) はロクロの使用が認められる点で他と異なる。

4 ま と め

前述のように本報告で紹介した遺物はごく一部にすぎない。そこで各遺構の綿密な検討は出土遺物すべてを整理できた段階で行うことにし、ここでは当遺跡の大まかな年代観と周辺の遺跡との関連について述べたい。

今回の調査で検出された住居は総数47棟にのぼる。それらは出土遺物からみてA－8の例を除き、古墳時代中期から後期にかけて営まれていたと思われる。しかし、各住居間では時間的な前後関係がみられ、集落としては約100年以上の間存続していたと推測される。これらの住居は自然河道（SR1）を避けて立地しており、何らかの形でこの流れを利用していたものと思われる。またT31－2においても同時期の住居が検出されており、当集落の範囲は今回の調査区を中心に、沙々貴神社の東に広がる水田全面に広がると思われる。

これらの住居群が立地する微高地の東側には隣接して低湿地が広がっている。この低地には繖山をはじめとして周辺より水が流れ込み、現在においても肥沃な水田となっている。この地には弥生時代末から古墳時代初頭とされる西才行遺跡が存在し、多量の土器と供に木製の鍬などが出土している。[注10] 古墳時代においても、この地は農耕の場として当時の生産基盤となっていたと思われ、小中遺跡における今回の調査では直接農耕を示唆するような遺物は出土しなかったが、集落の立地条件を考えた際、当遺跡の住居群は古墳時代の農耕集落であると推定できる。

ところで当遺跡の南方には通称常楽寺山が聳え、その尾根には常楽寺山古墳群が点在している。常楽寺山古墳群調査報告書[注11]によると、この古墳群は5世紀中葉から6世紀後半にかけての造営とされておりこの時期は小中遺跡の集落が営まれた時代と一致する。つまり古墳群の造営に直接係わった人々の集落か、あるいはそれとなんらかの関係のある集落であることが推測できる。

一方、方形周溝墓と思われる遺構が4基検出され、溝内より弥生時代末から古墳時代初頭にかけての土器が出土している。[注12] これらの時代に相当する住居はA－8で検出されているが数は少ない。4基の周溝墓はいずれも微高地と湿地の境、あるいはやや微高地寄りに立地している。弥生時代末から古墳時代初頭にかけての墓域としては33号排水路敷で遺構が検出されなかったことから考えて、当微高地の東辺から湿地にかかる地帯が推定でき、その東限はT－33までの間にあると考えられる。

また当遺跡の北東約0.5kmに慈恩寺遺跡が存在し、57年度調査[注13]で古墳時代前期の集落が検出されている。これら慈恩寺遺跡検出の一部の住居と当遺跡検出の方形周溝墓とが時代的に一致しており、これら慈恩寺遺跡の集落の墓域となる可能性もある。しかしA－8検出の住居および56年度調査[注14]にて検出の住居との詳細な検討を前提とするが、これらを墓域とする集落はA－8から南部にかけて、あるいは今回検出された自然河道（SR1）の上流にあたる大字中屋に広がる微高地上に想定できる。このことはSR1より、古墳時代前期から中期にかけての土器が多量に出土していることによっても推察される。さらに当小中遺跡の中軸をなす古墳時代中期から後期に相当の住居群は、常楽寺山古墳群をはじめとする各群集墳[注15]が築造された時代性を有するものと考えられる。

西家　淳朗

注釈

注1）古墳時代から中世にいたる土器の散布地として知られている。

(2) 昭和57年度県営ほ場整備に伴う発掘調査が実施され、中世寺院関係の遺構の他古墳時代前期の集落が検出されている。

(3) 『上豊浦宗円堂遺跡発掘調査報告書』　1980年　安土町教育委員会

(4) 昭和56年の調査の結果、城下町関連の遺構の他、古墳時代から中世の遺物が出土している。

(5) これまでⅥ次にわたる調査が実施されており、安土城城下町関連の遺構の他古墳時代から平安時代の遺構が検出されている。

(6) 昭和58年度調査で古墳時代の遺物が出土している。

(7) 『陶邑古窯址群工』　1966年　平安学園考古学クラブ

(8) 同注(7)

(9) 『纒向』　1976年　桜井市教育委員会

(10) 昭和56年度より３次にわたり調査が実施され、弥生時代末～古墳時代初頭の遺物が出土している。

(11) 『常楽寺山古墳群調査報告書』　1977年　安土町教育委員会

(12) 石原道洋氏（八日市市教育委員会）の御教示による。

(13) 同注(2)

(14) 昭和56年度調査結果（滋賀県文化財保護協会）参照

(15) 熊野神社古墳群、桑実寺古墳群、奥石神社古墳群などの後期古墳が安土町内に数多く存在している。

表1　小中遺跡　遺物観察表

No.	器　形	法　量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺　構
1	坏 (須恵器)	口径11.8 器高 4.8	たち上がりは短く内傾し端部は丸く収める。	ヘラ削りは施されない。	(胎土)3×3mmまでの砂粒をまばらに含みやや粗い。(長石を含む) (焼成) 極めて良好 (色調) 暗灰色	A－1 1号住居 土拡
2		口径12.6	たち上がりは内傾し端部は丸く収める。	ロクロナデ。	(胎土) 石粒含む (焼成) 良好 (色調) 灰白色	A－1 2号住居 土拡
3	甕 (須恵器)	口径33.6	外反する口縁に突帯をめぐらす、頸部に波状文を施す。		(胎土)砂粒(長石・石英)をまばらに含む。 (焼成) 極めて良好 (色調) 明白灰色	A－1 3号住居 埋土
4	甕	口径16.2	[く]字状口縁を呈し、やや内傾する坦面をもつ。体部は球形と思われる。	口縁部内外面ともハケ成形とナデ成形。体部は5条ハケ成形。	(胎土)きめ細か、砂ほとんど含まず。 (焼成) 普 通 (色調) 暗赤褐色	A－1 3 号住居
5	高坏	脚径11.2	[ハ]字状の脚部から内面に稜を成して外下方に開く裾部をもつ。	脚部外面横ナデ成形、裾部内面ハケ成形、脚部内面はヘラ削り。	(胎土) 緻 密 (焼成) 不 良 (色調) 赤褐色	A－1 3号住居 埋土
6	甕	口径15.4	緩やかな [く] 字状の口縁を呈し、端部はやや厚く凹状の平坦面をもつ。	口縁端部は横ナデ成形口縁外面はハケ成形の後横ナデ、体部外面ハケ成形、口縁部内面はハケ成形で体部内面はヘラ削り。	(胎土)2×2mmまでの砂粒を均一に含み、精製されている。 (焼成) 良 好 (色調) 淡白褐色	A－1 2号住居 焼土
7	蓋 (須恵器)	口径11.9 器高 4.8	天井部のほぼ中心に中くぼみのつまみがつく・天井部は丸味をおびる。天井部と体部の稜線は甘く明確でない。	天井部の一部にヘラ削りを施す。	(胎土)暗灰色、緻密。希れに3mmの砂粒含む。 (焼成) 良 好 (色調) 暗灰色	A－1 SD2 2層
8	坏 (須恵器)	口径10.3	たち上がりは強く内傾し、端部内面に段をなし、やや厚い。		(胎土) 精 良 (焼成) 良 好 (色調) 暗灰色	
9	壺		口縁部は水平に開いて大きな平坦面をもち、端部は垂下する、平面に鋸歯状の刻みを施す。	摩滅が激しい。	(胎土)砂粒多く含む。 (焼成) 不 良 (色調) 淡白褐色	A－1 SD2 3層
10	小型壺	最大腹径 7.0	体部は偏平した球形である。	外面及び頸部内面はナデ成形。肩部内面は指ナデ成形。	(胎土)砂粒含むがきめ細かである。 (焼成) 良 好 (色調) 淡白褐色	A－1 SD2 2層
11		底径 1.9	やや上げ底の底部からやや内弯して立ち上がり、外反する口縁をもつ。	内面は丁寧なナデ成形外面は下半部がナデ成形で上半部はヘラ磨き	(胎土)砂含まず、きめ細か。 (焼成) 良 好 (色調) 淡赤褐色	
12	壺	口径16.5	外弯ぎみにのびた口縁で端部丸く収めて内側	内外面共に摩滅が激しく詳細は不明	(胎土)やや砂質、石英粒含む。	

			へわずかに肥厚する		(焼成) 不 良 (色調) 淡白褐色	
13	壺	口径19.4	[く] 字状口縁でやや外反し外上方へ伸びる	口縁は内外面共ナデ成形、頸部に貼付突帯をめぐらす。	(胎土)砂粒多く含む。 (焼成) 不 良 (色調) 淡白褐色	A－1 SD2 3層
14	壺	口径19.6	[コ] 字状の頸部から稜をなして直立する口縁をもつ。先端部の内面を肥厚させて、外上方につまみ出す。	口縁部内外面共横ナデ成形の後、頸部にハケ原体による刻み目。	(胎土)微細な粒子から成る極めて精良な胎土。 (焼成)良く焼け、締っている。 (色調) 白橙色。	A－1 SD2 肩部
16	甕	口径14.8	受口状口縁端部を外側につまみ出す。	口縁内外面共横ナデ成形。	(胎土)砂粒多量に含む。む。 (焼成) 良 好 (色調) 淡白褐色	A－1 SD2 2層
17		口径15.0 最大腹径16.4	[く] 字状口縁で先端部は内側に肥厚する。体部は球形を呈す。	口縁内面及び外面から肩部にかけてナデ成形体部内面は削りで外面は細いハケ。	(胎土) 石英長石粒を多く含む。 (焼成) 良 好 (色調) 淡白褐色	
19	壺	口径30.9	頸部内面に甘い稜をなして [く] 字状に折れ曲り、一旦稜を成して直立気味に外反する。	外面はハケ成形。内面は不明。	(胎土) 砂粒を均一に含み、極めて良好。 (焼成) 極めて良好 (色調) 淡橙褐色	A－1 SD2 2層
20	高坏	脚径11.4	[ハ] 字状の脚部から緩やかに外反して端部にいたる。焼成前穿孔を四方に施す。	内外面共、摩滅が激しく詳細は不明であるが裾外面はナデと思われる。	(胎土)2～3㎜の石英粒を多く含む。 (焼成) 不 良 (色調) 淡赤褐色	A－1 SD2 3層
21	高坏	脚径14.2	坏底部は内弯気味に外上方に伸び甘い稜を成して外上方に立ち上がる。	口縁部内外面共横ナデ調整。坏底部内外面共、摩滅して不明。	(胎土) きめ細かで砂含まず。 (焼成) 普 通 (色調) 橙褐色	A－1 SD2 2層
22	高坏	脚径15.2	脚部[ハ]字状に下方に開き、先端部でやや屈曲する。端部は丸く収める。外上方に大きく開く坏底部をもち、接合の際に脚部内面より粘土を補充してある。	内外面共、摩滅が激しい。	(胎土) きめ細か (焼成) 良 好 (色調) 淡橙灰色	A－1 SD2 3層
23	器台	口径 7.6	受け部は内弯気味に外上方に開いて稜を成して立ち上がる。端部は丸く収める。	端部内外面共ナデ成形外面はヘラ磨き。	(胎土) 砂含まず、きめ細か。 (焼成) 良 好 (色調) 淡橙灰色	
24	器台	口径 8.0	直線的に外上方に伸びる受け部である。	内外面共、摩滅が激しく調整不明。	(胎土)砂粒多く含む。 (焼成) 不 良 (色調) 淡灰褐色	A－1 SD2 2層
25		口径 9.2	やや内反気味に立ち上がる受け部に [ハ] 字状に外下方に伸びる脚部がつく、脚部に焼成	坏部内面に丁寧なヘラ磨きで外部はナデ成形脚部外面ヘラ磨き。内面下半部ハケ成形で上	(胎土) 石英粒を若干含むが緻密。 (焼成) 良 好 (色調) 淡灰褐色	

			前穿孔を三方に施す。	半部は絞り目がのこる。	受け部内面黒色	
26	甑	底径 4.6	平底の底部に焼成前穿孔をもつ。	底部外面ハケ調整	(胎土) 1～2㎜の石英粒を含む。 (焼成) 普 通 (色調) 淡赤褐色	A－1 SD2 肩部
27	埦 (黒色土器)	口径10.6 器高 4.1	体部は内弯して端部を丸く収める。口縁内部に沈線。断面逆台形の高台、底部外面に[×]をヘラで刻む。	口縁外部は横ナデ成形の後、横方向ヘラ磨き端部外面指押えの後、ヘラ磨き。内面はヘラ磨き。端部に沈線をめぐらす。 高台は貼り付ける。	(胎土)極めて微細な粒子より成る。 (焼成) 良 好 (色調) 内外とも黒褐色。	A－1 SD2 1層
28		口径15.6	緩やかに内弯する体部で端部は丸く収める。	外面は端部に横ナデ成形の後、横方向のヘラ成形。外面は指圧の後ヘラ成形。内面に格子状のヘラ磨き。端部内面に沈線一条。	(胎土) 1×1㎜までの砂粒をまばらに含む。 (焼成) 良 好 (色調)胎土は淡白褐色内面は暗黒灰色。	
29	鍋 (土師器)	口径24.3	[く] 字状の口縁をもち端部内側に肥厚する	口縁部内面横ナデ成形で体部内面は未調整。外面はヘラ削り。	(胎土)微細な砂粒より成る。 (焼成) 良 好 (色調)内面と口縁外面のみ黒灰色。体部外面は暗褐茶色。	
30	坏 (須恵器)	口径14.8 器高 2.7	極端に低い断面逆台形の高台をもつ。口縁やや外弯して端部は丸く収める。	内外面共、ナデ成形、底部外面は貼付の後ナデ成形。	(胎土)石英･長石粒含むむ。 (焼成) 普 通 (色調) 淡灰色	
31	埦 (縁釉)	口径14.5	やや外反した端部をもつ。	内外面共、ナデ成形の後、施釉。	(胎土)きめ細かで砂含まず。 (焼成) 普 通 (色調) 胎土は淡赤褐色。釉は暗緑黄色。	
32			高台部のみ、二段の高台。	貼付高台	(胎土) きめ細か。 (焼成) 普 通 (色調) 胎土は淡灰褐色。釉は暗緑黄色。	
33	碗 (白磁)	口径16.0		内外面共施釉		
34	碗 (青磁)	高台径 5.2	削り出しの高台をもつ	体部内外面共、施釉。ヘラ削り。	(胎土) 灰白色 (焼成) 良 好 (色調)釉・淡青灰色	
35	小型壺	最大腹径 6.3	「手づくね」土器である。	未調整	(胎土) 砂粒含む。 (焼成) 普 通 (色調) 淡赤褐色	A－6 12号住居 埋土
36	小型壺	口径 6.2 底径 2.7 最大腹径 8.4	やや平底気味の底部をもち最大腹径がほぼ中位にある。扁球形の体	口縁部内外面共、横方向のナデで体部外面上半は丁寧なナデ。下半	(胎土)やや荒く1㎜内外の石英粒を含む。 (焼成) 普 通	A－6 12号住居 床面

		器高 8.5	部に直線的に外上方へ伸びる口縁をもつ。	は叩き、体部内面はナデで底部近くはハケ状工具による横方向調成	(色調) 橙褐色	
37	壺	口径11.5 最大腹径14.2 器高14.7	丸底で最大腹径が中位にある横ぶくれの球形の体部に直線的に外上方へ伸びる口縁部をもつ、端部は丸く収める。	口縁部内外面共、横ナデ・体部外面は目の細いハケ成形。	(胎土) きめ細かで砂含まず。 (焼成) 良 好 (色調) 淡橙褐色	
38	甕	口径10.3 最大腹径12.4	球形の体部に外上方へつまみ出された短い口縁をもつ。	口縁外部横ナデ、体部は縦・横の粗いハケ成形。	(胎土) 砂粒含む。 (焼成) 良 好 (色調) 赤褐色ないし灰褐色。	
39		口径15.8 最大腹径23.2 器高26.4	[く] 字状口縁を呈しやや外弯気味に立ち上がる。先端部は外側に内傾する面をもつ。体部は縦長の球形で丸底を呈す。	口縁部内外面は横ナデ成形、体部外面は縦方向のハケ成形、体部内面は粘土紐を巻き上げ後指ナデ。	外面スス付着 (胎土)きめ細かで砂粒をほとんど含まない (焼成) 良 好 (色調)内面は白褐色、外面は淡橙褐色	
40		口径14.8 最大腹径25.0 器高28.7	[く]字状口縁でやや外弯気味に外上方へ伸びる。端部は丸く収める。体部は縦長の球形で丸底を呈す。	口縁部内外面共、横ナデ成形、体部内面はナデ成形で粘土紐の継ぎ目がのこる、外面ハケ成形。	(胎土)2～3㎜の石英長石を含む。 (焼成) 良 好 (色調)暗赤褐色、胴体半分に火を受ける。	
41	高坏	口径17.7	坏底部外側に水平に開き甘い稜を成して外上方に伸びる。端部は丸く収める。	坏部内面ハケ成形の後横ナデ成形、坏部底部は未調整。	(胎土)砂粒少なくきめ細かい。 (焼成) 普 通 (色調) 淡橙白色	A－6 12号住居 カマド
42		口径20.8 脚径13.8 器高14.6	坏底部と口縁部の境に稜を成してやや外反気味に外上方に伸びる。端部は外側につまみ出され窪んだ面をなす。脚部は [ハ] 字状で屈曲して裾部にいたる。	坏部内面はナデ成形、外面はハケ成形の後軽いナデ成形、接合部及び脚部内面ヘラ削り、脚部外面裾部内外面共ナデ成形。	(胎土)石英粒含むが、緻密。 (焼成) 良 好 (色調) 淡白褐色	A－6 12号住居 床面
43	甑	口径21.5 器高20.2	平底の底部に大小の不規則な穿孔をもつ。断面円形の取手をほぼ中位につける。	端部ナデ成形、取手はハケ状工具使用、粘土紐の巻き上げ痕が残る。	(胎土)石英雲母粒含む (焼成) 普 通 (色調) 赤褐色	A－6 12号住居 カマド
44	甕 (須恵器)	口径 8.8 最大腹径10.6 器高11.1	扁球した体部で頸部より外弯気味に立ち上がり一旦稜を成し内弯した口縁をもつ。端部丸く収める。体部中位上方に穿孔し胴部及び底部にヘラ記号が見られる。	外面ロクロナデ 体部はヘラ状工具をあててなでる。	(胎土)きめ細か、茶灰色 (焼成) 良 好 (色調) 暗茶灰色	A－6 SR1 3層
45	壺 (須恵器)	口径18.0	頸部は外弯気味に立ち上がり一旦稜を成して端部にいたる。口縁頸	内外面共ロクロナデ。	(胎土)砂をほとんど含まず緻密。 (焼成) 不 良	A－2 SR1 2層

			部に4条の波状文をめぐらす。		(色調) 淡赤灰色	
46	小型壺	口径 9.2 最大腹径 9.5 器高 7.7	最大腹径は中位より上方にあり、扁球の体部にやや外弯した口縁をもつ。	外面ハケ成形 口縁内面は縦の指ナデ成形、体部内面ヘラ削り。	(胎土) 1×1㎜までの砂粒を均一に含み、精製されている。 (焼成) 良 好 (色調) 淡白褐色	A－2 SR1 1層
47		口径10.6 器高 6.4	中位上方で張りのある体部にやや内弯気味に開く口縁をもつ。	口縁外部ナデ成形、内面ハケ成形の後、ナデ成形。体部外面ハケ成形で内面は未調整。	(胎土) 1～3㎜の砂粒を含み、きめが粗い。 (焼成)不良、表面摩滅。 (色調) 淡灰褐色	A－2 SR1 2層
48		口径10.4 器高 6.7	小さな半球形の体部に大きく直線的に開く口縁部をもつ。	口縁外部ナデ成形、内面ハケ成形の後、ナデ成形。体部外面ハケ成形で内面は未調整。	(胎土) 3×3㎜までの砂粒を均一に含む。石英・長石を含む。 (焼成) 良 好 (色調) 淡橙褐色	A－2 SR1 3層
49		最大腹径11.2	最大腹径は中位よりやや上方にあり扁球の体部をもつ。	外面は摩滅、内面未調整。	(胎土) 3×3㎜までの砂粒を多量に含み粗い。 (焼成) やや甘い (色調) 淡橙褐色	A－2 SR1 2層
50	壺	口径15.7	直立した頸部が水平に外半し、外側に稜を成して直立する口縁をもつ。	口縁内部はナデ成形、口縁外部指ナデ成形、施文は口縁部に3列の竹管文。頸部 貼付突帯上にきざみ目を施す。	(胎土) 2～3㎜までの石英砂を含む。 (焼成) 良 好 (色調) 赤褐色	A－2 SR1 3層
51	甕	口径11.8	外弯した口縁で端部は外下方に肥厚する。	口縁外部ナデ成形。端部内面は横方向のハケ後ナデ成形。肩部はハケ成形。	(胎土) 砂含まず、きめ細か。 (焼成) 良 好 (色調) 淡赤褐色	A－6 SR1
52	壺	口径21.3	直立気味の頸部から外反し、一旦稜を成し、そこからさらに外反して口縁にいたる。端部下方に肥厚がみられ凹状の面をもつ。	内面横方向のヘラ磨き外面は頸部がナデ成形で口縁部に乱雑な波状文を施す。	(胎土) 2～3㎜の石英雲母粒含む、粘土は緻密。 (焼成) 良 好 (色調) 淡白褐色	A－2 SR1 3層
53	壺	口径11.2	受口状口縁で胴部は球形と思われる。[コ]字状の頸部から口縁部が直立する。先端部内面に凹状の面をもつ。	口縁内外面共、横ナデ成形。体部内外面共ハケ成形。肩部内面に指頭圧痕。	(胎土) 3×3㎜までの砂粒を均一に含む。 (焼成) 良 好 (色調) 淡橙褐色	A－2 SR1 2層
54		口径13.0 最大腹径25.0 器高28.7 底径 5.5	体部はほぼ球形で上げ底の底部を呈す。口縁はやや外弯して立ち上がる。端部丸く収める。	内面摩滅が著しく不明外面は口縁部横ナデ成形で体部ハケ成形。	(胎土) 3×3㎜までの砂粒を均一に含む。 (焼成) 良 好 (色調)内面淡白橙色、外面淡赤褐色	
55	壺	口径21.8	頸部から外弯し一旦鋭い稜を成して直立する	口縁部内外面共ナデ成形、体部の外面ハケ成	(胎土)砂粒均一に多く含む。砂分多い。	A－4 SR1

			口縁をもつ。先端部に凹状の水平面をもつ。	形で内面は削り。	(焼成) 良 好 (色調) 橙褐色	2層
56		最大腹径12.2	わずかに平底気味で外上方に強く張り出し最大腹径は体部中位より下方にある。頸部はやや外弯しつつ直立する。	頸部内面横ナデ成形、体部内面は指ナデ成形外部はヘラ磨きであるが腹部最大径は横方向のヘラナデ成形。	(胎土) 微細な砂粒を均一に含む。 (焼成) 良 好 (色調) 白褐色	A－2 SR1 3層
57	甕	口径12.0 最大腹径15.3	体部球形。頸部[コ]字状を呈し、顎をつくり直立する。先端部外側につまみ出され凹状の端面をもつ。	口縁内外面共横ナデ成形、体部外面ハケ成形で内面は不明、頸部外面にハケ原体による平行線。	(胎土) 2×2㎜までの砂粒を均一に含み、精良。 (焼成) 良 好 (色調) 白褐色	A－2 SR1 2層
58		口径13.2 最大腹径17.6	球形の胴部でやや内弯気味に開いた口縁をもち先端は内側に肥厚する。体部下位に穿孔が一ケ所みられる。	内面は口縁部ハケ成形で肩部と底部近くに指押え体部ヘラ削り、外面は口縁部ハケ成形の後、横ナデ成形。肩部に細い原体によるハケ成形で体部は叩き後ハケ成形。	胴部穿孔 (胎土) 2×2までの砂粒を均一に含み良い胎土である。石英・長石を含む。 (焼成) 良 好 (色調) 淡白褐色	A－6 SR1 3層
59		口径15.2	[く] 字状でやや内弯気味の口縁をもつ。	口縁内外面共ナデ成形体部外面はハケ成形であろうが内外面共摩滅が激しい。	(胎土) 1㎜の砂粒多く含む。 (焼成) 不 良 (色調) 淡褐灰色	A－2 SR1 1層
60		口径16.1	頸部 [く] 字形に屈曲し、外面に顎をつくり外反気味に立ち上がる受口状口縁先端を外側へつまみ出す。	口縁部内外面共ナデ成形、口縁外部に一部ススト付着、体部はハケ調整の後2条のクシ描きの沈線を格子状に施す。	(胎土) 石英・長石粒含む。 (焼成) 普 通 (色調) 淡赤褐色	
61		口径16.4	頸部から鋭く [く] 字状に外反し顎をつくり外上方に伸び端部にいたる。端部丸く収める。	口縁内外面共横ナデ成形、肩部外面に10条の平行沈線と腹部にかけてハケ成形。体部内面ヘラ削り。	(胎土) 3×3㎜までの砂粒を均一に含み精良な土。 (焼成) 良 好 (色調) 淡白茶色	A－2 SR1
62	甑	口径16.0 器高 9.8	丸底の底部に焼成前穿孔。外上方に内弯気味に立ち上がり端部にいたる。端部丸く収める。	内外面共ハケ成形であるが外面下半は摩滅して不明。	(胎土) 砂含まずやや砂質。 (焼成) 普 通 (色調) 淡橙褐色	A－2 SR1 2層
63	高坏	脚径 8.8	中実の脚柱部から[ハ]字状に開く裾部をもつ焼成前穿孔を四方に施す。	摩滅	(胎土) 砂粒多く含む (焼成) 不 良 (色調) 淡橙灰色	A－2 SR1
64		脚径10.8	中空の脚柱部は外下方に伸びた裾部をもつ。端部丸く収める。	裾部内外面共横ナデ成形、脚中部内面ヘラ削り。	(胎土) 微細な粒子より成る。 (焼成) 良 好 (色調) 淡橙褐色	A－2 SR1 2層
65		脚径10.0	[ハ] 字状に開いた脚部で先端に凹状の端面	脚部外面上部ナデ成形下部及び内面下半ハケ	(胎土) 砂多く含む。砂っぽい。	A－2 SR1

			をもつ。	成形。脚部内面絞り目のこる。	(焼成) 普 通 (色調) 淡白褐色	1層
66	器台	口径 8	受部と脚部の境は中位より上方にありそこより上方に開く。受部先端上方に肥厚する。	摩滅	(胎土) 砂多く含む (焼成) 不 良 (色調) 茶褐色から黒茶色	A－2 SR1 2層
67		口径15.2	受部は直線的に外上方に伸び端部に平坦面をもつ。脚部は［ハ］字状に伸びる。焼成前穿孔が3方。	受部内外面共ナデ成形の後軽いヘラ磨き。脚部は縦方向のヘラ磨き	(胎土) 非常に緻密できめ細か。 (焼成) 良 好 (色調) 淡白褐色	
68		口径15.8 脚径14.6 器高10.6	受部と脚部の境がほぼ中位にある。受部は外弯気味に開き端部上下わずかに肥厚させる。脚部は外弯気味に開き焼成前穿孔を5方に施す。	内面上部ヘラ磨きで下部はナデ成形、外面はナデ成形であり、特に上部は丁寧になされている。くびれ部に一部ヘラ磨き。	(胎土)砂粒を均一に含むがきめ細か。 (焼成) 良 好 (色調) 淡赤白色	A－2 SR1 3層
69	小鉢	口径11.5 底径 4.8 器高 6.1	やや上げ底気味の底部よりやや内弯気味に立ち上がる。口縁端部はやや鋭い。	外面ハケ成形、内面指ナデ成形。	(胎土) やや粗い (焼成) やや甘い (色調) 淡赤褐色	A－2 SR1 2層
70	鉢	口径18.0 最大腹径18.6	受口状口縁。頸部より外上方に開き顎を作ってやや外傾気味に立ち上がる。先端は外上方につまみ出され内傾する面をもつ。	口縁内外面共横ナデ成形、頸部は8条の沈線肩部にハケ成形の際列点を施し、ハケ目をつくる。及び円弧文。	(胎土) きめ細か (焼成) 普 通 (色調) 淡白褐色	A－2 SR1 3層
71		口径24.8	扁球化した体部は内弯気味に開く口縁をもつ。	口縁部内外面共横ナデ成形、外面体部に一部ハケ成形。	(胎土) 2～3㎜の砂粒を多量に含む。 (焼成) 普 通 (色調) 淡白褐色 外面一部スス付着。	A－4 SR1 3層
72	小型壺	口径 4.4 器高 3.5		内外面共指頭圧痕、手づくね。	(胎土) 粗 い (焼成) 良好 (色調) 白橙色	A－2 SR1 3層
73		口径 5.2 最大腹径 6.7 器高 5.2		内外面共、指頭圧痕、手づくね。	(胎土) 精良 (焼成) 良好 (色調) 赤褐色	A－2 SR1 2層
74	(手あぶり)					
75	小型壺	最大腹径 9.3	扁球化した胴部をもつ底部厚く全体のつくりは粗雑。	外面は指押え。 内面は指ナデ。	(胎土) 精良 (焼成) 良好 (色調) 橙白色	A－8 20号住居 床面
76		最大腹径 8.4	球形の体部をもつ。	内外面共、指頭圧痕。	(胎土) 精良 (焼成) 良好 (色調) 淡橙褐色	
77	鉢	口径11.0 底径 2.8 器高 6.5	やや開いた半球形の体部に短く外反する口縁を持つ。	口縁は外面ナデ成形で内面ハケ成形。体部内外面共不明。	(胎土)細砂（長石）を均一に含む。 (焼成) 良好	A－8 23号住居 床面

					(色調) 淡赤褐色	
78	壺	口径17.0	頸部は内面で甘い稜を成し外上方に伸びる口縁をもつ。先端部外側にわずかに屈曲する。	内外面共、摩滅著しいが外面はハケ成形と思われる。	(胎土) 粗い (焼成) やや甘い (色調) 白橙色	A－8 20号住居 床面
79	壺	口径13.2	頸部より外反し外上方に伸び外面に丸味のある顎をつくり内傾して立ち上がる。端部は外上方につまみ出される。	口縁端部内外面共ナデ成形。口縁部から頸部にかけてハケ成形の後列点、体部外面ハケ成形。内面指ナデ成形。施文は頸部に4条の沈線、口縁端部外面に3列の棒状浮文及びきざみ目を施す。	(胎土) 砂っぽい (焼成) 普通 (色調) 淡灰茶色	A－6 SR1 3層
80		口径17.8	頸部よりやや厚目に直立し内面に稜を成して大きく外反する口縁で端部は厚く垂下する。体部の器壁は比較的薄い。	内面は口縁ヘラ磨きで体部指ナデ。外面は口縁横ナデ成形で体部ヘラ磨き。口縁端部にハケ状工具による平行線と2本・3本と交互に施される棒状浮文。頸部に突帯をはりつけて刻み目を施す。肩部にかけて刻み目及び平行線を施す。	(胎土)3×3㎜までの砂粒を均一に含み、精良。 (焼成) 極めて良好 (色調) 内外面共、淡橙褐色。	A－8 17号住居 床面
81		最大腹径16.4	やや上げ底気味の底部より大きく外上方に開き、最大腹径部より大きく内傾する。	外面ヘラ磨き。内面未調整。	(胎土)細砂を均一に含む。 (焼成) 良好 (色調) 白橙色。	A－8 20号住居 床面
82	甕		[く] 字状口縁を呈しやや外弯する。	内外面摩滅激しく詳細不明。		A－8 19号住居 床面
83	高坏	口径11.0	底部と口縁部の境に甘い稜を成す。端部丸く収める。	摩滅。	(胎土)3×3㎜までの砂粒(石英・長石)を含みやや粗い。 (焼成) やや甘い (色調) 淡橙褐色	A－8 22号住居 埋土
84		口径22.1	坏底部はほぼ水平に開き外面に稜をつくり外反気味に立ち上がる。端部丸く収める。	摩滅。	(胎土) きめ細か (焼成) 不良 (色調) 淡赤白色	A－8 14号住居 床面
85			[ハ]状に開く脚柱部から外反する裾部をもつ。	摩滅。		
86		脚径 9.4	脚部 [ハ] 字状に開き先端部丸く収める。	摩滅。	(胎土) 石英・長石粒含む。 (焼成) 不良 (色調) 淡茶褐色	A－8 19号住居 埋土
87	壺	口径16.7	外弯気味に外上方に開いた口縁は先端で外側に水平に開く。端部は上下に肥厚し、平坦面	口縁端部内外面共ナデ成形。頸部は外面ハケ成形で内面は摩滅。端部と頸部に沈線。	(胎土)1㎜の石英・長石粒を均一に含む。 (焼成) 普通 (色調) 淡橙褐色	A－8 SX2

			をなす。			
88	甕	最大腹径11.8	平底気味の底部で球形の体部をもつ。	外面はハケ成形されているが摩滅が激しい。体部内面は指ナデ成形底部内面ハケ成形。	(胎土) 極めて粗い (焼成) 良好 (色調) 暗白褐色	
89		口径12.0 最大腹径14.4 器高14.2 底径 4.0	最大腹径が中位よりやや上方にあり平底を呈す。頸部より外上方に開いた口縁は緩い稜をなして直立する。先端部を外上方につまみあげ窪んだ面をつくる。	口縁部内外面共横ナデ成形。体部外面はハケ成形であるが摩滅が著しい。内面ヘラ状工具でカキ上げる。頸部内面ハケ成形。肩部内面に押え。底部近くは縦方向のハケ成形。	(胎土) 2×2㎜までの砂粒を均一に含み精製されている。 (焼成) 良好 (色調) 淡白褐色	
90	高坏	脚径13.8	中空の脚柱部はゆったりと外下方に開き穿孔部より外反して外下方に開く。端部は上方につまみ出され平坦面をなす。焼成前4方の穿孔。	脚部外面縦方向ヘラ磨き、裾端部外面及び裾部内面ナデ成形、内面ハケ目脚柱部内面に絞り目残る。	(胎土) きめ細かで砂含まず。 (焼成) 良好 (色調) 淡赤褐色	
91		脚径14.6	中空の脚柱部上方に焼成前穿孔3方を施し、やや内弯気味の裾部をもつ。端部丸く収める。	脚部外面ヘラ磨き、内面ハケ成形。	(胎土) 1×1㎜までの砂粒を均一に含み精製されている。 (焼成) 良好 (色調) 淡灰褐色	
92	器台	口径 9.4 器高 7.5 脚径11.4	受部と脚部の境が細かく中位より上にある。受部はやや内弯気味に開き脚部は外反気味に開く。先端部は受部で外傾した平坦面をもち脚部では丸く収める。脚部に焼成前穿孔3方。	内面は口縁部に放射状の磨きで脚部は摩滅して詳細は不明。外面は脚部にヘラ磨きで口縁部外面は摩滅して詳細不明。	(胎土) 砂含まずきめ細か。 (焼成) 普通 (色調) 淡赤褐色	
93	取手					
94						
95	蓋 (須恵器)	口径12.6 器高 5.1	天井部は丸味をおびてふくらむ。天井部と体部をわける稜線は短く甘い。	ヘラ削りは天井部上半に施す。	(胎土) 2×2㎜までの砂粒をまばらに含みやや粗い。 (焼成) 良好 (色調) 白灰色	B－1 37号住居 埋土
96	坏 (須恵器)	口径 9.5 器高 4.8	立ち上がりは一旦内傾して甘い稜を成して直立気味に立ち上がる。底部は丸味をおびる。	底部ヘラ削り。	(胎土) 1×1㎜までの細砂をまばらに含み良好である。 (焼成) 普通 (色調) 暗灰色	
97	高坏 (須恵器)	口径14.4	外反する口縁に波状文をめぐらす。		(胎土) きめ細か (焼成) 不良 (色調) 灰色	B－1 38号住居 埋土

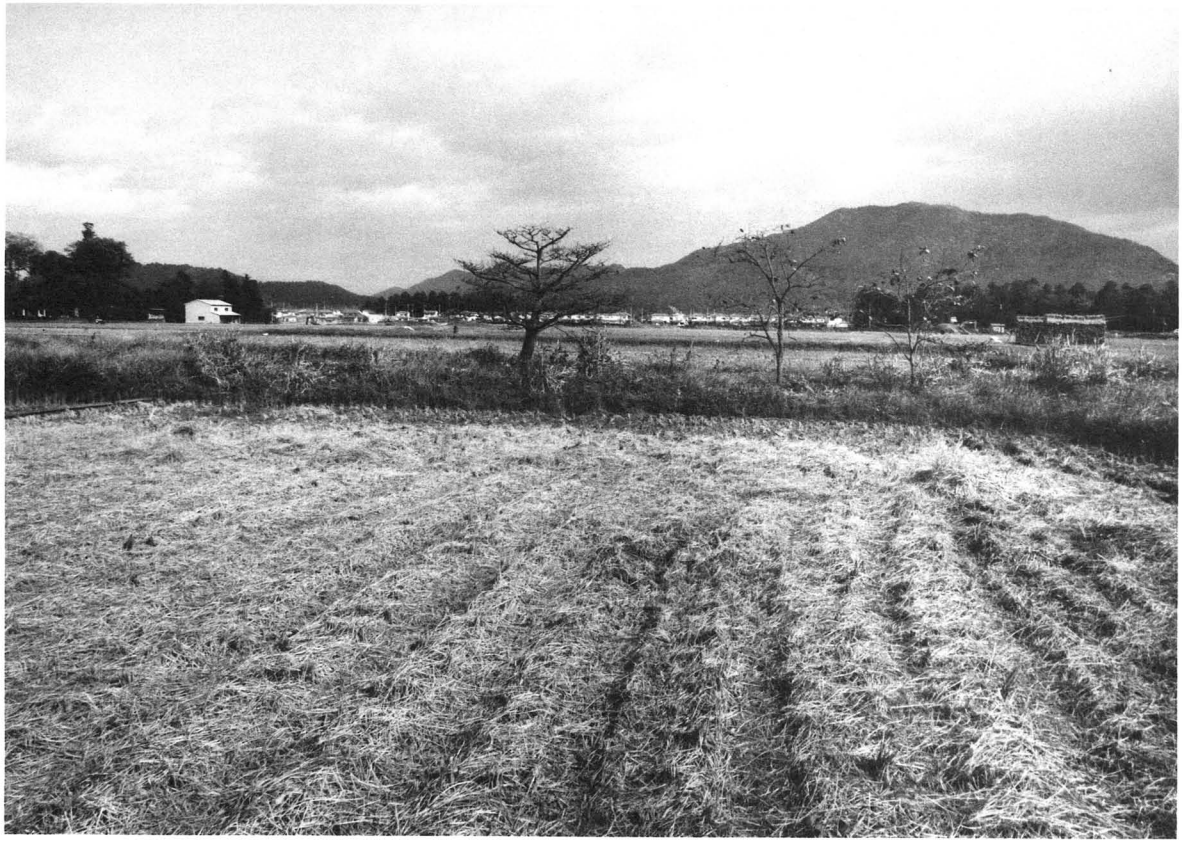
98	小型壺	口径 8.4	張りをもつ球形の体部に外上方に直線的にのびる口縁をもつ。端部丸く収める。	口縁内外面及び肩部外面ナデ成形、下腹部外面未調整。	(胎土) 1㎜の砂粒を含む。 (焼成) 良好 (色調) 赤褐色	B－1 39号住居 埋土
99		口径 7.7	縦長の球形の体部にやや径の大きい頸部から短く外上方につまみ出された口縁をもつ。	口縁外面横ナデ成形、体部外面未調整。内面は指ナデ。	(胎土) 2×2㎜までの砂粒をまばらに含む精良な胎土。 (焼成) 良好 (色調) 淡橙褐色	B－1 39号住居 土拡
100	甕	口径13.1 最大腹径15.7	球形の体部で［く］字状の口縁をもつ、全体的に器壁は厚い。	内面ヘラ削り、外面ハケ成形の後、口縁部横ナデ成形。	(胎土) 3×3㎜までの砂粒を含み、やや粗い。 (焼成) 良好 (色調) 白褐色	B－1 33号住居 土拡
101		口径13.5 器高13.7 最大腹径14.4	ほぼ球形の体部で、やや外反した口縁をもつ。端部丸く収める。	体部外面ハケ成形。口縁外面横ナデ成形で内面はハケ成形。内面上半はヘラ状工具によるカキ上げ。下半部は指ナデ。底部内面は未調整	(胎土) 5×5㎜までの砂粒(長石・石英)を多量に含みやや粗い。 (焼成) やや甘い (色調) 白褐色	B－1 37号住居 床面
102		口径13.9	［く］字状にやや外反する口縁で、端部は丸く収める。	内面ハケ成形。外面は口縁部ナデ成形で、体部はハケ成形。	(胎土) 緻密 (焼成) 良好 (色調) 淡白褐色	B－1 43号住居 床面
103	壺	口径14.6	頸部より直立し、大きく外反する口縁をもつ。端部は厚く、垂下する。	口縁内面は横方向のヘラ磨き。口縁外面の端部は横ナデ成形で、頸部はハケ成形。施文は口縁部に4条の沈線と円形浮文。	(胎土)きめ細かで石英・長石の小粒を含む。 (焼成) 普通 (色調) 橙褐色	B－1 47号住居 床面
104		口径12.3 最大腹径15.0 底径 5.6 器高23.6	底部平底で最大径が胴部下半にあり「パイナップル型」を呈す。口縁はやや外反気味に立ち上がり、先端部に平坦面をもつ。	外面ハケ成形。口縁部内面未調整。体部内面ハケ成形。粘土は底部より巻き上げられて輪づみ痕が残る。	(胎土) 2×2㎜までの砂粒を均一に含み、精良。 (焼成) 良好 (色調) 橙白色	B－1 34号住居 床面
105	甕	口径14.8	球形の体部に［く］字状口縁をもつ。口縁やや外弯し、先端部を外上方につまみ出す。端部丸く収める。	外面ハケ成形の後、口縁部に横ナデ成形。口縁内面ヘラ削り。	(胎土) 3×3㎜までの砂粒を均一に含む。 (焼成) 良好 (色調) 白褐色	B－1 33号住居 土坑
106		口径16.4	頸部は鋭く屈曲し、口縁はやや内弯しながら開き、先端部は内側に大きく肥厚し、平坦面をつくる。	口縁部内外面共、横ナデ成形。肩部外面は細い原体による横方向のハケ成形。肩部内面は粘土紐巻き上げの後、下から上へ指ナデ成形。	(胎土) 2×2㎜までの砂粒(長石・石英砂)を均一に含み精良。 (焼成) 良好 (色調) 褐橙色	B－1 35号住居 埋土
107			台付甕(壺)の脚部と思われる。	内面下半及び外面横ナデ成形。	(胎土) 砂粒含み砂質。 (焼成) 良好 (色調) 淡灰褐色	B－1 37号住居 埋土

108	甑	口径20.6 器高 5.2	底部に径 4.3cmの焼成前穿孔を施す。底部より内弯気味に立ち上がり、中位より直線的に外上方に伸びる。端部丸く収める。	端部外面は軽い横ナデ成形で下半は「籠目」が残る。上半は未調整。内面下半はオサエとナデ成形。	(胎土) 砂含まずきめ細か。 (焼成) 良好 (色調)内面は淡赤褐色外面は淡黒色～淡赤褐色。	B－1 42号住居 床面
109	高坏	脚径10.2	ゆるやかに外反し、端部に至る。	脚部外面ヘラ削り。裾部内面ハケ成形後ナデ成形。	(胎土)石含まず。緻密。 (焼成) 普通 (色調) 淡橙褐色	B－1 37号住居 床面
110		脚径10.8	中空の脚柱部は直線的に下方に伸び、鋭く外下方に屈曲した裾部をもつ。端部丸く収める。	脚柱部は摩滅が激しい。裾部内外面共、横ナデ成形。脚柱部内面絞り目、残りヘラ削り。	(胎土)きめ細か。石含まず。 (焼成) 普通 (色調) 淡赤褐色	B－1 38号住居 土坑
111		脚径12.1	穿孔のない中空の脚柱部に裾部がゆるやかに外反して開く。端部丸く収める。	裾部内外面共、横ナデ成形。裾部外面に縦方向のハケ成形。内面は上部絞り目で、中部ヘラ削り。	(胎土)長石・石英多く含む。 (焼成) 普通 (色調) 淡灰茶色	B－1 39号住居 埋土
112		脚径11.3	中空の脚柱部は[ハ]字状に開き、裾部やや外反する。焼成前穿孔を三方に施す。	脚部内面未調整。外面ヘラ磨き。	(胎土)砂粒を多く含みやや粗い。 (焼成) 良好 (色調) 白褐色	B－1 30号住居 埋土
113		口径17.1	坏底部と受部の境に甘い稜をなし直線的に外上方に伸びる。端部丸く収める。	坏部内外面共、ナデ成形であるが摩滅が激しく詳細は不明である。	(胎土)石含まずきめ細か。 (焼成) 普通 (色調) 赤褐色	B－1 35号住居 土坑
114		口径15.0	坏部は内弯気味に外上方に立ち上がり、端部丸く収める。中空の脚柱部は中ぶくれ気味で屈曲した裾部をもつ。	坏部は内外面共にハケ成形が一部残る。及び内面上部と外面に横ナデ成形。脚部内面に縦方向の指ナデ成形。外面ナデ成形。	(胎土)砂含まずきめ細か。 (焼成) 普通 (色調) 暗橙褐色	B－1 42号住居 床面
115		口径14.0	坏部やや内弯気味に外上方に伸びて甘い稜をなし内弯気味に立ち上がる。端部は外方につまみ出され丸く収まる。脚柱部より屈曲し外方へ伸びる裾部が付く。	脚柱部内面に絞り目残る。摩滅が激しく調整不明。	(胎土)石をほとんど含まずきめ細か。 (焼成) 不良 (色調) 淡橙褐色	B－1 33号住居 焼土
116		脚径12.6	坏部は平坦な坏底部よりやや内弯気味に立ち上がる。脚部は外弯しつつ広がり、端部上面肥厚する。端部に凹状の面をもつ。	坏部外面ヘラ削り。脚部内外面共、丁寧なロクロナデ。坏部内面ナデ成形。ロクロの使用が認められる。	(胎土)きめ細かで、石ほとんど含まず。 (焼成)良好で硬質。 (色調) 赤褐色	B－1 37号住居 床面
117		口径22.4 脚径12.2 器高14.9	坏底部は直線的に外上方に伸び外面に甘い稜をなして外上方へ大きく外反する。中空の脚	口縁外部ハケ成形の後端部に横ナデ成形。坏部内面にハケ成形。外面はハケ成形の後、ナ	(胎土)3㎜大の石含むがきめ細か。 (焼成) 良好 (色調) 淡赤灰色	B－1 31号住居 床面

			柱部にゆるやかに外反する裾部をもつ。端部丸く収める。脚部外から内に焼成前穿孔三方	デ成形。脚部外面縦方向ヘラ磨き。内面下半にナデ成形。内面に絞り目痕が残る。		
118		脚径15.2	坏部は直線的に外上方に伸びる。中空の脚柱部は大きく[ハ]字状に開き、なめらかに外反する裾部をもつ。焼成前穿孔三方を施す。	脚部及び坏部外面ヘラ磨き。坏部内面、丁寧なヘラ磨き。脚部内面は丁寧な横ナデ成形及び絞り目痕がみられる。	(胎土)極めて精製されている。 (焼成) 極めて良好。 (色調) 淡橙褐色	
119	器台		受部は外弯気味に伸び脚部はゆるやかに外弯する。裾部との境に焼成前穿孔を施す。	裾部ハケ成形。脚部及び受部指ナデ成形。		B－1 30号住居 埋土
120	長頸壺	口径 8.4	直線的に伸び上がった頸部はやや外傾して口縁に至る。端部丸く収める。	内外面共縦方向のヘラ磨き。	(胎土)細砂を均一に含む。 (焼成) 良好 (色調) 白橙色	B－1 SX4
121	壺	口径12.8	［く］字状口縁を呈し、やや外反気味に上方に伸び、端部に至る。端部丸く収める。	口縁部内面横ナデ成形口縁部外面は縦方向のハケの後ナデ成形。頸部ナデ成形。肩部はハケ成形の後列点を施す。	(胎土) 1～2㎜の砂粒含む。 (焼成) 普通 (色調) 淡赤灰色	
122	甕	口径14.0	鋭く［く］字状に屈曲した頸部より外反し、外側に緩い稜をなして外上方に立ち上がる。端部丸く収める。器壁が比較的厚い。	口縁内外面共横ナデ成形。肩部ハケ成形。	(胎土) 1㎜大の石英粒を多く含む。 (焼成) 良好 (色調) 淡赤褐色	
123		口径14.4	頸部内面に甘い稜をなし外弯気味に短く外上方に伸びた口縁をもつ。	内面及び口縁外面横ナデ成形。体部外面ハケ成形。	(胎土) 精良 (焼成) 良好 (色調) 暗橙茶色	
124		口径17.0	屈曲した頸部が水平方向に外反し、顎をつくり、さらに外反しつつ立ち上がって受口状口縁をつくる。内側に内傾する端面をもつ。	口縁内外面共横ナデ成形。肩部に3条の沈線	(胎土)石英小粒を含む。 (焼成) 普通 (色調) 淡灰褐色	
125	壺	口径18.9	受口状口縁で先端部がわずかに外上方につまみ出され、窪んだ面をつくる。	口縁端部内外面共、横ナデ成形の後、外面に列点。	(胎土) 2×2㎜までの砂粒を多量に含みやや粗い。 (焼成) 普通 (色調) 白褐色	
126		口径13.4	頸部内面で稜をなし、外弯気味に外上方に開き顎をつくってやや内傾気味に立ち上がる。先端部を外上方につまみ出し、内傾する窪んだ面をもつ。	口縁内面及び端部外面ナデ成形。口縁端部に刻み目。頸部に列点及び4条以上の沈線。	(胎土)砂粒多く含み、砂っぽい。 (焼成) 良好 (色調) 淡橙褐色	

127	高坏	口径25.8	大きく外上方に開いた坏底部は一旦稜をなし外弯して立ち上がる。端部丸く収める。	口縁部内外面共、ナデ成形。坏底部内外面共ヘラ磨き。	(胎土)石粒含むがきめ細かい。 (焼成) 良好 (色調) 淡赤褐色	
128		脚径 9.0	坏部はやや内弯気味に外上方に伸び外側に稜をなし、内傾して立ち上がる。脚部は[ハ]字状に開き、先端部が外側につまみ出される。三方の焼成前穿孔を上下2段に施す。	脚部外面ヘラ磨き。裾端部外面及び裾部内面横ナデ成形。	(胎土) 緻密 (焼成) 良好 (色調) 赤褐色。坏部内面黒色	
129		脚径10.6	中空の脚柱部は緩やかな [ハ] 字状に開き裾部でわずかに外反する。焼成前四方の穿孔を施す。	脚部外面ヘラ磨き。裾部外面横ナデ成形。内面は指ナデで裾部のみハケ成形の後、横ナデ成形。	(胎土) 3×3㎜までの砂粒を均一に含み精製されている。 (焼成) 極めて良好。 (色調) 赤褐色	
130	器台	口径15.0 脚径12.0 器高11.8	受部と脚部の境は中位よりやや上方にある。受部はやや外弯気味に開き脚部は直線的に開く。端部は丸く収める。	内外面共ハケ成形されているが内面は軽くなされる。その後口縁部内外面共横ナデ成形。裾部にも一部横ナデ成形。	(胎土) 砂ほとんど含まず緻密。 (焼成) 良好 (色調) 暗赤褐色	
131	小型壺	口径 4.6 底径 2.9 器高 3.8		端部内外面共横ナデ成形。体部外面縦方向ハケ成形。内面底部ハケ成形。手づくね。	(胎土) 緻密。砂含まず。 (焼成) 良好 (色調) 淡赤褐色	
132	甕	口径14.4	頸部よりやや内弯気味に伸び、外側に緩い稜をなして直立する。	口縁内外面共ナデ成形体部は外面ハケ成形、内面は軽いナデ成形。口縁部に刻み目。肩部に竹管による列点。	(胎土) 石含むがきめ細かい。 (焼成) 良好 (色調) 淡橙褐色	
133	器台	脚径14.4	焼成前穿孔三方。[ハ]字状の脚柱部よりさらに外反する裾部をもつ。	脚部外面ナデ成形で、内面ハケ成形。	(胎土) 砂粒多く含む。砂質。 (焼成) 不良 (色調) 白褐色	
134	小型壺	口径 8.2 器高 8.4	ほぼ球形の体部で口縁は直線的に外上方に伸びる。	口縁内面及び口縁外部から肩部にかけて横ナデ成形。体部外面ハケ成形で内面は指ナデ成形。	(胎土) 砂粒含みやや砂質。 (焼成) 普通 (色調) 淡橙褐色	B－1 31号住居
135	高坏	脚径 9.2	脚柱部は[ハ]字状に開き裾部は短い屈曲する。脚柱部に五方の焼成前穿孔を施す。	脚柱部外面縦方向のハケ成形で内面指ナデ成形。裾部内外面共ナデ成形。	(胎土)砂含まずきめ細か。 (焼成) 良好 (色調) 赤褐色	B－1 SX4

図　　版

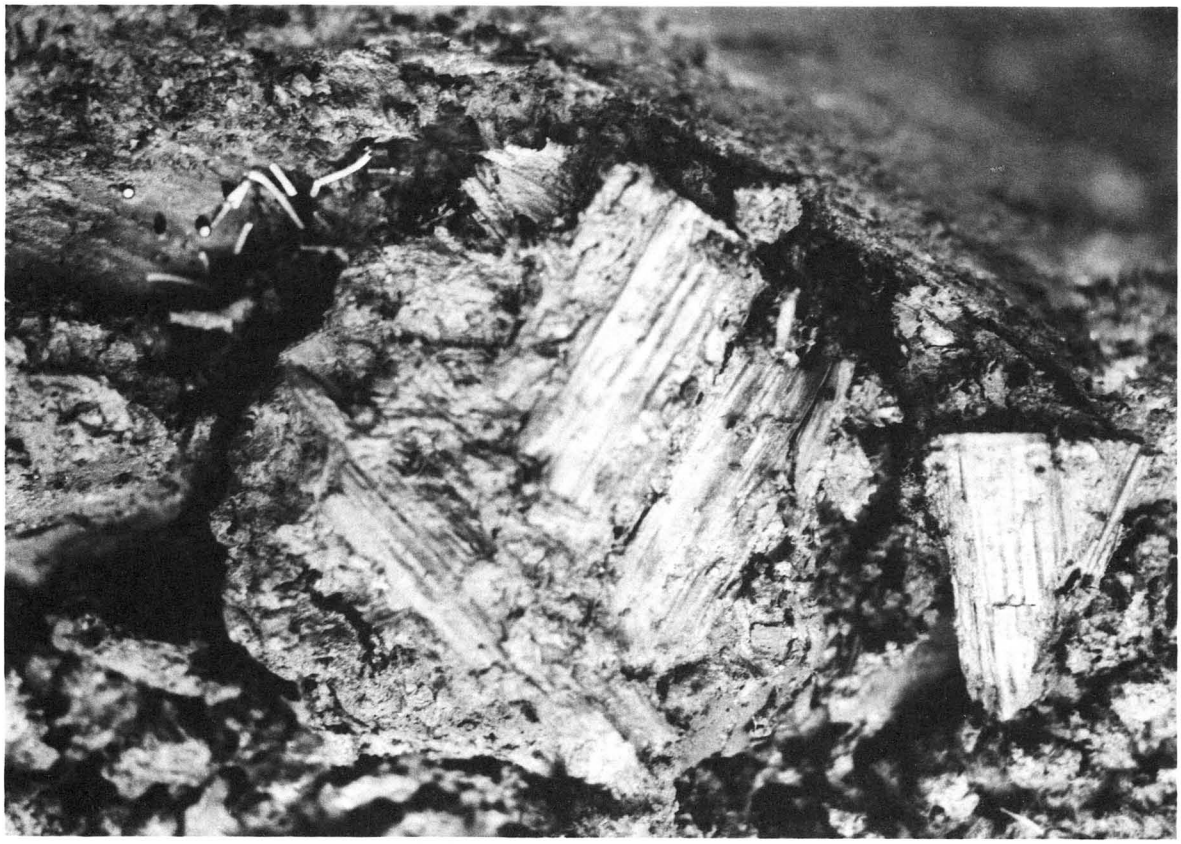


遺　跡　遠　景

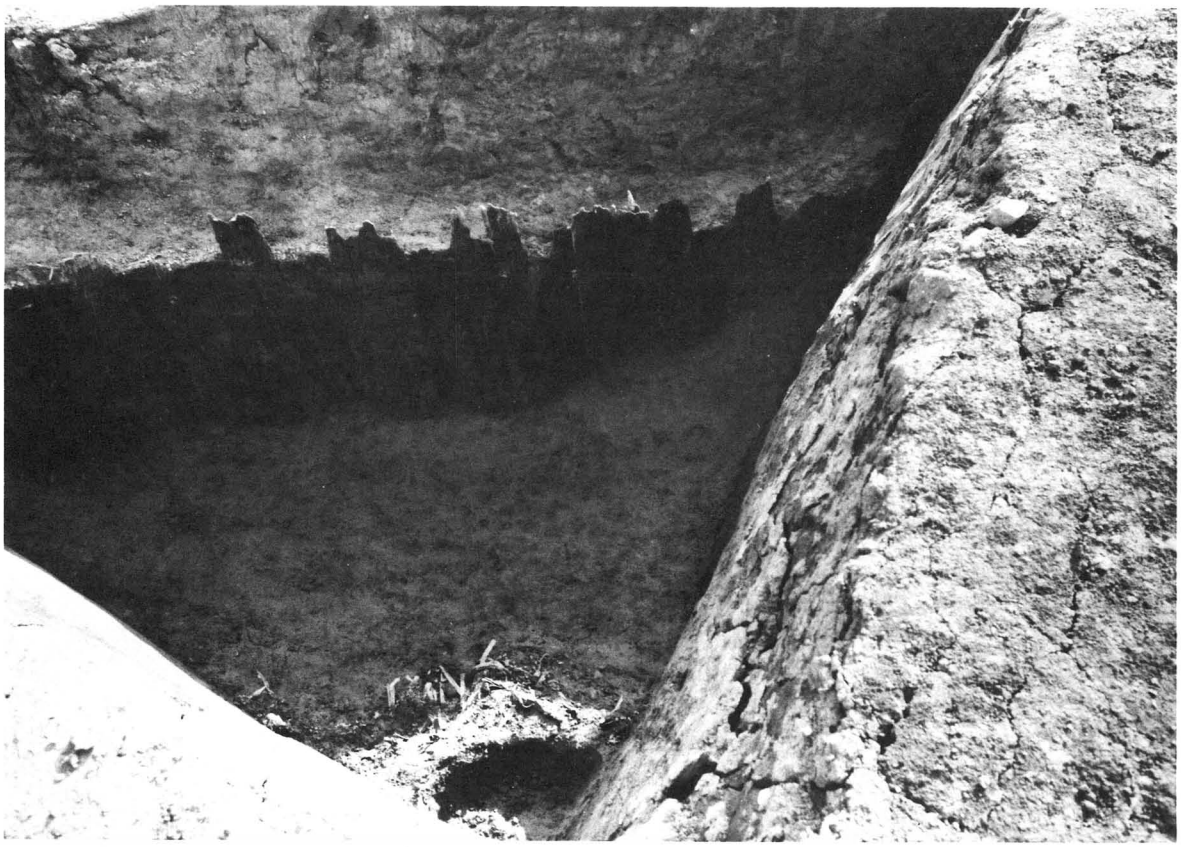
A区（西から）

B区（南から）

D区　全景（南から）



D区　ＳＰ１Ａセクション西壁こけら経出土状況



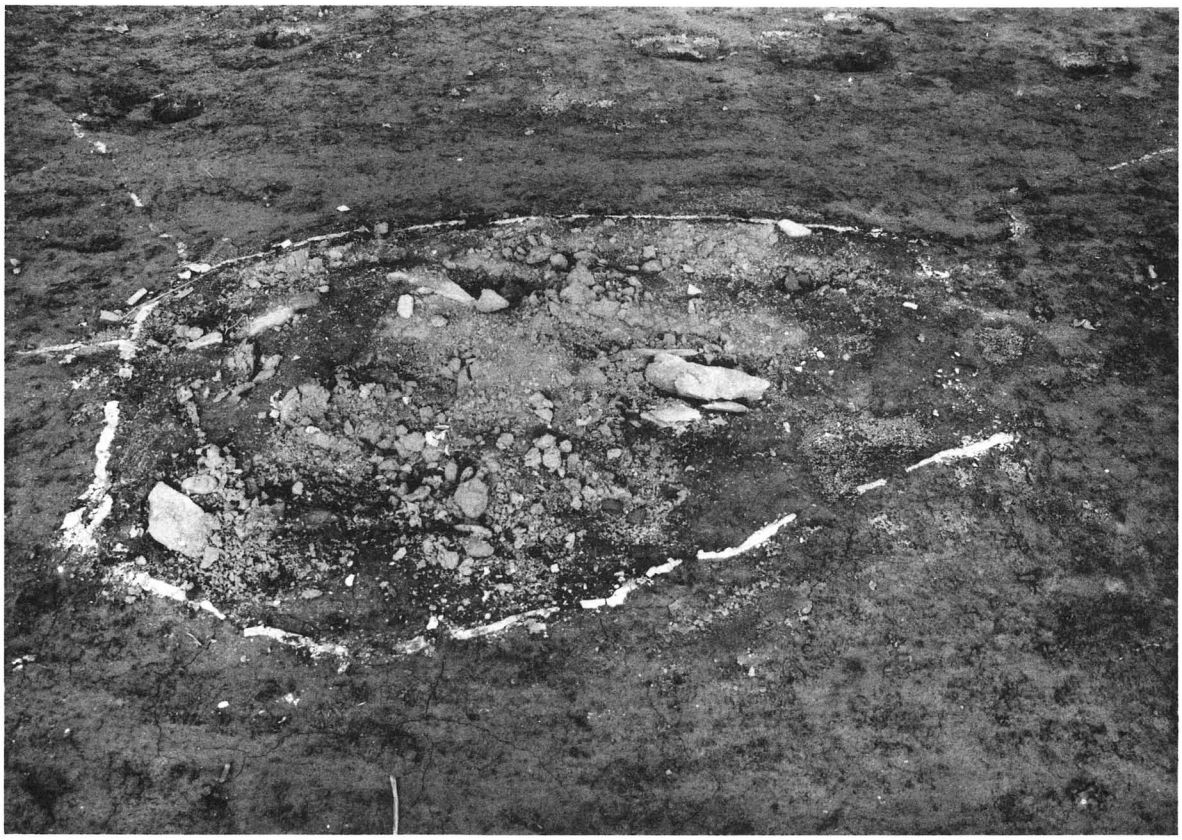
D区　ＳＰ１Ｅセクション西側板柵こけら経出土状況

D区　ＳＰ１五輪塔出土状況

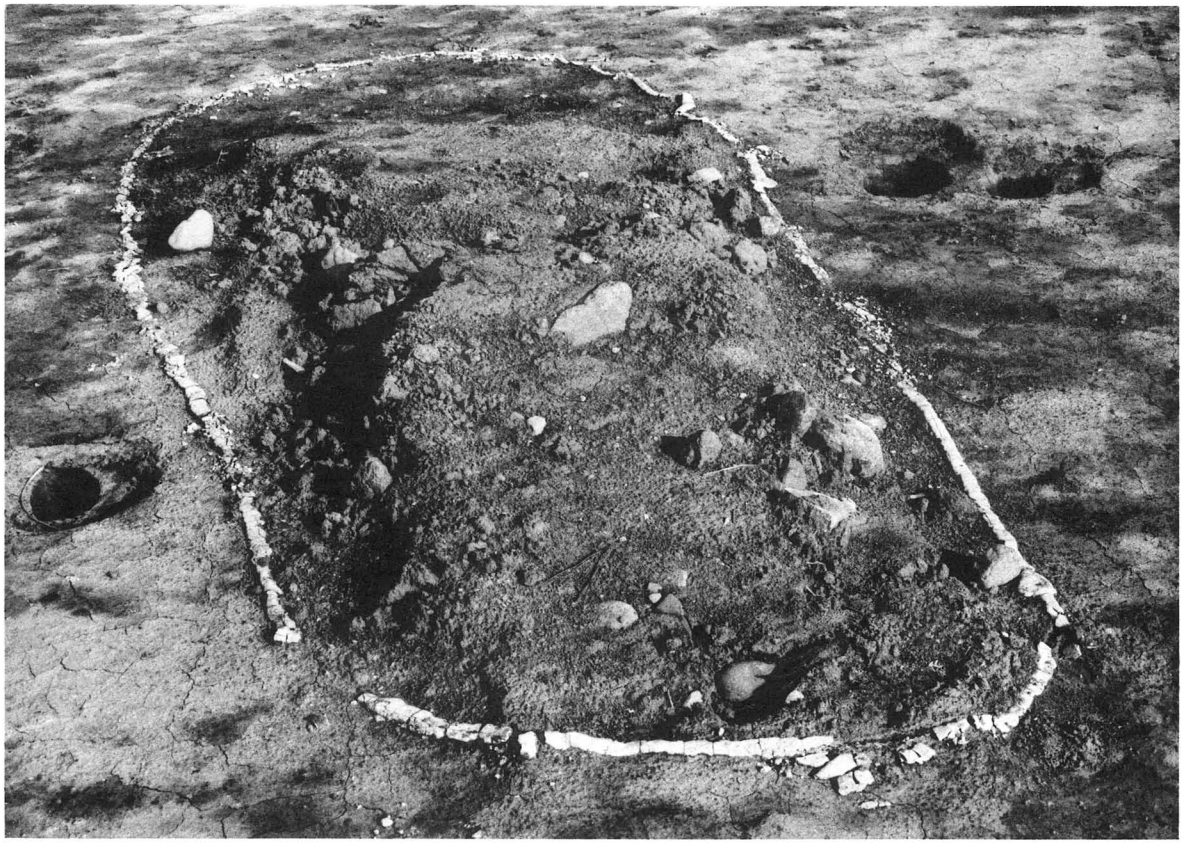
D区　ＳＰ１Ｂセクション出土木製椀

D区　土壙1（検出時）

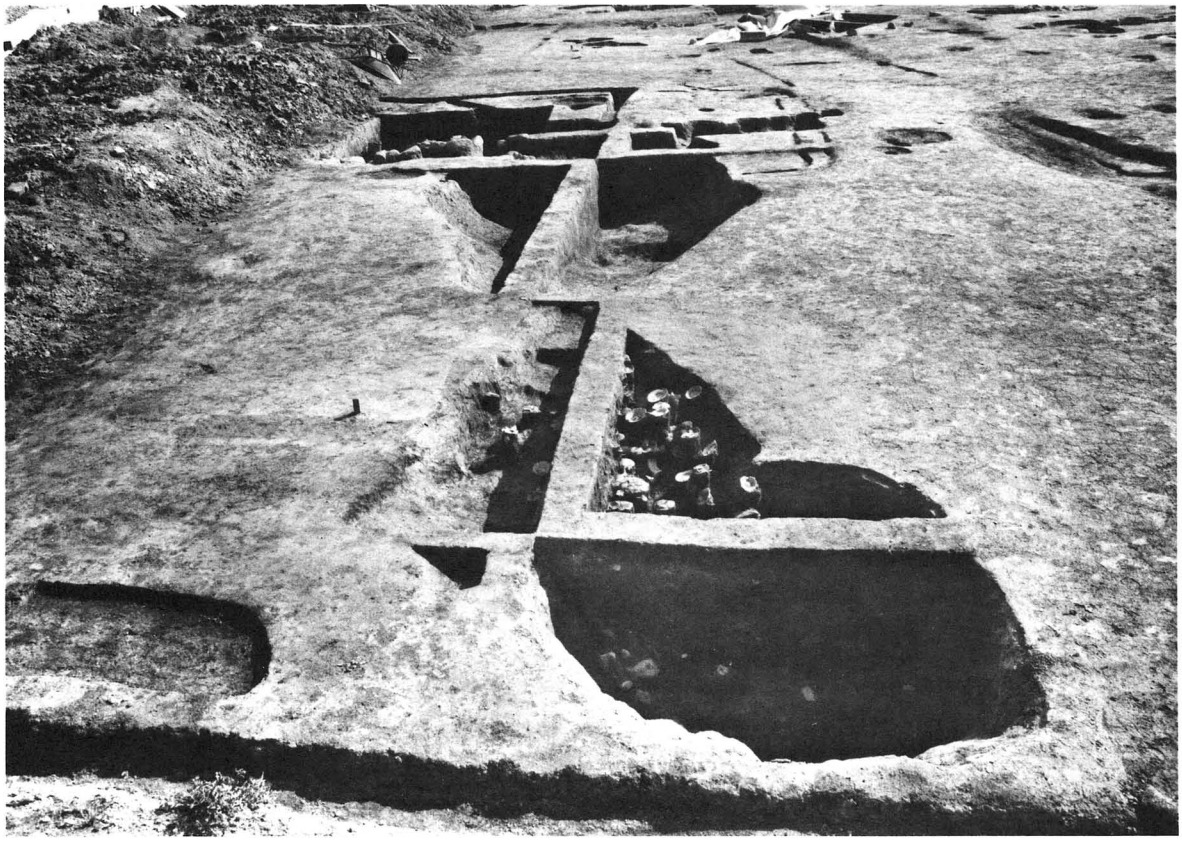
D区　土壙1（完掘後）



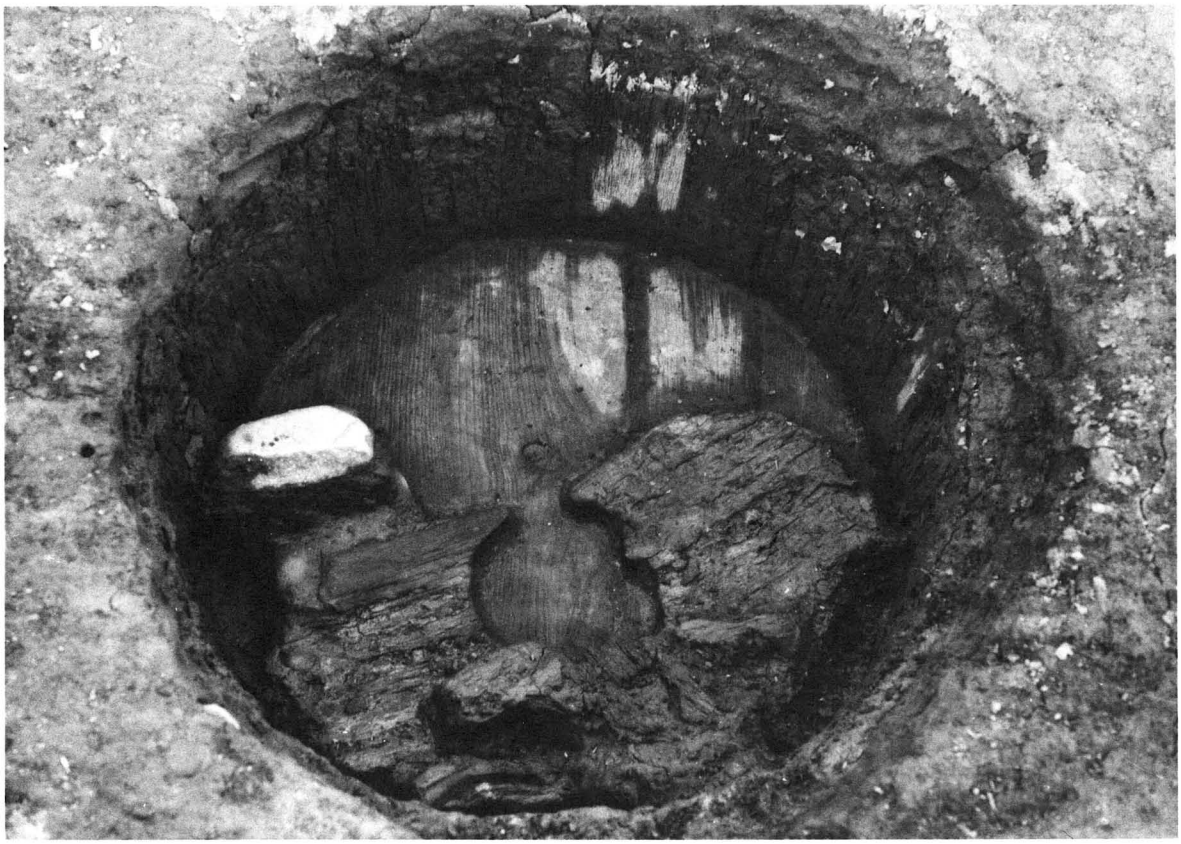
D区　土壙2



D区　土壙3（瓦溜り）



D区　土壙5（手前），6（奥）



D区　土壙8（井戸2，桶）

D区　ＳＤ１出土土器

D区　遺構４（築地）

図版九　慈恩寺遺跡（遺構）

D区　1号住居

D区　1号住居出土土器

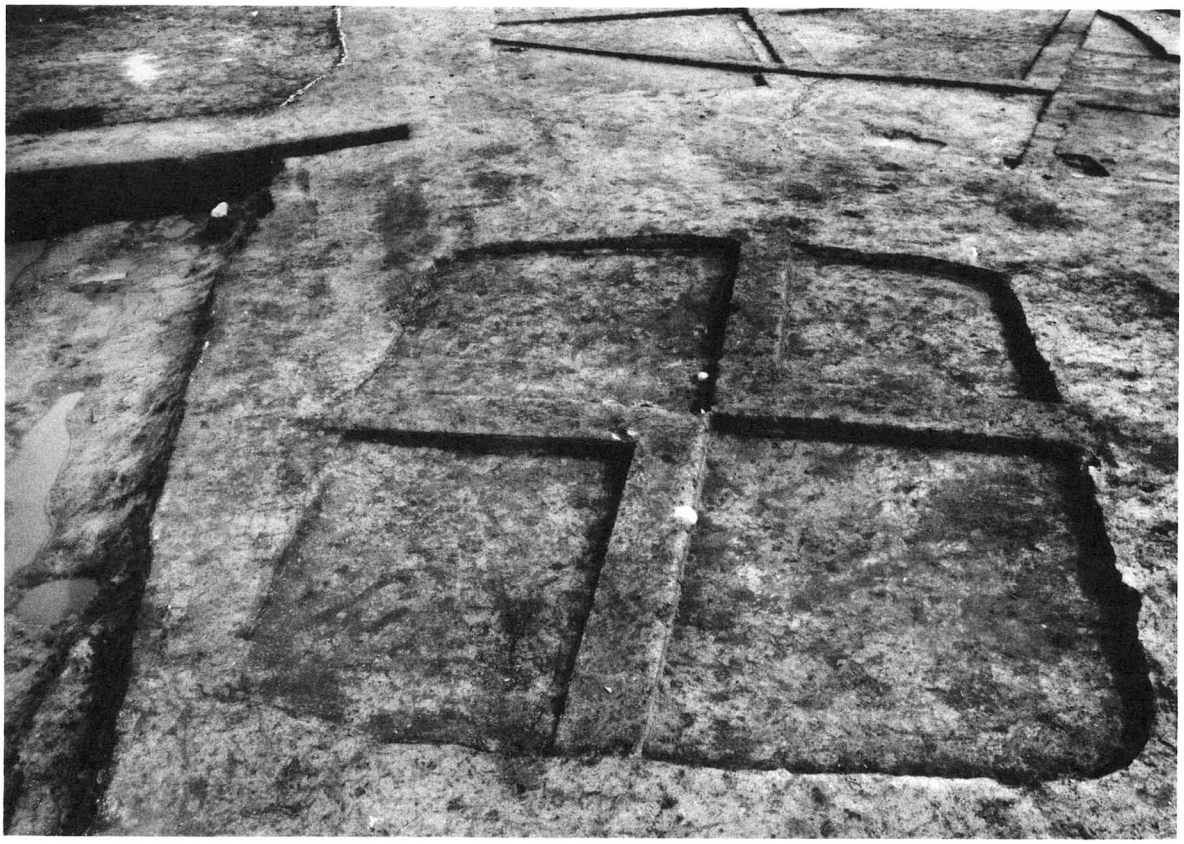
図版一〇　慈恩寺遺跡（遺構）

E区（北西から）

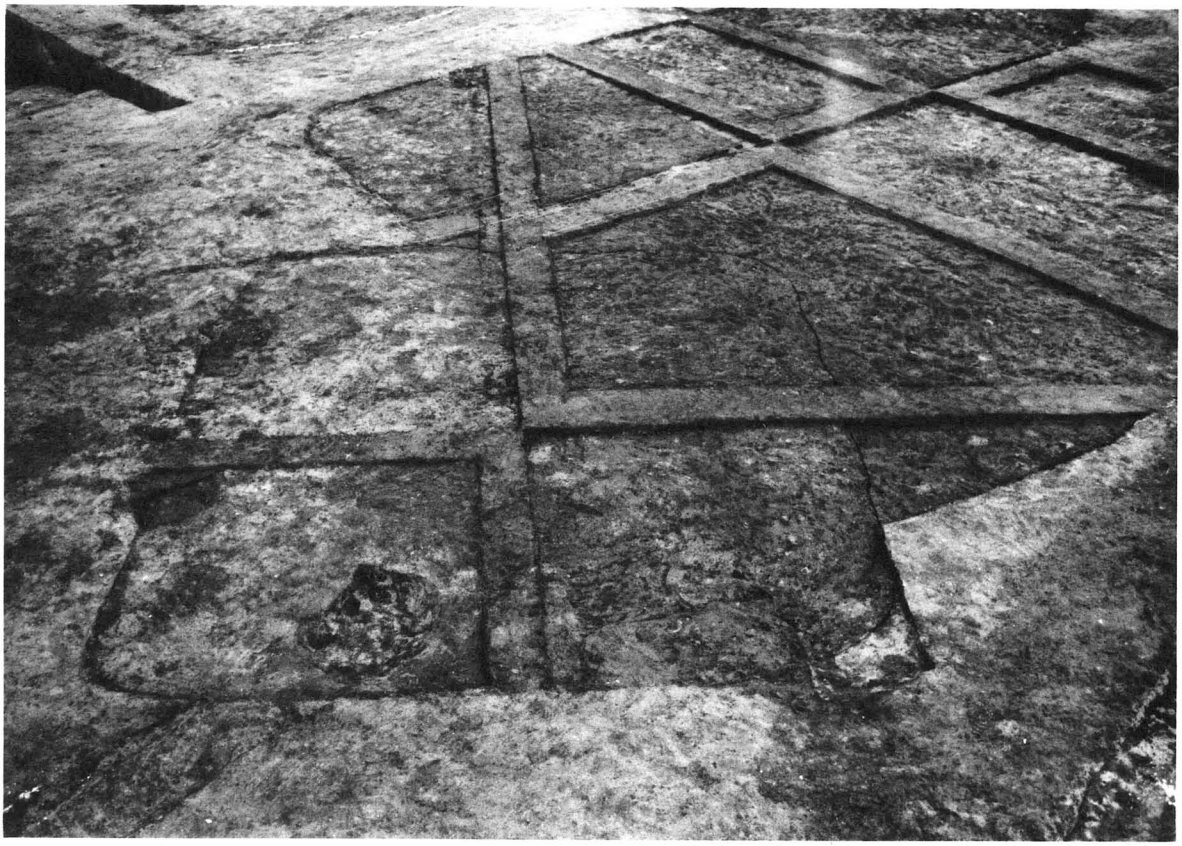
F区　（F－1）全景（東から）

G区　全景

G区　平面確認部分検出住居群

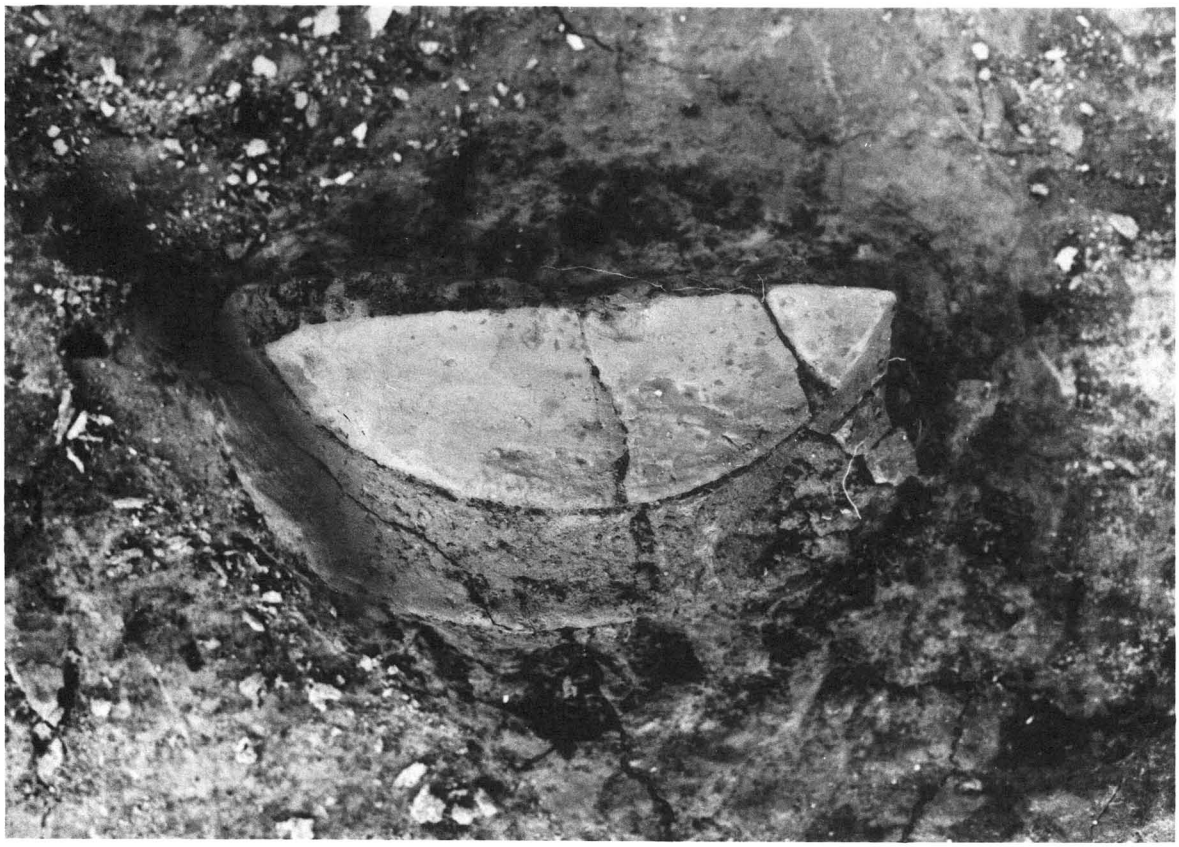


G区　1号住居（西から）

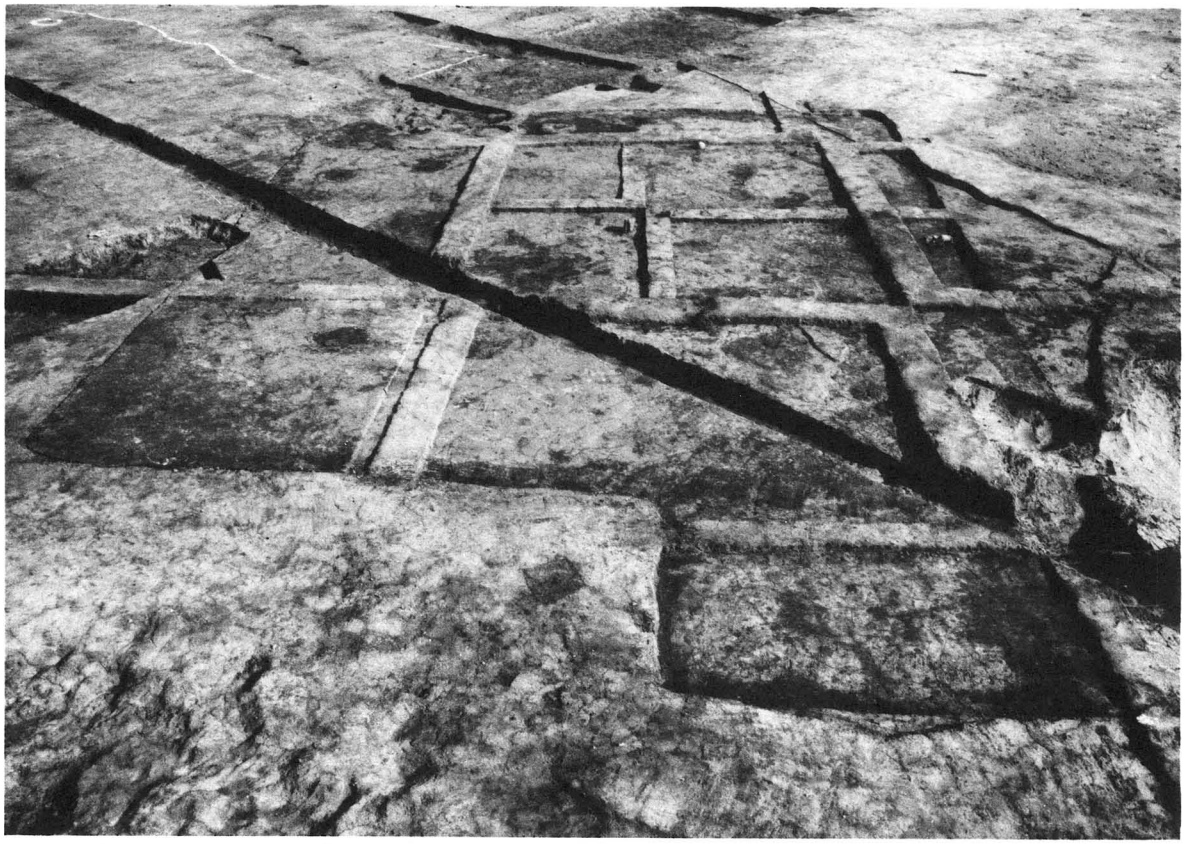


G区　2，3号住居（南西から）

G区　4号住居（南東から）

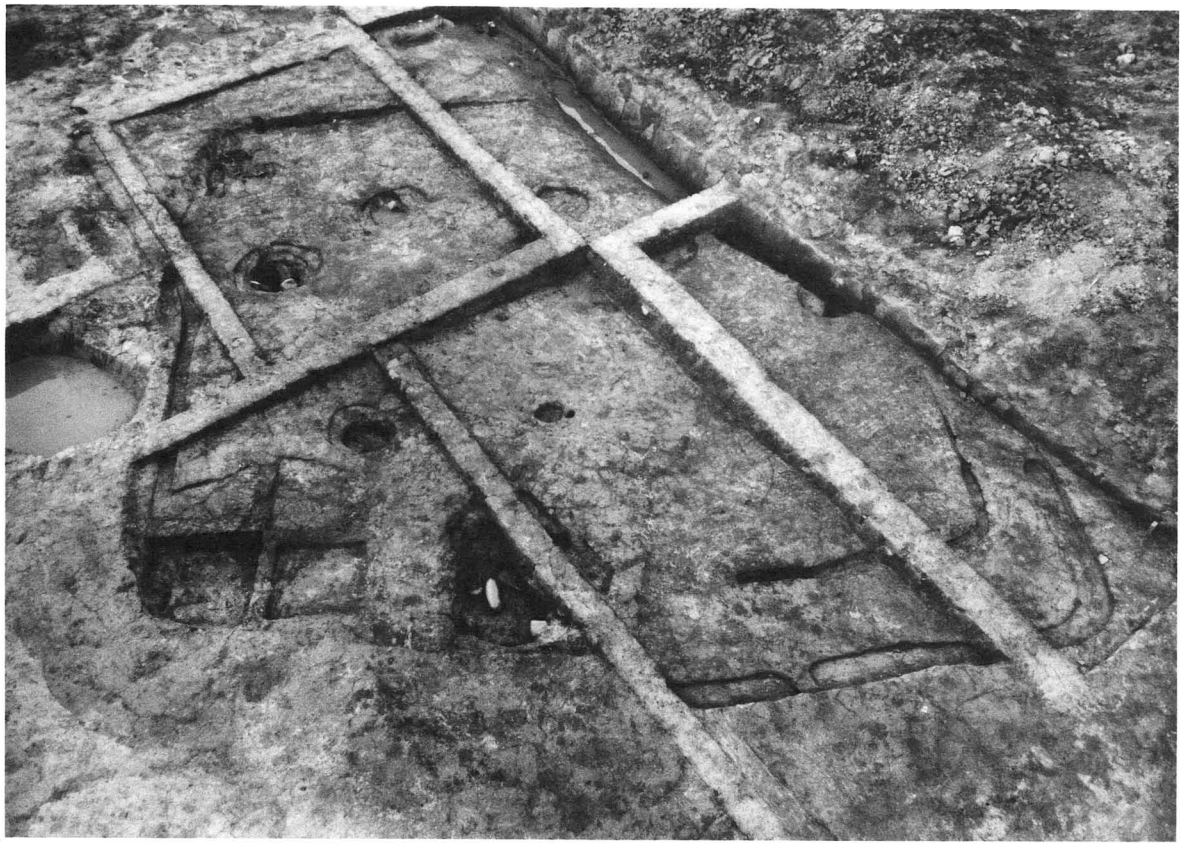


G区　4号住居出土高坏

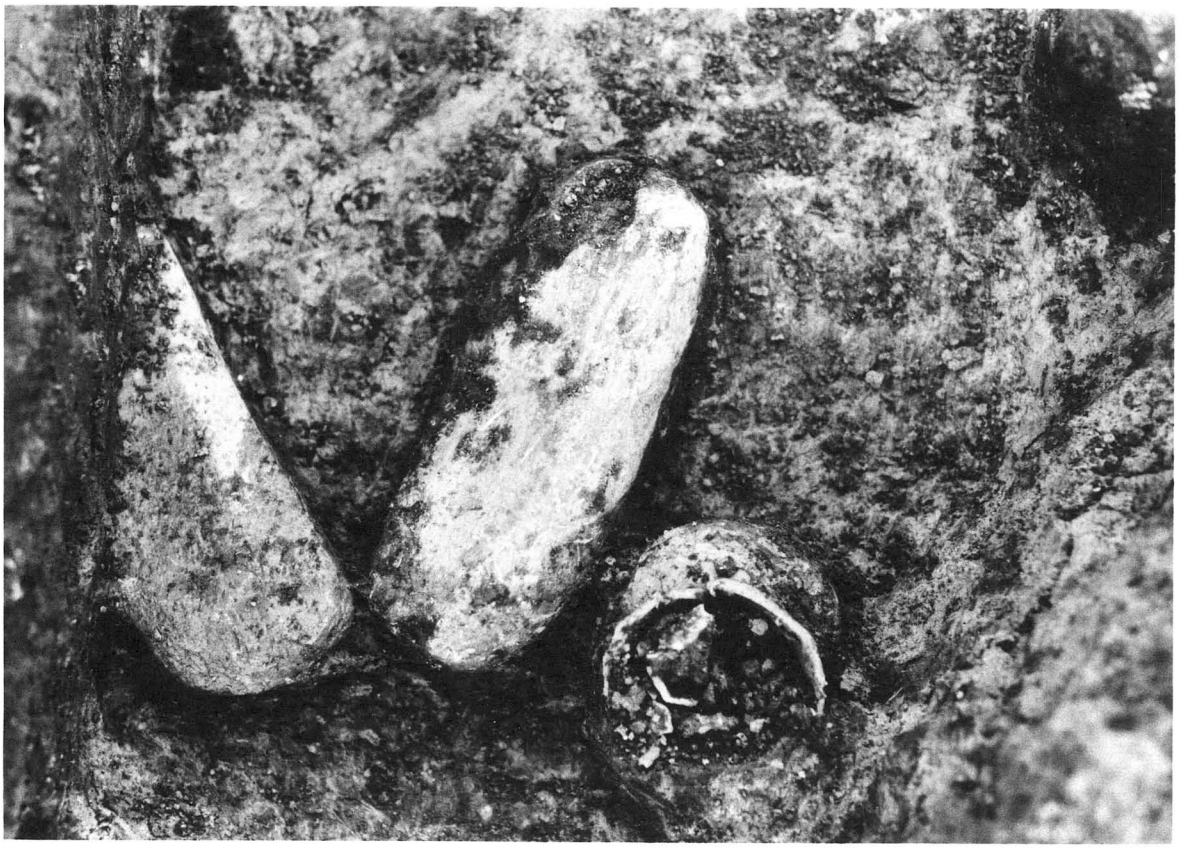


G区　5，6号住居（北東から）

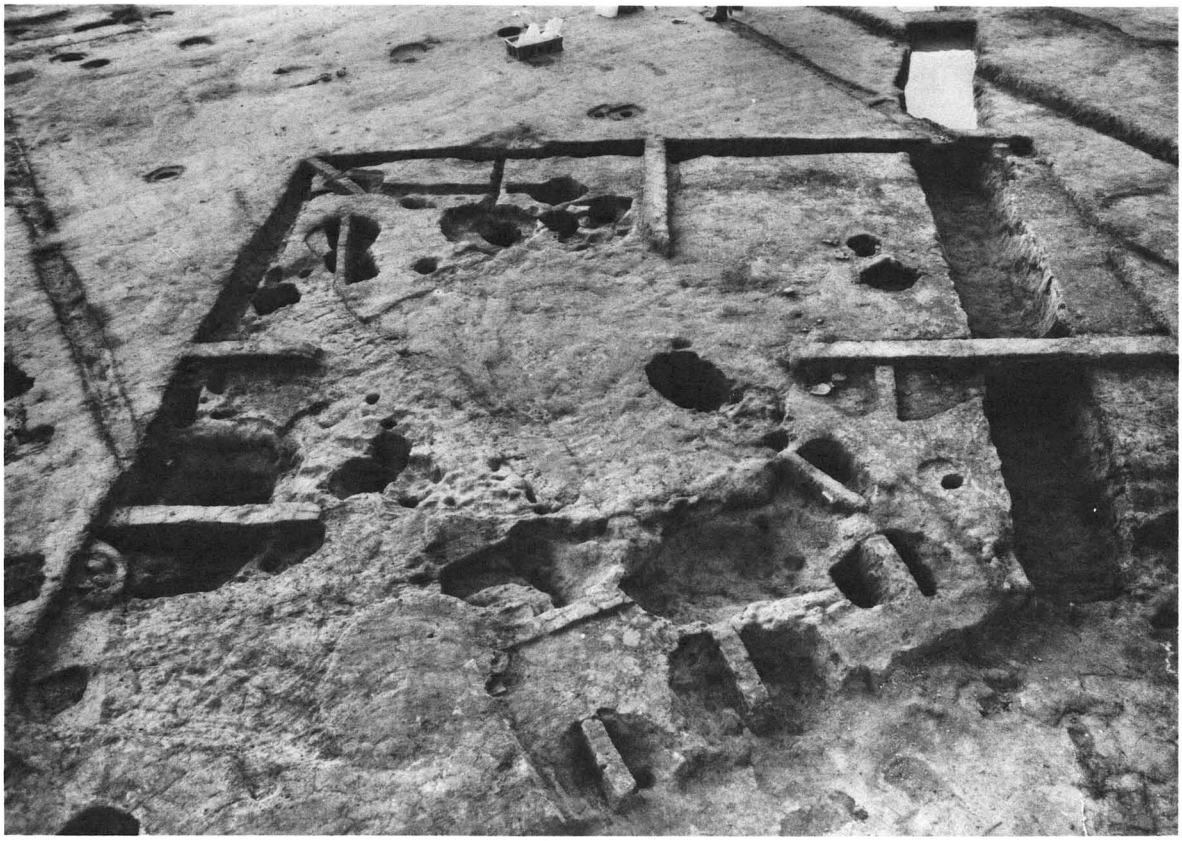
G区　5，6号住居土器出土状況



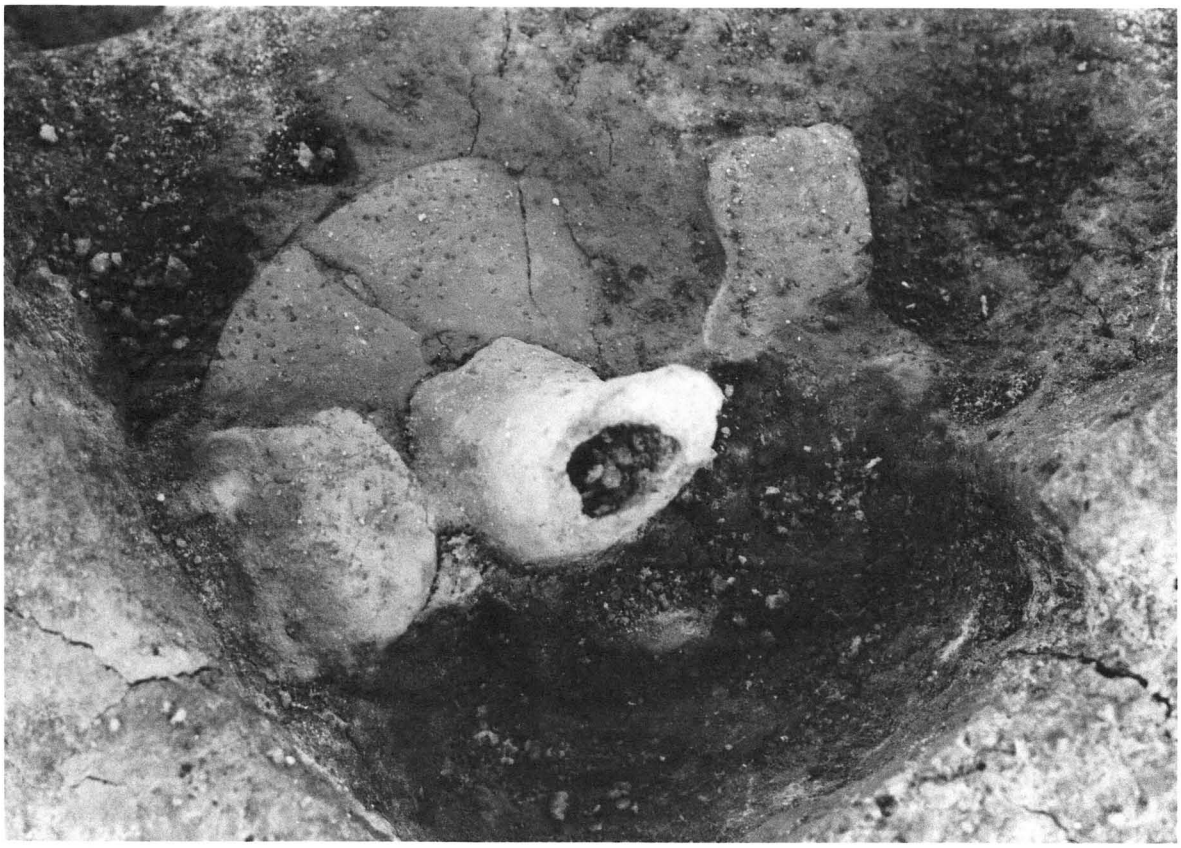
G区　7号住居（東から）



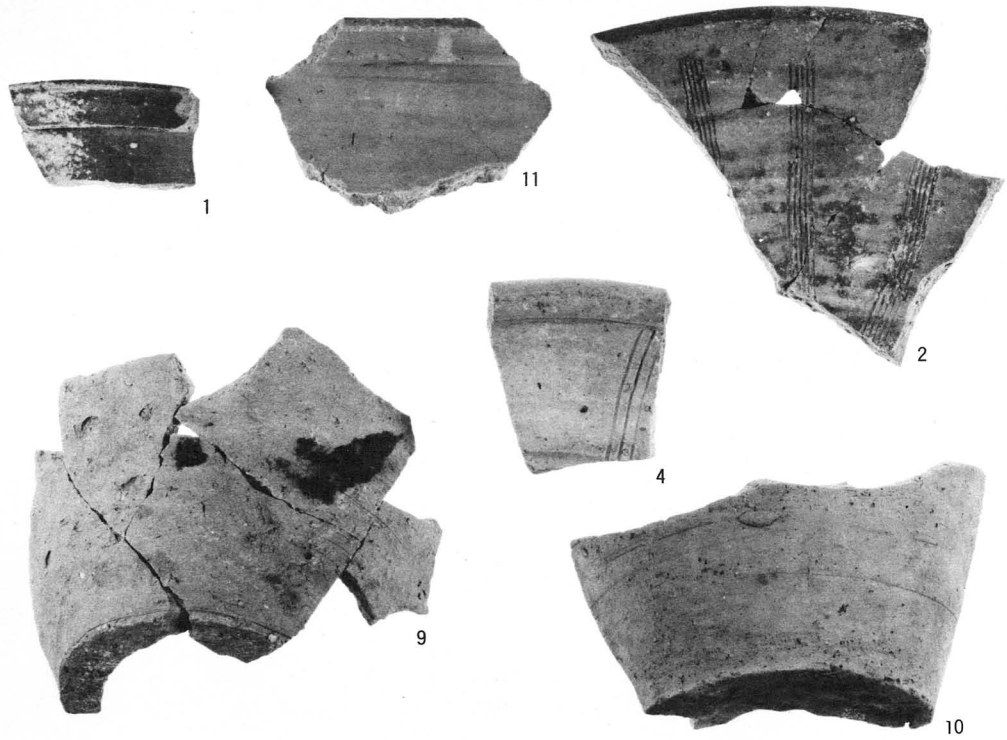
G区　7号住居土壙内土器出土状況



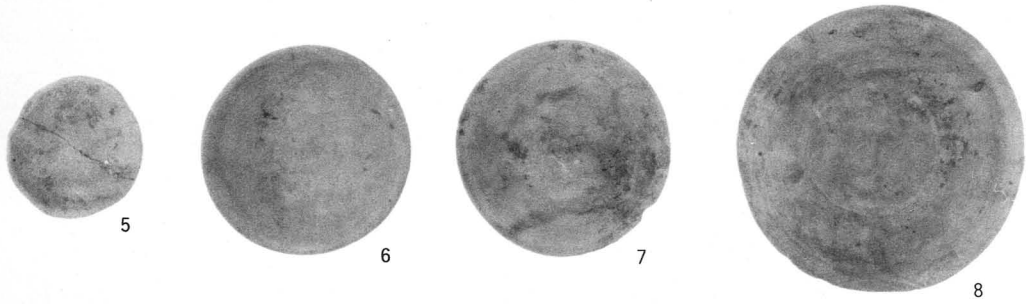
G区　8号住居全景



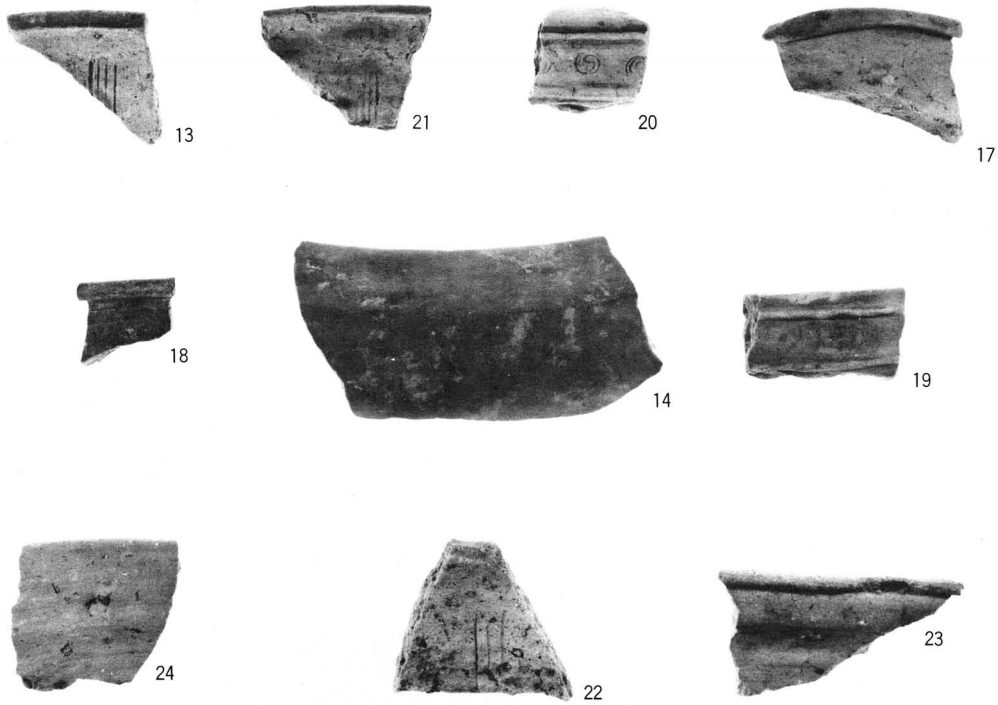
G区　8号住居土器出土状況



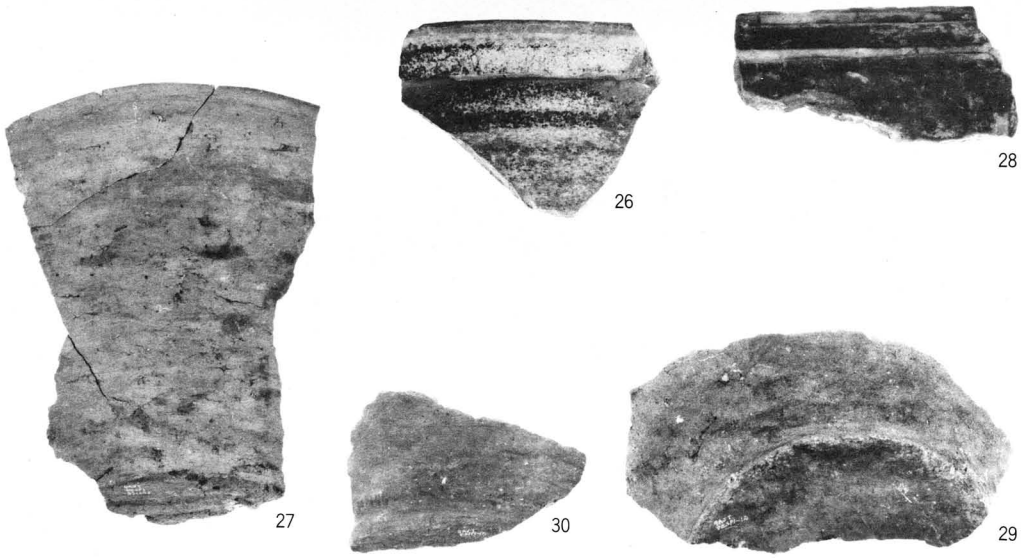
D区　1. 2. 4：ＳＰ１Ａセクション，9〜11：Ａセクション西



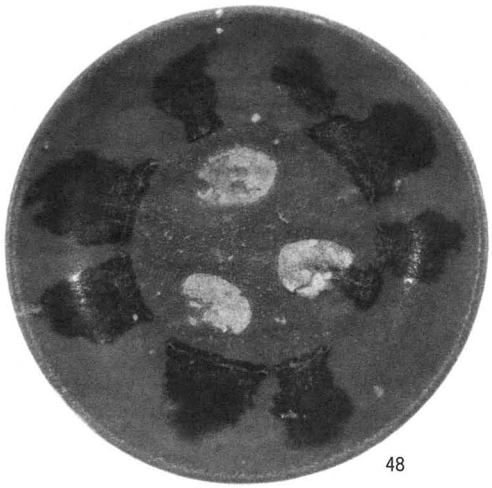
D区　5〜8：ＳＰ１Ａセクション西

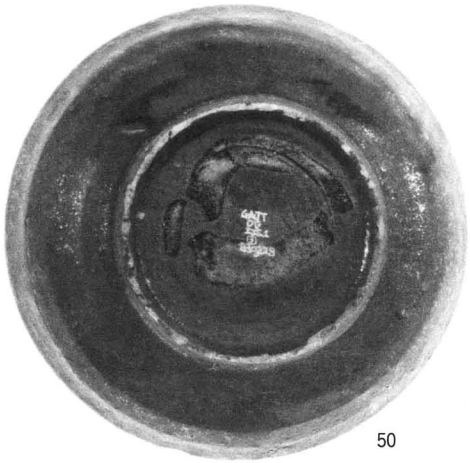


D区　13：ＳＰ１Ｂ～Ｃセクション，14：ＳＰ１Ｂセクション西，17：ＳＰ１Ｄセクション東部肩口，18～21：ＳＰ１Ｄセクション西，22：ＳＰ１Ｄセクション東，23：ＳＰ１Ｅセクション西，24：ＳＰ１Ｅセクション西板柵付近

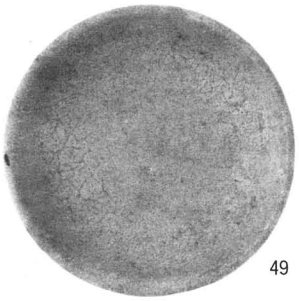


D区　26～28：ＳＰ１，29．30：ＳＰ１１層

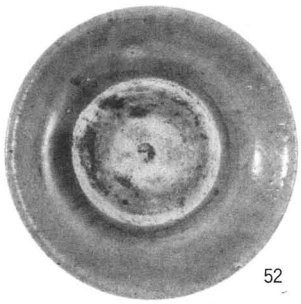

48


50

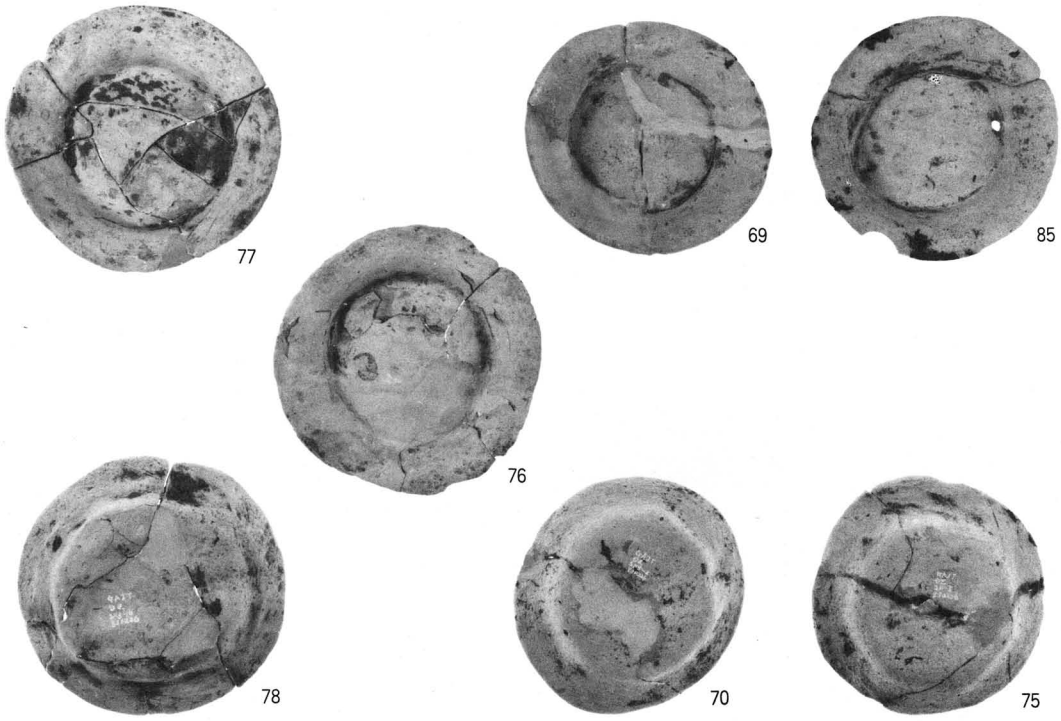
D区　48．50：土壙1


49

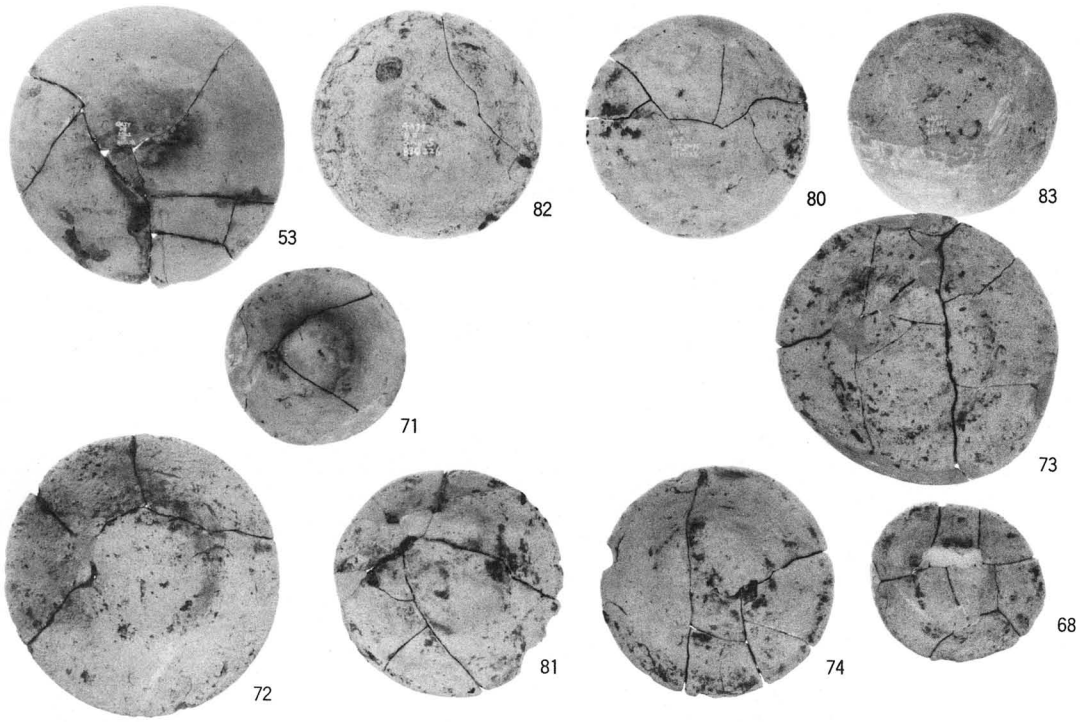
51


52

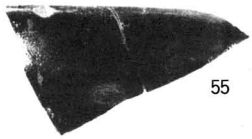
D区　49～52：土壙1

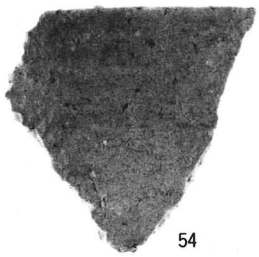


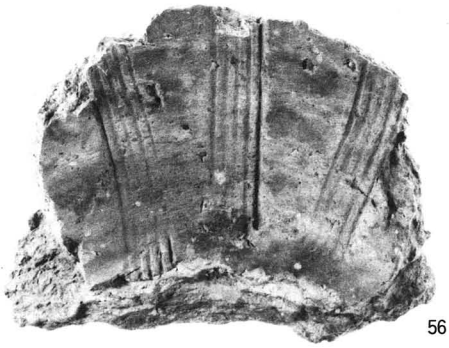
D区　69～85：土壙5

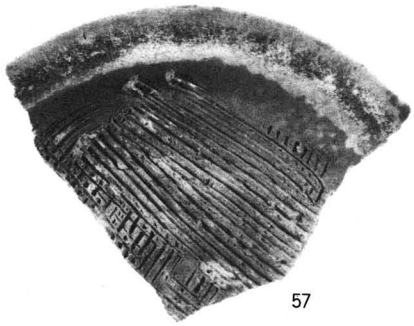


D区　53：土壙1，68～83：土壙5


55


54


56

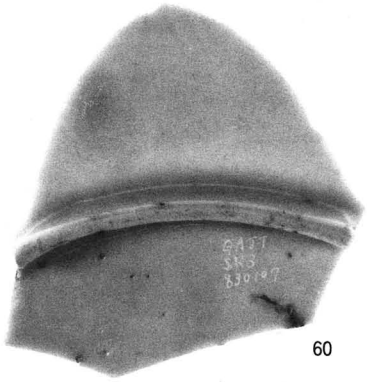

57

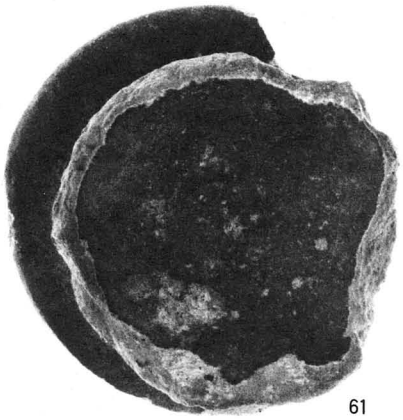
D区　54～57：土壙1

58

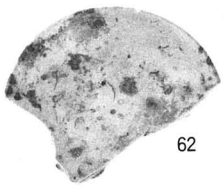
59

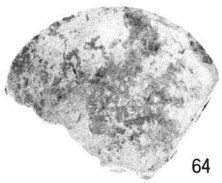
D区　58．59：土壙2

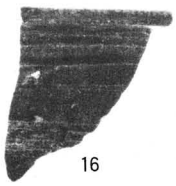




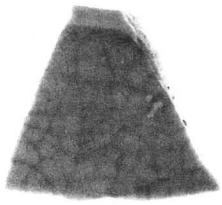
D区　60．61：土壙3

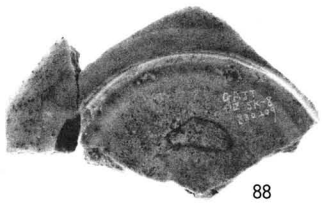




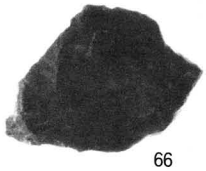


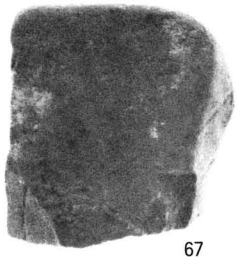
D区　15：ＳＰ１Ｃセクション，16：ＳＰ１Ｃセクション東部，36．62～64：土壙4


86


88

65


66


67

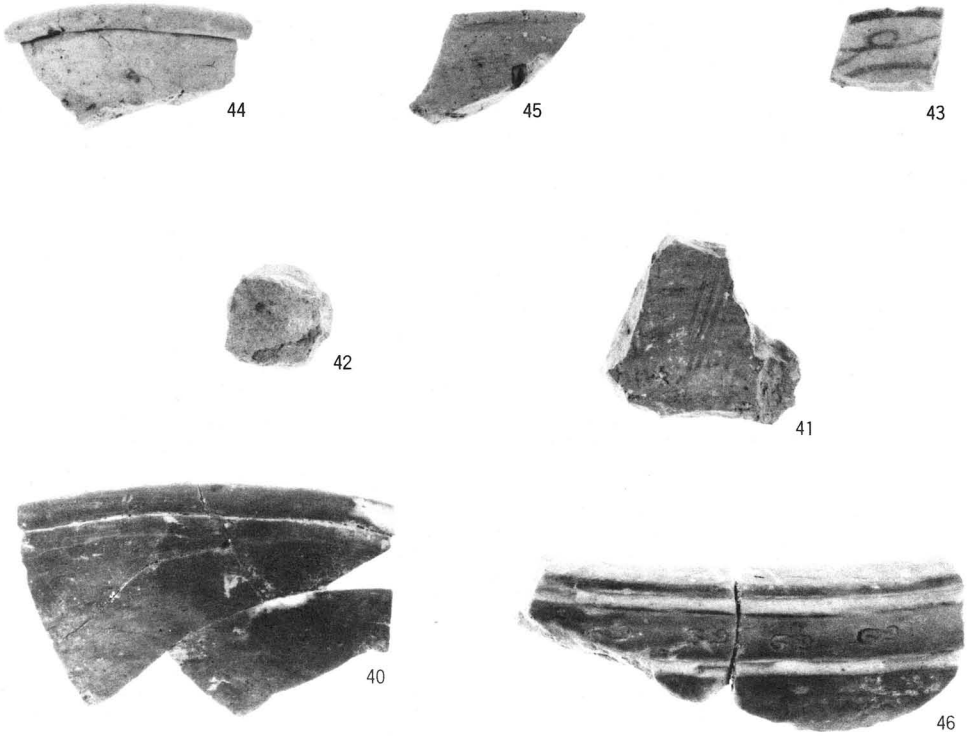
D区　65～67：土壙5，86：土壙6，88：土壙8

84

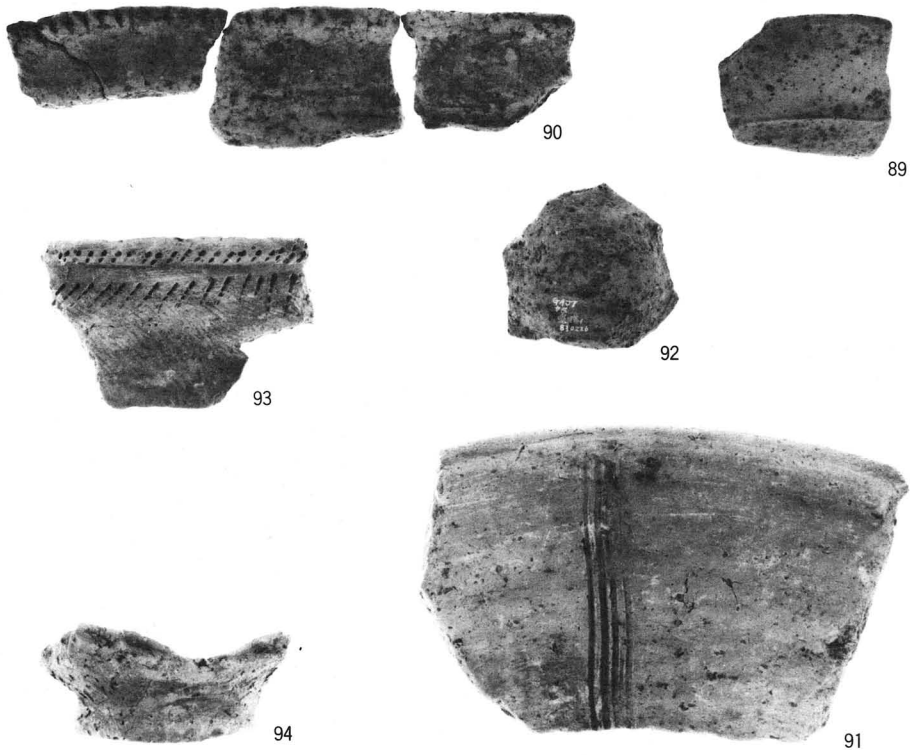
87

D区　84．87：土壙6

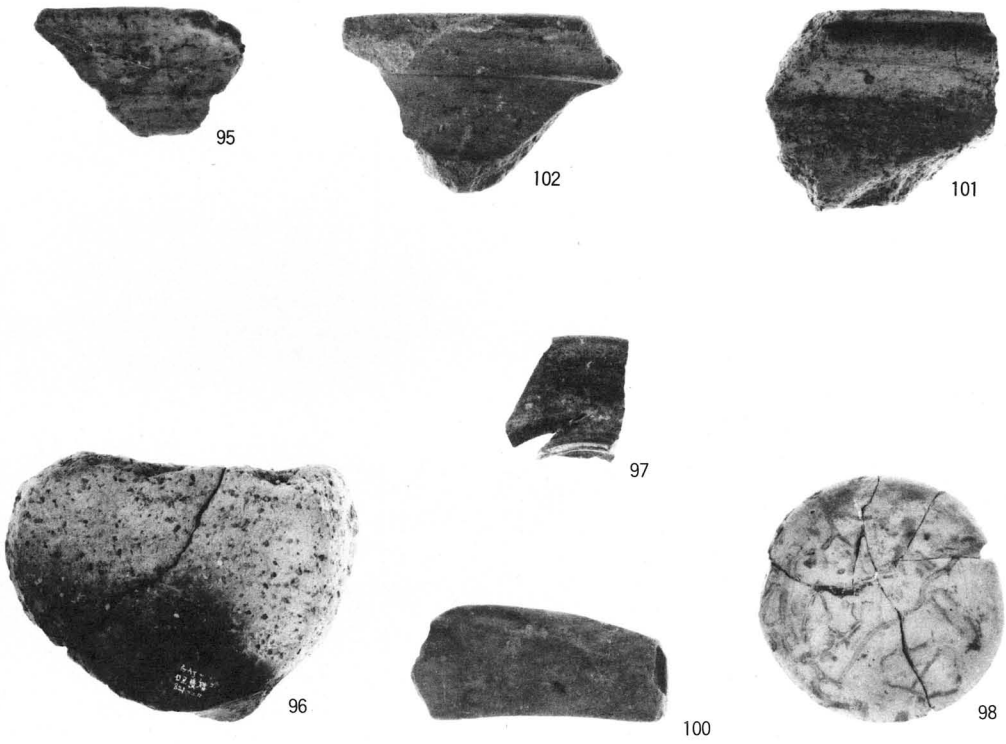
D区　32～35：ＳＤ１Ｃグリット　3層



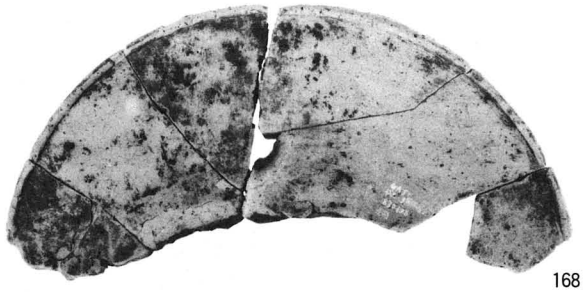
D区　40：ＳＤ２Ｂグリット，41～44：ＳＤ２Ｃグリット，45．46：ＳＤ２Ｄグリット



D区　89～94：遺構1

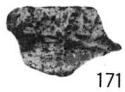


D区　95．96：遺構2（ＳＤ5），97：遺構3，98．100：遺構5，101：遺構6，102：表採


168

169

170


171

165

166

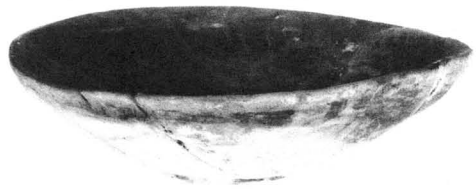
167

D区　165～171：３号住居

3

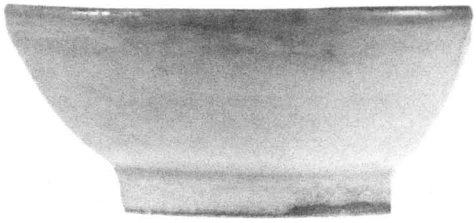
12

D区　3：ＳＰ１Ａセクション西，12：ＳＰ１Ｂセクション西



31

38



99

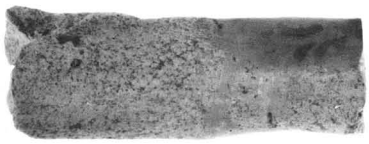
47

105

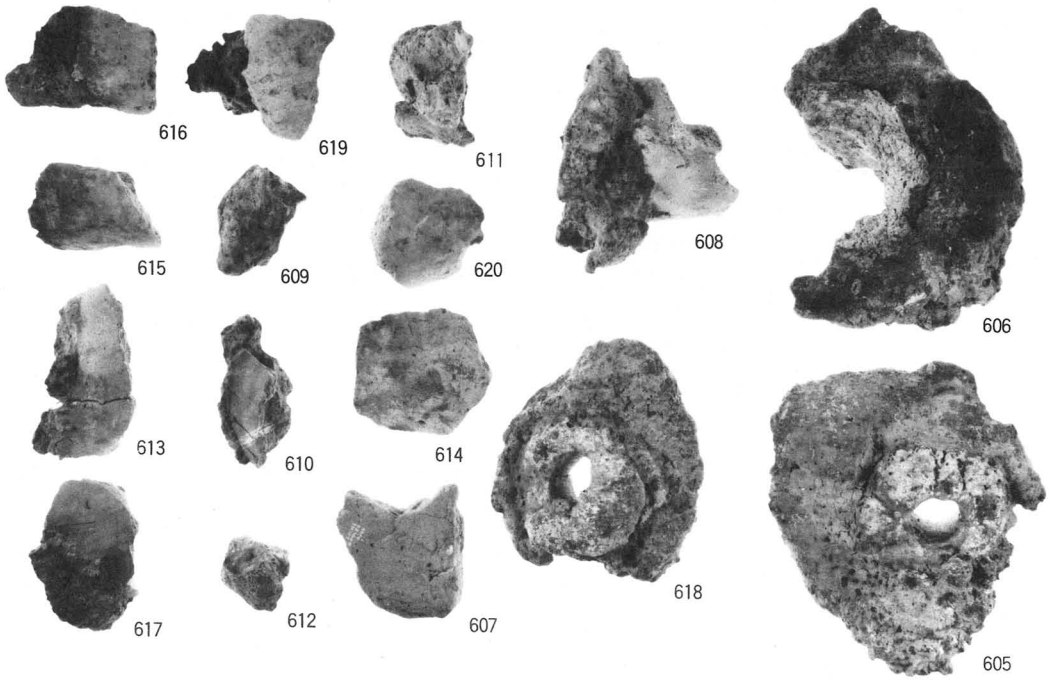
164

186

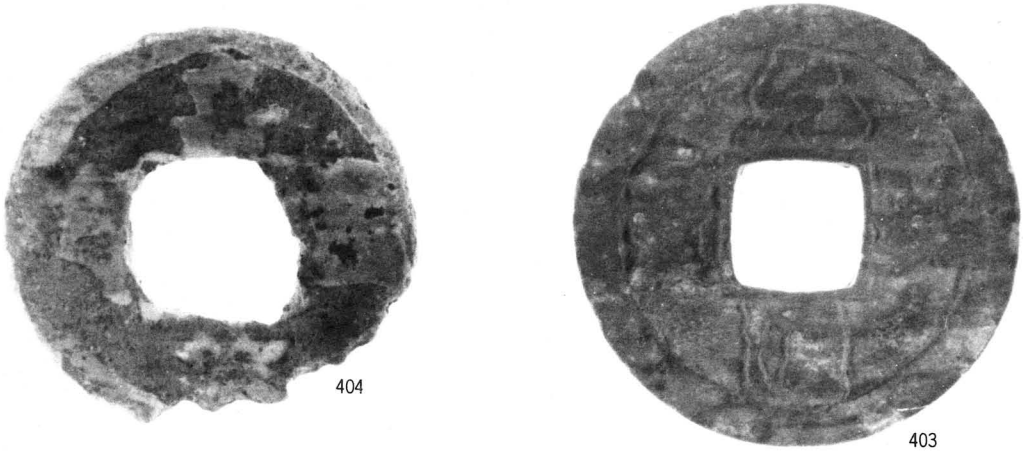
D区　105：ＳＰ１Ａセクション，38：ＳＤ１Ｃグリット３層，31：ＳＤ１Ｃグリット，
47：ＳＤ２Ｂグリット，99：遺構５，186：１号住居，164：３号住居



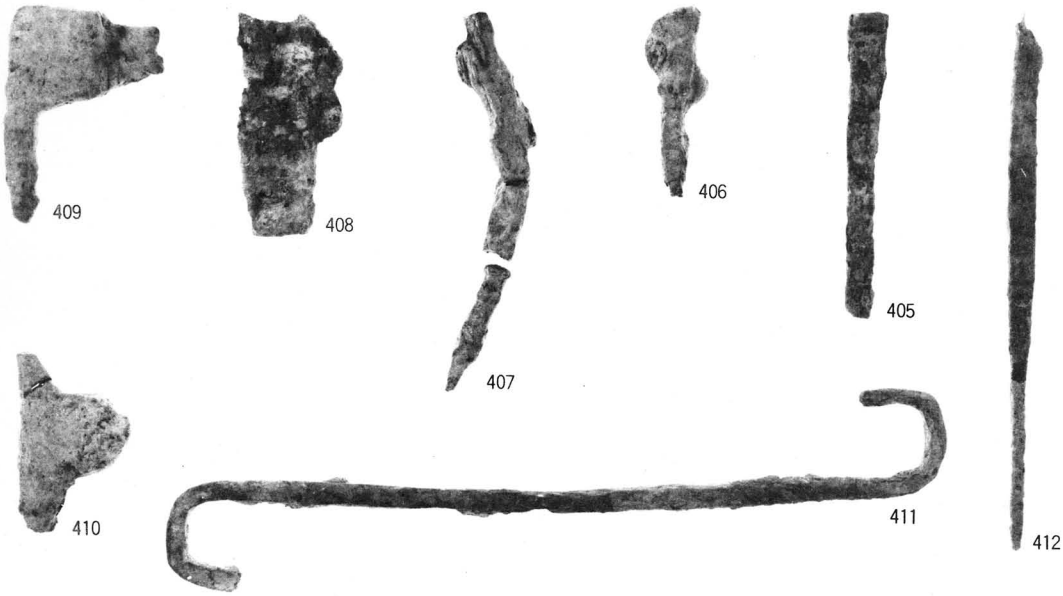
D区　柱状土製品・鞴，601：ＳＰ１Ａセクション西，602：ＳＰ１Ａセクション，
603：ＳＤ２Ｃグリット下層部，604：３号住居付近表採



D区　鞴：605．606．619．620：ＳＰ１Ａセクション西，608．610．614．616：ＳＰ１Ａセプション
607：ＳＰ１Ｄセクション西，615：ＳＰ１ 1層，618：ＳＤ２Ｂグリット，
611．612：ＳＤ２Ｃグリット下層部，613：遺構４中央部，609．617：遺構５底部



D区　404：ＳＰ１１層，403(元祐通宝)：土壙１



D区　411：ＳＰ１Ａセクション，410：土壙５，412：ＳＤ２Ｄグリット

G区　405．407．409：ＳＤ１，408：ＳＤ１　1層，406：５，６号住居埋土

401

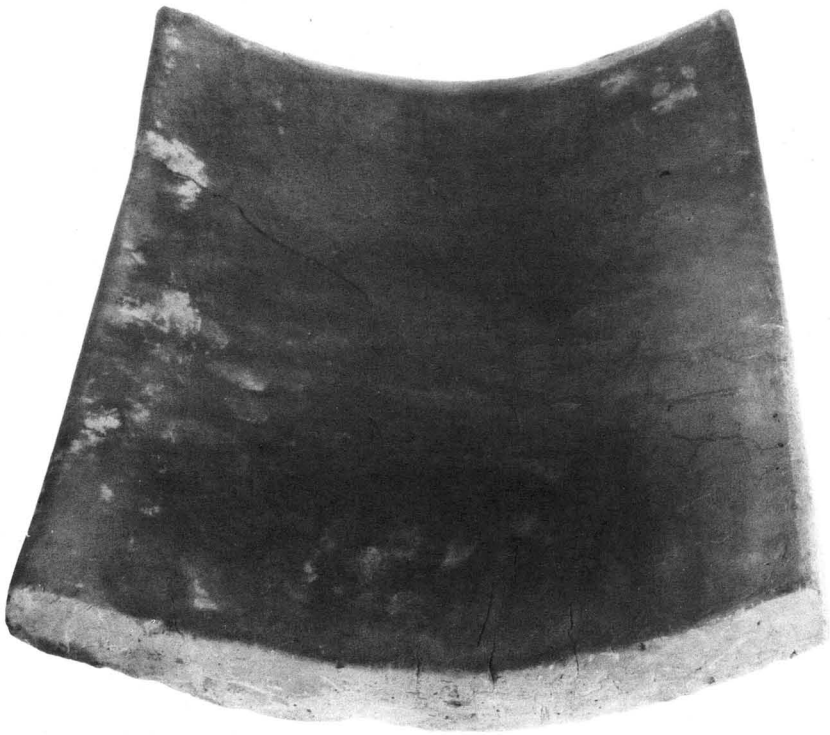
402

D区　401：ＳＤ２Ｃグリット
Ｇ区　402：東部断面

—

508

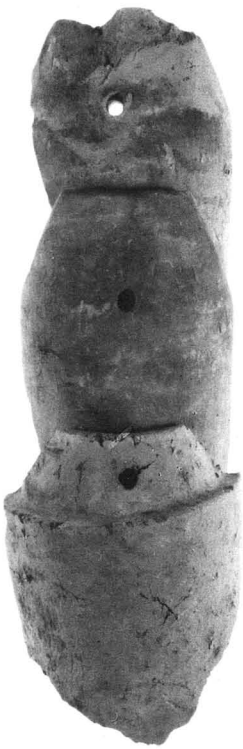
D区　508：ＳＰ１Ａセクション西



501

D区　501：ＳＰ１Ａセクション

513



521

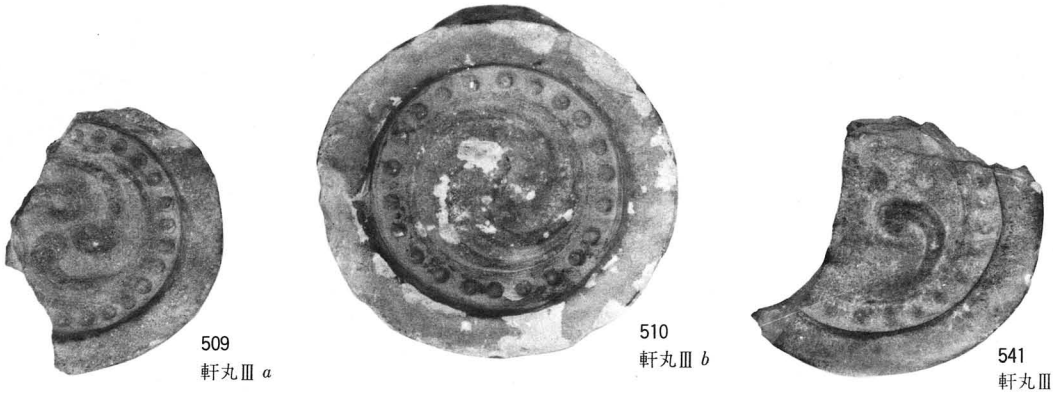
548

545

D区　545．548：ＳＤ２Ｄグリット，513：ＳＤ２グリット下，521：ＳＰ１Ｄセクション東壁

502
軒平Ⅲ *b*

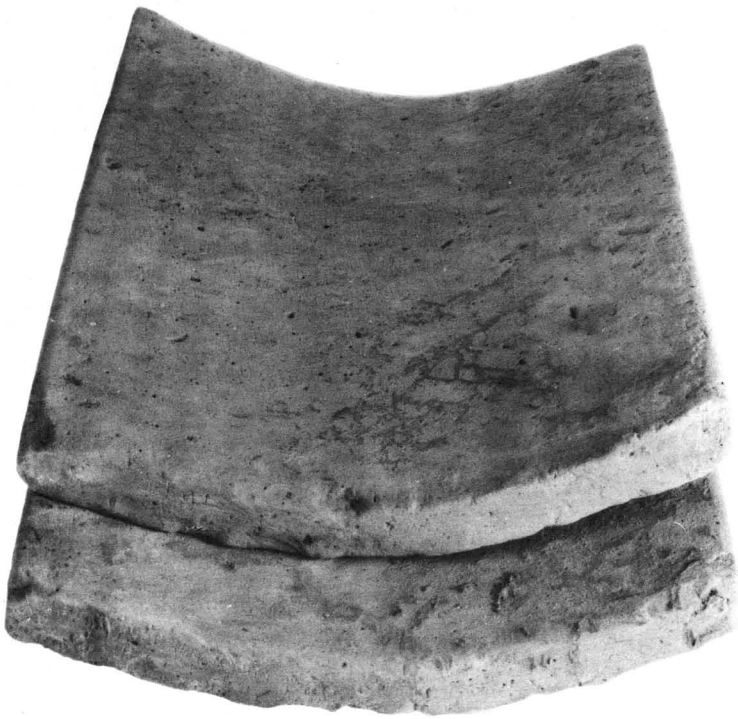
503
軒平Ⅲ *a*



509
軒丸Ⅲ *a*

510
軒丸Ⅲ *b*

541
軒丸Ⅲ *a*



537

536

D区　502. 503. 509. 510：ＳＰ１Ａセクション，536. 537：ＳＰ１，541：ＳＤ２Ｃグリット

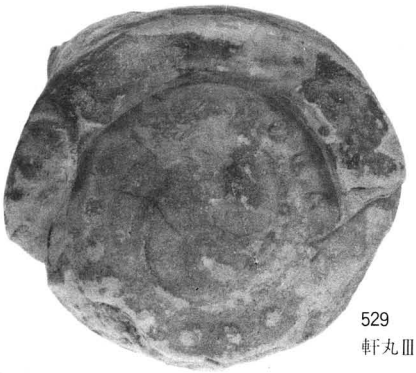
525
軒平Ⅱ *b*

523
軒平Ⅱ *b*

530
軒平Ⅲ *a*

512
軒平Ⅲ *a*

547
軒丸Ⅱ *b*



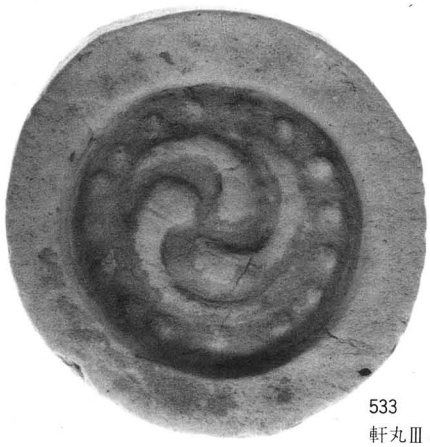
529
軒丸Ⅲ *b*

D区　512：ＳＰ１Ｂセクション西部肩口，523．525：ＳＰ１Ｄセクション西，
529：ＳＰ１Ｅセクション東，530：ＳＰ１，547：ＳＤ２Ｄグリット

515
軒平Ⅲ *b*

535
軒平Ⅲ *b*

527
軒丸Ⅱ *a*

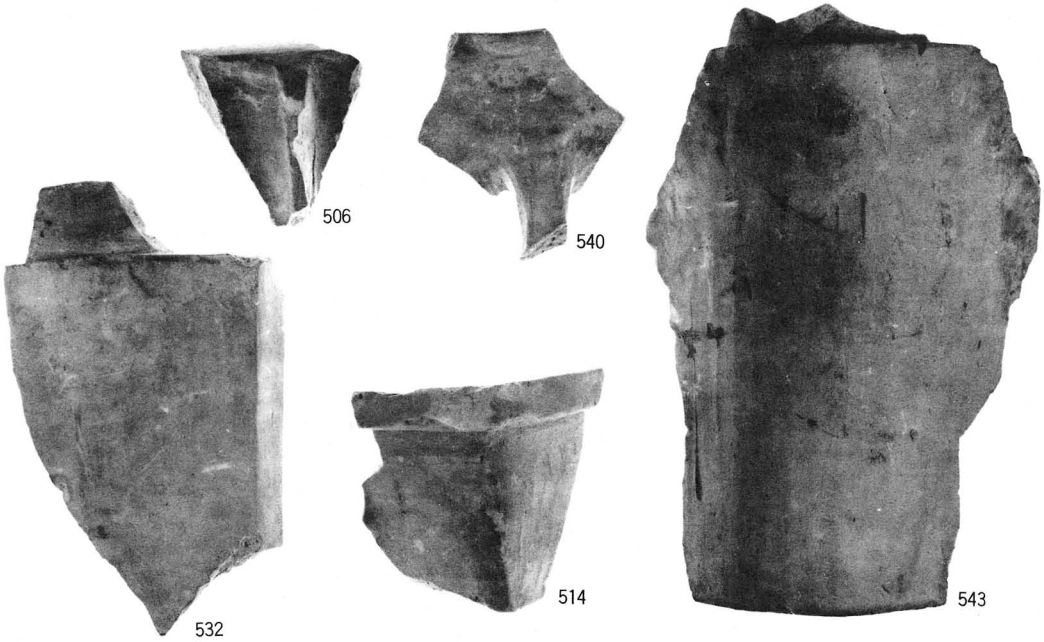


533
軒丸Ⅲ *b*

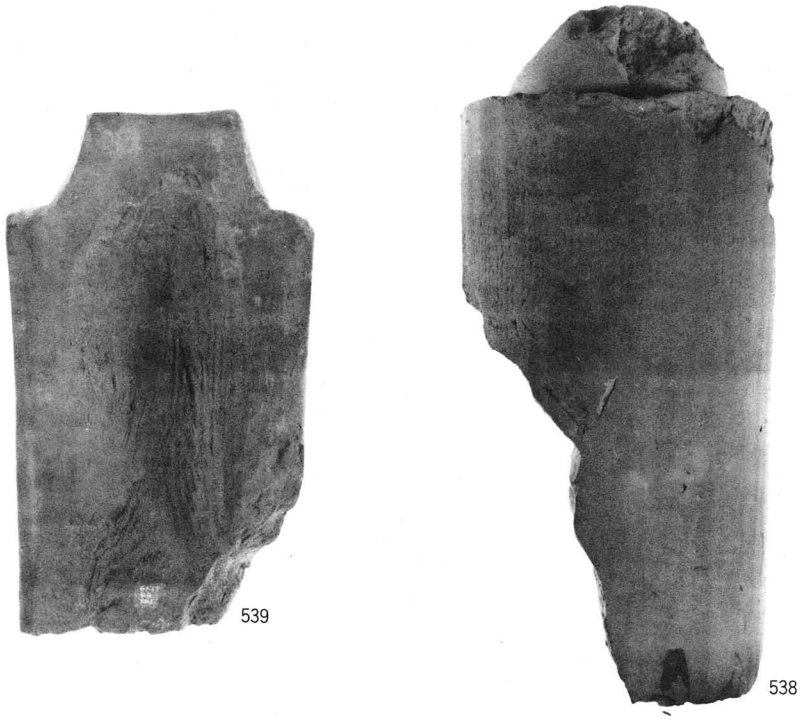
522
軒丸Ⅰ

519
軒丸Ⅰ

D区　519：ＳＰ１Ｄセクション，522．527：ＳＰ１Ｄセクション西，533：ＳＰ１，
535：ＳＰ１土壙４，515：ＳＤ２Ｃグリット

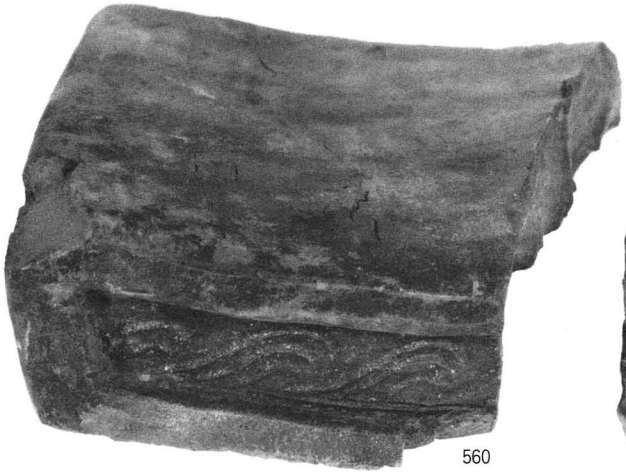


D区　506：ＳＰ１Ａセクション，514：ＳＰ１Ｂ～Ｃセクション１層，532：ＳＰ１，543：ＳＤ２Ｃグリット，540：ＳＤ２Ｄグリット



D区　538．539：ＳＰ１

D区　504．505．507．511：ＳＰ１Ａセクション，516～518：ＳＰ１Ｄセクション
524：ＳＰ１Ｄセクション西，531．534：ＳＰ１



560
軒平Ⅱ *b*

520
軒平Ⅱ *b*

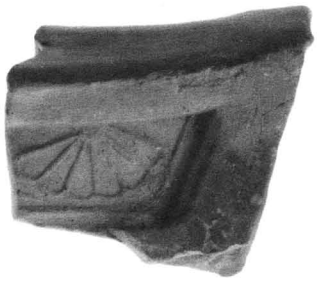
D区　520：ＳＰ１Ｄセクション東部，560：土壙４

546

544

D区　544．546：ＳＰ１Ｄグリット

549
軒平Ⅱ *a*



554
軒平Ⅱ *a*

D区　549：土壙1，554：土壙4

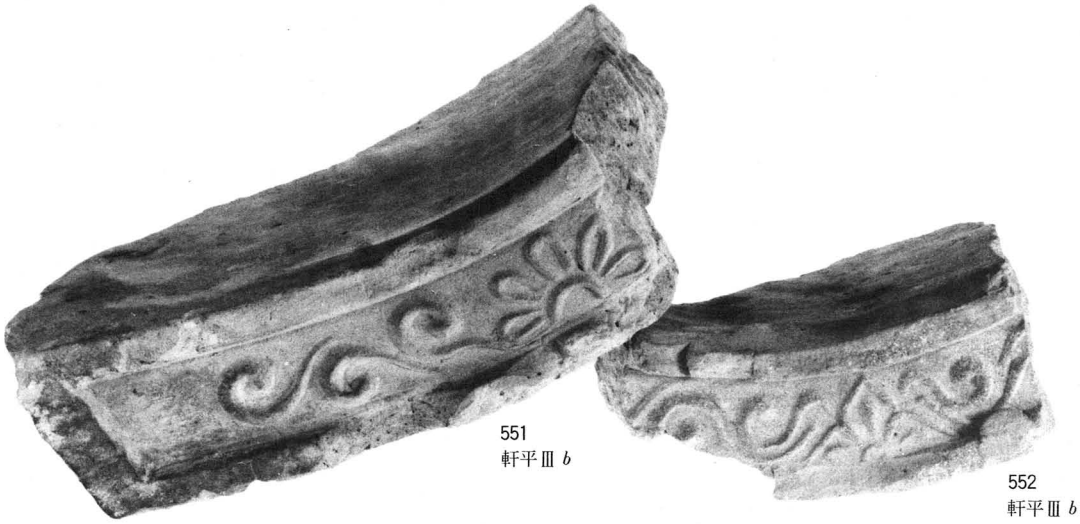
528
軒平Ⅰ

561
軒平Ⅰ

542
軒平Ⅰ

526
軒平Ⅰ

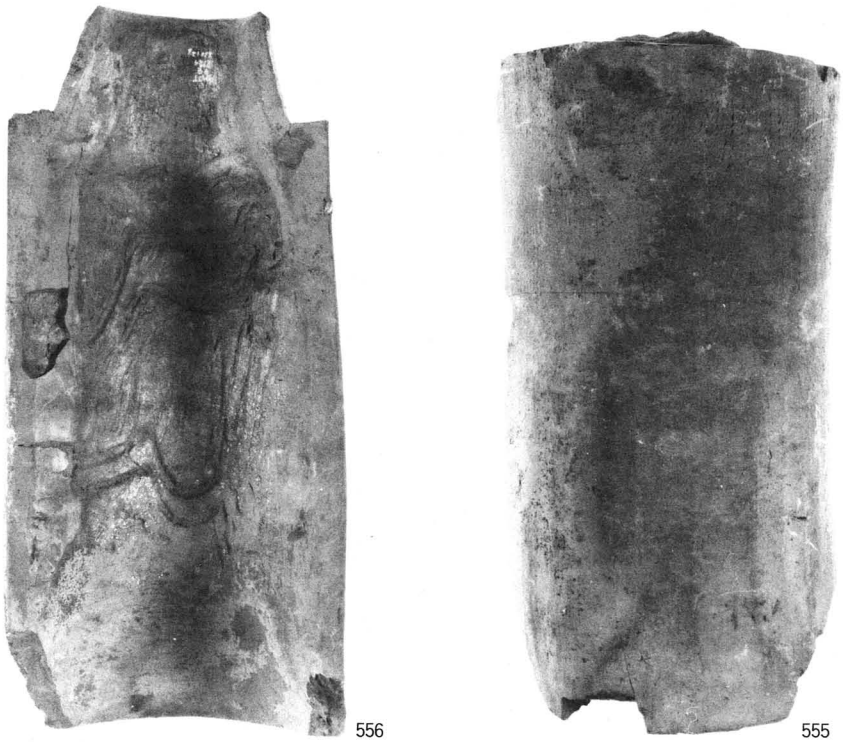
D区　561：ＳＰ１Ｄセクション付近表採，542：ＳＤ２Ｄグリット，526．528：土壙4



551
軒平Ⅲ*b*

552
軒平Ⅲ*b*

D区　552：土壙3，551：遺構3

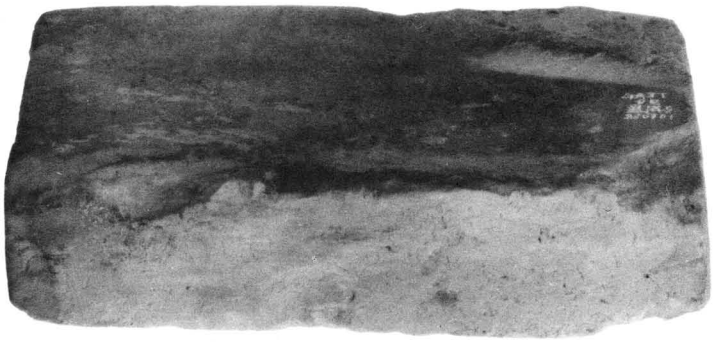


556

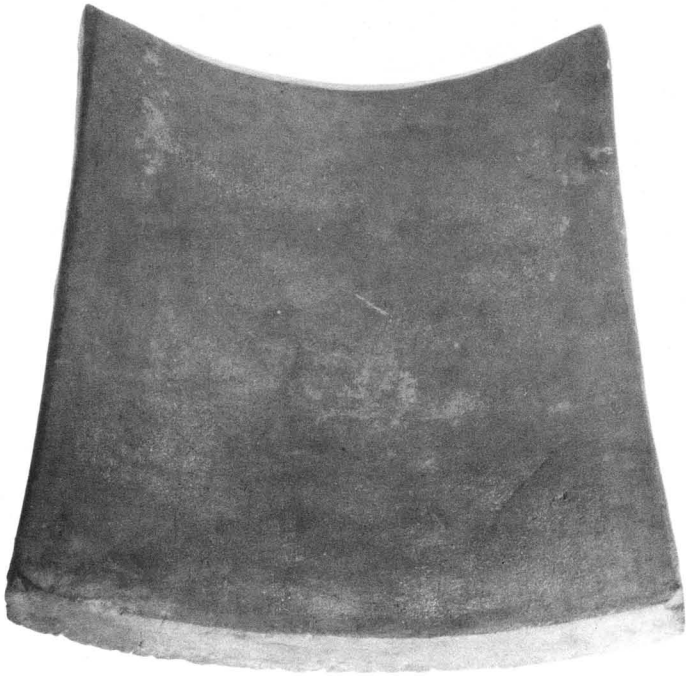
555

D区　555．556：遺構4

553
軒平Ⅲ *a*

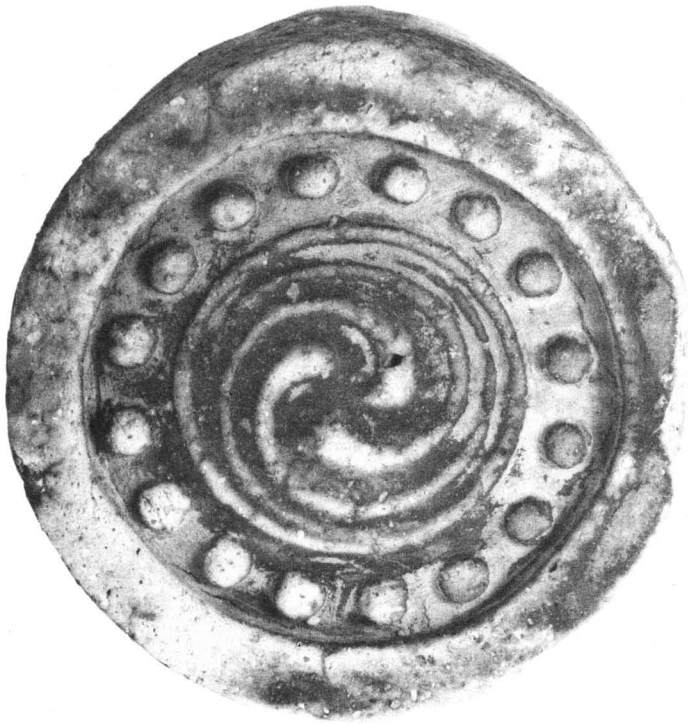


558



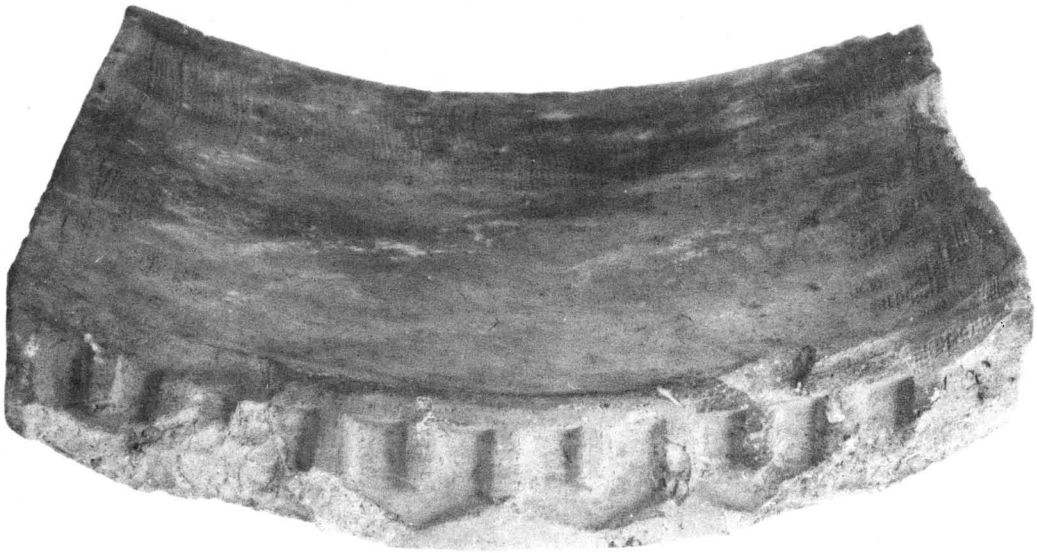
550

D区　553：土壙4，550：遺構2，558：遺構5



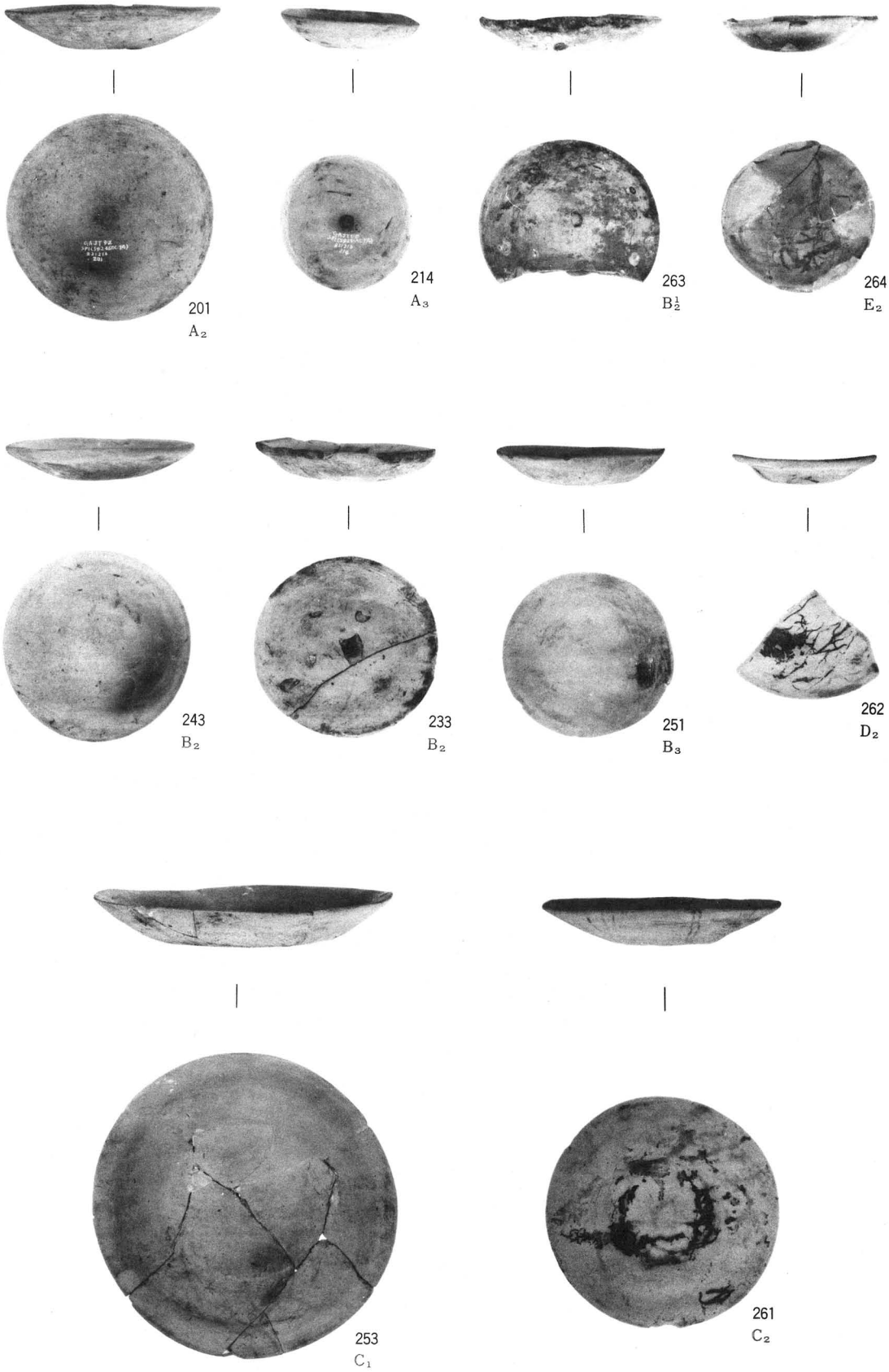
557
軒丸Ⅱα

D区　557：遺構5

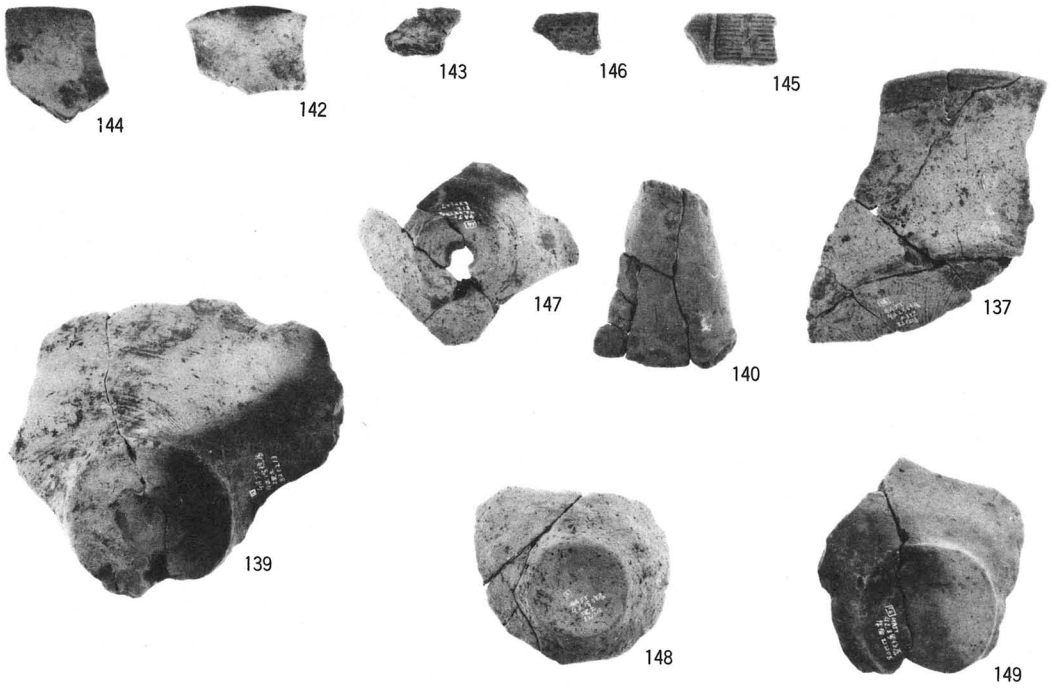


559
軒平Ⅰ

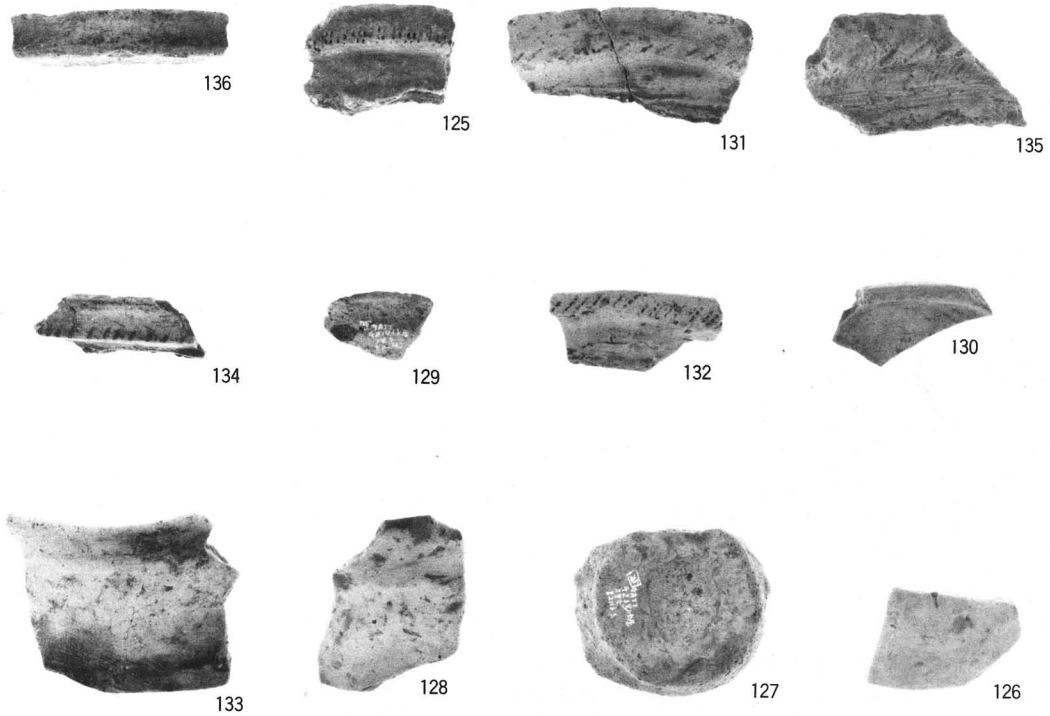
D区　559：遺構5



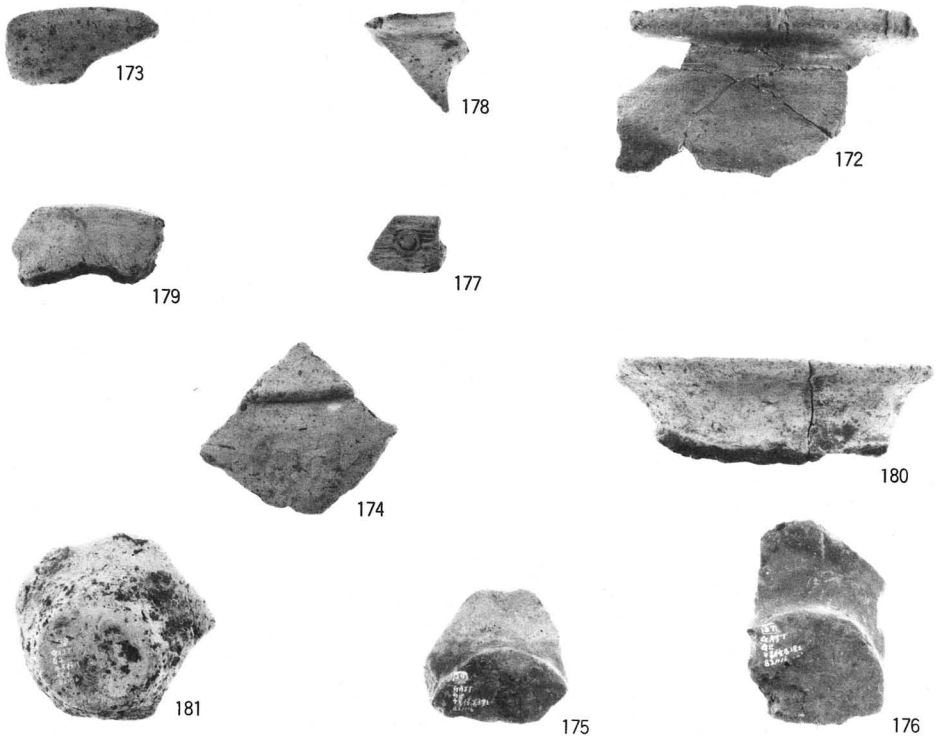
D区　201. 214. 253. 261.：ＳＰ１，ＳＤ２Ｄグリット下層，233. 243. 251. 262. 263. 264：ＳＰ１，ＳＤ２Ｄグリット



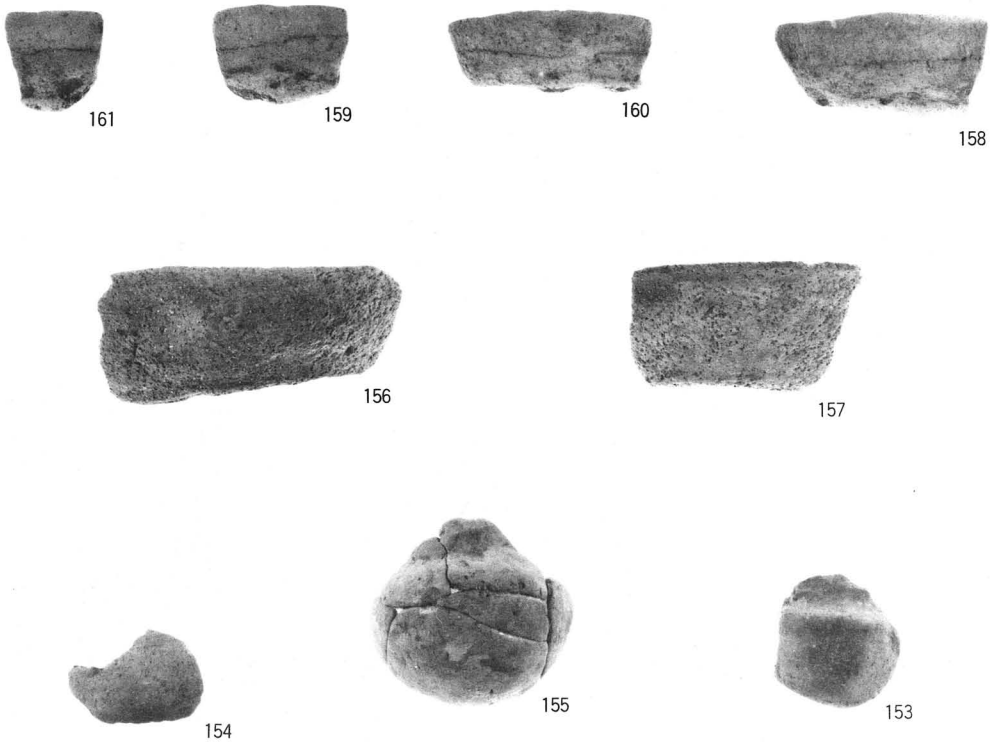
G区　139．148：1号住居埋土，137：2号住居焼土中，140：2号住居床面，142：2号住居，
143．146：2号住居焼土，144．145：2号住居埋土，147：3号住居Pit，149：3号住居床面



G区　128．129：1号住居埋土，125～127．130．132～136：3号住居埋土，131：3号住居床面



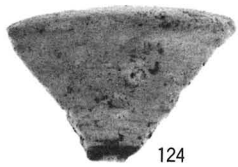
G区　172：4号住居床面，174．178：4号住居，175～177．179．181：4号住居埋土
173：5，6号住居ＳＫＸ，180：5，6号住居土壙1



G区　155：7号住居土壙1，153．154：7号住居土壙2，156：7号住居土壙3，157：7号住居Pit，
158～161：7号住居床面

116

117

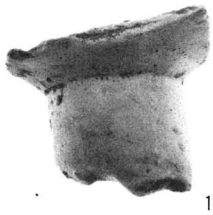

124

118

122

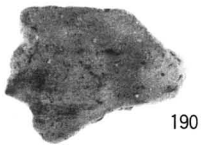
119

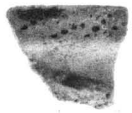
120

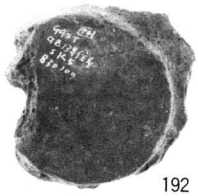

121

G区　116～119．122．124：12号住居北西埋土，120．121：12号住居南西埋土

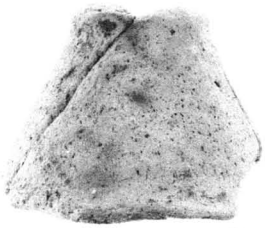
199


190

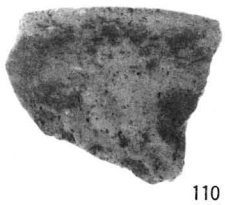

188

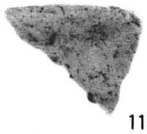

192

187

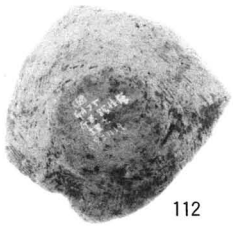

191

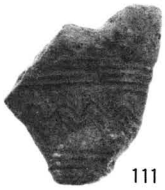
G区　188～191：13号住居土壙２，192：13号住居土壙５，187：13号住居土壙15


110


113

108


112


111

G区　108：８号住居，110～112：８号住居埋土，113：８号住居焼土

301

306

D区　301：表採

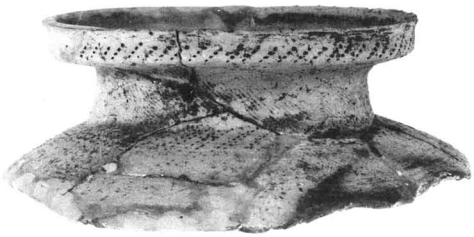
G区　306：８号住居床面

303

304

G区　303．304：7号住居土壙1

114



115

185

G区　114．115：12号住居床面，185：14号住居埋土

107

138

39

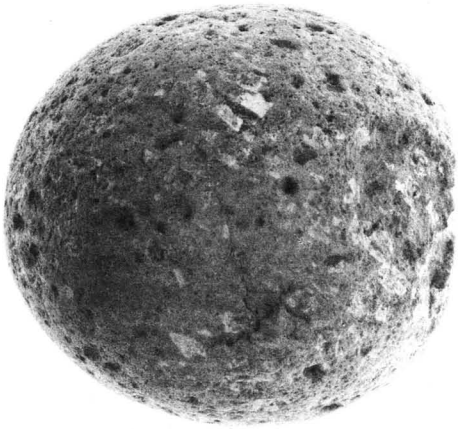
182

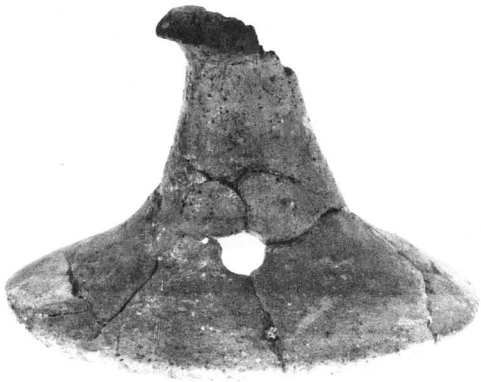
150

103

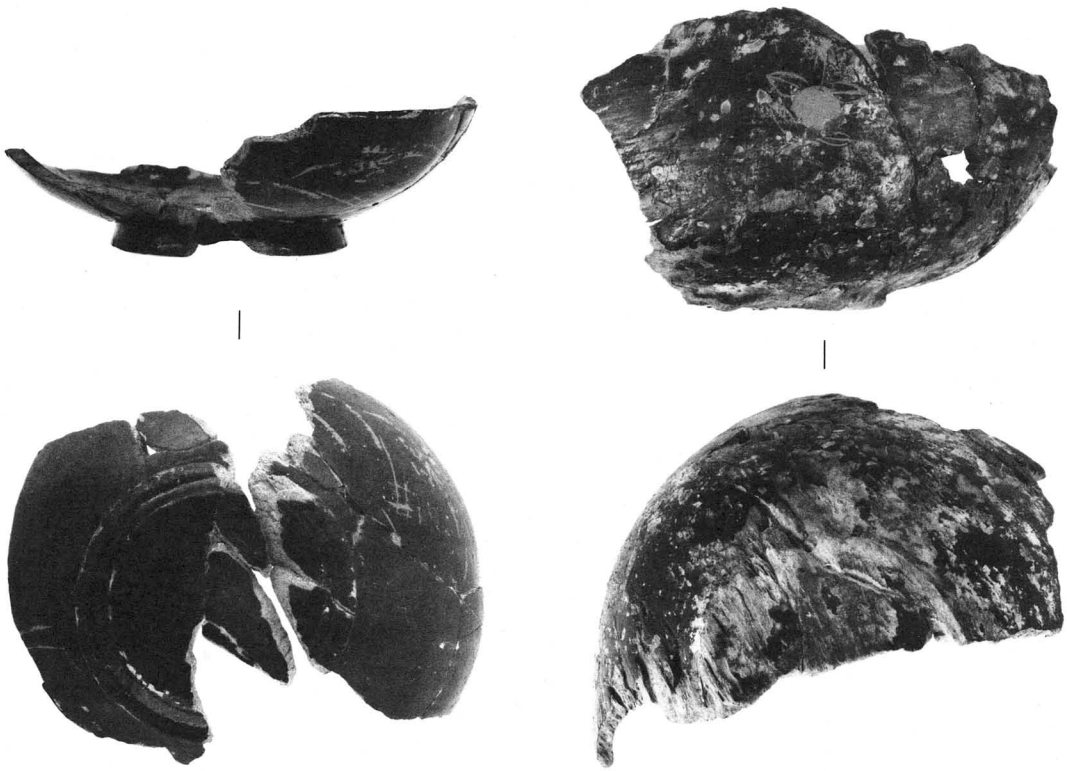
162

184


305


106

G区　39：ＳＤ１，138：２号住居焼土中，150：３号住居床面，182：４号住居，184．305：５，６号住居床面，162：７号住居土壙１，106．107：８号住居，103：13号住居土壙１



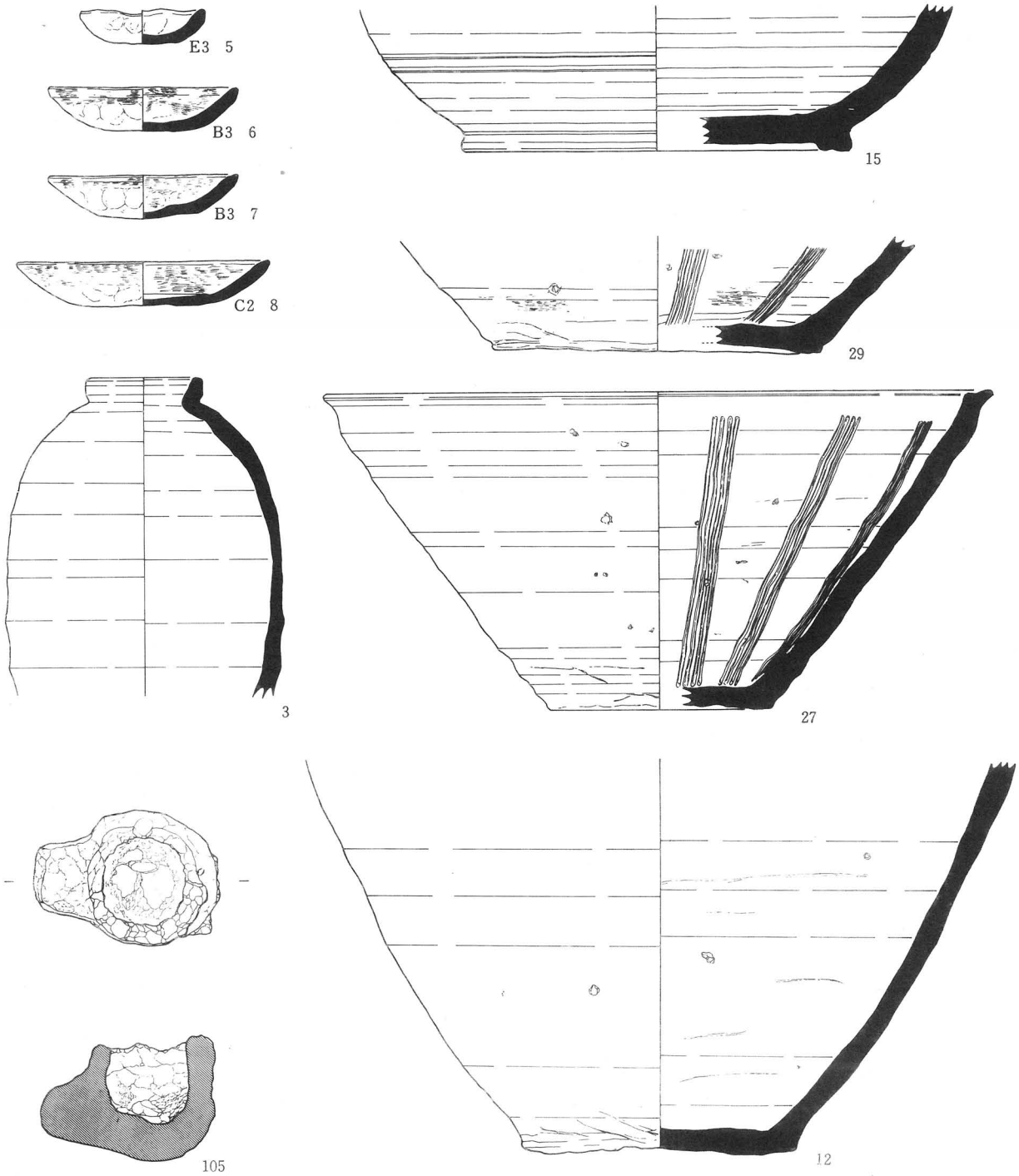
W5　　W2

W6

D区　W5：ＳＰ１Ｂセクション，W2．W6：ＳＰ１Ｄセクション

W3　　W8

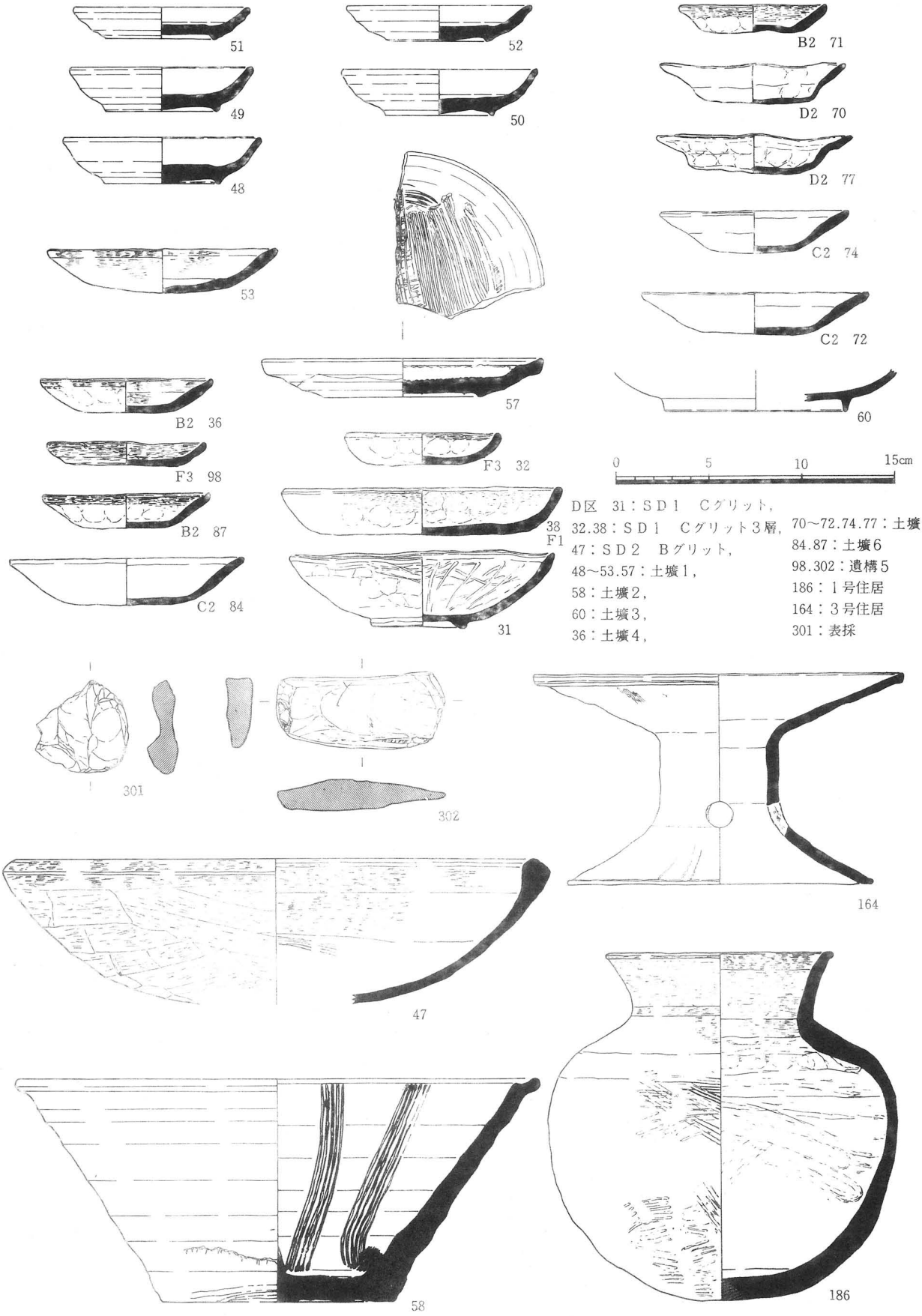
D区　W8：ＳＰ１Ｃセクション，W3：ＳＤ１Ｂグリット



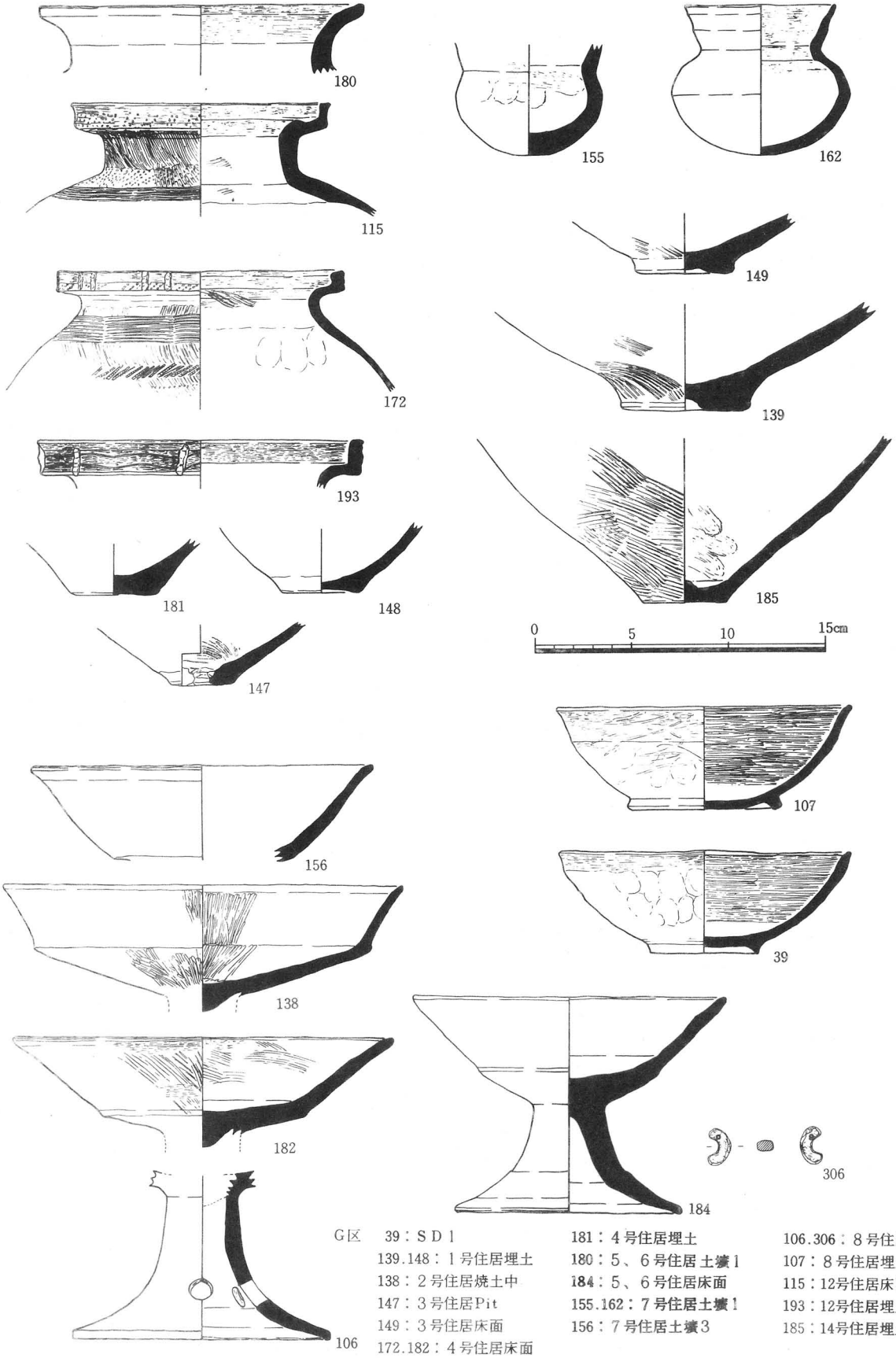
D区　池(ＳＰ１)

3.5.6.7.8：Ａセクション西
105：Ａセクション
12：Ｂセクション西
15：Ｃセクション
27：池内
29：池内１層

0　10　20cm

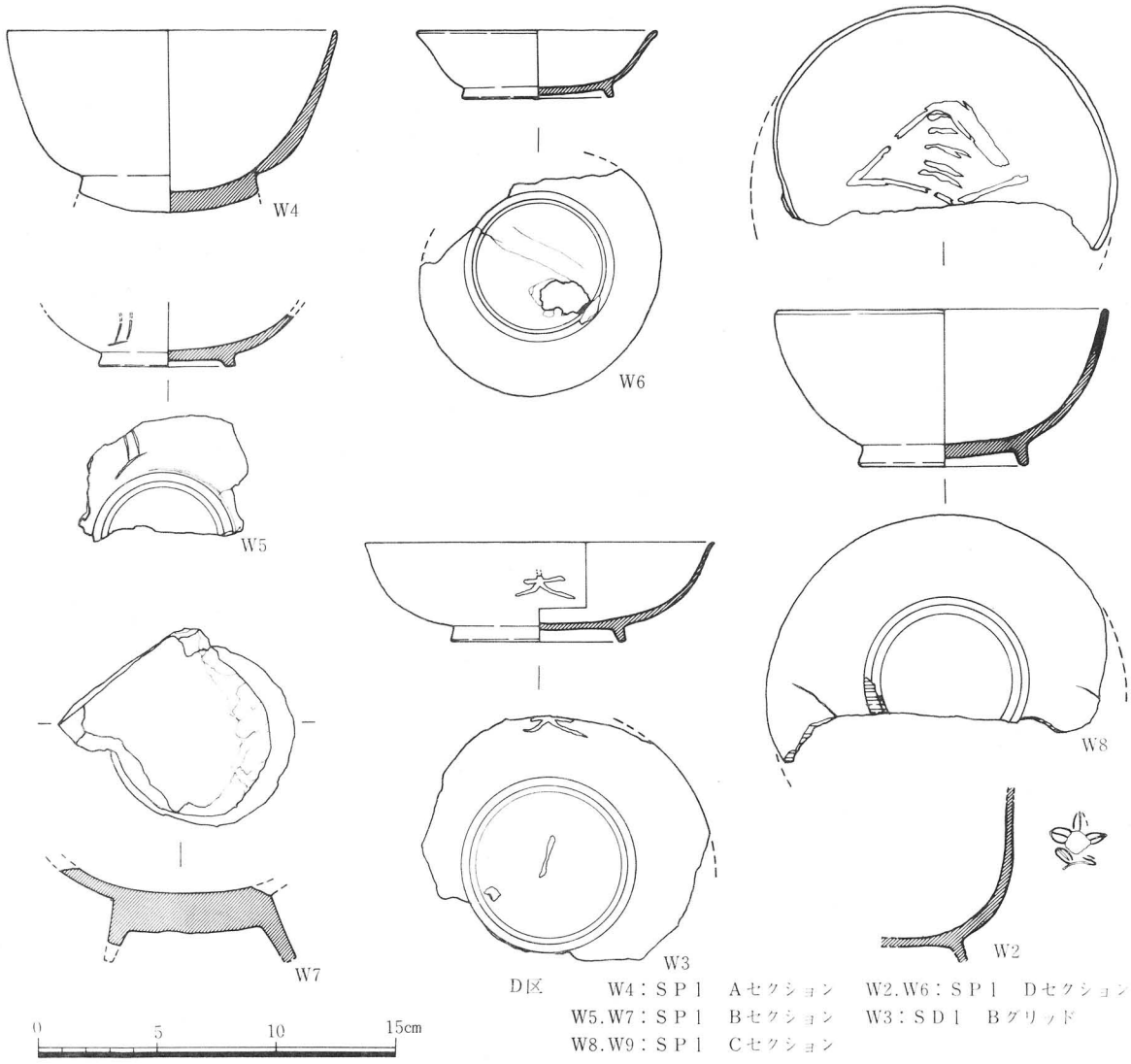


D区　31：ＳＤ１　Ｃグリット，
32.38：ＳＤ１　Ｃグリット３層，
47：ＳＤ２　Ｂグリット，
48～53.57：土壙１，
58：土壙２，
60：土壙３，
36：土壙４，
70～72.74.77：土壙５
84.87：土壙６
98.302：遺構５
186：１号住居
164：３号住居
301：表採

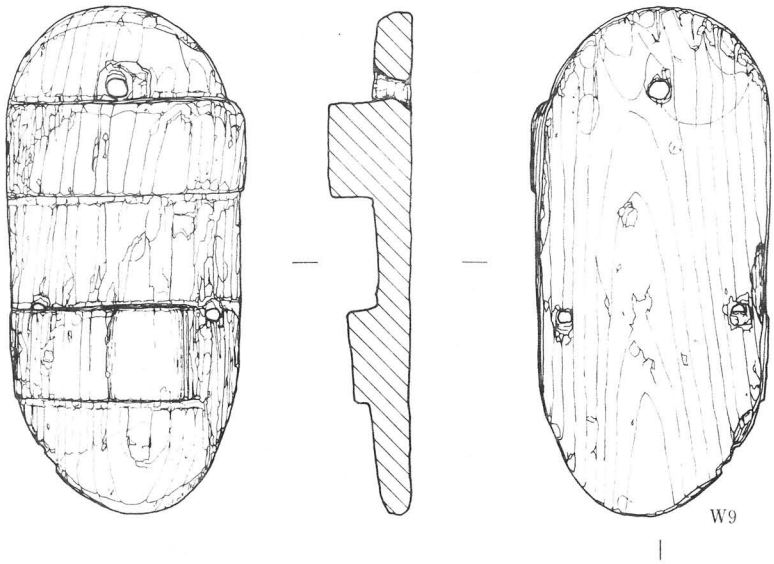


G区　39：ＳＤ１
139.148：１号住居埋土
138：２号住居焼土中
147：３号住居Pit
149：３号住居床面
172.182：４号住居床面
181：４号住居埋土
180：５、６号住居土壙１
184：５、６号住居床面
155.162：７号住居土壙１
156：７号住居土壙３
106.306：８号住居床面
107：８号住居埋土
115：12号住居床面
193：12号住居埋土
185：14号住居埋土

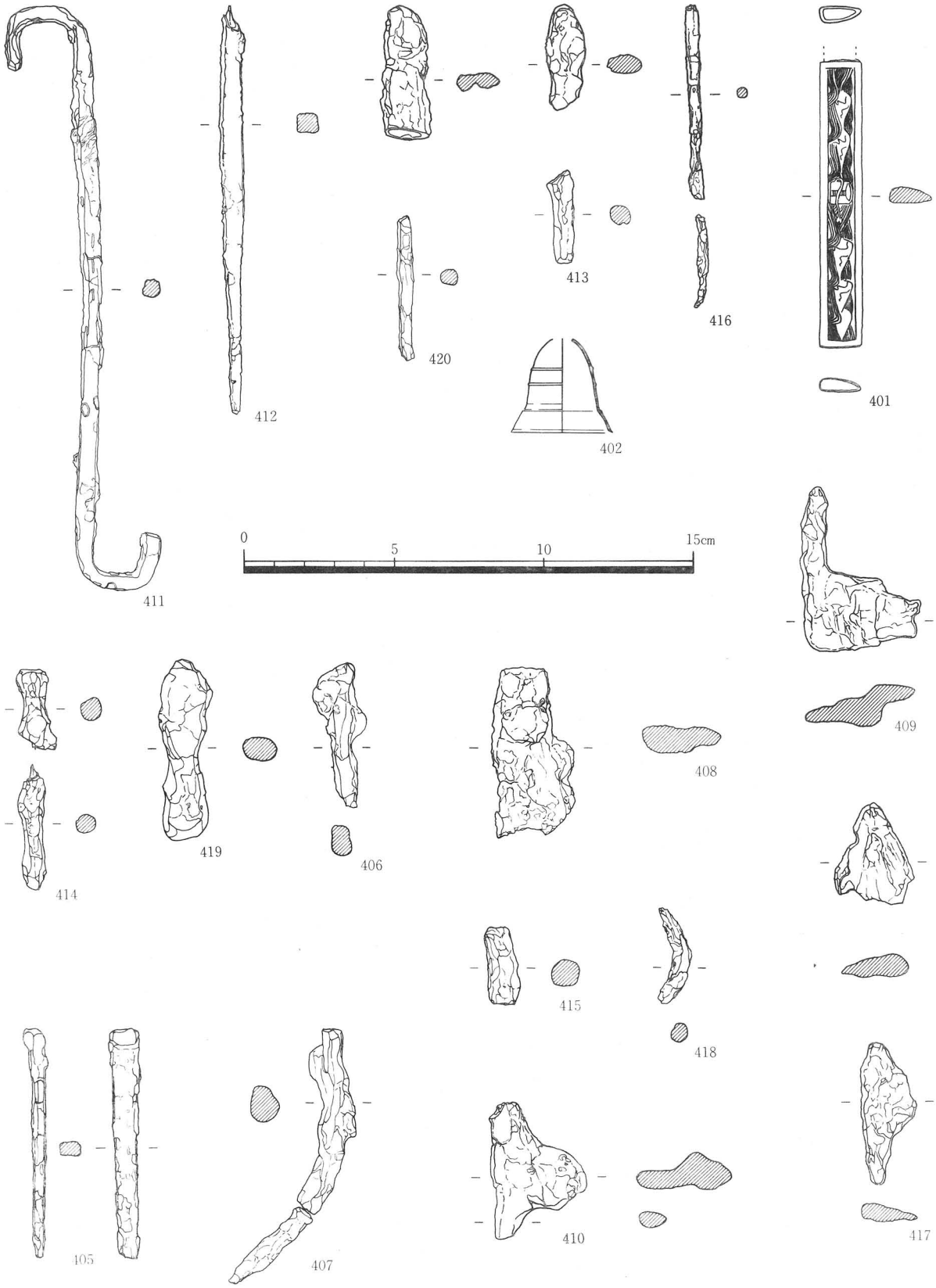
図版五四　慈恩寺遺跡（遺物実測図―漆器椀・木製品）



D区　W4：ＳＰ１　Ａセクション　W2.W6：ＳＰ１　Ｄセクション
W5.W7：ＳＰ１　Ｂセクション　W3：ＳＤ１　Ｂグリッド
W8.W9：ＳＰ１　Ｃセクション



図版五五　慈恩寺遺跡（遺物実測図―鉄製品）

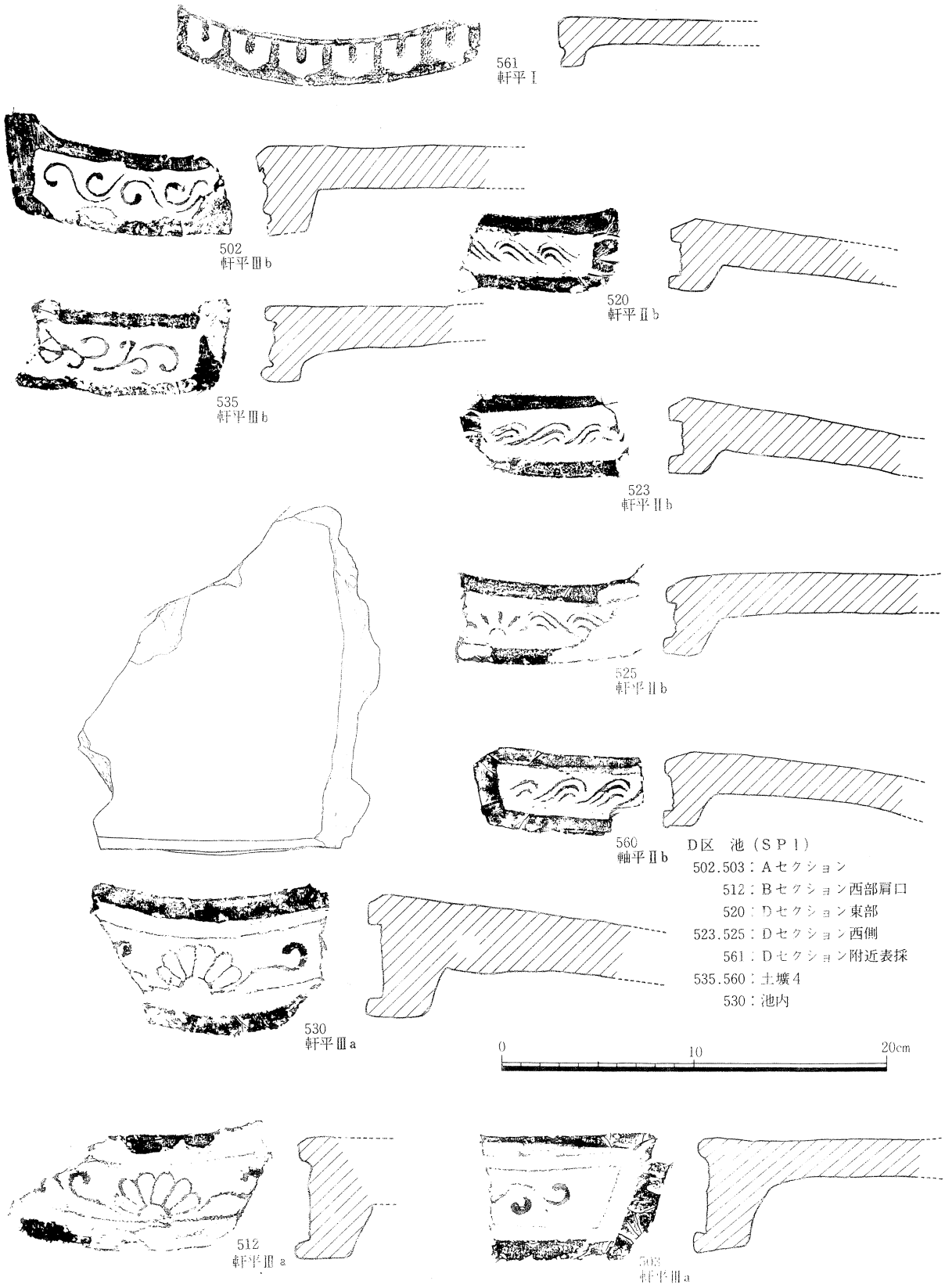


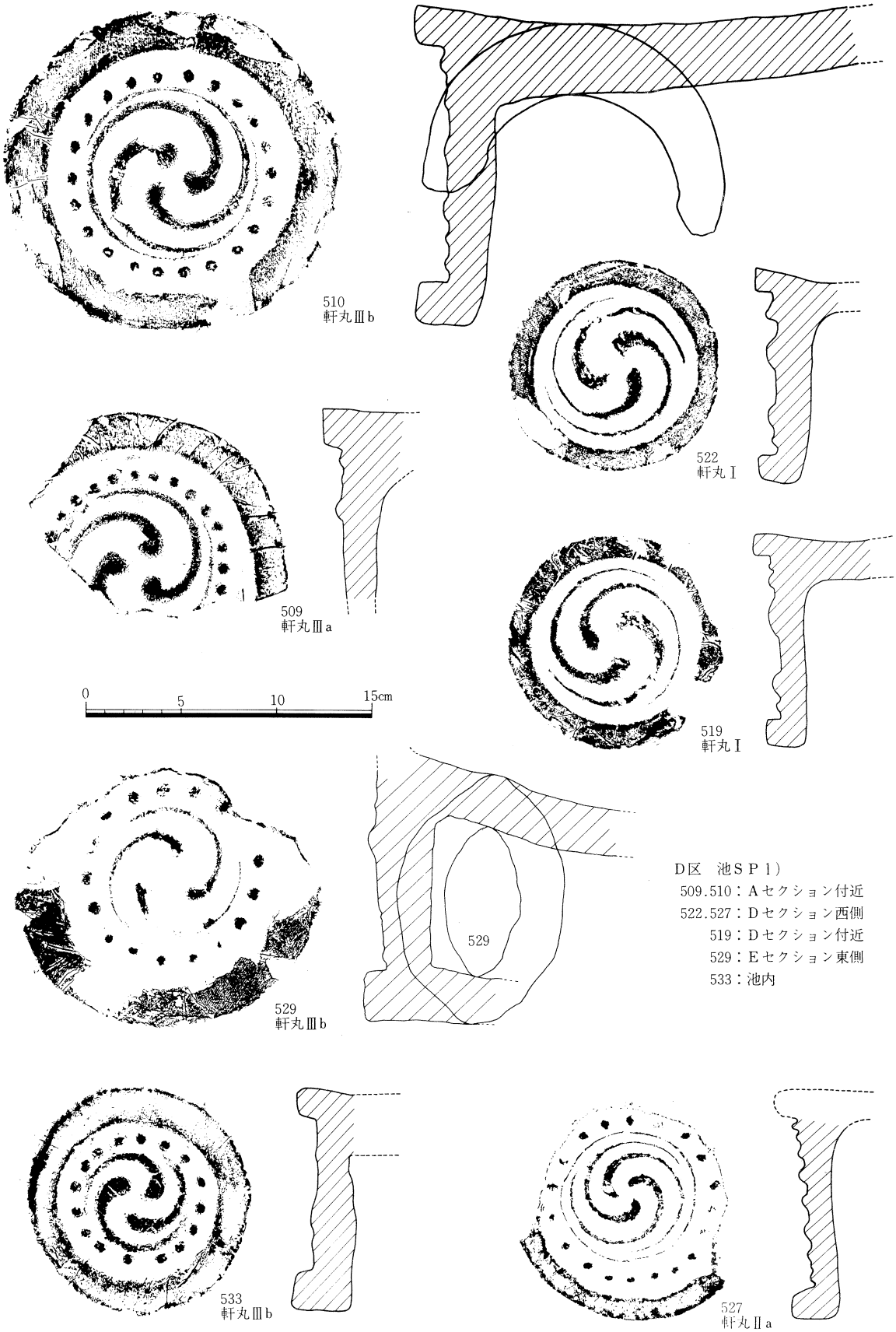
D区　401：ＳＤ２　Ｃグリット
412：ＳＤ２　Ｄグリット
410：土壙５
411：ＳＰ１　Ａセクション

Ｇ区　402：東部断面
405.407.408.409.417～420：ＳＤ１
406：５、６号住居
413.414：ＳＫＸ１
415.416：井戸１

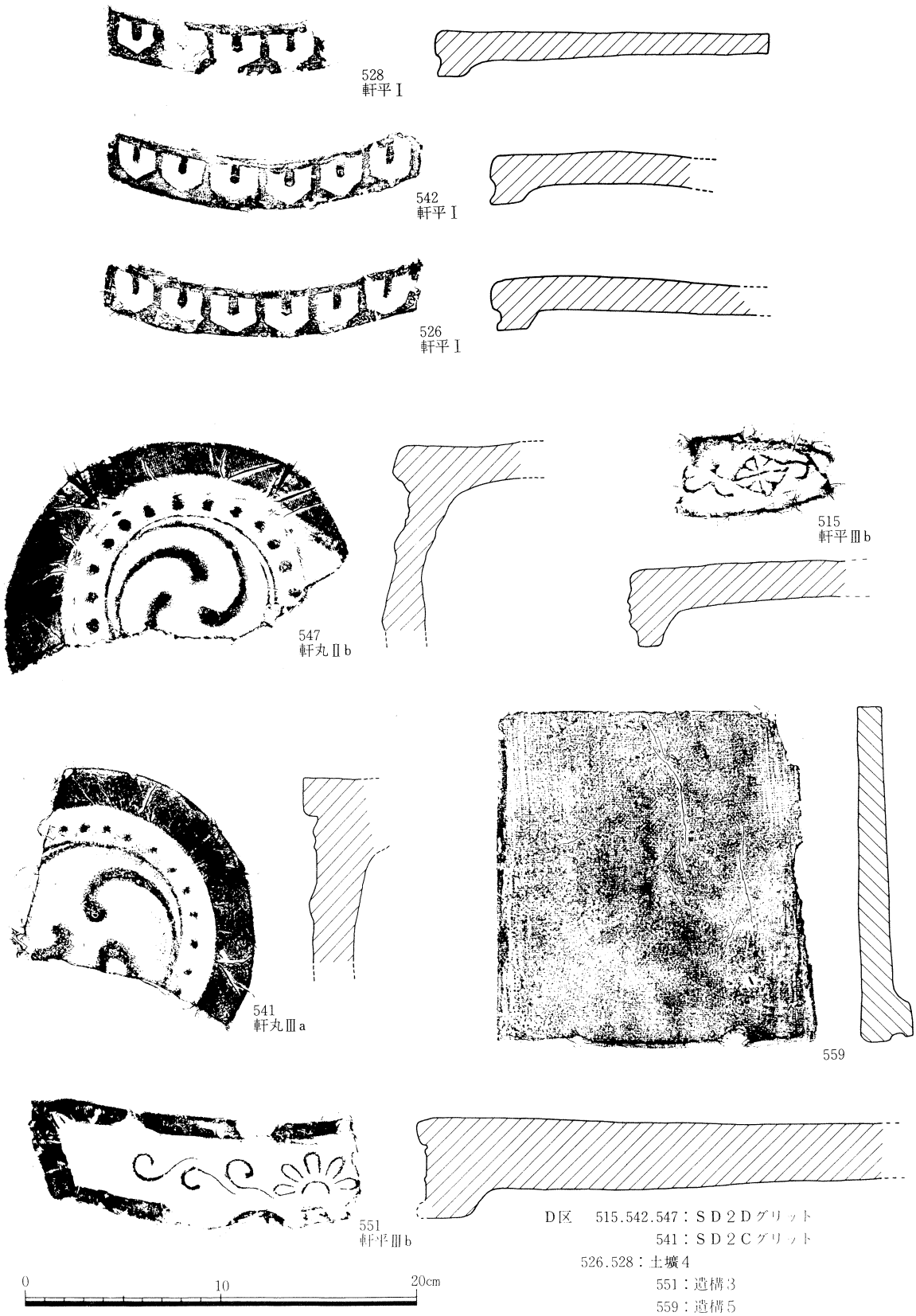
図版五六　慈恩寺遺跡（遺物実測図―瓦）

D区　501：池（SP1）Aセクション


561
軒平Ⅰ
502
軒平Ⅲb
520
軒平Ⅱb
535
軒平Ⅲb
523
軒平Ⅱb
525
軒平Ⅱb
560
軒平Ⅱb
530
軒平Ⅲa
D区　池（SP1）
502.503：Aセクション
512：Bセクション西部肩口
520：Dセクション東部
523.525：Dセクション西側
561：Dセクション附近表採
535.560：土壙4
530：池内
0
10
20cm
512
軒平Ⅲa
503
軒平Ⅲa



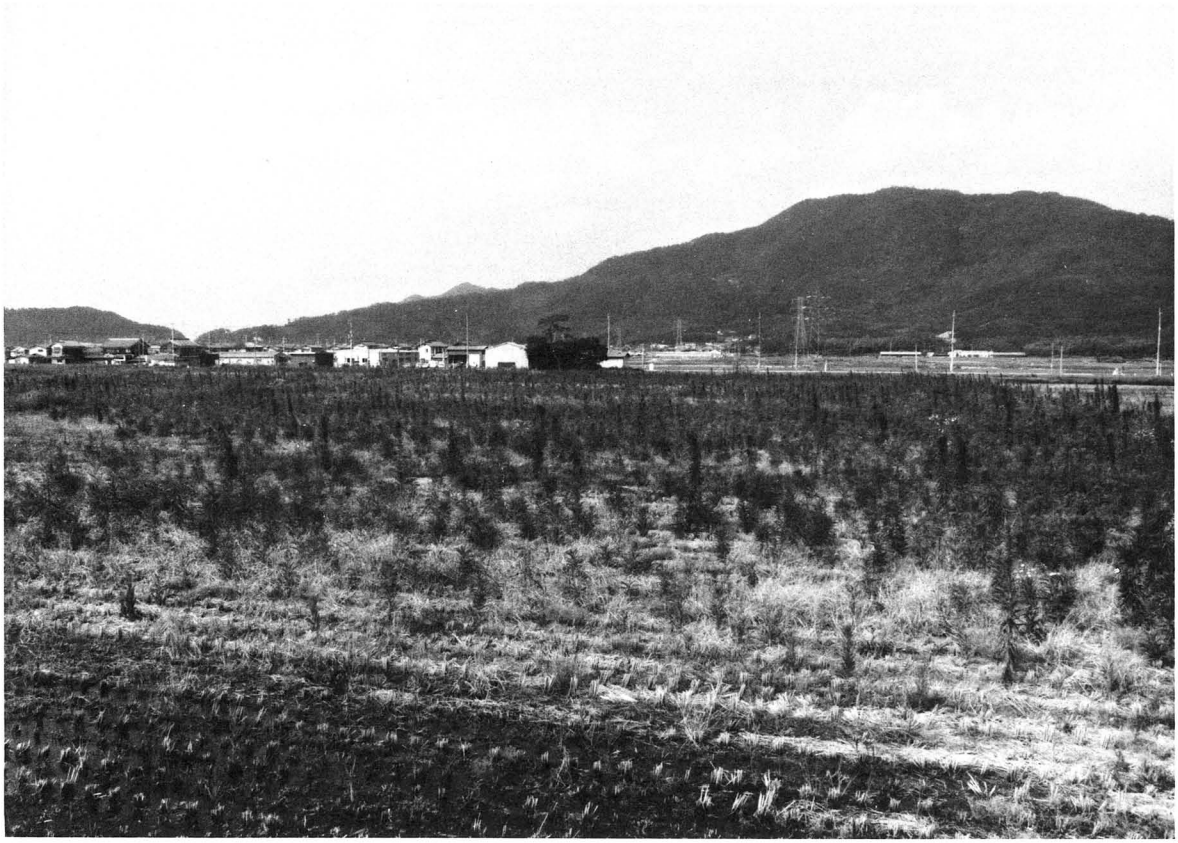
D区　池ＳＰ１）
509.510：Ａセクション付近
522.527：Ｄセクション西側
519：Ｄセクション付近
529：Ｅセクション東側
533：池内



D区　515.542.547：ＳＤ２Ｄグリット
541：ＳＤ２Ｃグリット
526.528：土壙４
551：遺構３
559：遺構５

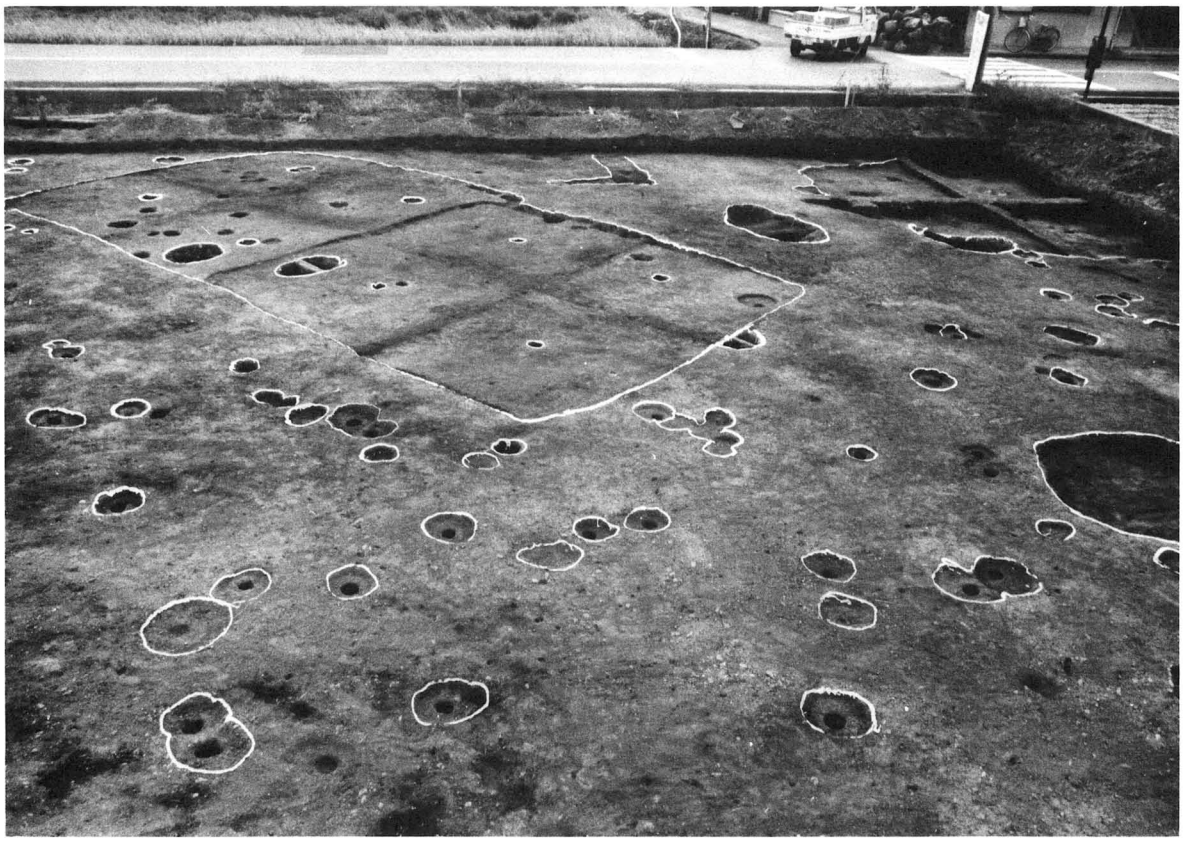
図版六〇　小中遺跡（遺構）

遺　跡　遠　景（南から）

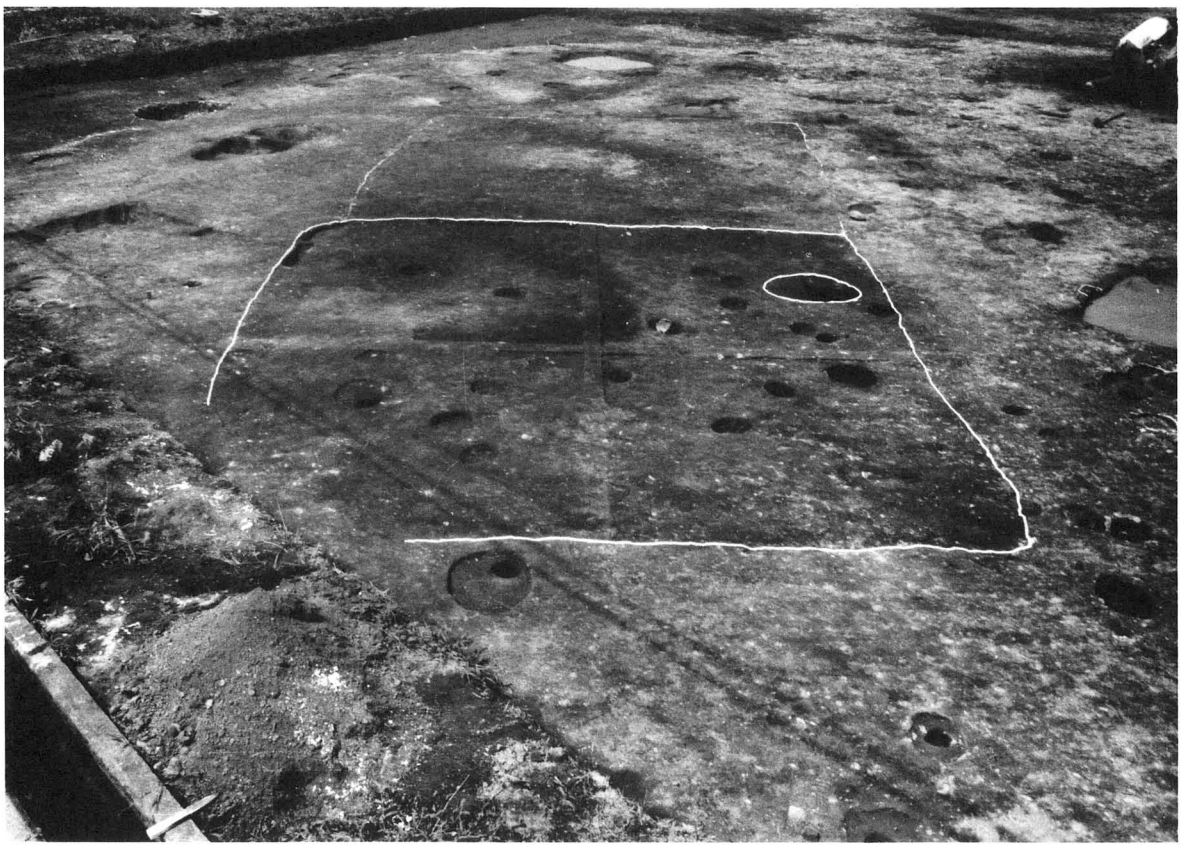


A区　調査前（西から）

図版六一　小中遺跡（遺構）



A－1　西部（東から）



A－1　1号住居（南から）

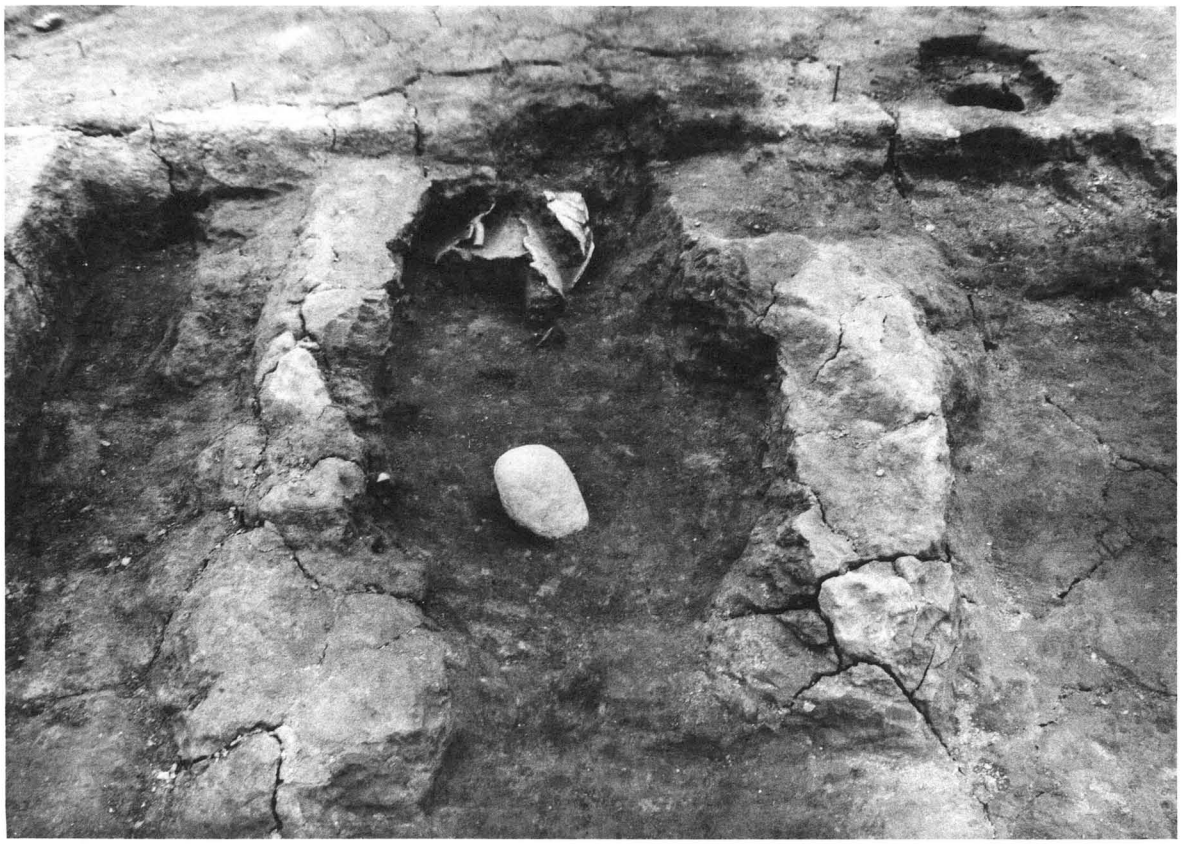
A－1　2号住居（東から）

A－2　全景（北から）

A－2　ＳＲ１遺物出土状況（北から）

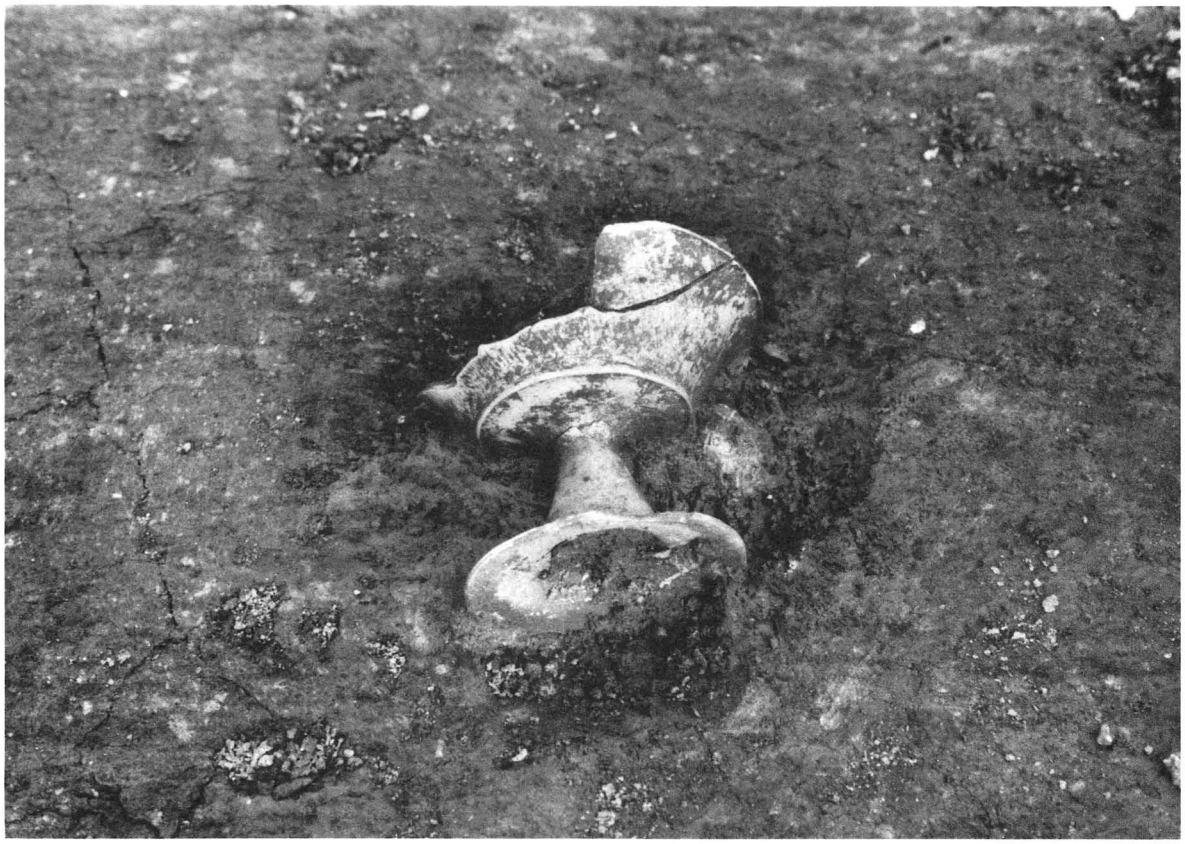
A－4　全景（北東から）

A－6　12号住居（南から）



A－6　12号住居カマド（南から）

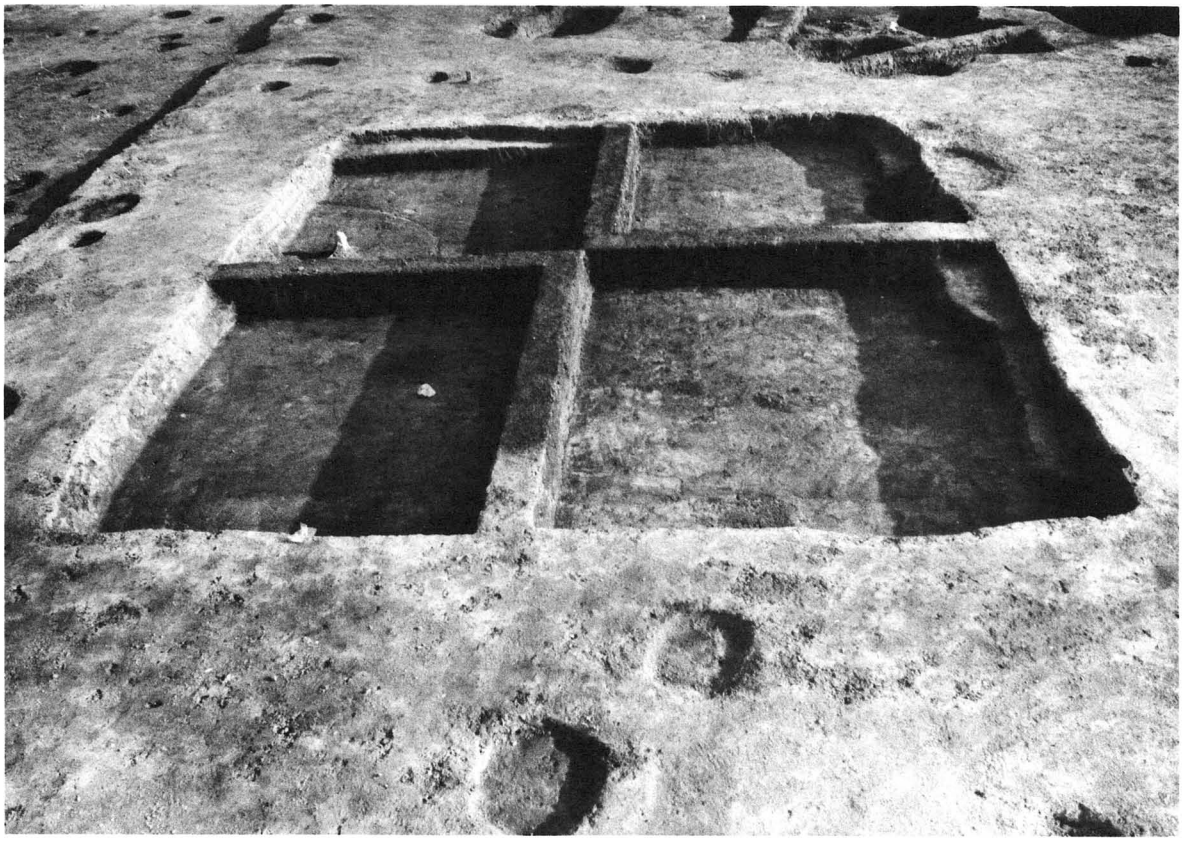
A－6　12号住居遺物出土状況



A－6　12号住居遺物出土状況

A－6　SR1（南から）

A－8　全景（東から）

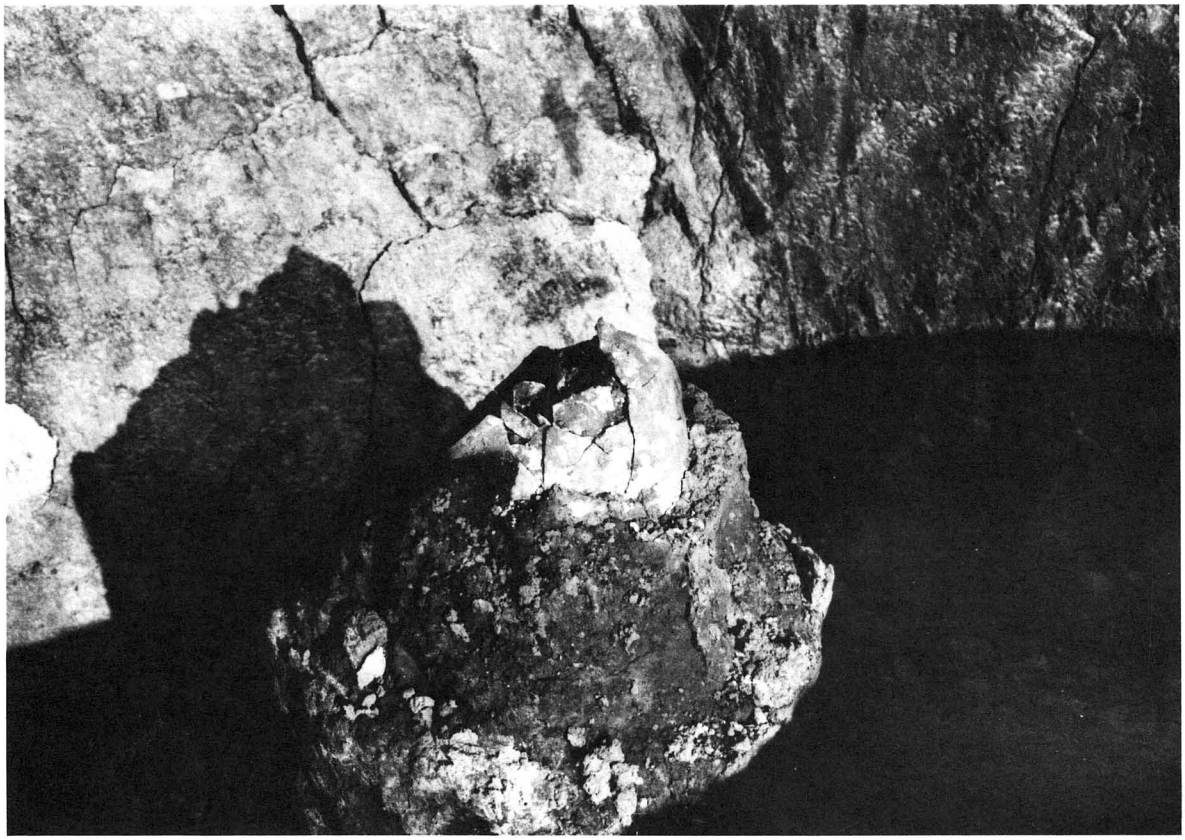


A－8　14号住居（南から）

A－8　15号住居（北から）

A－8　SX1，2（北から）

A－8　SX3（南から）

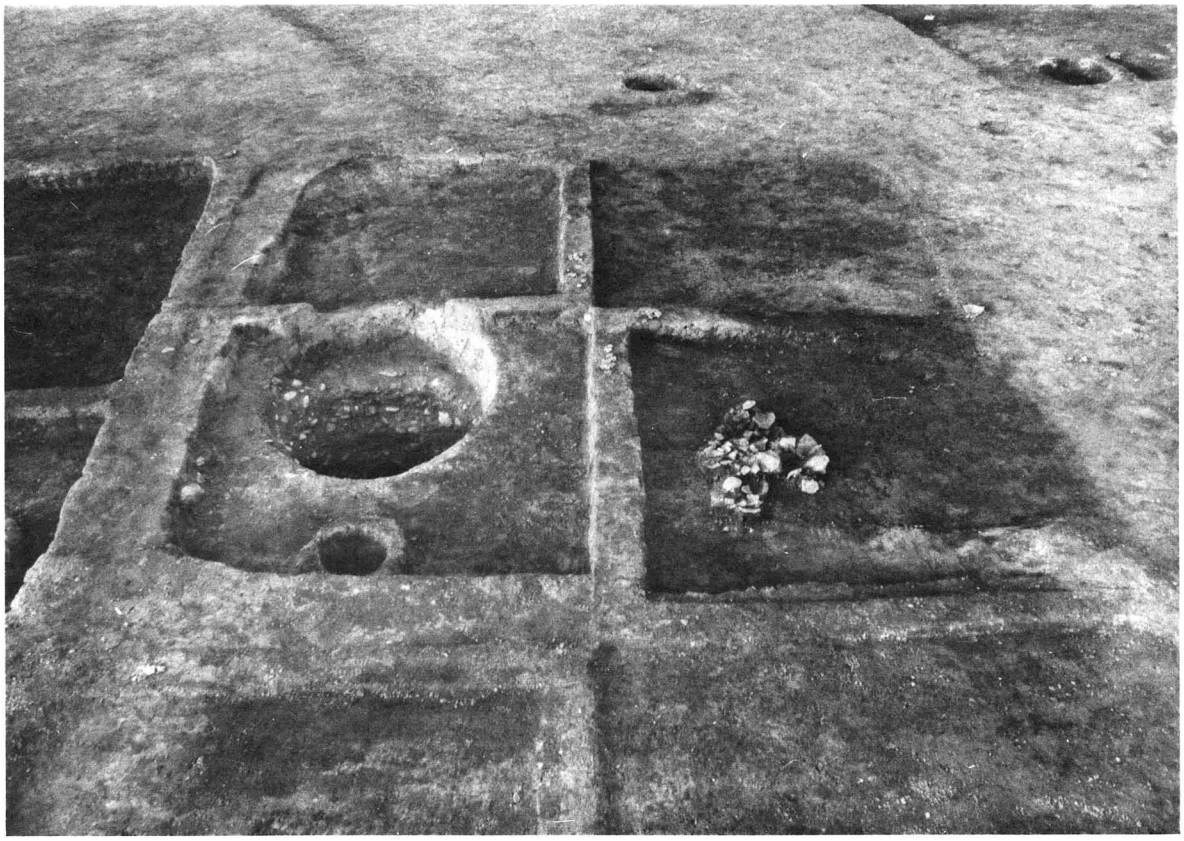


A－8　ＳＸ２遺物出土状況

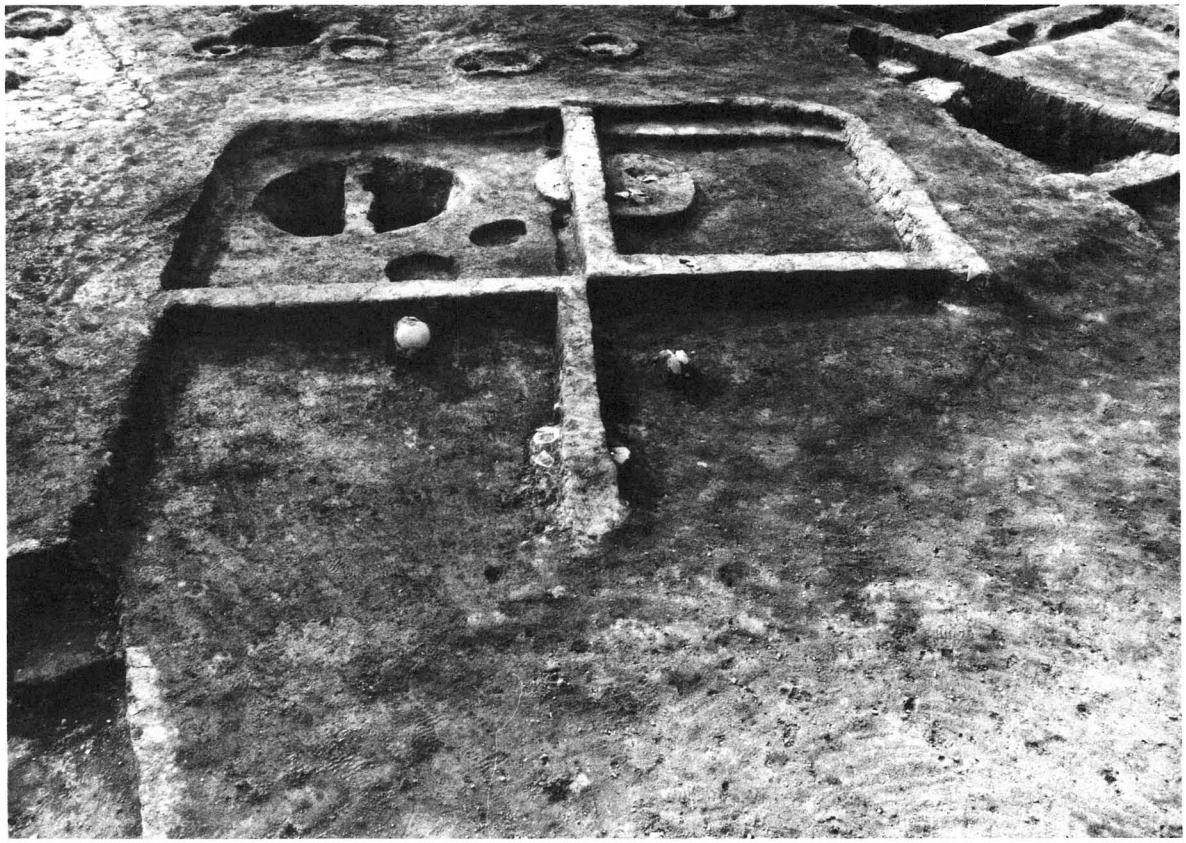
B－1　北半全景（南東から）

B－1　南半全景（北から）

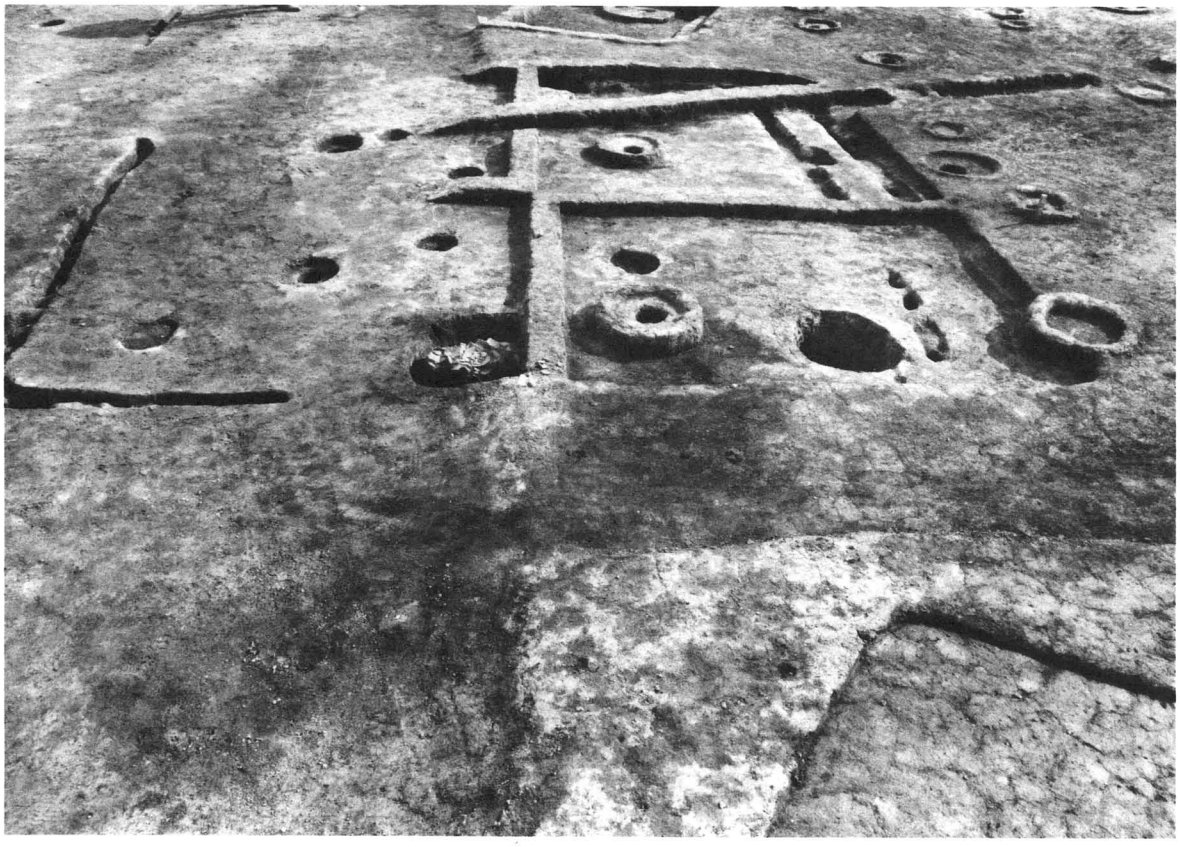
B－1　南半全景（南から）



B－1　34号住居（南から）

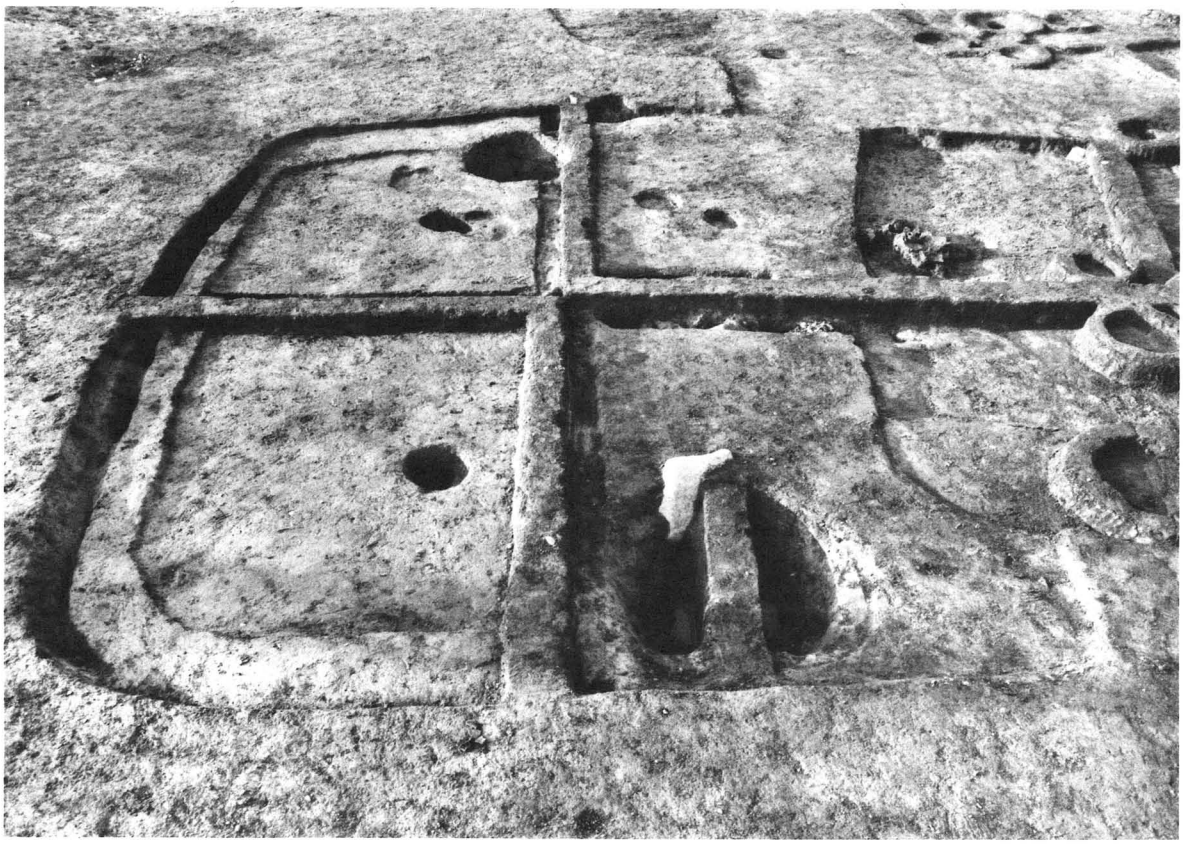


B－1　37号住居（東から）

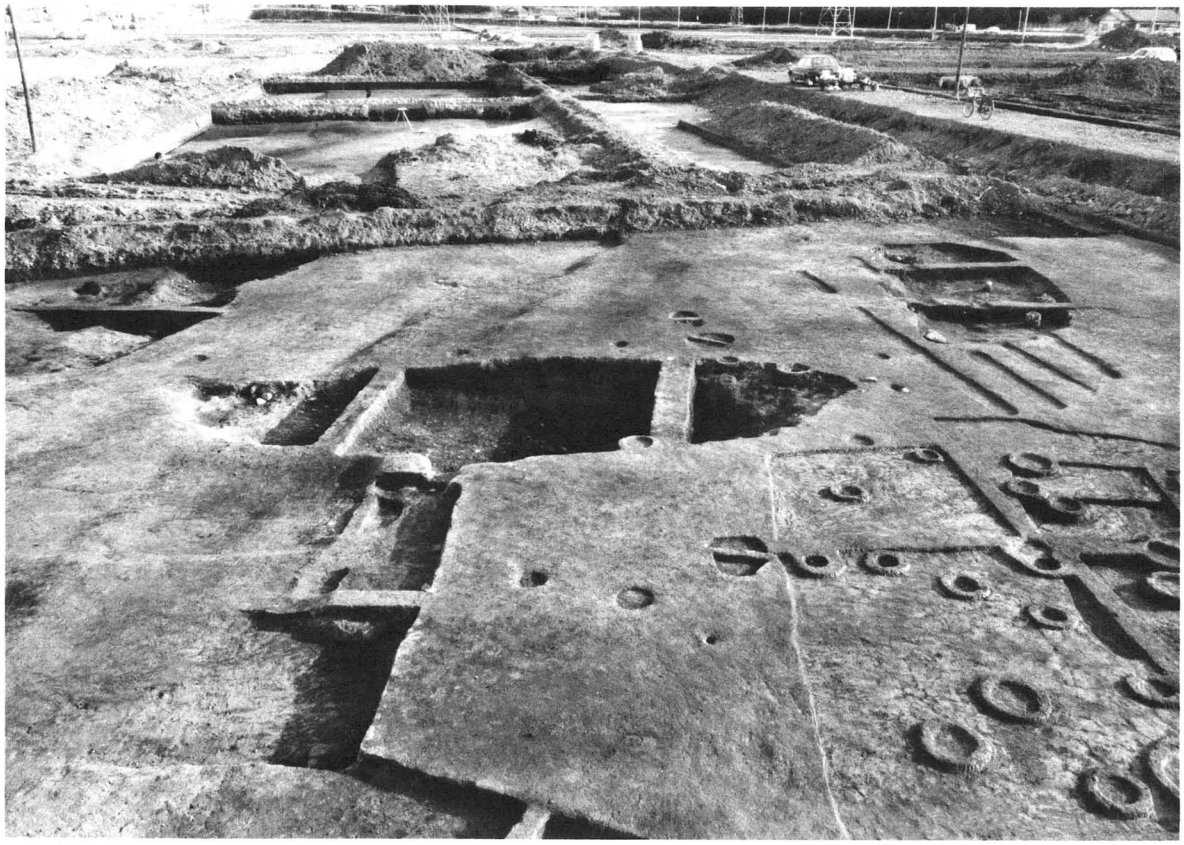


B－1　39号住居（北から）

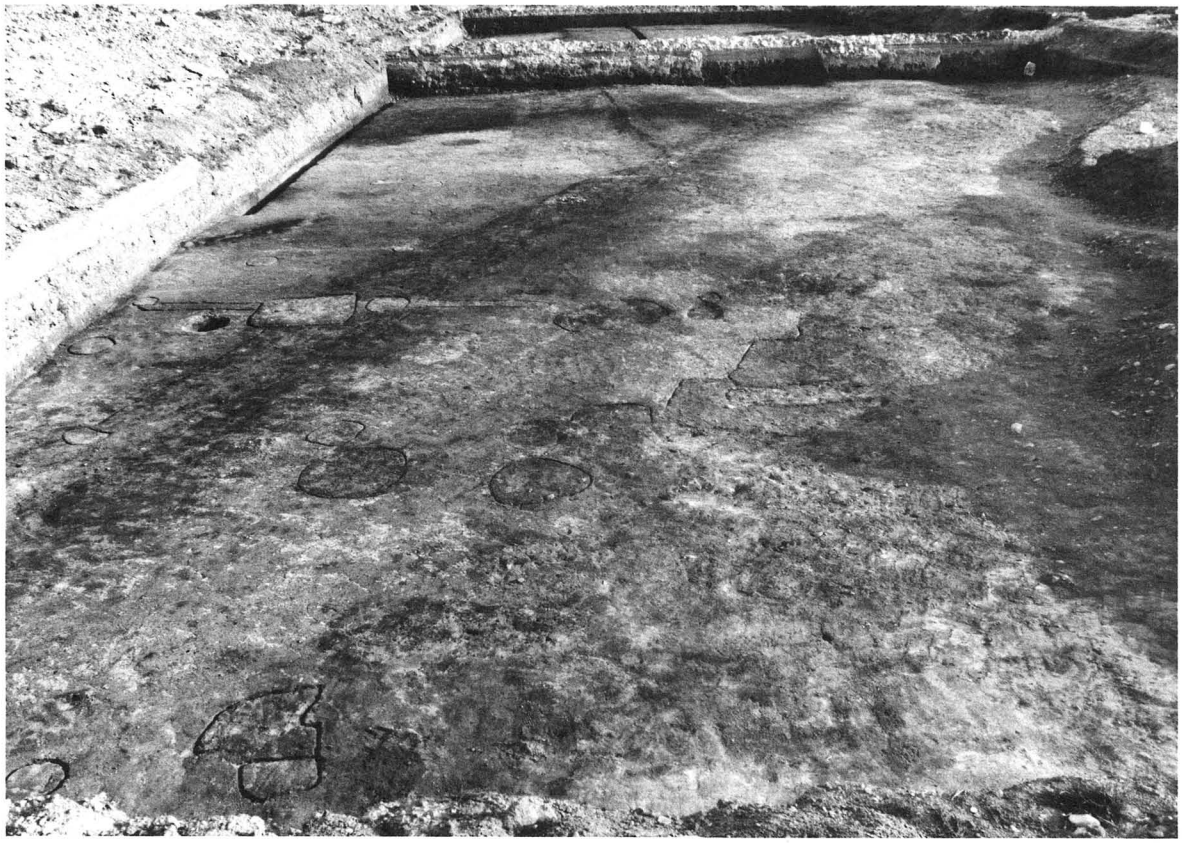
B－1　40号住居（南から）



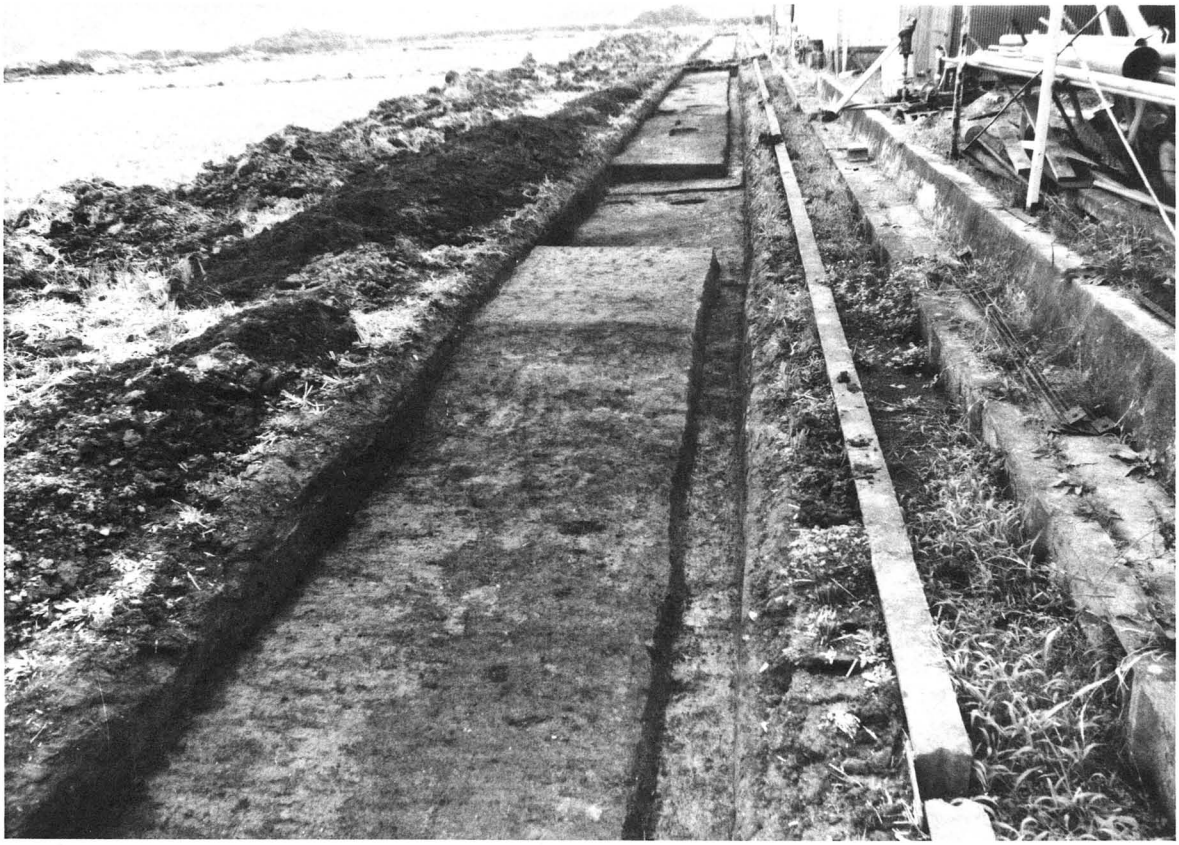
B－1　41号住居（南から）



B－1　SX4（北から）

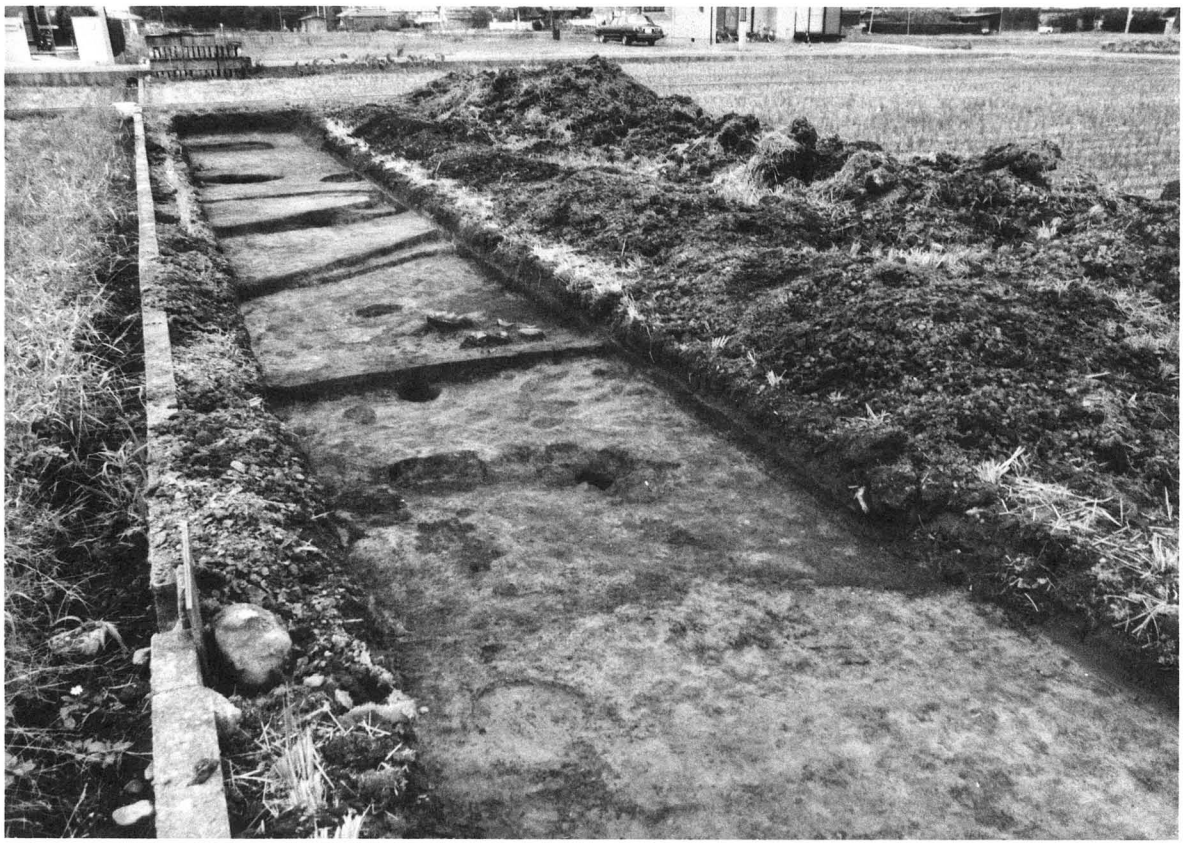


B－3　遺構検出状況（北から）



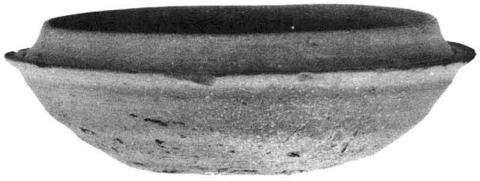
T・31－1（北から）

図版七五　小中遺跡（遺構）



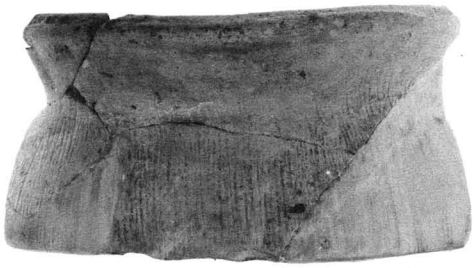
T・31－2（南から）

T・31－3（西から）

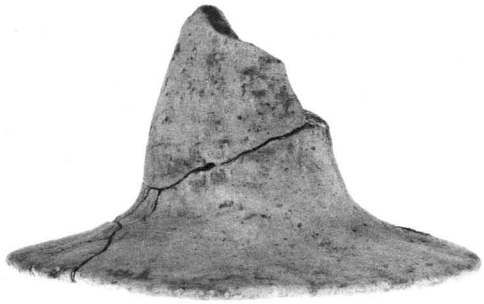


1

4



6



5

3

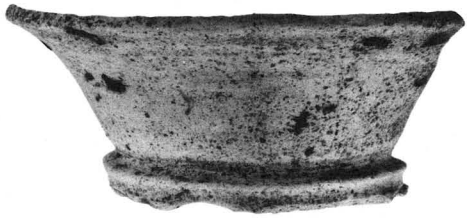
2

1：A－1　1号住居土壙，2：A－1　2号住居土壙，6：A－1　2号住居焼土，
4：A－1　3号住居，3．5：A－1　3号住居埋土

7

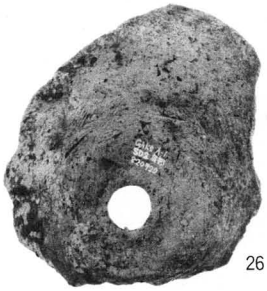
12

8



13

19



26

9

7．8．12．19：A－1　SD2 2層，9．13：A－1　SD2 3層，26：A－1　SD2肩部

14

11

22

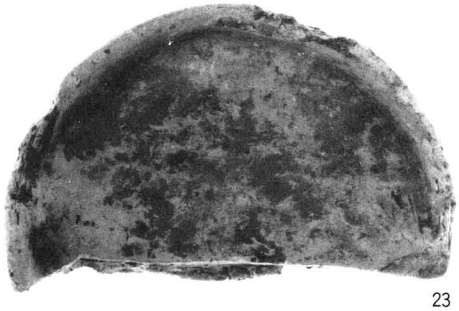
25

20

21

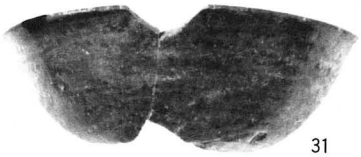
11．21．25：A－1　SD2 2層，20．22：A－1　SD2 3層，14：A－1　SD2肩部

24

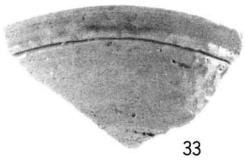


23

24：A－1　SD2 2層，23：A－1　SD2 3層

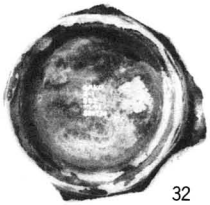


31

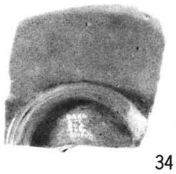


33

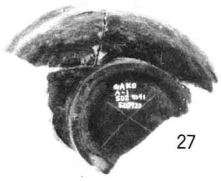
28



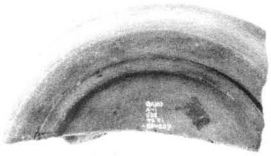
32



34



27



30

29

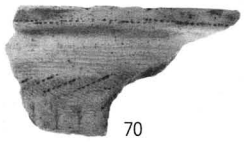
27～34：A－1　SD2 1層

46

48

47

49

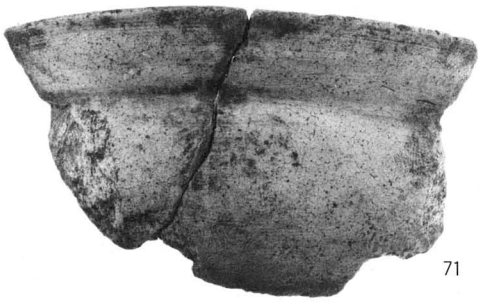


70

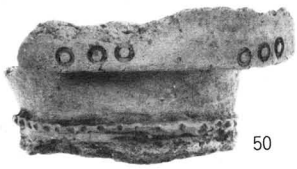
59

60

74

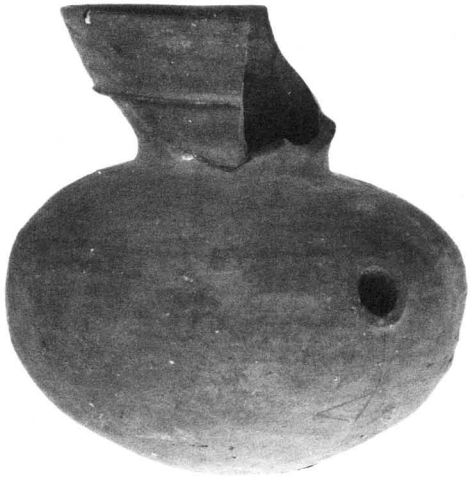


71



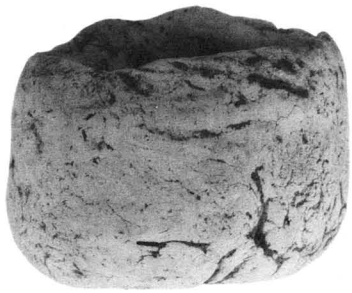
50

46．59．60：A－2　SR1 1層，47．49．74：A－2　SR1 2層，
48．50．70：A－2　SR1 3層，71：A－4　SR1 3層



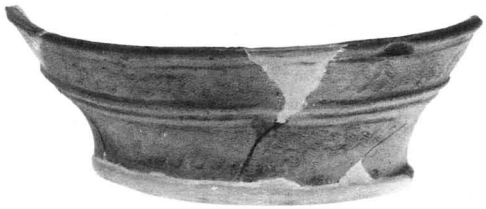
44

73



72

56



45

52

45．73：A－2　SR1 2層，52．56．72：A－2　SR1 3層，44：A－6　SR1 3層

53

54

55

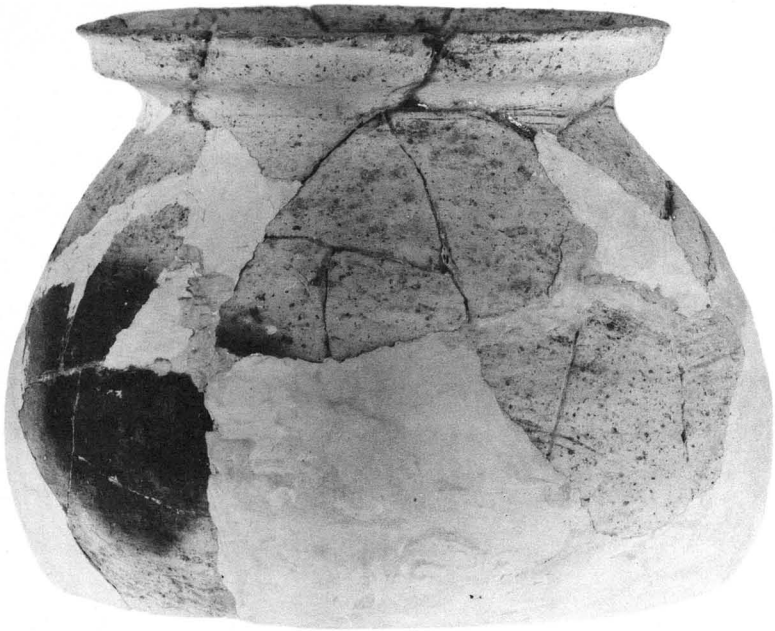
53．54：A－2　SR1 2層，55：A－4　SR1 2層

69

64

58

67



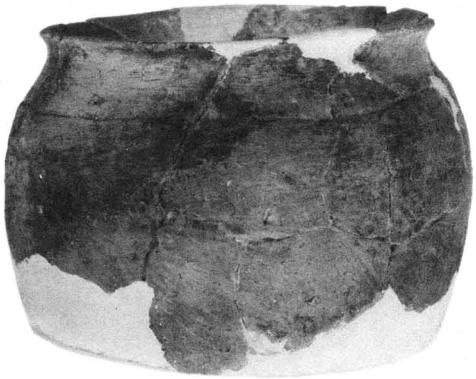
57

57. 64. 67. 69：A－2　SR1 2層，58：A－6　SR1 3層

36

35

37

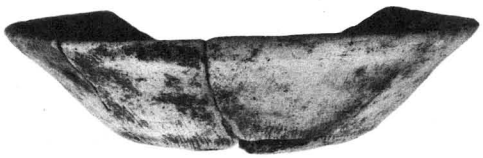


38

39

40

35：A－6　12号住居埋土，36～40：A－6　12号住居床面



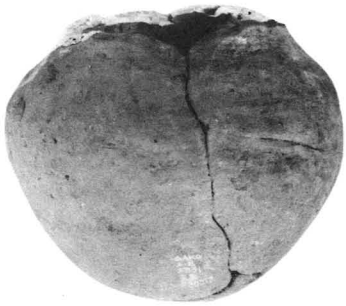
41

42

43

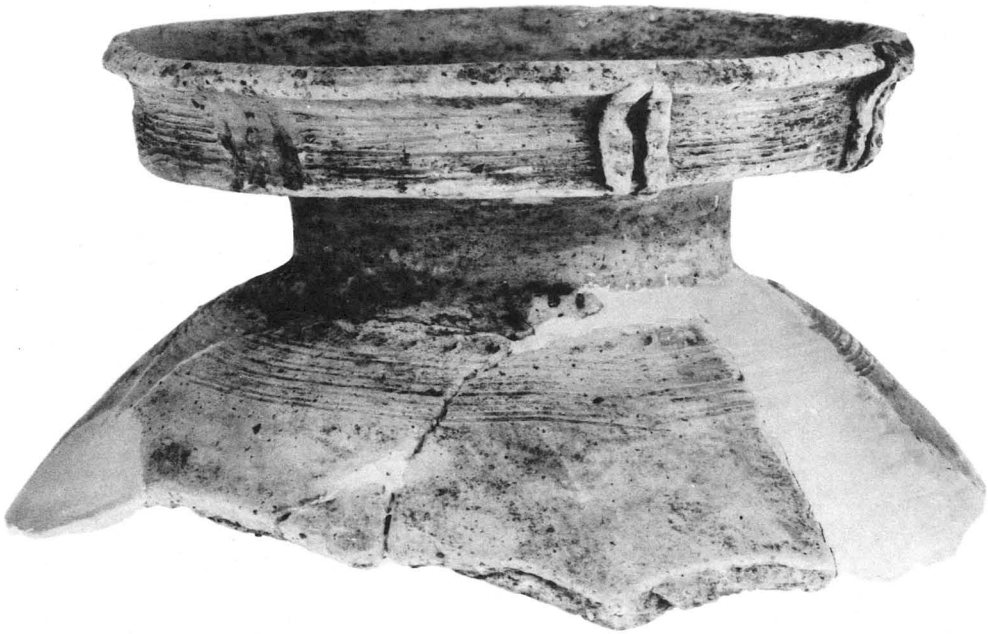
42：A－6　12号住居床面，41．43：A－6　12号住居カマド

75



76

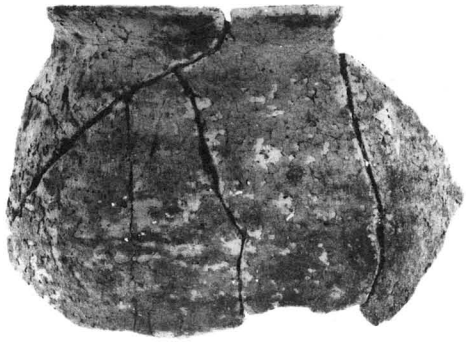
79



80

79：A－8　16号住居埋土，80：A－8　17号住居床面，75．76：A－8　20号住居床面

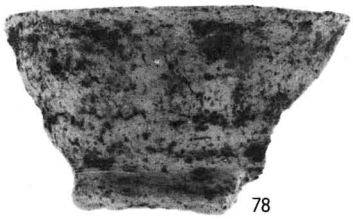
81



82

85

86



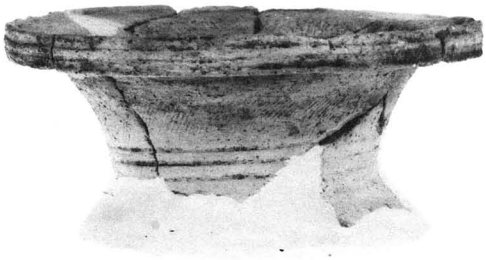
78

83

84

77

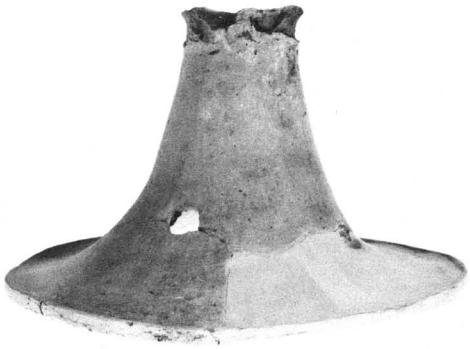
84．85：A－8　14号住居床面，86：A－8　19号住居埋土，82：A－8　19号住居床面，
78．81：A－8　20号住居床面，83：A－8　22号住居埋土，77：A－8　23号住居床面



87

89

88



90

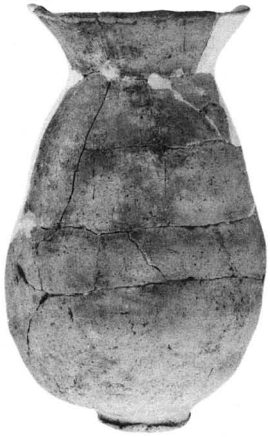
92

91

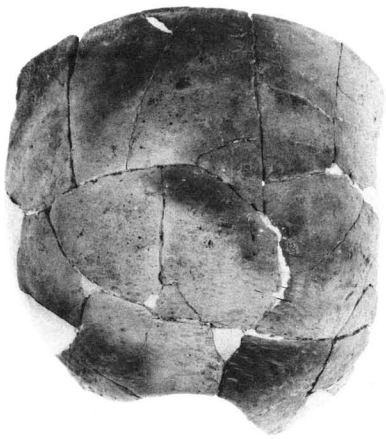
93

94

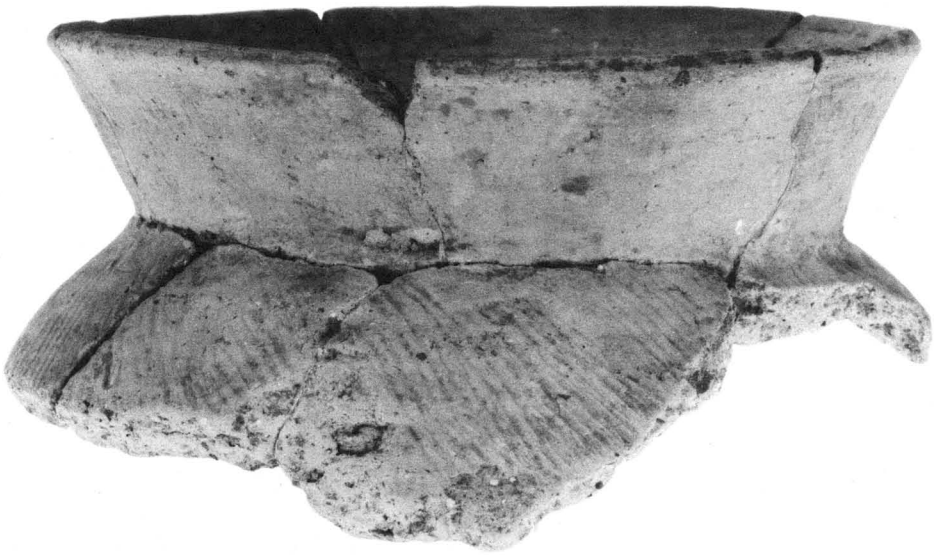
87～94：A－8　SX2



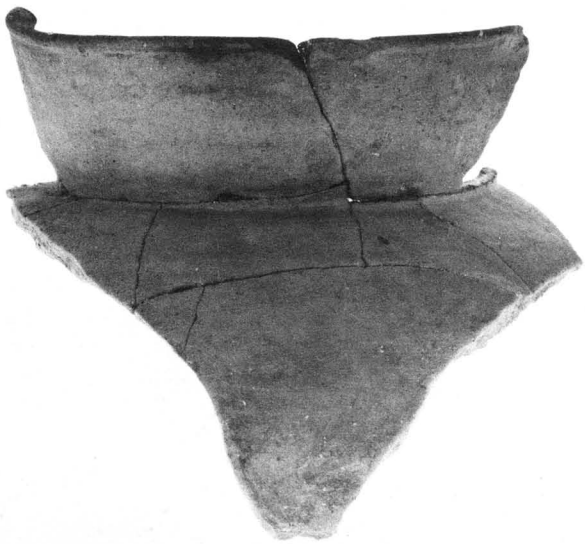
104



108

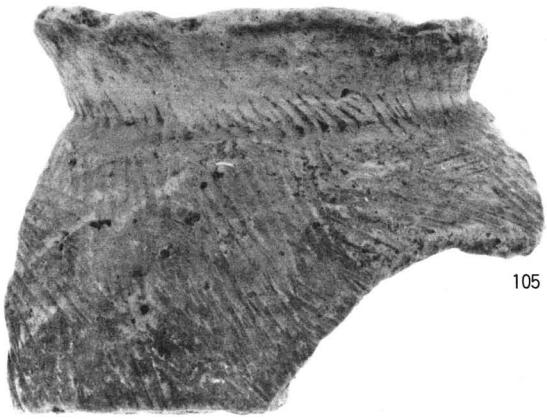


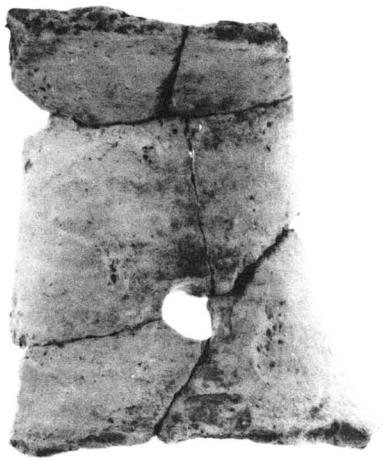
102



106

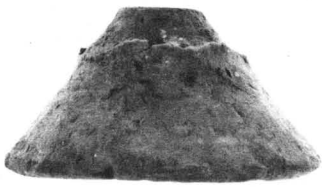
104：B－1　34号住居床面，106：B－1　35号住居埋土，108：B－1　42号住居床面，
102：B－1　43号住居床面


105


119

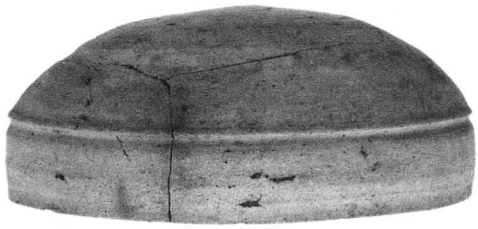
97

98

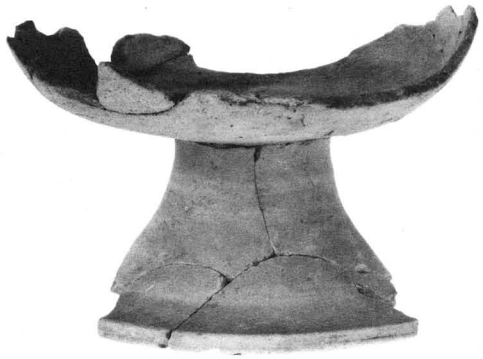

107

103

119：B－1　30号住居埋土，105：B－1　33号住居土壙，107：B－1　37号住居埋土，
97：B－1　38号住居埋土，98：B－1　39号住居埋土，103：B－1　47号住居床面



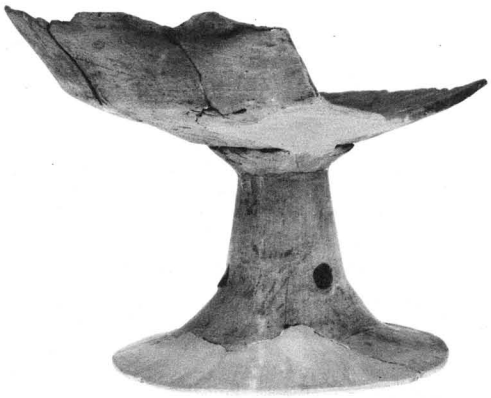
95



116

96

109

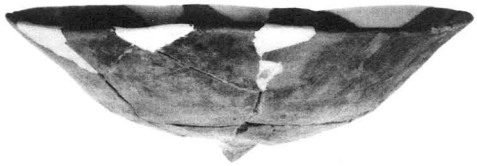


117

118

117．118：B－1　31号住居床面，95．96：B－1　37号住居埋土，
109．116：B－1　37号住居床面

115

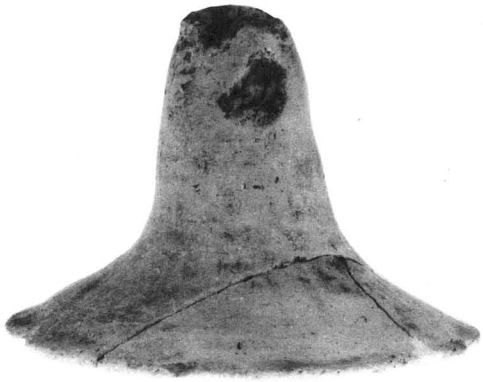


113

114

110

112



111

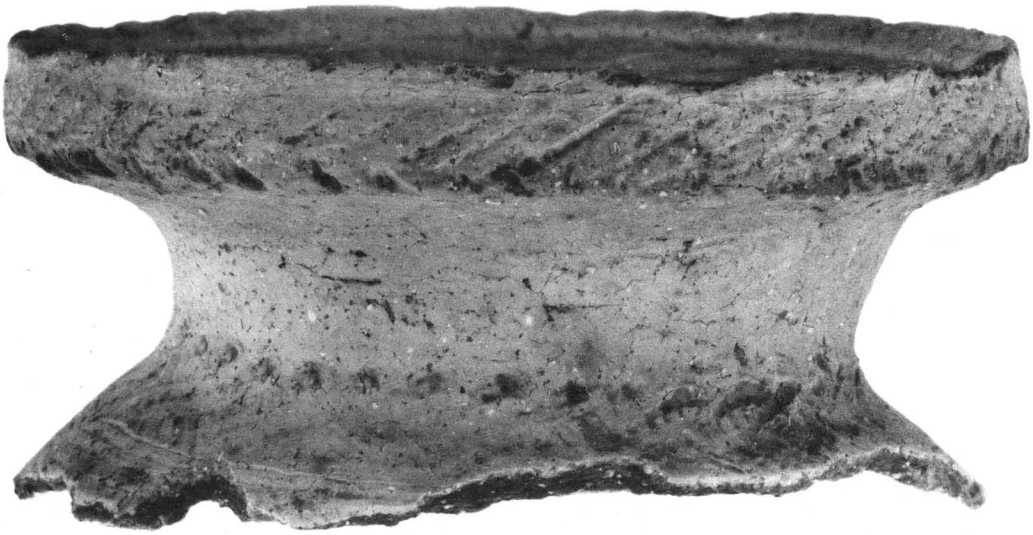
112：B－1　30号住居埋土，115：B－1　33号住居焼土，113：B－1　35号住居土壙，
110：B－1　38号住居土壙，111：B－1　39号住居埋土，114：B－1　42号住居床面

100

99

129

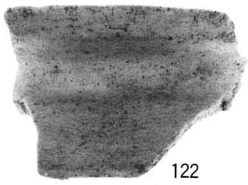
128

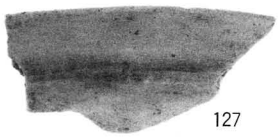


126

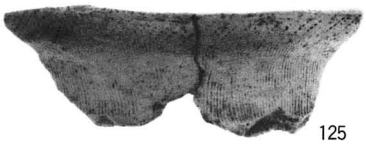
100：B－1　33号住居土壙，99：B－1　39号住居土壙，126．128．129：B－1　SX4

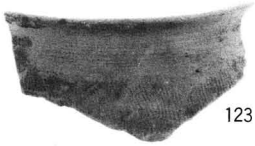
121


122


127

124


125

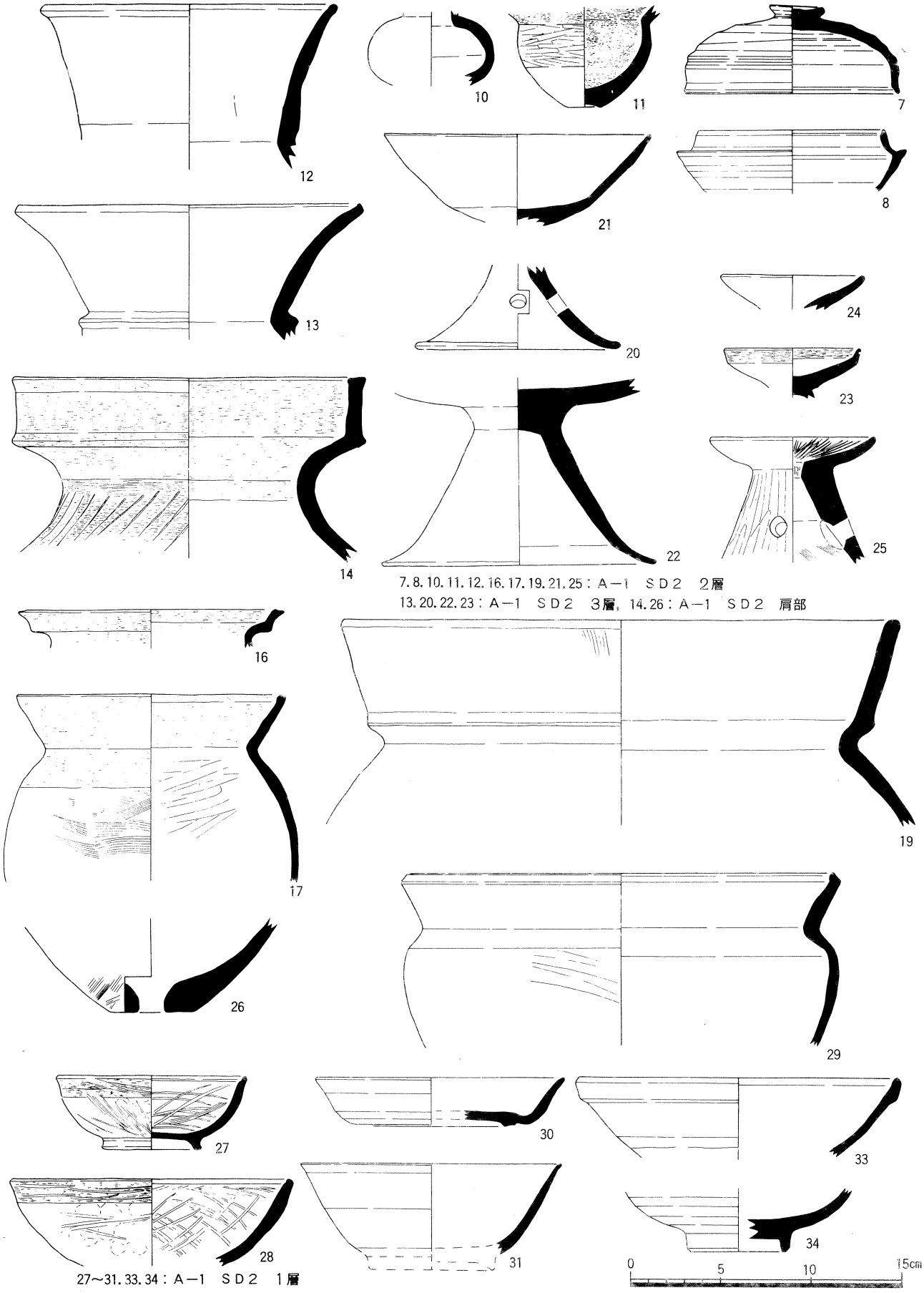

123

131

130

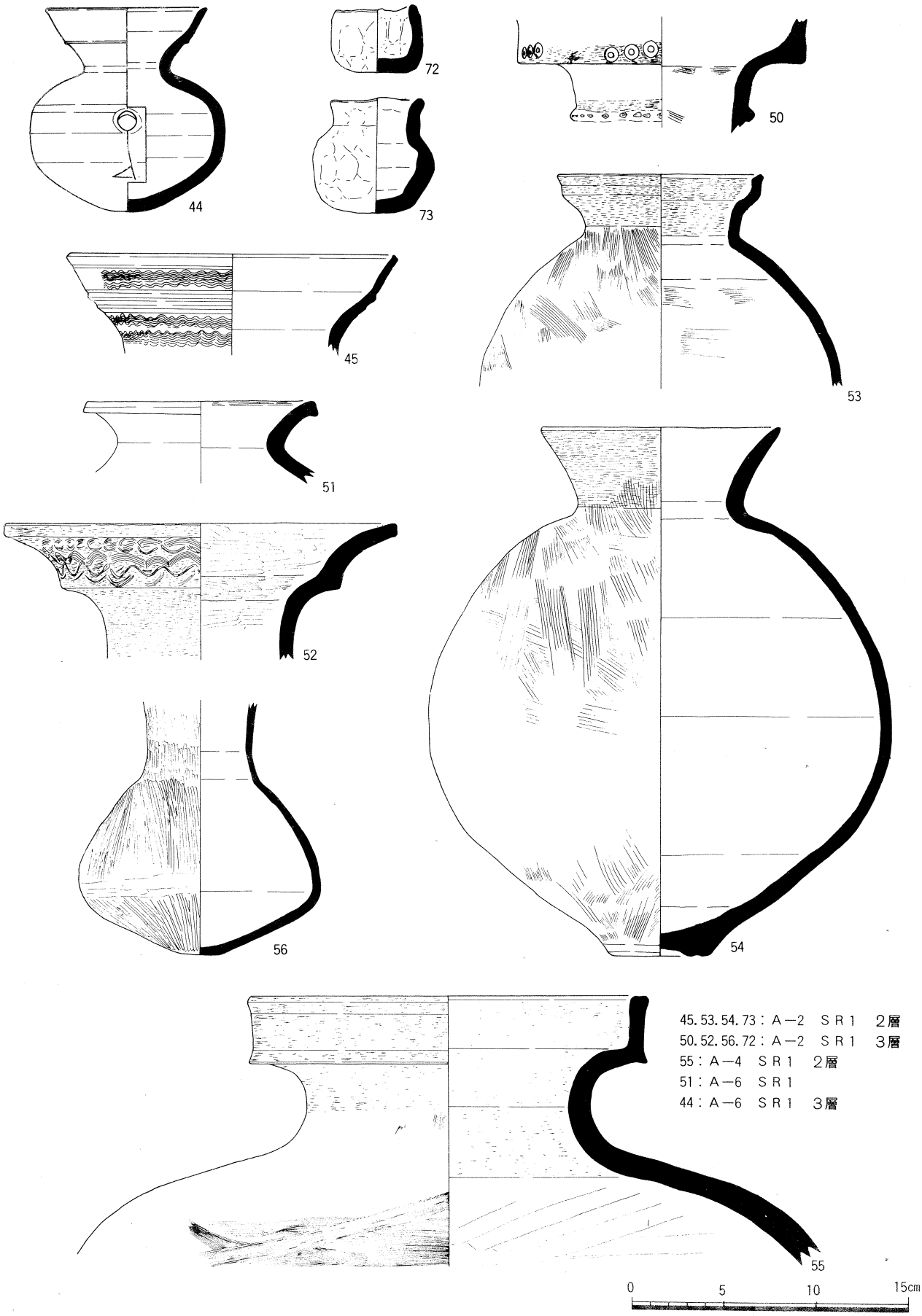
120

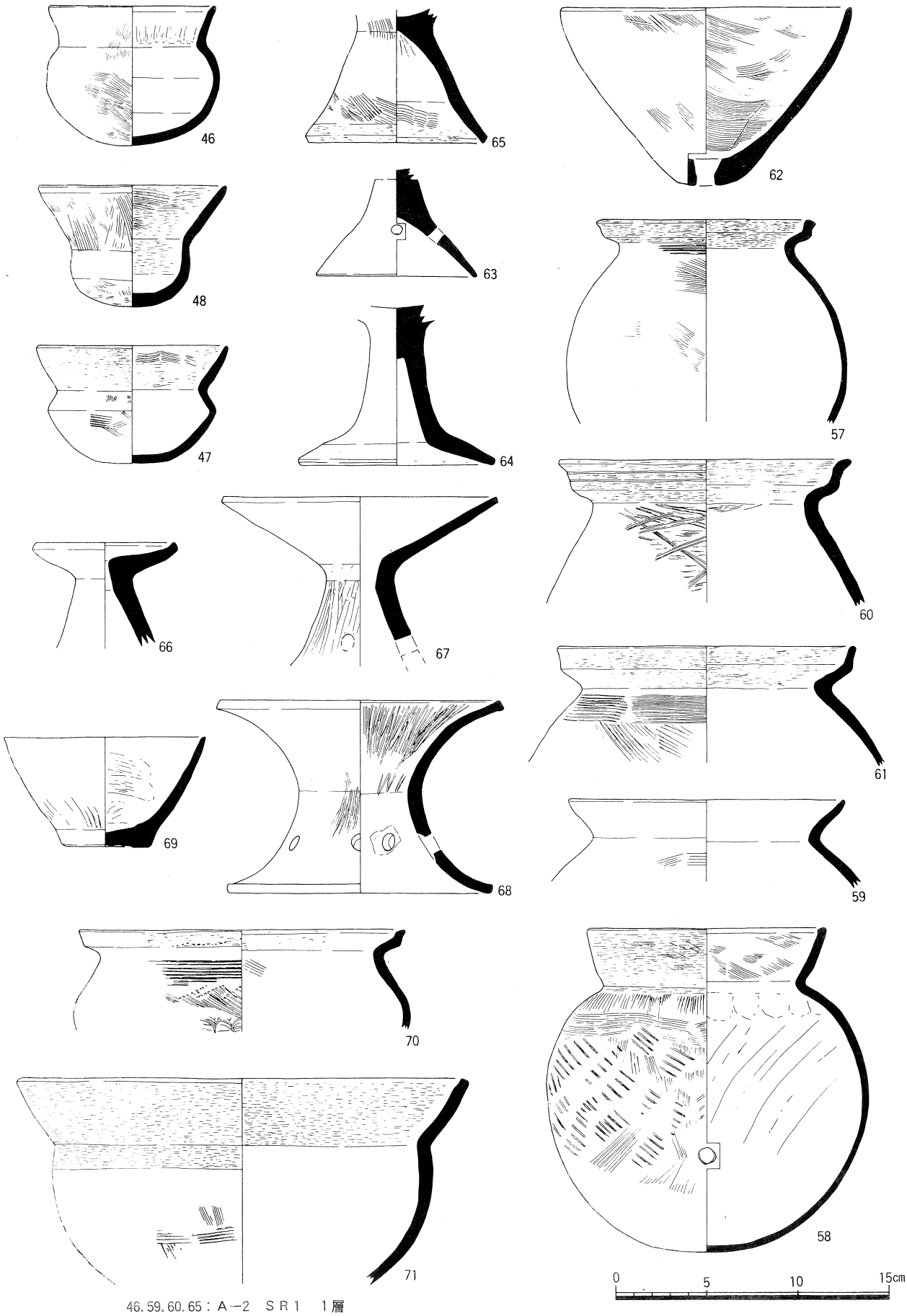
120～125．127．130．131：B－1　SX4



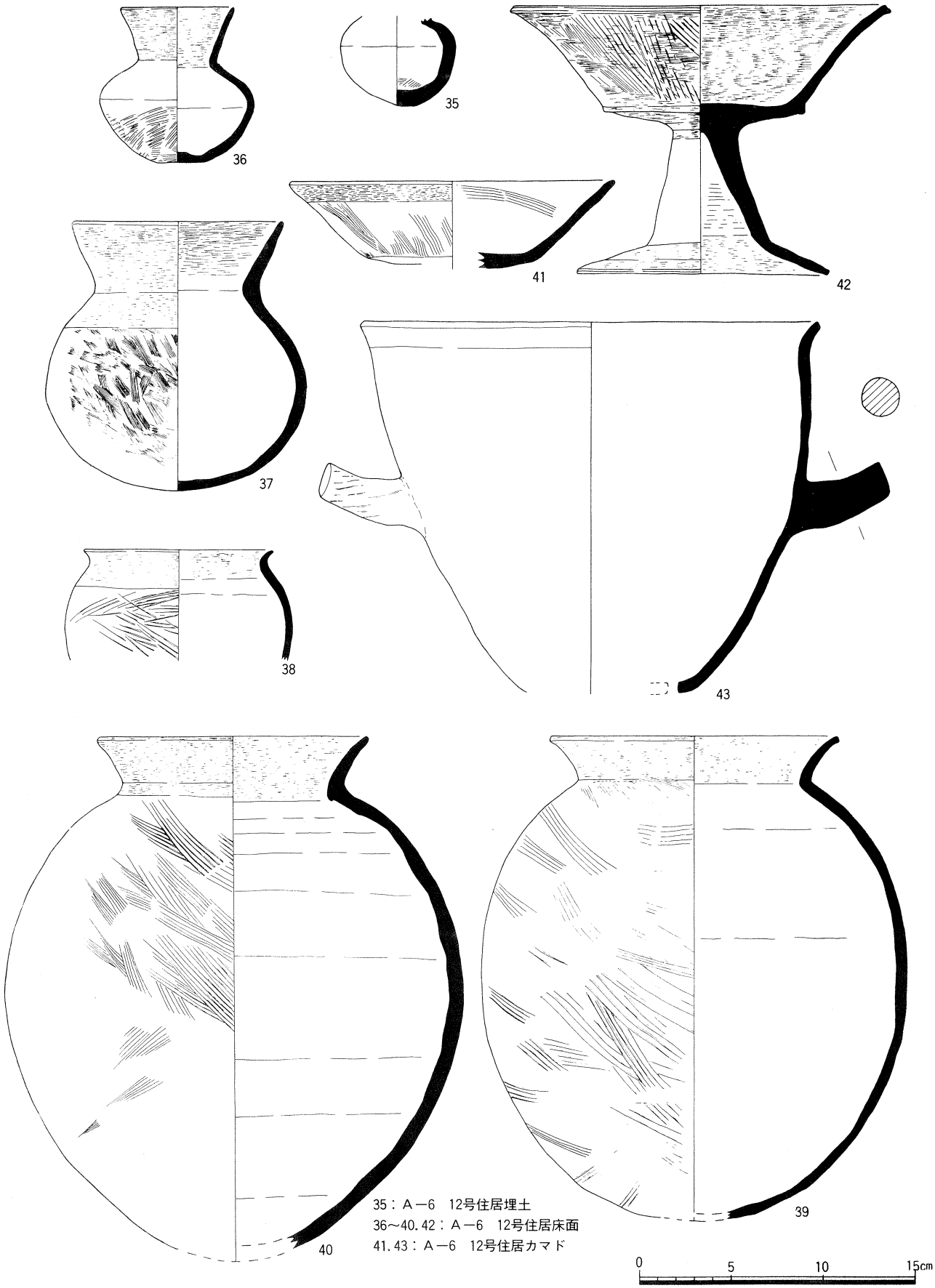
7.8.10.11.12.16.17.19.21.25：A－1　SD2　2層
13.20.22.23：A－1　SD2　3層，14.26：A－1　SD2　肩部

27～31.33.34：A－1　SD2　1層

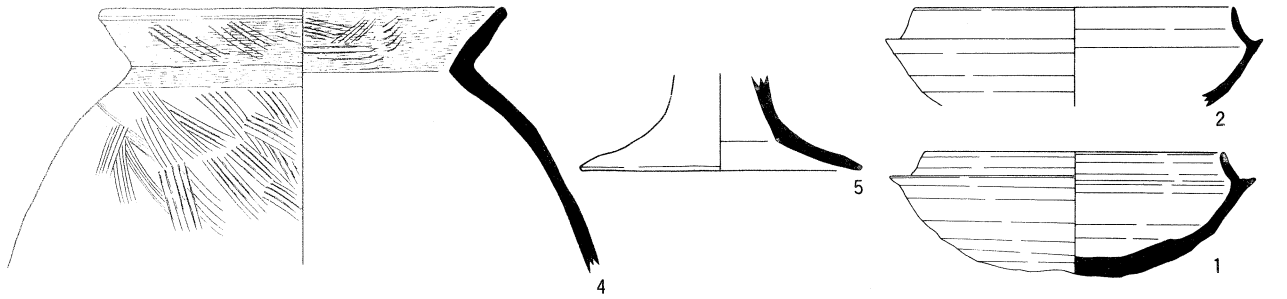

44
72
73
50
45
53
51
52
54
56
55
45. 53. 54. 73：A－2　SR1　2層
50. 52. 56. 72：A－2　SR1　3層
55：A－4　SR1　2層
51：A－6　SR1
44：A－6　SR1　3層
0
5
10
15cm



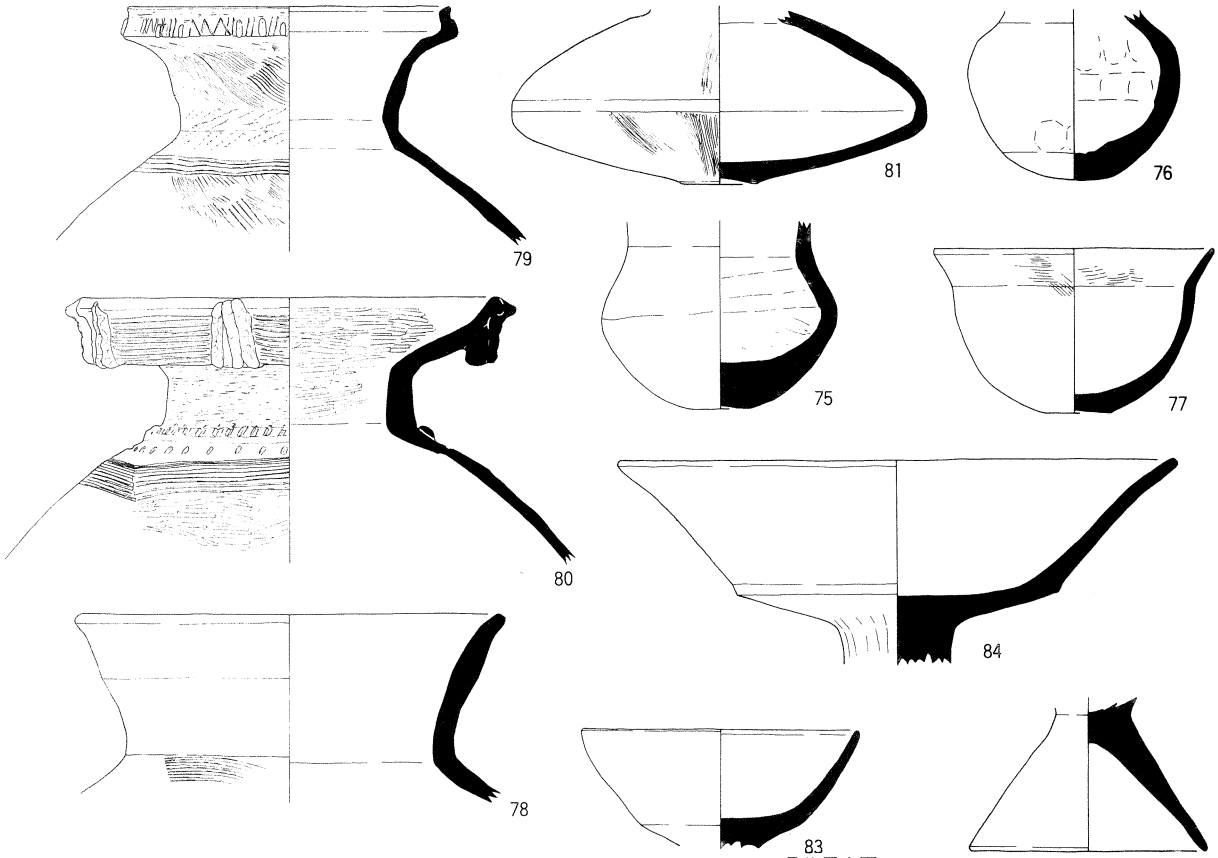
46.59.60.65：A−2　SR1　1層
61.63：A−2　SR1
47.57.62.64.66.67.69：A−2　SR1　2層
48.68.70：A−2　SR1　3層
71：A−4　SR1　3層
58：A−6　SR1　3層



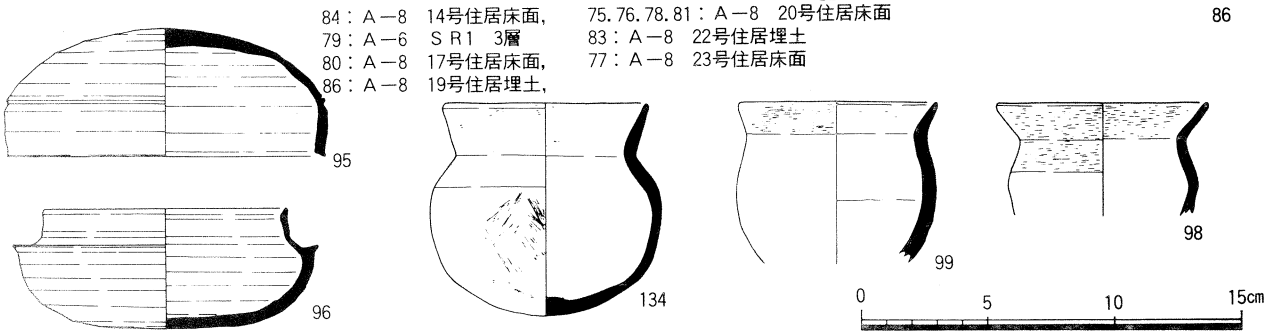
35：Ａ－6　12号住居埋土
36～40.42：Ａ－6　12号住居床面
41.43：Ａ－6　12号住居カマド



1：A－1　1号住居土壙，　4：A－1　3号住居
6：A－1　2号住居焼土，　3.5：A－1　3号住居埋土
2：A－1　2号住居土壙，

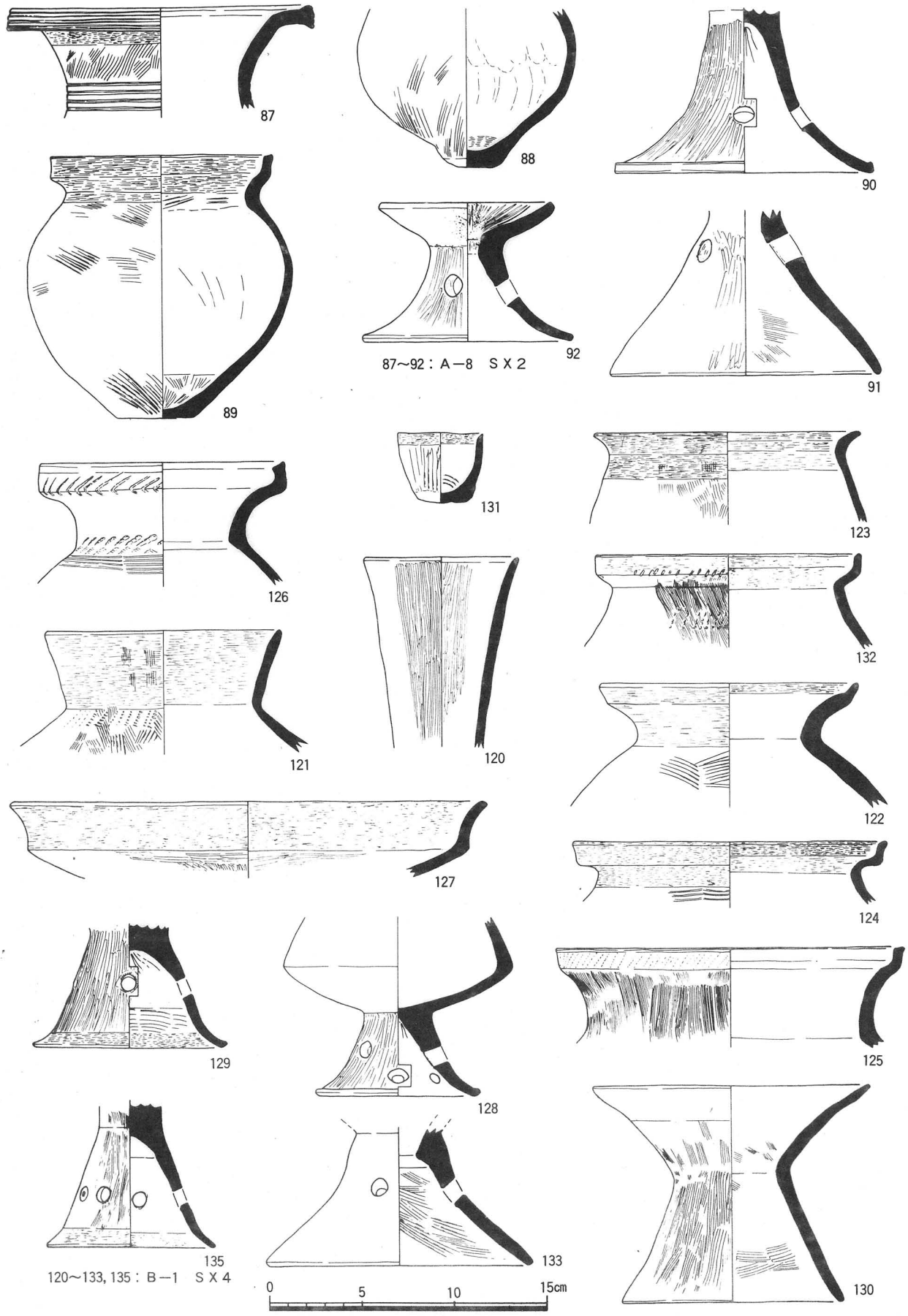


84：A－8　14号住居床面，　75.76.78.81：A－8　20号住居床面
79：A－6　SR1　3層　83：A－8　22号住居埋土
80：A－8　17号住居床面，　77：A－8　23号住居床面
86：A－8　19号住居埋土，



134：B－1　31号住居　98：B－1　39号住居埋土
95.96：B－1　37号住居埋土　99：B－1　39号住居土壙

112：Ｂ－1　30号住居埋土，
117.118：Ｂ－1　31号住居床面，
100.105：Ｂ－1　33号住居土壙，
104：Ｂ－1　34号住居床面，
106：Ｂ－1　35号住居埋土
113：Ｂ－1　35号住居土壙，
101.116：Ｂ－1　37号住居床面
110：Ｂ－1　38号住居土壙
111：Ｂ－1　39号住居埋土
108.114：Ｂ－1　42号住居床面
102：Ｂ－1　43号住居床面
103：Ｂ－1　47号住居床面


87
88
90
89
92
87～92：A－8　SX2
91
131
123
126
132
120
121
122
127
124
129
128
125
135
133
130
120～133, 135：B－1　SX4
0
5
10
15cm

昭和57年３月25日

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告Ｘ-５-１

編　集　滋賀県教育委員会

発　行　滋賀県教育委員会

財団法人　滋賀県文化財保護協会

印　刷　有限会社　真　陽　社

京都市下京区油小路仏光寺上ル

ＴＥＬ（０７５）３５１－６０３４